一般国道９号仁摩温泉津道路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書１

中祖遺跡
ナメラ迫遺跡

2008年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

一般国道９号仁摩温泉津道路建設予定地内
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書 1

中　祖　遺　跡
ナメラ迫遺跡

2008年3月

国土交通省中国地方整備局
島 根 県 教 育 委 員 会

空から見た中祖遺跡

中祖遺跡礎石建物跡瓦出土状況

中祖遺跡礎石建物跡

序

国土交通省中国地方整備局松江国道事務所では、一般国道９号のうち急カーブや狭いトンネルなどが多く交通の難所となっている仁摩温泉津間においては、仁摩温泉津道路の整備を行っています。

仁摩温泉津道路の整備に際しては、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ整備計画や工法の検討を行っていますが、どうしても回避することのできない埋蔵文化財については道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

具体的には、島根県教育委員会に委託し、一般国道９号仁摩温泉津道路建設地内に所在する遺跡の発掘調査を実施していただいております。道路事業計画との調整を図りつつ、十分な調査を進めていただいていることに対し、同委員会の御尽力に敬意を表する次第です。

この報告書は、平成17年度から19年度に実施しました大田市温泉津町福波地内に所在する中祖遺跡、同市仁摩町天河内地内に所在するナメラ迫遺跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。本書が、この地域における人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みを後世に伝える貴重な資料として、学術並びに教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の事業に御理解、御支援いただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂に御協力いただきました地元の方々や関係機関の皆様に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

平成20年３月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所
所　長　越　智　健　吾

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局から委託を受けて平成17年度より一般国道９号仁摩温泉津道路建設地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しています。本書はこのうち平成17年度から19年度に実施した大田市温泉津町福波地内の中祖遺跡と、同市仁摩町天河内地内のナメラ迫遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

中祖遺跡は縄文時代から連綿と営まれた遺跡で、今回の調査によって石見部では確認例が少ない奈良・平安時代の礎石建物跡が明らかとなりました。建物跡は屋根の棟に瓦を用いる熨斗棟であったことが判明したのをはじめ、文字を記したヘラ書き土器なども出土しており、官衙など公的な施設であったと考えられます。また、ナメラ迫遺跡では古墳時代の集落跡が確認され、石見沿岸部における小集落の様相が窺える資料を得ることができました。

本書にまとめたこうした成果が、大田市並びに島根県の豊かな地域史像を構築する上で一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行に当たりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、地元の方々並びに関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

島根県教育委員会

教育長　藤原義光

例　　言

1．本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所の委託を受けて、平成17～19年度に実施した一般国道９号(仁摩温泉津道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本書で報告する遺跡は次のとおりである。

島根県大田市温泉津町大字福光ハ494－4番地ほか　中祖遺跡

島根県大田市仁摩町大字天河内575番地ほか　ナメラ迫遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

〔平成17年度〕

事 務 局　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、永島静司（同総務Ｇ課長）、宮澤明久（同調査第２Ｇ課長）、塩野由美子（同総務Ｇ主幹）、坂根　繁（同）

調 査 員　伊藤　智（同調査第２Ｇ文化財保護主事）、竹下浩充（同教諭兼主事）、阿部賢治（同調査補助員）

〔平成18年度〕

事 務 局　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、坂本憲一（同総務G課長）、宮澤明久（同調査第２Ｇ課長）、塩野由美子（同総務Ｇ主幹）

調 査 員　角田徳幸（同調査第２Ｇ主幹）、園山暢男（同教諭兼主事）、阿部賢治（同調査補助員）、油利　崇（同）

調査指導　田中義昭（島根県文化財保護審議委員）、大橋泰夫（島根大学法文学部教授）、神英雄（浜田市立石正美術館主任学芸員）、白石　純（岡山理科大学助教授）

〔平成19年度〕

事 務 局　卜部吉博（埋蔵文化財調査センター所長）、川原和人（同調整監）、坂本憲一（同総務G課長）、廣江耕史（同調査第３Ｇ課長）、赤山　治（同総務Ｇ企画幹）

調 査 員　角田徳幸（同調査第３Ｇ主幹）、園山暢男（同教諭兼文化財保護主任）、井谷朋子（同調査補助員）

調査指導　中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

4．発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

〔平成17～19年度〕高橋憲生（社団法人中国建設弘済会技術員）、寺戸由美子（同事務員）

5．本調査に伴って行った自然科学的な分析は次の機関に委託または依頼して実施し、その成果は第５章にまとめて掲載した。また、石材の同定は中村唯史氏に依頼し、石材名を本文中に記した。

中祖遺跡の樹種同定・花粉分析・放射性炭素年代測定及びナメラ迫遺跡出土柱根の樹種同定（文化財調査コンサルタント）、中祖遺跡出土瓦の胎土分析（岡山理科大学）、ナメラ迫遺跡の放射性炭素年代測定（古環境研究所）

6．現地調査及び資料整理にあたっては次の方々の御協力を賜った。

大國晴雄・遠藤浩巳・長嶺康典・中田健一（大田市石見銀山課）、梅木茂雄（江津市教育委員会）、榊原博英（浜田市教育委員会）

7．本書のうち、挿図中の北は測量法による平面直角座標系ＸＹ座標（世界測地系）、第Ⅲ座標系

のX軸方向を指している。

8．本書に掲載した実測図の作成と浄書は調査員・補助員の他、濵岡宏行・小池康明・無川美和子が行い、写真は角田徳幸が撮影した。

9．本書のうち、第1～4章と第5章2節の執筆と編集は角田徳幸が行い、第5章1節・3～6節については文責を明示した。

10．本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　次

第1章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第2章　遺跡の位置と環境

　第1節　遺跡の位置と地理的環境 …… 2

　第2節　歴史的環境 …… 2

第3章　中祖遺跡の調査

　第1節　遺跡の概要 …… 5

　第2節　Ⅰ区の調査 …… 7

　第3節　Ⅱ区の調査 …… 8

　第4節　Ⅲ区の調査 …… 12

　第5節　総括 …… 46

第4章　ナメラ迫遺跡の調査

　第1節　遺跡の概要 …… 61

　第2節　Ⅰ区の調査 …… 63

　第3節　Ⅱ区の調査 …… 66

　第4節　Ⅲ区の調査 …… 84

　第5節　総括 …… 89

第5章　付　論

　第1節　中祖遺跡の立地環境 ……（渡辺正巳・古野　毅）… 97

　第2節　中祖遺跡出土瓦の胎土分析関係資料 …… 103

　第3節　中祖遺跡出土瓦の胎土分析 ……（白石　純）… 131

　第4節　中祖遺跡と古代山陰道 ……（神　英雄）… 138

　第5節　中祖遺跡・ナメラ迫遺跡の放射性炭素年代測定 ……（古環境研究所）… 143

　第6節　ナメラ迫遺跡出土柱根の樹種同定 ……（渡辺正巳・古野　毅）… 145

挿　図　目　次

第１図　中祖遺跡・ナメラ迫遺跡と周辺の主な遺跡… 3
第２図　中祖遺跡と周辺の地形…… 6
第３図　中祖遺跡Ⅰ区８層上面遺構実測図…… 7
第４図　中祖遺跡Ⅰ区出土遺物実測図…… 8
第５図　中祖遺跡Ⅱ区北東壁土層実測図…… 9
第６図　中祖遺跡Ⅱ区４層上面遺構実測図…… 9
第７図　中祖遺跡Ⅱ区７層遺構実測図…… 11
第８図　中祖遺跡Ⅱ区出土遺物実測図…… 11
第９図　中祖遺跡Ⅲ区遺構配置図…… 12
第10図　中祖遺跡Ⅲ区完掘後地形測量図…… 13
第11図　中祖遺跡Ⅲ区調査区東壁他土層実測図…… 14
第12図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡遺構実測図…… 15
第13図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡遺物出土状況実測図 …… 16
第14図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土遺物実測図…… 17
第15図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図１… 19
第16図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図２… 20
第17図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図３… 21
第18図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図４… 22
第19図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図１… 23
第20図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図２… 24
第21図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図３… 25
第22図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図４… 26
第23図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図５… 27
第24図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図６… 28
第25図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図７… 29
第26図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図８… 30
第27図　中祖遺跡Ⅲ区土坑他実測図…… 32
第28図　中祖遺跡Ⅲ区土坑出土遺物実測図…… 33
第29図　中祖遺跡Ⅲ区石敷道及び１号溝・２号溝遺構実測図…… 34
第30図　中祖遺跡Ⅲ区３号溝・４号溝遺構実測図…… 35
第31図　中祖遺跡Ⅲ区遺物出土状況実測図…… 36
第32図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図１…… 38
第33図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図２…… 39
第34図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図３…… 40
第35図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図４…… 41
第36図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図５…… 42
第37図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図６…… 43
第38図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図７…… 44
第39図　中祖遺跡Ⅲ区出土須恵器・土師器分類図…… 47
第40図　中祖遺跡Ⅲ区出土瓦構成図…… 48
第41図　熨斗瓦と熨斗棟…… 49
第42図　中祖遺跡Ⅲ区出土土器の構成図…… 51
第43図　周辺地域における奈良時代から平安時代前半の遺跡…… 52
第44図　江津市宮倉遺跡出土遺物実測図…… 53
第45図　ナメラ迫遺跡調査区配置図…… 61
第46図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区調査前地形測量図…… 62
第47図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区調査後地形測量図…… 63
第48図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区土層実測図…… 64
第49図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区土坑実測図…… 64
第50図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区出土遺物実測図…… 65
第51図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区古墳横穴式石室実測図…… 65
第52図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構配置図…… 66
第53図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区北壁・南壁土層実測図 …… 67
第54図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構実測図…… 67
第55図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図… 68
第56図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴及び溝状遺構遺物出土状況実測図…… 69
第57図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構実測図…… 70
第58図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図１ …… 72
第59図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図２ …… 73
第60図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図３ …… 74
第61図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図４ …… 75
第62図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図５ …… 76
第63図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図６ …… 77
第64図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図７ …… 78
第65図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡遺構実測図…… 79
第66図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡出土遺物実測図 …… 80
第67図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区２号建物跡遺構実測図…… 80
第68図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺物出土状況実測図…… 81
第69図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物実測図１ …… 82
第70図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物実測図２ …… 83
第71図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査前地形測量図…… 84
第72図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査区配置図…… 85
第73図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ土層実測図…… 85
第74図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構実測図…… 86
第75図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査後地形測量図…… 87
第76図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡遺構実測図…… 87
第77図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区横断土層・焼土実測図…… 88
第78図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区出土遺物実測図…… 88
第79図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土土器分類図… 90

第80図　石見における墨書土器・ヘラ書き土器他出土遺跡の分布…… 92
第81図　中祖遺跡Ⅱ区試料採取地点 …… 101
第82図　中祖遺跡Ⅱ区№1地点の花粉ダイアグラム　102
第83図　中祖遺跡Ⅱ区№2地点の花粉ダイアグラム　102
第84図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図1 …… 105
第85図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図2 …… 106
第86図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図3 …… 107
第87図　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料実測図1 … 108
第88図　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料実測図2 … 109
第89図　久本奥窯跡・石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図 …… 110
第90図　石見国分寺瓦窯跡・重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図 …… 111
第91図　重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図 …… 112
第92図　重富瓦窯跡・天王平廃寺出土瓦胎土分析資料実測図 …… 113
第93図　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料実測図 …… 114
第94図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較(K_2O-CaO散布図)…… 133
第95図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較(TiO_2-CaO散布図)…… 134
第96図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較($SiO_2-Al_2O_3$散布図)…… 134
第97図　江津市における古代山陰道の痕跡 …… 139
第98図　益田市西部における古代山陰道（長門－石見連絡路）の痕跡 …… 139
第99図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区1号建物跡と同定試料 … 147
第100図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区2号建物跡と同定試料 … 147

表　目　次

第1表　中祖遺跡Ⅱ区陶磁器構成表 …… 10
第2表　中祖遺跡Ⅲ区陶磁器構成表 …… 45
第3表　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土瓦の構成 …… 48
第4表　中祖遺跡Ⅲ区土器構成表 …… 51
第5表　周辺地域における奈良時代から平安時代前半の遺跡 …… 52
第6表　中祖遺跡出土土器・陶磁器観察表 …… 55
第7表　中祖遺跡出土瓦観察表 …… 58
第8表　中祖遺跡出土木製品観察表 …… 59
第9表　中祖遺跡出土金属製品観察表 …… 60
第10表　中祖遺跡出土石製品観察表 …… 60
第11表　ナメラ迫遺跡Ⅱ区陶磁器構成表 …… 81
第12表　石見におけるヘラ書き土器・墨書土器・文字瓦一覧 …… 92
第13表　ナメラ迫遺跡出土土器・陶磁器観察表 …… 94
第14表　ナメラ迫遺跡出土金属製品観察表 …… 96
第15表　ナメラ迫遺跡出土石製品観察表 …… 96
第16表　中祖遺跡Ⅱ区微化石概査結果 …… 101
第17表　中祖遺跡Ⅱ区年代測定結果 …… 101
第18表　中祖遺跡胎土分析試料一覧 …… 135
第19表　放射性炭素年代測定試料及び処理 …… 143
第20表　放射性炭素年代測定結果 …… 143
第21表　ナメラ迫遺跡樹種同定結果一覧表 …… 148

本 文 写 真 目 次

写真1　丸瓦細部の状況 …… 22
写真2　平瓦細部の状況 …… 30
写真3　焼塩壺細部の状況 …… 44
写真4　出土木質遺物の顕微鏡写真 …… 102
写真5　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料1 …… 115
写真6　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料2 …… 116
写真7　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料3 …… 117
写真8　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料4 …… 118
写真9　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料5 …… 119
写真10　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料6 …… 120
写真11　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料1 …… 121
写真12　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料2 …… 122
写真13　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料3 …… 123
写真14　石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料1 … 124
写真15　石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料2 … 125
写真16　重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料1 …… 126
写真17　重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料2 …… 127
写真18　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料1 …… 128
写真19　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料2 …… 129
写真20　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料3 …… 130
写真21　瓦胎土実体顕微鏡写真 …… 137
写真22　ナメラ迫遺跡樹種同定顕微鏡写真 …… 148

図　版　目　次

図版１　1　中祖遺跡遠景（東上空から）
　　2　中祖遺跡遠景（南上空から）
図版２　1　中祖遺跡Ⅰ区遺構検出状況（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅰ区水田跡検出状況（南から）
　　3　中祖遺跡Ⅰ区土層堆積状況（南東から）
図版３　1　中祖遺跡Ⅱ区４層上面遺構（北東から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区調査区北東壁土層（西から）
図版４　1　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.１柱痕（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.１完掘（南西から）
　　3　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.２柱痕（南西から）
　　4　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.２完掘（南西から）
　　5　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.３柱痕（南西から）
　　6　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.３完掘（南西から）
図版５　1　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.４土層（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.４完掘（南西から）
　　3　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.５土層（南西から）
　　4　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.５完掘（南西から）
　　5　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.６土層（南西から）
　　6　中祖遺跡Ⅱ区Ｐ.６完掘（西から）
図版６　1　中祖遺跡Ⅱ区７層上面杭列検出状況（北東から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区７層杭列・自然木検出状況（北東から）
図版７　1　中祖遺跡Ⅱ区７層上面杭列検出状況（北から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区７層以下土層（西から）
図版８　1　中祖遺跡Ⅱ区７層杭列（北西から）
　　2　中祖遺跡Ⅱ区７層自然木（東から）
図版９　1　中祖遺跡Ⅲ区近景（南東上空から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区近景（南上空から）
図版10　1　中祖遺跡Ⅲ区完掘状況（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区完掘状況（東から）
図版11　1　中祖遺跡Ⅲ区完掘状況（西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区調査区東壁土層（北西から）
図版12　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡瓦溜（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡瓦溜（北西から）
図版13　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡瓦溜（南東から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡瓦溜（南西から）
図版14　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡ピット検出状況（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡ピット完掘状況（南から）
図版15　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡完掘状況（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡瓦溜西端（南から）
図版16　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石１（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石１掘り方（南から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石１掘り方（南から）
図版17　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石２（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石２掘り方（南から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石２掘り方（南から）
図版18　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石３（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡礎石３掘り方（南から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡平瓦出土状況（西から）
図版19　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡Ｐ.５土層（西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡Ｐ.５（西から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡Ｐ.５完掘状況（西から）
図版20　1　中祖遺跡Ⅲ区調査区西側遺物出土状況（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区調査区東側遺物出土状況（南東から）
図版21　1　中祖遺跡Ⅲ区１号土坑検出状況（南から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区１号土坑土層（南から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区１号土坑（南から）
図版22　1　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑検出状況（北から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑土層（北から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑土層（北から）
図版23　1　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑木枠（南東から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑（東から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区２号土坑完掘状況（東から）
図版24　1　中祖遺跡Ⅲ区３号土坑検出状況（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区３号土坑完掘状況（南西から）
図版25　1　中祖遺跡Ⅲ区３号土坑検出状況（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区３号土坑ｂ－ｂ’断面（南西から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区３号土坑ｃ－ｃ’断面（南西から）

図版26　1　中祖遺跡Ⅲ区４号土坑土層（北から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区Ｐ.12土層（北東から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区Ｐ.12（北東から）
図版27　1　中祖遺跡Ⅲ区石敷道（西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区石敷道ｂ－ｂ’断面（西から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区石敷道ａ－ａ’断面（東から）
図版28　1　中祖遺跡Ⅲ区３号溝検出状況（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区３号溝完掘状況（南西から）
図版29　1　中祖遺跡Ⅲ区３号溝陶磁器出土状況（南西から）
　　2　中祖遺跡Ⅲ区３号溝ｄ－ｄ’断面（西から）
　　3　中祖遺跡Ⅲ区３号溝ｅ－ｅ’断面（西から）
図版30　1　中祖遺跡Ⅰ区出土遺物
　　2　中祖遺跡Ⅱ区出土遺物
図版31　1　中祖遺跡Ⅱ区礎石建物跡出土遺物
図版32　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦１
図版33　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦２
図版34　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦・平瓦
図版35　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦１
図版36　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦２
図版37　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦３
図版38　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦４
図版39　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦５
図版40　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦６
図版41　1　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦７
図版42　1　中祖遺跡Ⅲ区土坑出土遺物
図版43　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物１
図版44　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物２
図版45　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物３
図版46　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物４
図版47　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物５
図版48　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物６
図版49　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物７
図版50　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物８
図版51　1　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物９
図版52　1　ナメラ迫遺跡遠景（南上空から）
　　2　ナメラ迫遺跡遠景（上空から）
図版53　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区近景（西上空から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区近景（南上空から）
図版54　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区（南から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅰ区中央土層（南から）
図版55　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区１号土坑検出状況（西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅰ区１号土坑土層（南から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅰ区１号土坑（西から）
図版56　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区２号土坑検出状況（南西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅰ区２号土坑土層（南西から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅰ区２号土坑（南西から）
図版57　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区古墳（北東から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅰ区横穴式石室（北西から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅰ区横穴式石室（北東から）
図版58　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査前近景（西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査後近景（西から）
図版59　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区中央遺構遺物検出状況（北西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区北壁土層（南西から）
図版60　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構遺物検出状況（北から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構遺物検出状況（北から）
図版61　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構（北から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構遺物検出状況（西から）
図版62　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構ａ－ａ’断面（西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構ｂ－ｂ’断面（西から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構ｃ－ｃ’断面（北東から）
図版63　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第61図48出土状況（西から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第62図53．第63図78出土状況（南から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第60図36出土状況（北から）
図版64　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第60図39出土状況（北から）
　　2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第60図50出土状況（西から）
　　3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第58図5・18他出土状況（北から）
図版65　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第58図18出土状況（北から）

2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第58図15、第62図66他出土状況（西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構第58図11出土状況（北から）
図版66　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構検出状況（北から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構遺物出土状況（北から）
図版67　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構ｂ－ｂ’断面土層（北東から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構ａ－ａ’断面土層（東から）
図版68　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構床面遺構検出状況（北から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構（北から）
図版69　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡検出状況（北から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡（北から）
図版70　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡柱穴
図版71　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡柱穴
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区２号建物跡（西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区２号建物跡柱穴
図版72　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区南端遺物検出状況（南から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区南壁土層（北から）
図版73　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区調査区南端遺物検出状況（南から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅰ区第69図１出土状況（北から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅰ区第69図15出土状況（西から）
図版74　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ１・２付近調査前（西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ３付近調査前（北西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構（北西から）
図版75　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ１（南西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ１土層（北西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ２（南西から）
図版76　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ２土層（北西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ３（南西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ３土層（北西から）
図版77　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構（南西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構横断土層（南西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構縦断土層（北西から）
図版78　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡（南西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡（南から）
図版79　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡検出状況（南西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡ピット検出状況（南西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡ａ－ａ’断面土層（南から）
図版80　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡柱穴１
図版81　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡柱穴２
図版82　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区横断土層（北から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区焼土検出状況（南西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区焼土縦断土層（北から）
図版83　1　ナメラ迫遺跡Ⅲ区焼土・ピット群検出状況（南西から）
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区ピット群（南西から）
3　ナメラ迫遺跡Ⅲ区完掘状況（南から）
図版84　1　ナメラ迫遺跡Ⅰ区出土遺物
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構出土遺物
3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物１
図版85　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物２
図版86　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物３
図版87　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物４
図版88　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物５
図版89　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物６
図版90　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物７
図版91　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物８
図版92　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物９
2　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡出土遺物
3　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物１
図版93　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物２
図版94　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物３
図版95　1　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物４
2　ナメラ迫遺跡Ⅲ区出土遺物

第１章　調査に至る経緯と経過

一般国道９号仁摩温泉津道路は島根県大田市仁摩町大国から同温泉津町福波間11.8kmに計画されている高規格道路である。この事業地内に存在する埋蔵文化財については、国土交通省松江国道工事事務所(当時)より平成15(2003)年２月19日付けで島根県教育委員会に協議があり、県教育庁文化財課は事業地内に周知の遺跡もしくは未発見の遺跡が存在する可能性があるので、平成15年３月３日付けで事業実施前に遺跡の有無について確認調査が必要な旨を回答した。これに対し国交省松江国道工事事務所は平成15年３月31日付けで事業地内の遺跡について島根県教育委員会に照会したので、県教育庁埋蔵文化財調査センターでは平成15年４月に事業地内の分布調査を実施した。その結果、事業地内には仁摩町内で計11ヶ所、温泉津町内では計６ヶ所の遺跡が存在することを確認したが、この時点では一部に分布調査ができない地点もあった。これを受け、島根県教育委員会は平成15年７月28日付けで国土交通省松江国道工事事務所あてに分布調査の結果とともに、これらの遺跡について文化財保護法上の諸手続きをとるよう回答した。平成17(2005)年３月には未確認であった温泉津町福波地内で分布調査を行い、事業地の周辺で遺物を採取した。

平成17年度からは一般国道９号(仁摩温泉津道路)改築工事が本格化し、これに伴う発掘調査を島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所より受託している。調査は周辺で遺物が採取されていた温泉津町福波の福波第2高架橋予定地のトレンチ調査から着手した。その結果、事業地内でも弥生土器・土師器・須恵器・布目瓦・羽口などが出土して遺跡の存在が明らかとなり、小字名をとって中祖遺跡と命名した。本調査は橋脚の建設地点を対象とし平成17年10月にＰ２橋脚(Ⅰ区)について行い、その後同年12月まで仁摩町の五丁遺跡群のうち工事用道路の進入路部分の調査を実施した。

平成18(2006)年度は、前年度に引き続き中祖遺跡・五丁遺跡群の本調査を行ったほか、本線部分では仁摩町立岩中遺跡・於才迫遺跡・狐城跡、工事用道路部分では温泉津町紺屋平遺跡、仁摩町ナメラ迫遺跡・宇福遺跡・矢臺遺跡で遺跡の範囲確認のためのトレンチ調査を実施した。このうち、中祖遺跡では４月にＰ３橋脚(Ⅱ区)、６～７月にP1橋脚(Ⅲ区)の発掘を行い、Ⅲ区で古代の礎石建物跡１棟が検出された。この建物跡は瓦を用いたものであり、石見地域では確認例が少ない重要な遺跡であると判断されたため、島根県教育委員会では事業者である国土交通省松江国道事務所と協議を行い、橋脚部分を含め掘削が及ぶ660㎡を新たに調査対象とした。また、中祖遺跡が古代の官衙または寺院であった場合、遺跡が広範囲に広がる可能性も考えられたことから、事業地北側部分についても文化財側で遺跡の範囲確認調査を行っている。一方、トレンチ調査ではナメラ迫遺跡で古墳時代～室町時代の集落、於才迫遺跡では集石遺構・炭窯が確認されたが、その他の遺跡では調査範囲内で遺構・遺物は確認されなかった。このうち、ナメラ迫遺跡については９月～11月にかけて工事用道路部分(Ⅰ・Ⅱ区)の本調査を行っており、古墳時代中期の溝や竪穴、室町時代の掘立柱建物跡が検出されている。

平成19(2007)年度は仁摩町庵寺遺跡、温泉津町梨ノ木坂遺跡他の本調査を実施しているが、ナメラ迫遺跡については前年度の対象からは外れていた本線Ｐ１橋脚部分(Ⅲ区)のトレンチ調査を８月に行ったところ掘立柱建物跡・盛土遺構が確認されたので、引き続き本調査を実施した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と地理的環境

島根県西部(旧石見国)の沿岸部は、日本海に山地が迫り深い入り江になったリアス式海岸と、その間に開けた砂丘が織りなす変化に富んだ景観をもつ。人々の生活の舞台となった集落や古墳は、そうした浦々に注ぐ河川沿いに形成された小平野と周辺の丘陵地に点在する。中祖遺跡とナメラ迫遺跡は、このような石見沿岸部に形成された遺跡で、中祖遺跡は島根県大田市温泉津町大字福光ハ494-4番地ほか、ナメラ迫遺跡は大田市仁摩町大字天河内578-1番地ほかに所在する。

中祖遺跡が所在する福光地区は、明治22(1889)年の町村制施行時には邇摩郡福光村とされたところで、昭和26(1951)年に邇摩郡福波村、昭和29(1954)年に邇摩郡温泉津町となり、平成17(2005)年に大田市と合併している。遺跡は日本海沿いに形成された砂丘と大江高山(標高808m)から西へと流れる福光川の谷底氾濫原が接するところに位置する。調査地点は標高70～80mほどの丘陵地南側裾部の緩斜面から砂丘後背湿地にかけてで、調査前には水田または市立福波保育園の敷地として利用されていた。

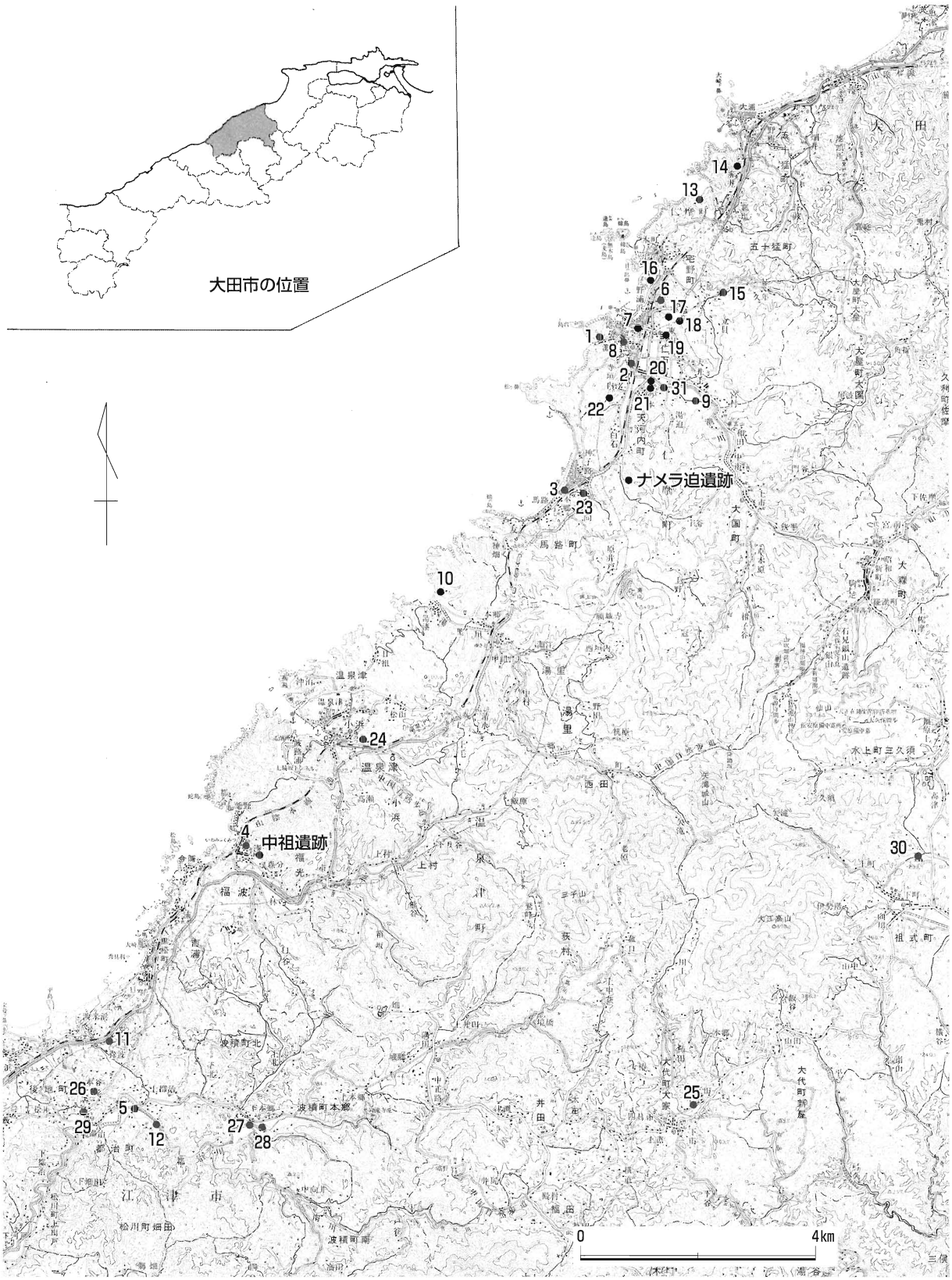
ナメラ迫遺跡が所在する天河内地区は、明治22(1889)年の町村制施行時には邇摩郡明治村とされたところで、明治24(1891)年に邇摩郡大国村、昭和29(1954)年に邇摩郡仁摩町となり、平成17(2005)年に大田市と合併している。遺跡は仁摩平野から南へと延びる谷筋の奥部に位置しており、この谷を県道馬路大国停車場線が通過する。調査地点は標高100mあまりの丘陵の中腹から裾部にかけての斜面で、調査前は丘陵部は山林、裾部は棚田状に造成された水田跡地であった。

第２節　歴史的環境

調査地の周辺地域における遺跡の初見は、久根ヶ曽根遺跡と鳥居原遺跡[1]で縄文時代前期に遡る。海岸砂丘とその縁辺部に立地し、砂層下の黒灰色層または黒色砂層から縄文土器のほか石斧・石鏃などが出土している。中期・後期の遺跡はあまり多くはないが、やはり砂丘に立地する坂灘遺跡・湊遺跡・中祖遺跡の他、善興寺橋遺跡が知られており、中祖遺跡では所謂クロスナ層から縄文時代後期前葉の遺物が比較的まとまって出土した[2]。周辺ではクロスナ層は江の川河口沿岸部に延びる江津砂丘地帯に広がっており、江津市と浜田市にまたがる大平山遺跡でも縄文時代後期の遺物が確認されている[3]。クロスナ層は砂丘形成の休止期に、その表面が草木に覆われたことにより生じたもので、砂丘地が集落として利用されたと見られる。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺跡には、坂灘遺跡・川向遺跡・五丁遺跡群・立平浜遺跡・打落し遺跡・埋築遺跡などが知られる。沿岸部の砂丘地や少し内陸に入った地点で確認されており、当地域にも初期の水稲耕作がいち早くもたらされ、内陸へと広がった。このうち、川向遺跡では矢板を円形または長楕円形状に打ち込み内部に木製農具の未製品を入れた水浸け保管施設が検出された他、鍬・鋤・高坏・杓子など多数の木製品が出土している[4]。弥生時代後期になると、波来浜遺跡で方形貼石墓計13基が営まれる。規模は１辺４～５ｍまでで大形の墳墓は見られないが、多量の供献土器の他、銅鏃・鉄鏃なども副葬されており、この頃には農耕集落を率いるとともに他地域との交流を行う有力者が出現していたことが窺われる[5]。

古墳時代前期・中期には大形古墳は知られていない。仁摩平野を望む位置に造られた安養寺１号墳は、この地域では数少ない前期古墳の可能性が考えられるもので、墳丘は長辺12m・短辺８mほどの方墳状をなし、箱式石棺をはじめとする４基の埋葬施設が確認された[6]。また、坂灘遺



1．坂灘遺跡　2．善興寺橋遺跡　3．久根ケ曽根遺跡　4．湊遺跡　5．埋築遺跡　6．立平浜遺跡　7．打落し遺跡
8．川向遺跡　9．五丁遺跡群　10．湯湊遺跡　11．波来浜遺跡　12．高津遺跡　13．猛鬼遺跡　14．赤井穴ケ迫古墳
15．宝隆寺古墳群　16．赤崎山横穴墓群　17．明神古墳　18．高浜遺跡　19．大寺遺跡　20．楡ノ木谷横穴墓群
21．安養寺古墳群　22．矢迫屋横穴墓群　23．鳥居原古墳　24．仮屋遺跡　25．大家八反田遺跡　26．佐古ケ丘横穴墓群
27．神田遺跡　28．二川遺跡　29．都治農協裏遺跡　30．白坏遺跡　31．白石遺跡

第１図　中祖遺跡・ナメラ迫遺跡と周辺の主な遺跡

跡では石を２～３段に積み上げ、床面に石を敷いた箱式石棺が明らかになっており、人骨とともに鹿角装刀子が出土している[7]。集落の実態は不明であるが、前期には坂灘遺跡・立平浜遺跡・大寺遺跡・中祖遺跡、中期には坂灘遺跡・ナメラ迫遺跡・猛鬼遺跡・大家八反田遺跡などが営まれる。このうち、大家八反田遺跡は旧河道から手捏土器・土製模造鏡・土製勾玉・滑石製模造品などが出土しており、水辺の祭祀遺跡である[8]。

古墳時代後期になると仁摩の明神古墳、馬路の鳥居原古墳、五十猛の赤井穴ヶ迫古墳など小平野ごとに有力な古墳が営まれる。明神古墳は径20mの円墳で、全長10.1mの横穴式石室に家形石棺を納めており、副葬品には金銅装円頭大刀・銅碗・鏡片・鉄斧・鉄鏃・鉄鎌などがある[9]。鳥居原古墳は横穴式石室をもち、双龍環頭大刀をはじめ、鞍金具・玉類・耳環などが出土した[10]。

赤井穴ヶ迫古墳は出土品は知られていないが、石見では唯一の切石造り横穴式石室を内蔵する。これらの中でも明神古墳が所在する仁摩平野周辺はナメラ迫古墳・楡ノ木谷横穴墓群・赤崎山横穴墓群など有力農民層の墳墓も確認されており、地域の中核となっていったことが窺える。

奈良・平安時代の遺跡は確認例は少ない。『和名抄』によれば邇摩郡には託農・大国・温泉・杵道・大家・群治の６郷が置かれ、『延喜式』には駅として波祢・託農・樟道・江東・江西などの名が見えるが、郡家や駅などに関わる遺跡は不明といわざるを得ない。その中で注目されるのは白坏遺跡で、「延喜九年(909)」と書かれた木簡をはじめ、墨書土器・ヘラ書き土器などが出土しており、集落ごとに置かれた倉庫の可能性が指摘されている[11]。また、古代瓦が出土した遺跡には中祖遺跡の他、大寺遺跡・都治農協裏遺跡などがあり、役所や寺院などの公的施設の存在が考えられるが、実態は明らかでない。一方、波来浜遺跡では巡方・丸鞆・鈴具が一括出土した火葬墓が検出されており、行政組織を支えた官人の存在が窺える。

平安時代末から鎌倉時代の遺跡には白石遺跡がある。掘立柱建物跡11棟が確認された他、白磁や龍泉系青磁など輸入陶磁器が出土しており、豪族居館の可能性が考えられている[12]。

註

(1)宍道正年『島根県の縄文土器集成』Ⅰ　1974年
(2)島根県教育委員会『中祖遺跡範囲確認調査報告書』2007年
(3)江津市教育委員会・浜田市教育委員会『大平山遺跡調査報告書』1988年
(4)仁摩町教育委員会『川向遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1993年
(5)江津市『波来浜遺跡発掘調査報告書』1973年
(6)仁摩町教育委員会『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1989年
(7)島根県教育委員会「坂灘遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XⅢ集　1987年
(8)遠藤浩巳「大家八反田遺跡の概要」『島根考古だより』第53号 島根考古学会　1987年
(9)島根県文化財愛護協会「新指定文化財二件」『季刊文化財』第57号　1987年
(10)山本　清「原始・古代」『仁摩町誌』仁摩町　1973年
(11)大田市教育委員会『白坏遺跡発掘調査概報』1989年
(12)前掲註(6)に同じ。

第３章　中祖遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

中祖遺跡は日本海沿いに形成された砂丘と福光川が流れる砂丘後背湿地が接するところに位置する。縄文時代後期から江戸時代にかけて営まれた複合遺跡で、仁摩温泉津道路建設に関連して行った遺跡範囲確認調査では、砂丘の端部に当たる地点で遺物包含層である上下２面のクロスナ層を確認した。クロスナ層は砂丘形成の休止期に、その表面が草木に覆われたことにより腐植物など有機物の影響を受けて形成されたもので、中祖遺跡では下層から縄文時代後期、上層からは古墳時代前期・中期及び奈良時代の遺物が出土している(1)。

発掘調査地点は仁摩温泉津道路福波第２高架橋の橋脚部分を対象とし、施工順に平成17年度調査区をⅠ区、18年度調査区をそれぞれⅡ区・Ⅲ区と呼称した。Ⅰ・Ⅱ区は砂丘後背湿地、Ⅲ区は標高70～80mほどの丘陵地南側裾部の緩斜面で後背湿地側から見ると北側縁辺部に当たる。

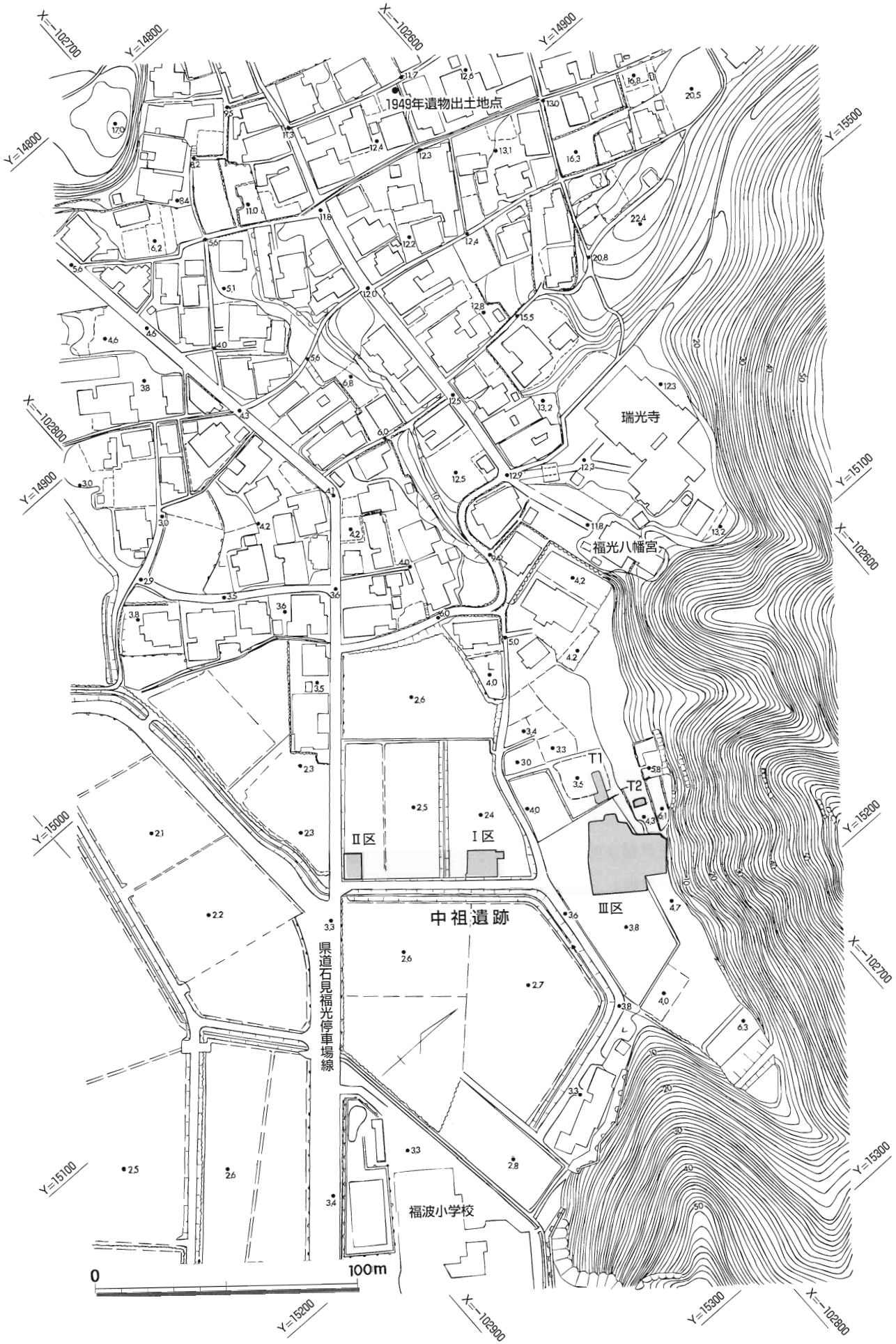
Ⅰ区は平安時代以降の水田が確認された。稲株状の痕跡が多数見られ、それらが長方形状をなすことから、水田の隅部に当たるものと思われる。遺物包含層からは弥生土器・須恵器・土師器が出土した他、布目瓦が含まれており、これがⅢ区の礎石建物跡を確認する端緒となった。

Ⅱ区は室町時代と平安時代の２面の遺構面がある。前者は畑と見られる遺構と柵列状遺構が確認されている。畑状の遺構は、畝間の溝と見られる幅20～50cmほどの浅い溝８条がほぼ南北方向に並んでおり、その南西側に畑地を区画する浅い溝がＬ字形に掘られる。柵列状遺構は畑地の区画溝を切っており、北東から南西方向に0.4～0.6m程度の間隔で並ぶ。調査区北東壁土層で確認できるものを含めると計７個があり、いずれも柱痕が確認できる。出土遺物には青磁・白磁・備前・肥前の他、北宋銭がある。

平安時代の遺構面では杭列とヤナギ属の立ち株が検出された。杭列は長さ４mの範囲で確認でき、本来はしがらみ状になっていたと見られる。また、ヤナギ属は湿地性の植物であるが、花粉分析の結果、この頃までにはシダ類が生息できるほどの乾燥した草地環境になっていたとされる。これらは砂丘後背湿地が次第に乾燥し、耕地化されて行く過程を示すものと見られる。

Ⅲ区は大田市立福波保育園の跡地で、遺構の遺存状況は良好ではなかったが、奈良時代後半～平安時代前半の礎石建物跡1棟・土坑・ピット、江戸時代の石敷道・溝などが確認された。このうち、礎石建物跡は東西２間、長さ4.2mほどの建物跡で、礎石の間隔は約2.1mである。原位置に残る礎石は３つのみであったが、その他に動かされた礎石と見られる大きな石が５つあり、東西２間・南北２間程度の小規模な建物と考えられる。礎石は自然石が使われ地山を浅く掘り窪めて据えられており、建物跡の南側には瓦溜が残されていた。瓦には丸瓦と平瓦があったが軒瓦は見られず、ともに凹面には布目、凸面には縄目タタキがあるのが特徴である。平瓦に対する丸瓦の比率が極端に低いことから、屋根全面を瓦葺きにした総瓦葺きではなく、棟部分に瓦を用いた熨斗棟であった可能性が高い。出土遺物には瓦のほか須恵器坏・壺、土師器甕、焼塩壺などがあり、土師器坏には焼成前に内面に「佐右」とヘラ書きされたものが含まれていた。

江戸時代の石敷道は、人頭大でやや軟質の転石を幅1.3～1.5mの範囲に敷き詰めたもので、側溝などは確認されていないが、ほぼ東西方向に延びている。



第2図　中祖遺跡と周辺の地形

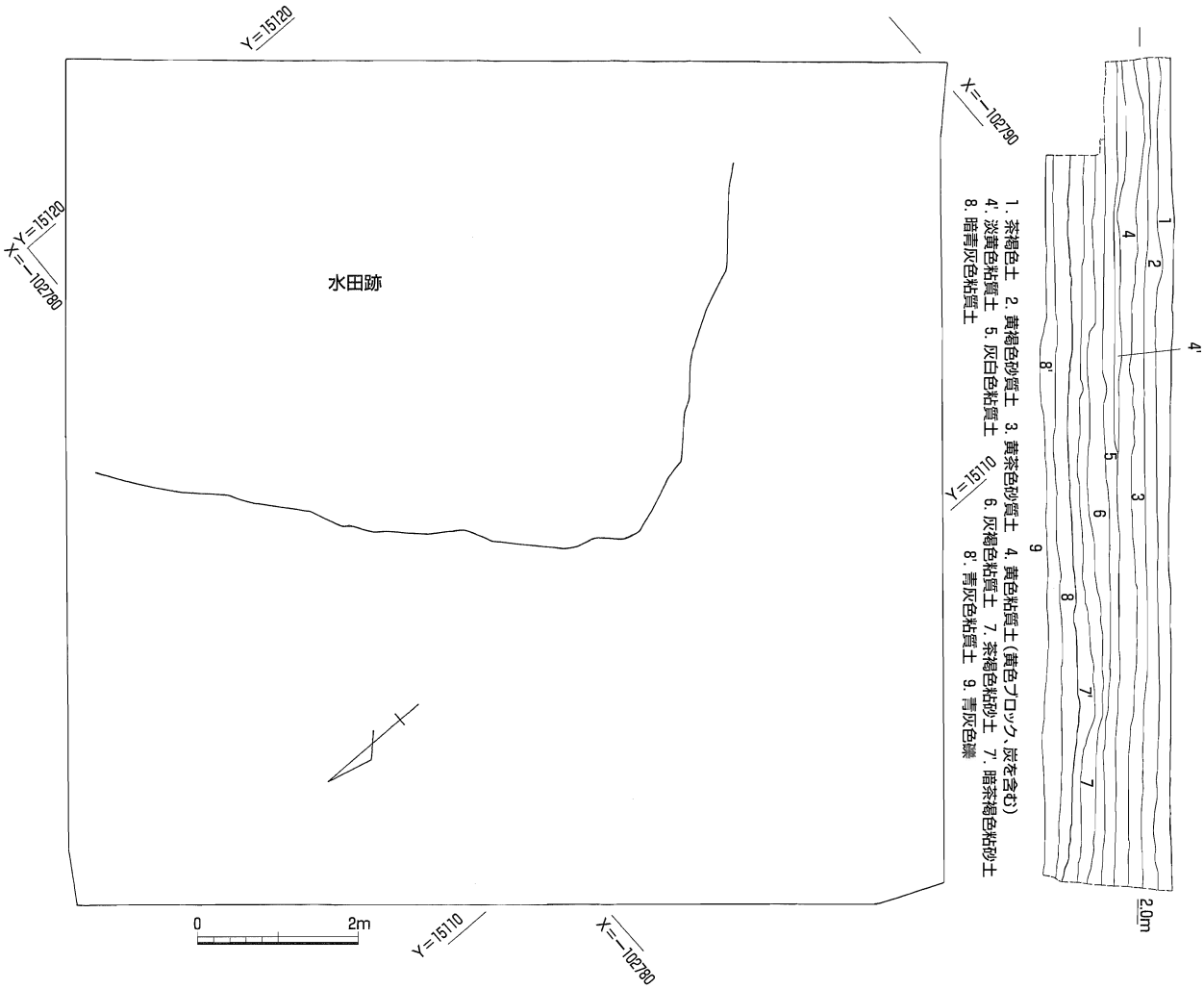
第２節　Ⅰ区の調査

県道石見福光停車場線より北東へ50mほど入った水田に設定した調査区である。

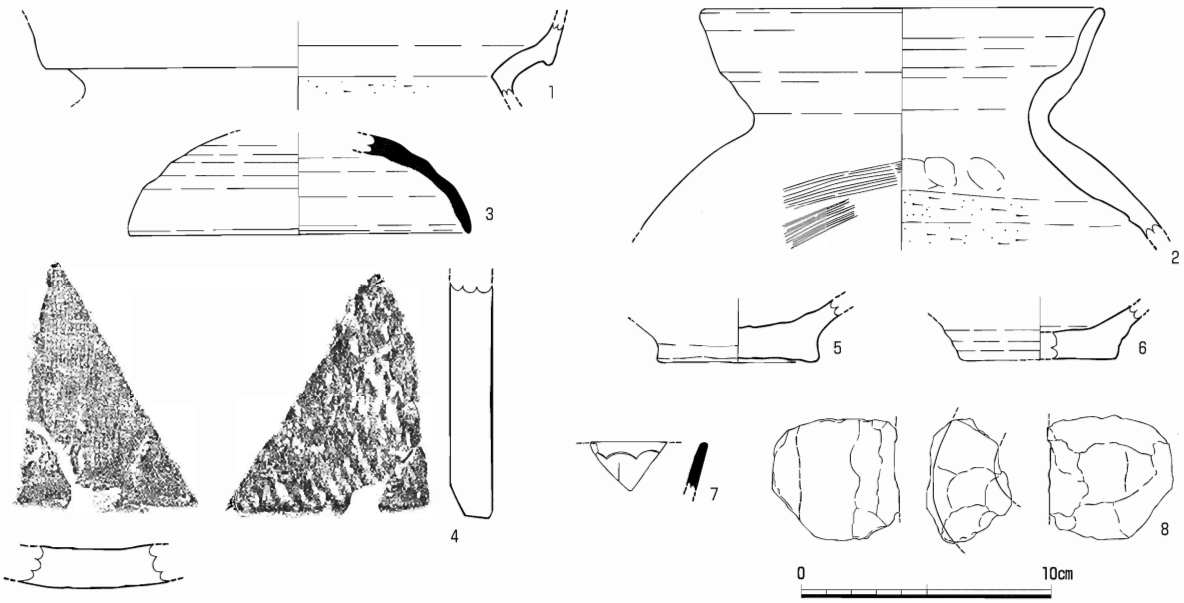
層序(第３図)は耕作土を除去すると、上層より茶褐色土(１層)・黄褐色砂質土(２層)・黄茶色砂質土(３層)・黄色粘質土(４層：黄色土ブロック、炭を含む)・淡黄色粘質土(４'層)・灰白色粘質土(５層)・灰褐色粘質土(６層)・茶褐色粘砂土(７層)・暗茶褐色粘砂土(７'層)・暗青灰色粘質土(８層)・青灰色粘質土(８'層)・青灰色礫(９層)の順となっている。一つの層は厚さが10～20cm前後で、ほぼ水平堆積である。遺構面は標高1.1mほどのところの暗青灰色粘質土(８層)の上面にあり、水田遺構が検出されている。

水田遺構は暗茶褐色粘砂土(７'層)を除去した段階で、稲株状の痕跡が確認されたことにより明らかとなった。調査範囲に制約があるため全形は不明だが、稲株状の痕跡は5.5×7.5mの範囲に多数見られ、長方形状に広がっている。その形状から水田の隅部に当たると考えられるものの、畦畔は確認されていない。この水田面からは中世前半の土師質土器坏片が出土しており、それ以降に営まれたものと見られる。

出土遺物としては弥生土器、土師器、須恵器、布目瓦、青磁、羽口片などがあるが、上層の２～３層で検出されたものが多い。



第３図　中祖遺跡Ⅰ区８層上面遺構実測図



第４図　中祖遺跡Ⅰ区出土遺物実測図

第４図１は弥生土器甕である。複合口縁の下端部を留めており、内面頸部にはヘラケズリがある。

２は土師器甕で、外傾する口縁外面に稜があり複合口縁の痕跡を留める。肩部外面はハケメ、内面には指押えとヘラケズリが見られ、口縁の一部に黒斑がある。

３は須恵器坏蓋で、口縁から頂部にかけ丸味のある形態をもち、外面には自然釉がかかる。

４は平瓦で凹面に布目圧痕、凸面に縄目タタキが見られ、端部にはケズリが施される。

５・６は土師器坏である。ともに風化しているが、底部の切り離しは回転糸切りと見られる。

７は青磁碗の口縁部片で、外面に線描きの蓮弁があり、内外面に施釉され、緑灰色を呈する。

８は羽口で、送風孔径は３cm前後になるものと見られる。先端部にはガラス質滓が付着しており、これに接する部分は外面が灰黒色、内面は黒褐色に変色する。

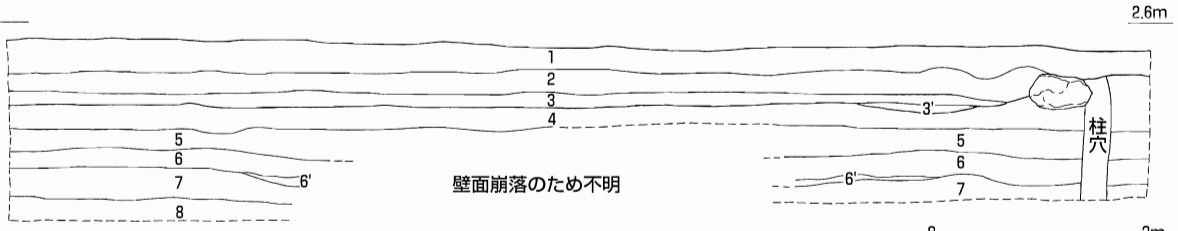
以上の遺物の時期は、１が弥生時代後期、２が古墳時代中期、３が古墳時代後期、４は奈良時代、５・６は平安時代、７は室町時代のものと見られる。

第３節　Ⅱ区の調査

県道石見福光停車場線に接する位置に設定した調査区である。

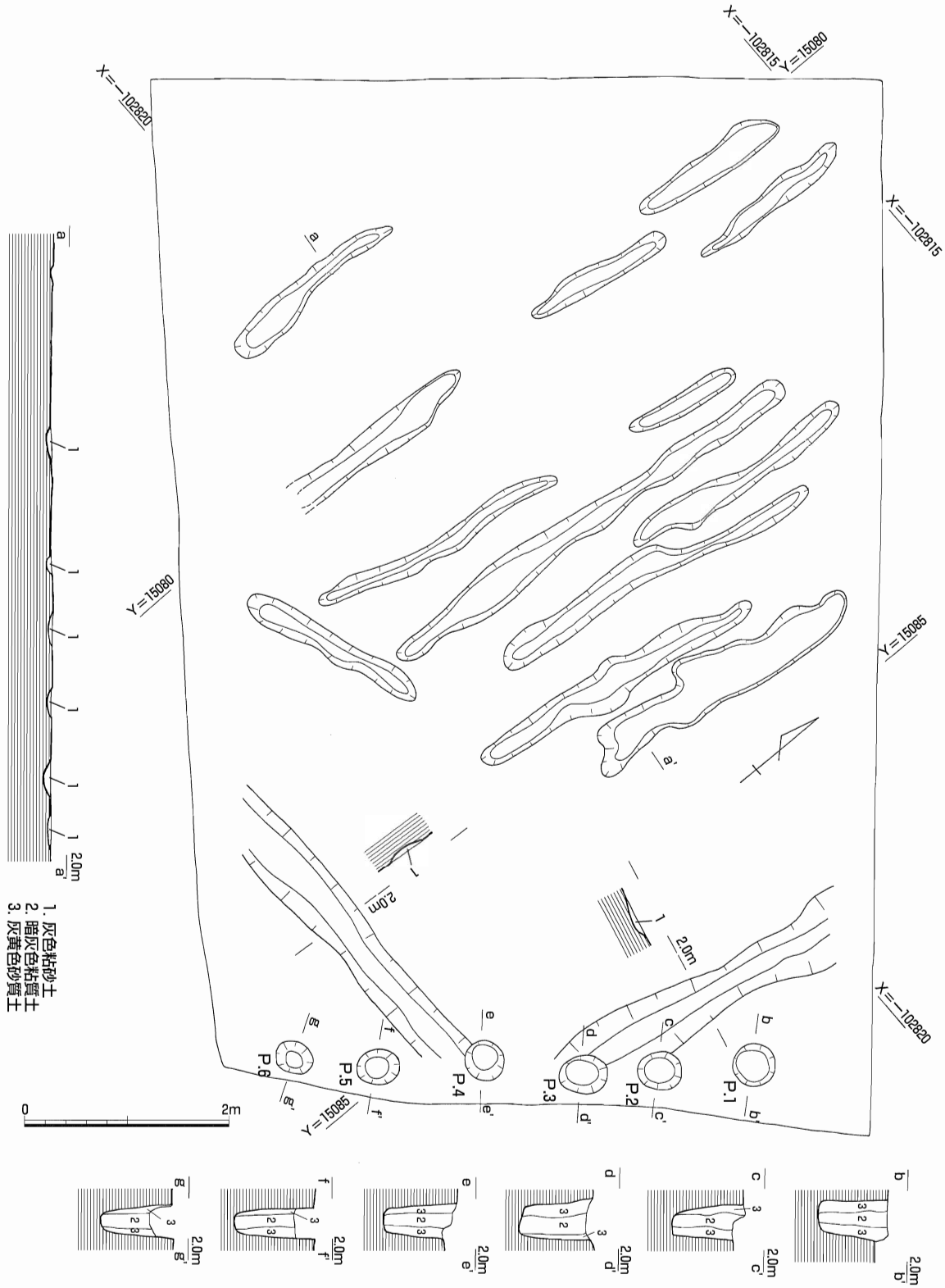
層序(第５図)は、上層より耕作土(１層)・灰褐色土(黄色土小粒含む：２層)・暗灰色粘質土(室町時代遺物包含層：３層)・灰色粘質土(３'層)・黄褐色粘砂土(４層)・灰色砂質土(５層)・黄灰色粘砂土(平安時代遺物包含層：６層)・青灰色粘質土(７層)・青灰色砂(８層)の順となっている。遺構面は２面あり、標高1.85m付近にある黄褐色粘砂土(４層)上面と標高1.1m付近にある青灰色粘質土(７層)である。

黄褐色粘砂土(４層)上面の遺構面では、畑と見られる遺構と柵列状遺構が確認された(第６図)。遺構面の上層にあたる暗灰色粘質土(３層)が遺物包含層となっており、青磁・白磁・備前・肥前の他、北宋銭など室町時代の遺物が出土している。畑状の遺構は、畝間の溝と見られる幅20～50cm・深さ5～10cm程度の浅い溝8条がほぼ南北方向に並んで検出された。その南西側には主軸をほぼ南北及び東西にとる幅35～60cm・深さ5～6cmの溝がほぼ直交するように掘られており、畑地を区画する溝と



1. 耕作土　2. 灰褐色土（黄色土小粒含む）　3. 暗灰色粘質土（室町時代遺物包含層）　3'. 灰色粘質土
4. 黄褐色粘砂土　5. 灰色砂質土　6. 黄灰色粘砂土（平安時代遺物包含層）　7. 青灰色粘質土　8. 青灰色砂

第５図　中祖遺跡Ⅱ区北東壁土層実測図



第６図　中祖遺跡Ⅱ区４層上面遺構実測図

見られる。

柵列状遺構は畑地の区画溝の後に掘り込まれており、ピットは北東から南西方向に0.4～0.6m程度の間隔で並ぶ。調査区北東壁土層で確認できるものを含めるとピットは計７個があり、いずれも柱痕が確認できる。P.１は径40㎝・深さ67㎝、P.２は径35～42㎝・深さ70㎝、P.３は径38～46㎝・深さ70㎝、P.４は径40㎝・深さ70㎝、P.５は径35～40㎝・深さ78㎝、P.６は径30～35㎝・深さ70㎝である。

青灰色粘質土(７層)では杭列とヤナギ属の立ち株が検出された(第７図)。遺構面の上層にあたる黄灰色粘砂土(６層)が遺物包含層となっており、平安時代頃の土師質土器小片が含まれていた。杭列は長さ４mの範囲に20～40㎝程度の間隔で打ち込まれており、計14本が確認された。いずれも先端を尖らせており、一部に杭を繋ぐように横方向に渡された木が残っていたことから、本来はしがらみ状に組まれていたことが考えられる。

ヤナギ属の立ち株は、杭列より北西5.5mのところに位置する。根が付いたまま横になった状態で検出されており、幹の太さは30㎝程度ある。この立ち株より採取した試料により放射性炭素年代測定を行ったところ、補正^{14}C年代975±20(yrBP)、暦年代AD1010-1060・AD1070-1160という結果が得られており、平安時代後半頃のものと見られる。ヤナギ属の立ち株は、この地点が湿地内ではあったが常時水浸きの状態であったわけではなかったことを示しており、花粉分析の結果と合わせると、この頃までにはシダ類が生息できる程度に乾燥した草地環境になっていたことが想定されている。

遺物は３層を中心に青磁・白磁・瓦質土器・備前・唐津・北宋銭などが出土しており、その構成は第１表に示した。

第８図１・２は青磁である。１は稜花皿の口縁部で、内面に陰刻線がある。２は小形の香炉の脚部で、畳付けに離れ砂が付着する。

３は白磁碗で、見込みに陰刻文があり、高台は無釉である。

４は瓦質土器の擂鉢で、外面はハケメののちナデ、内面の摺目は摩耗している。

５は備前擂鉢の口縁部で、内面に自然釉が見られる。

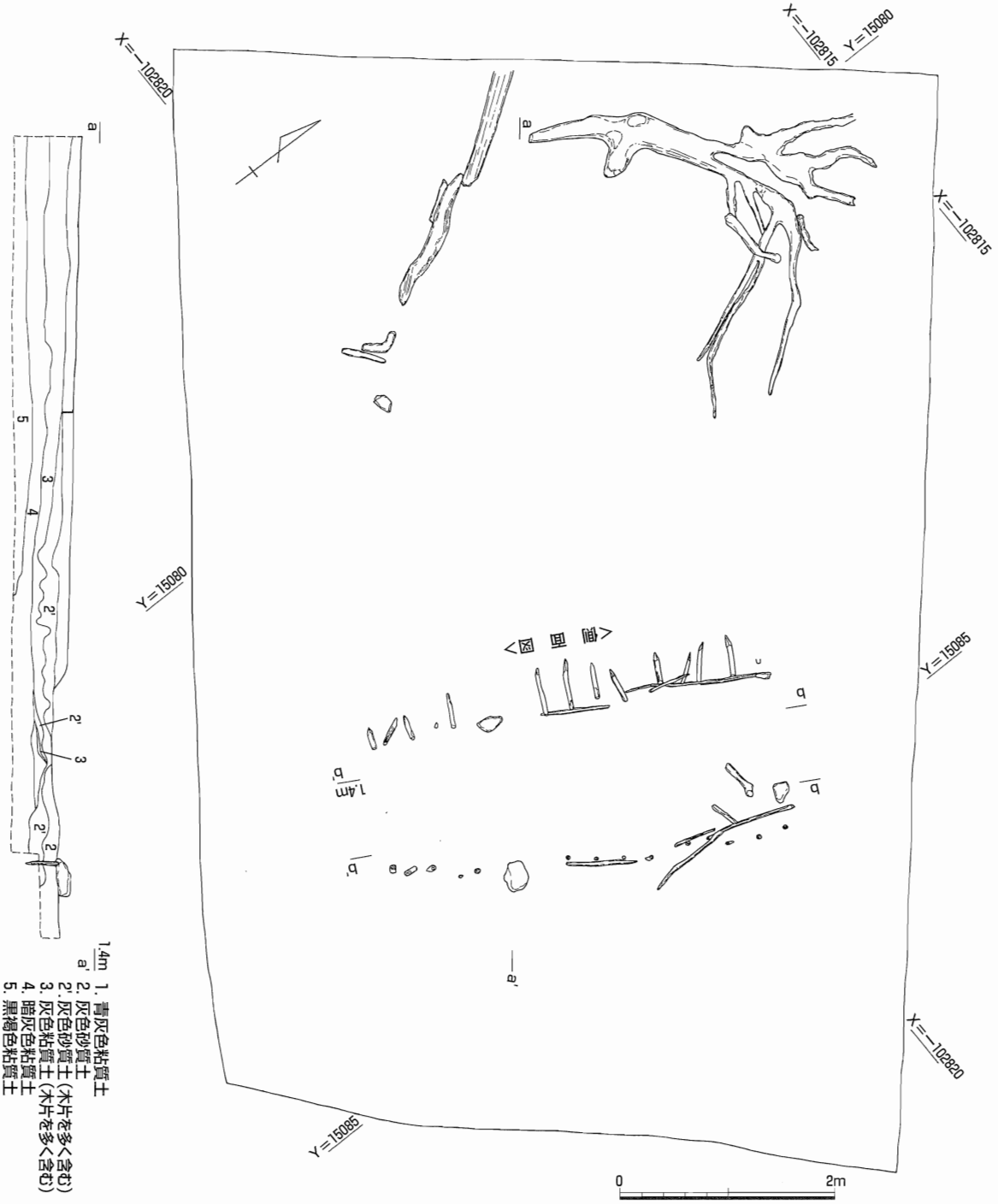
６・７は唐津皿の底部である。ともに底部は削り出し高台で無釉であり、見込みには胎土目が残っている。

８は北宋銭の「元祐通宝」で、初鋳は1086年である。

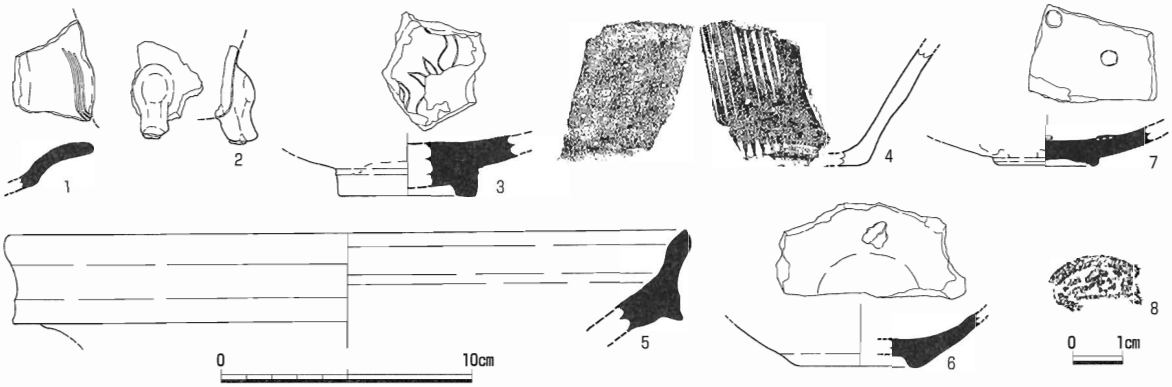
以上の遺物の時期は、３が平安時代に遡るが、1・2・4・5は室町時代、6・7は江戸時代初め頃のものと見られる。

第１表　中祖遺跡Ⅱ区陶磁器構成表

種　別	器　種	点　数
青　磁	稜花皿	1
	香炉	1
	碗	7
白　磁	皿E類	1
	碗	1
青　花	皿	1
備　前	擂鉢	3
	壺	3
瓦　質	擂鉢	1
土師質	鉢	1
小　計		20
唐　津	碗・皿	8
	鉢	2
	不明	2
肥　前	碗・皿	36
在地陶器		30
小　計		78
近世以降　磁器		20
不明陶器		9
合　計		127



第７図　中祖遺跡Ⅱ区７層遺構実測図



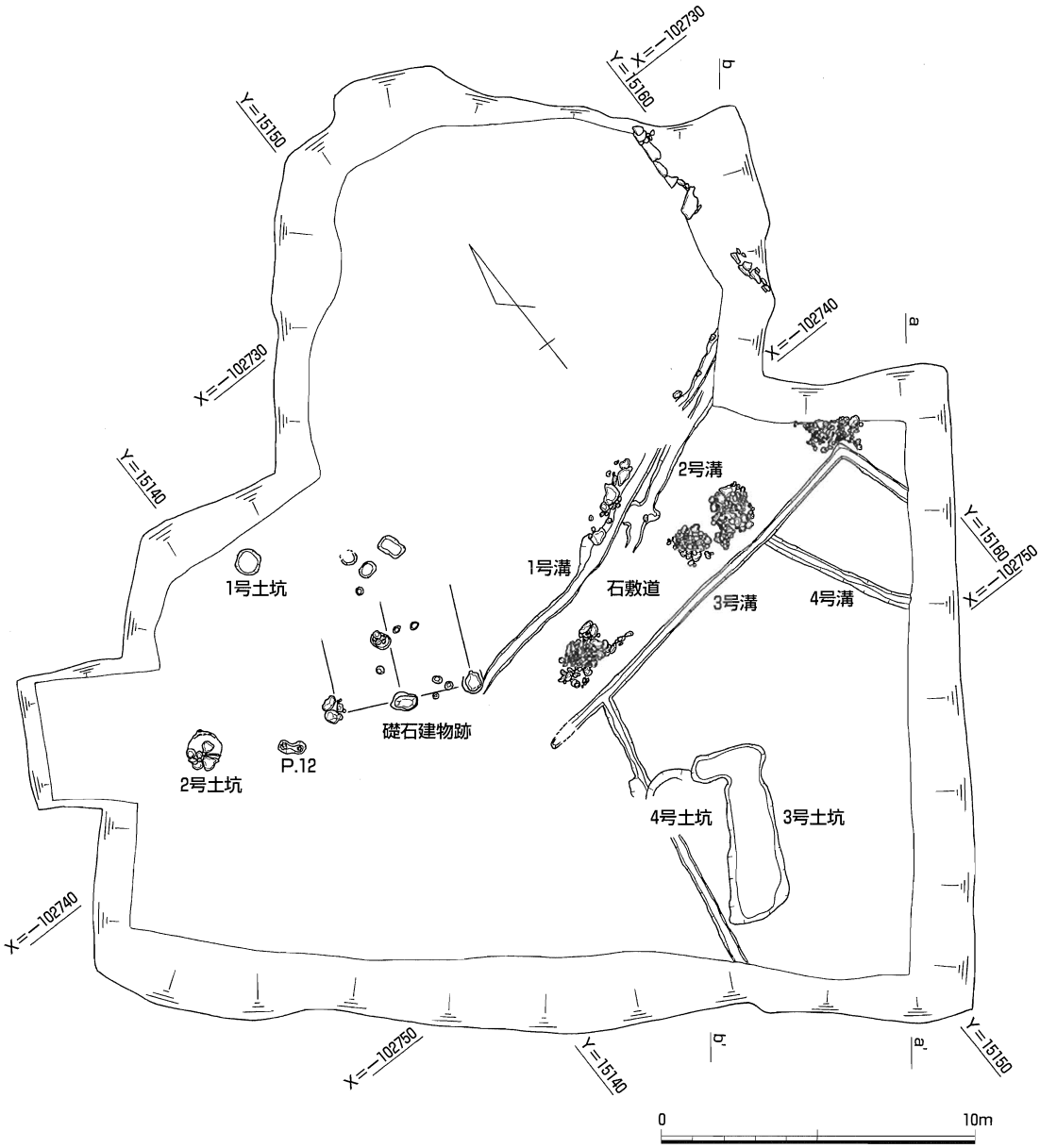
第８図　中祖遺跡Ⅱ区出土遺物実測図

第４節　Ⅲ区の調査

県道石見福光停車場線から北東へ100mほど入った地点に設定した調査区である。丘陵南側裾部の緩斜面に位置しており、調査区の西５mほどの地点まで海岸砂丘の堆積物である砂層が及んでいるが、調査地点は礫を多く含んだ黄灰褐色土を基盤層とする。

層序(第11図)は、福波保育園敷地の造成土を除去すると、基本的には上層より黒褐色土(３層)・灰褐色土(４層)・礫混じりの黒褐色土(遺物包含層：５層)・黒色土(遺物包含層：６層)・礫を多く含む黄灰褐色土(15層)の順となっている。遺構面は２面あり、礫混じりの黒褐色土(５層)と礫を多く含む黄灰褐色土(15層)である。前者には3号溝と石敷道が設けられ、後者では礎石建物跡をはじめとし、1～4号土坑や1・2号溝が営まれている。

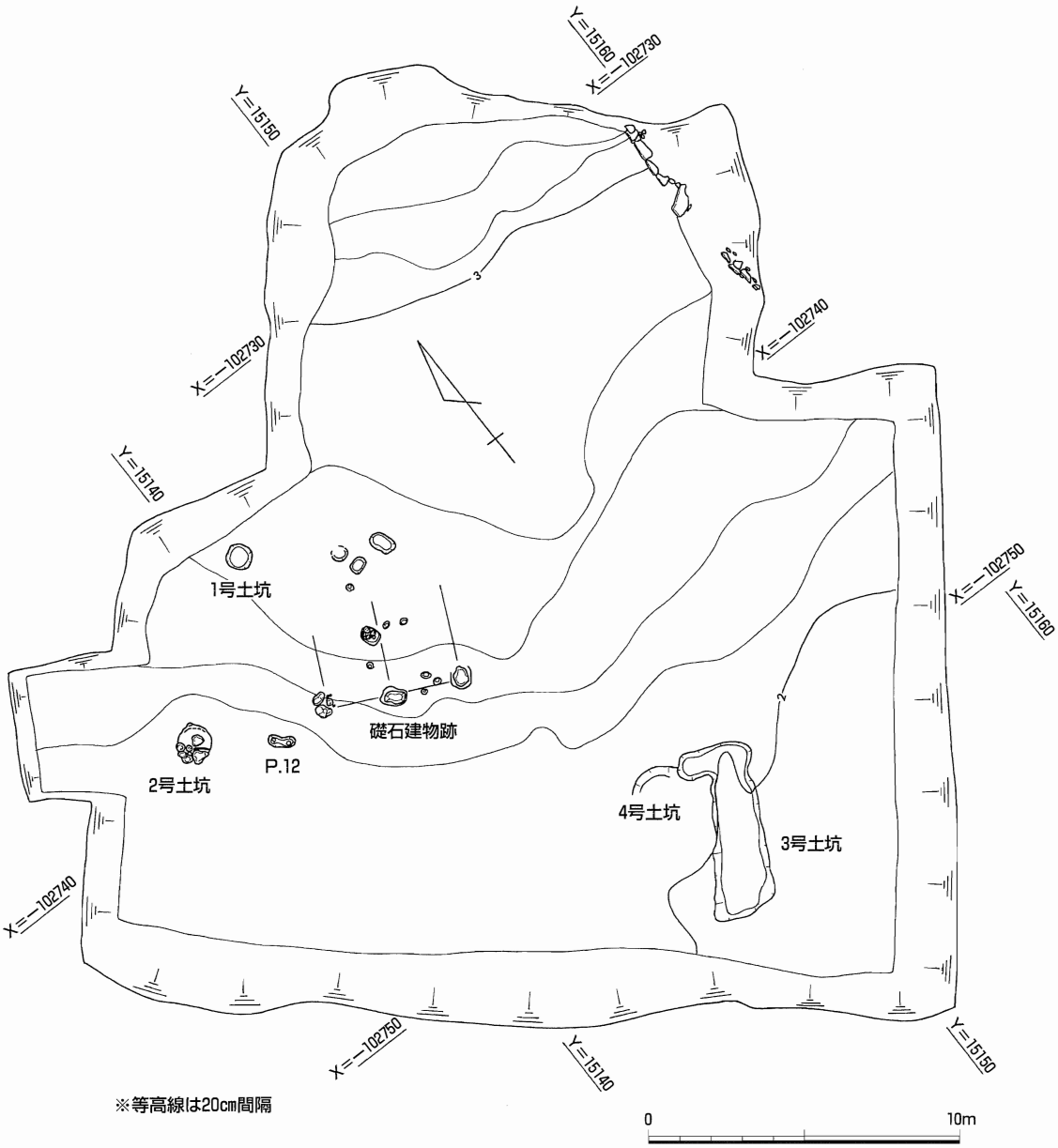
基盤層である15層は北から南へと緩やかに傾斜しており、これが南西へやや張り出した地点に礎石建物跡が位置する。その周囲に1・2号土坑があり、礎石建物跡から南東へ６m離れたところに3・4号土坑がある。礎石建物跡は１棟のみ確認されており、調査範囲内ではこれに伴う施設は見ら



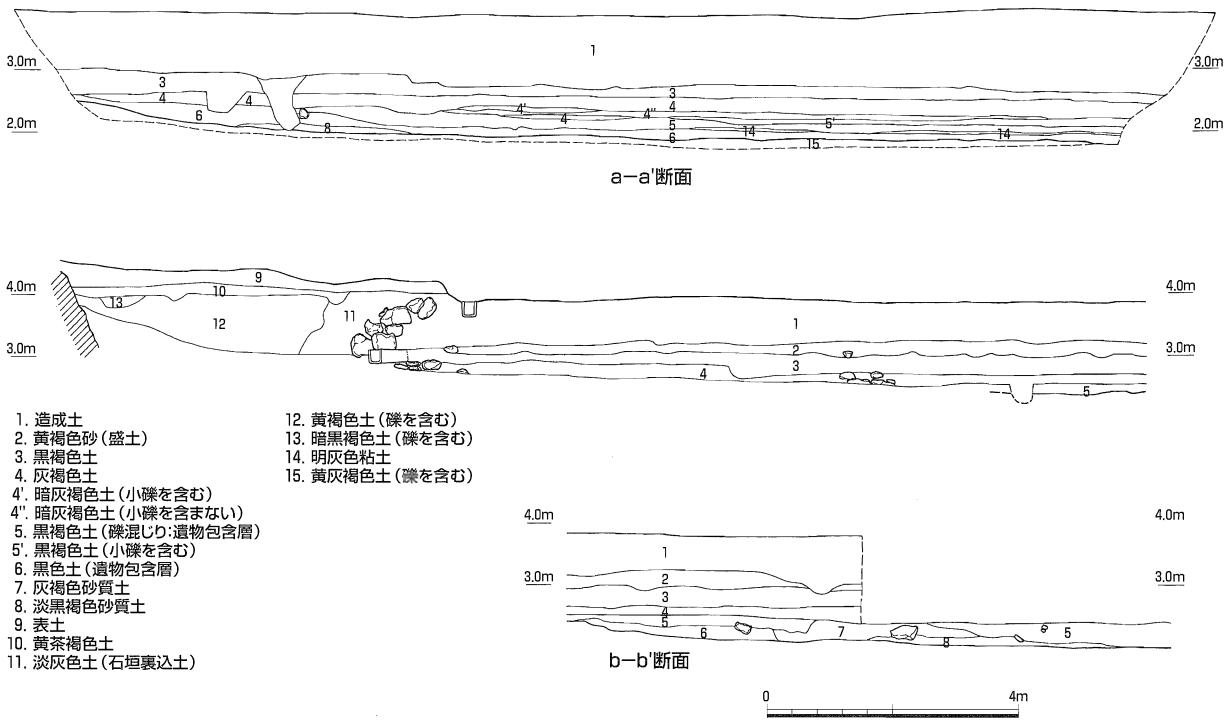
第９図　中祖遺跡Ⅲ区遺構配置図

れない。15層は北側が削平を受けているため、この部分に同時期の施設があった可能性は否定できないが、調査区のすぐ西側は砂丘となっていることから関連遺構の広がりは考えることはできず、遺構の配置は極めて散漫である。

5層上面の遺構は調査区の東半部にあり、石敷道は東西方向に約12mの範囲で確認された。道は東側へと入る小さな谷の方向へと延びており、この谷には福光石の大規模な石切場があることが分かっている。1号溝は15層に掘り込まれ、切り合い関係から礎石建物跡より後に設けられたものである。東側では石敷道より北へ逸れるもののほぼ平行することから、これに伴う可能性が考えられる。3号溝は内部に柴を入れて埋め込んだ暗渠で、石敷道と平行して延びているが、調査区内の東端部で石敷道を切っており、石敷道の後に掘られたものであることが分かる。これからは同様な構造の暗渠となる溝が南へ延びており、石敷道に伴う遺構ではなく、耕地の造成などに伴って設けられたものと見られる。



第10図　中祖遺跡Ⅲ区完掘後地形測量図



第11図　中祖遺跡Ⅲ区調査区東壁他土層実測図

（１）礎石建物跡（第12・13図）

調査区中央よりやや南西側の、南向き緩斜面に位置し、隣接する２号土坑は西４ｍ、３号土坑・４号土坑は南東７ｍのところにある。

礎石建物跡は整った基壇をもってはいないが、基盤層である礫を多く含んだ黄灰褐色がやや南西側に張り出した地形の先端に立地し、南側から見ると基壇状の高まりを伴うかのように見える。礎石は原位置で３個が検出された他、大きさと形状より礎石の可能性がある石材６個を確認した。礎石１～礎石３は基盤層を掘り込んで据え付けられたもので、建物跡の南辺に当たると考えられる。礎石２の北側にあるP.5は礎石抜き取り痕の可能性がある。礎石間の心々距離は礎石１と礎石２、礎石２と礎石３とも2.2m、礎石２とP.5も2.2mで、各礎石間の距離は等しい。こうした状況から礎石建物跡は東西２間、南北は不明ながら礎石と見られる石材の数から同様に２間で、4.4m四方の規模をもつ総柱建物であったことが想定される。

礎石は丸味を帯びた転石が用いられ、特に加工は加えられていない。礎石１は長さ65㎝・幅45㎝・厚さ35㎝、礎石２は長さ75㎝・幅45㎝・厚さ40㎝で、礎石の大きさに応じて掘られた深さ15～25㎝の掘り方に据えられる。礎石３はこれらとは異なり長さ60㎝・幅40㎝・厚さ20㎝ほどの板状の石材で、地山を僅かに掘り窪めて置かれていた。P.5は長さ65㎝・幅45㎝・深さ35㎝で、底面で根石と見られる石材が入っている。

また、礎石建物跡の南西側を中心に瓦溜が検出された。瓦は平瓦と丸瓦で、軒瓦は含まれておらず、いずれも小片となっていた。北東から南西方向へと傾斜するように確認され、礎石３付近は瓦片がこれを覆うように特に集中して出土している。瓦片は基盤層の直上にも見られ、建物跡の南側では瓦溜の上に動かされた礎石がのっていた。

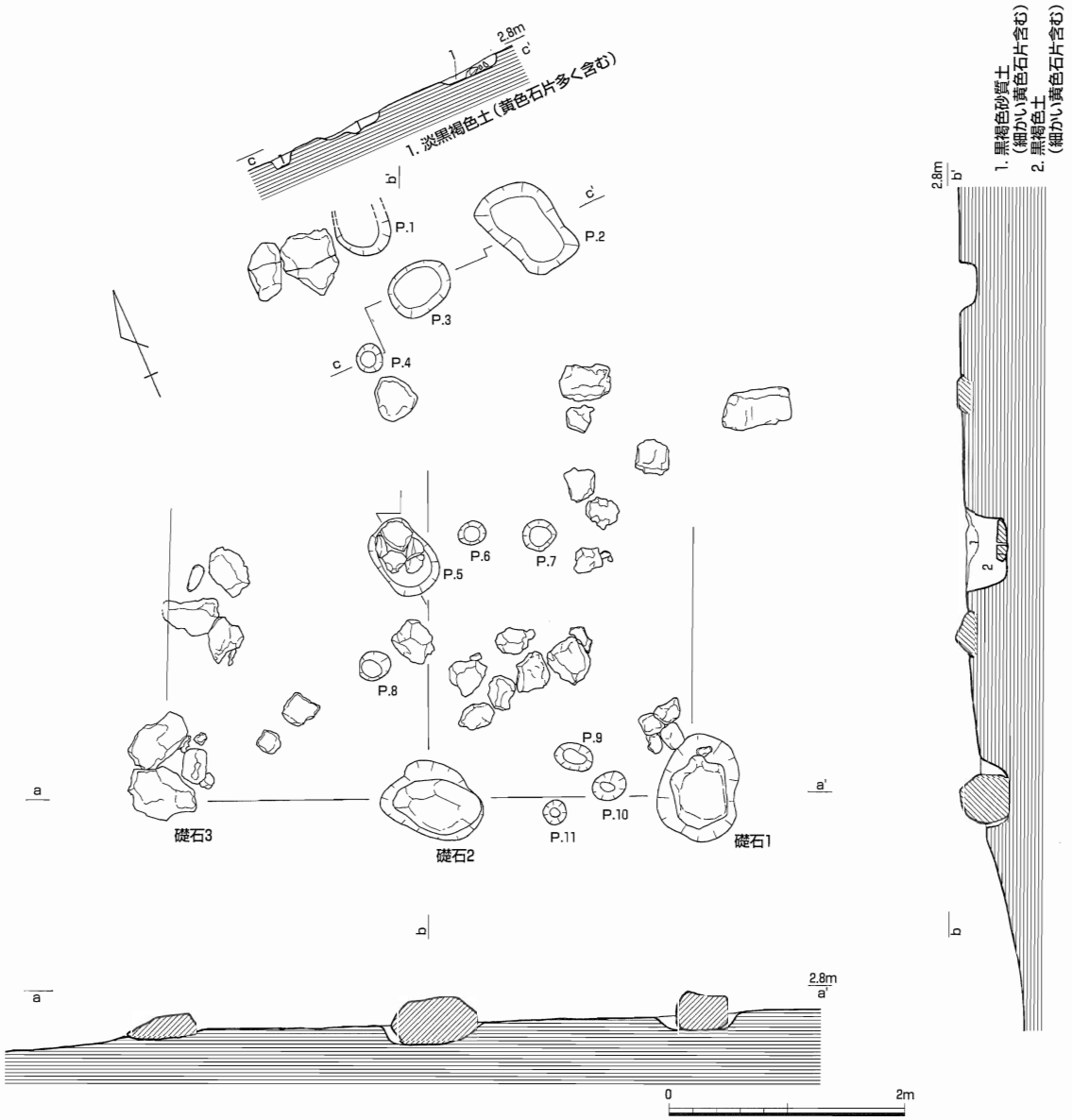
瓦溜の出土遺物としては丸瓦・平瓦のほか須恵器・土師器・焼塩壺・砥石などがあり、弥生土器・青磁・瓦質土器・磨製石斧のような混入遺物と見られるものも含まれる。

第14図１～６は須恵器である。１は坏蓋で、頂部に輪状つまみをもち、口縁端部が下方に肥厚しており、調整は回転ナデである。口唇に色調差があり、重ね焼きされたものと見られる。２～４は坏である。いずれも口縁部が外傾する器形をとり、底部外面には回転糸切り痕が残っている。２は外面に重ね焼きの痕跡があり、口縁の一部に自然釉がかかる。５は皿で、口縁部を欠くが大きく開く器形をもつ。内面底部に色調差があり重ね焼きされたと見られる。６は甕で、「く」字状に屈曲する口縁部をもち、外面に平行タタキ・内面に同心円状の当て具痕が残る。

７・８は土師器甕である。ともに口縁は短く外反するが、７は胴部外面に格子タタキ、内面に当て具または指押えの凹凸を残しており、８の胴部外面はナデ、内面はケズリである。

９は焼塩壺で、底部にかけて窄む長胴状の器形をもつ。外面はナデ、内面に布圧痕を残す。

10は弥生土器高坏の脚部と見られる。外面には13条以上の凹線、内面にはしぼり目がある。



第12図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡遺構実測図

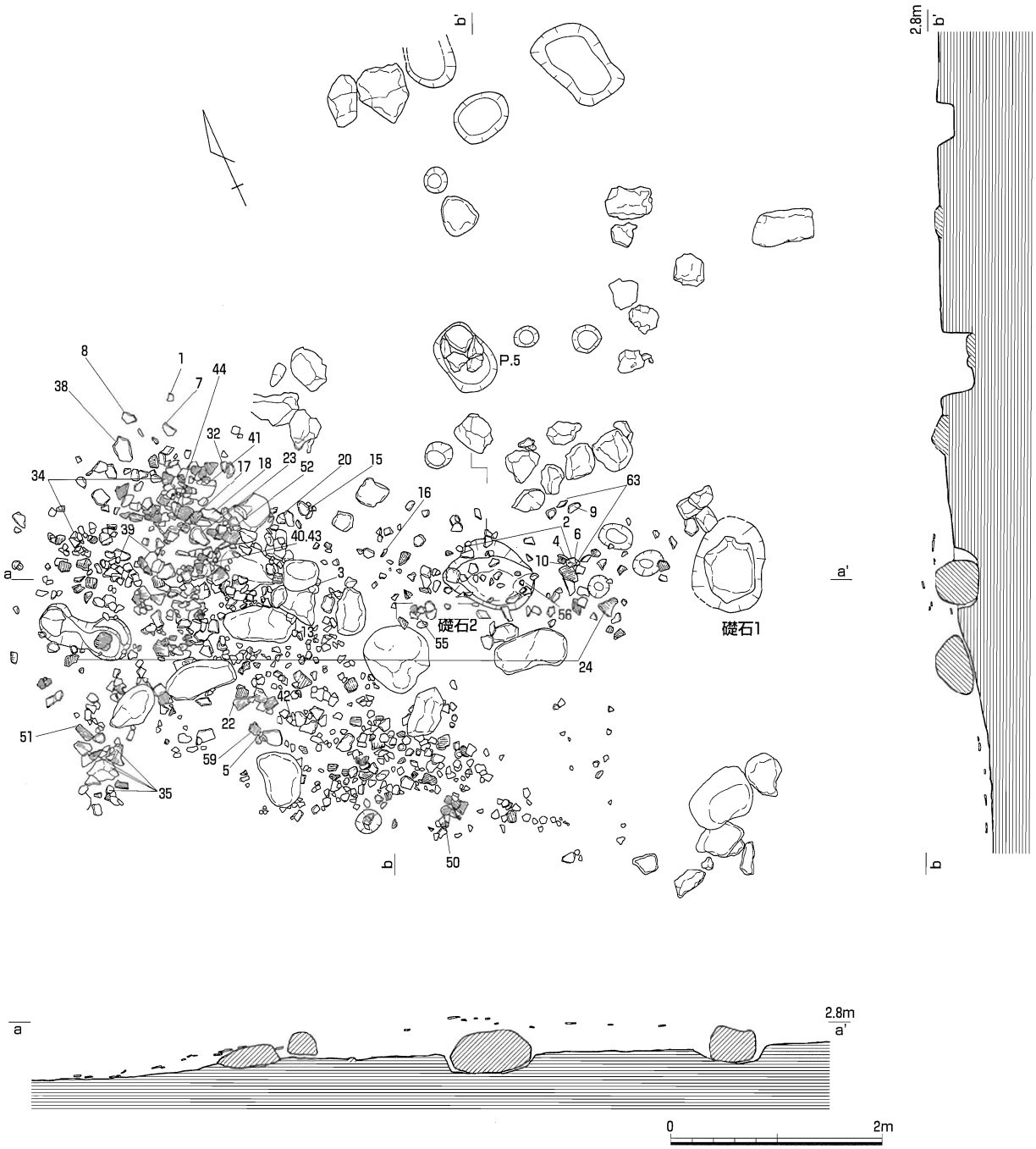
11は青磁碗の口縁部で外面に線描きの蓮弁が施されている。

12は土錘で、長さ3.5㎝・幅1.4㎝・孔径0.5㎝、重さは7.2ｇである。

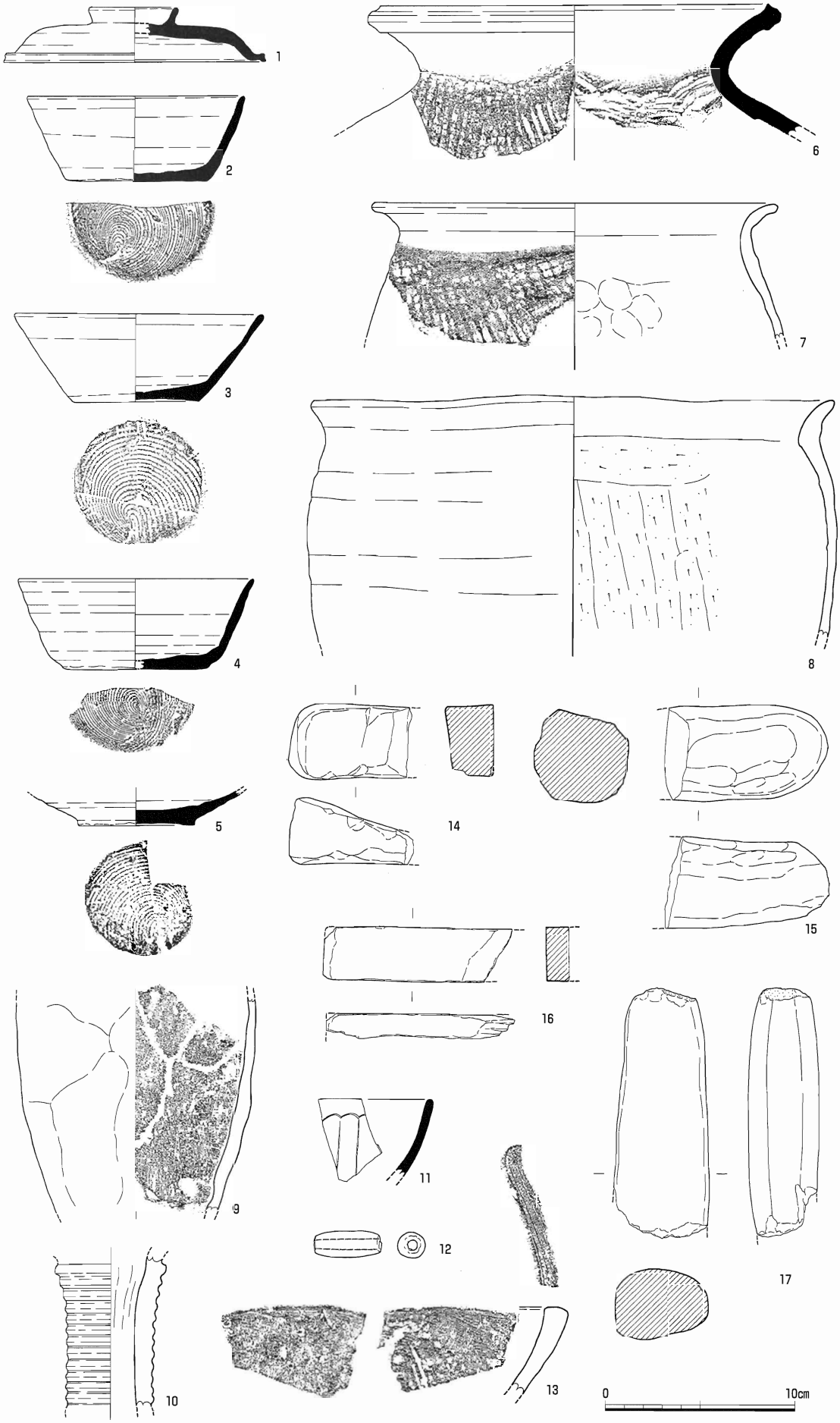
13は土師質土器鉢で、片口をもつ。口縁端部がやや厚く、内面には粗い摺目の一部が残っており、端部付近はハケメ調整される。

14～16は砥石である。14・15は砂岩、16は凝灰質頁岩製で、14と16はよく使用され平滑な面をもっている。

17は磨製石斧で、塩基性片岩製である。刃部は欠損し、側面・端部に成形時の敲打痕がある。



第13図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡遺物出土状況実測図



第14図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土遺物実測図

第15～18図は丸瓦である。基本的には凸面に縄目タタキ、凹面に布圧痕と糸切り痕が見られるもので、ほとんどは焼成が不良である。

第15図18～第16図20はほぼ全形が分かるもので、18は長さ37.6cm・広端幅15.0cm・狭端幅10.4cm、19は長さ34.1cm、20は長さ38.9cmである。凸面は18の側縁部、20のほぼ全面に縄目タタキののちケズリ調整が加えられており、凹面は18には両側縁・両端、19は両側縁、20は両側縁と広端にケズリが入る。18は凸面に離れ砂が付着しており19・20の凹面には糸切り痕が残る。

第16図21は僅かに見られる焼成良好品の一つで、色調は淡青灰色または暗灰色を呈する。凸面は縄目タタキののち一部にナデが入り、凹面には顕著な糸切り痕と側縁にケズリが見られる。22は広端が残っており、幅15.5cmである。凹面には糸切り痕と両側縁・広端にケズリが入る。第17図23・24は狭端で、23は幅9.7cmである。凹面には両側縁と23には狭端にもケズリが見られる。25は側縁の破片で、凸面の縄目タタキが不定方向となっており、凹面は側縁と端部側にケズリが入る。第18図27は両側縁が残るもので、幅13.5cm、凹面の両側縁にはケズリが見られる。

第17図26と第18図31・32は凹面に盛り上がりがあり、型の窪みが転写されたと考えられるものである。盛り上がりは26と31とも幅2.7cmで、26は型に当てられた布端部のほつれが見られる。第18図28～30は型に当てられた布の綴じ合わせが残る資料である。

第19～26図は平瓦で、丸瓦と同様に焼成が不良なものが多い。基本的には凸面に縄目タタキと糸切り痕、凹面には布圧痕と糸切り痕があり、四周にケズリ調整が施される。

第19図33～第21図37はほぼ全形が分かるもので、33は長さ38.2cm・広端幅23.5cm・狭端幅20.5cm、34は長さ38.0cm・狭端幅24.9cm、35は長さ38.8cm・広端幅23.5cm、36は長さ39.5cm・広端幅23.8cm、37は長さ38.1cm・狭端幅23.2cmである。34は凹凸に布端部のほつれ、35は一部に指押えが確認できる。

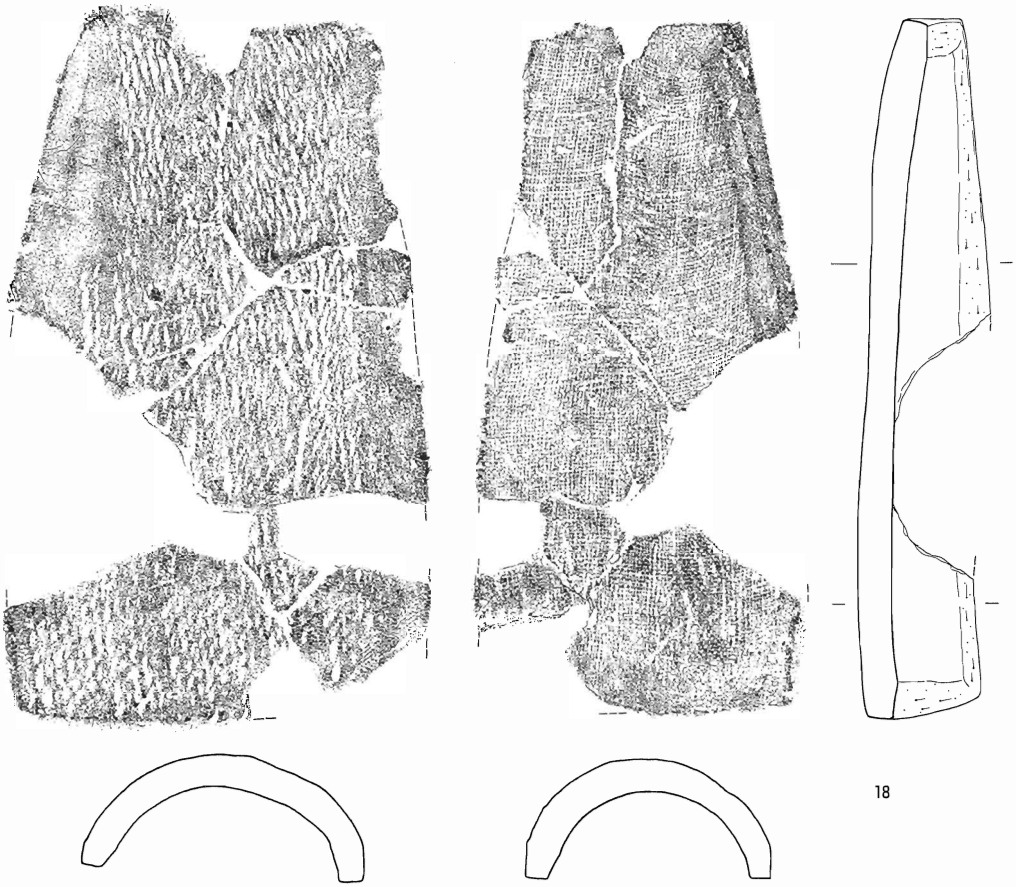
第21図38は広端の一部が残るもので、幅は27cm程度と見られる。凸面には離れ砂が付着しており、凹面の一部に指圧痕がある。第22図39～41は狭端が遺存するもので、39は幅24.7cm、40は幅24.0cm、41は幅22.9cmである。第23図42～第24図46は狭端または広端の一部が残るもので、42以外には端部近くに段が見られる。いずれも段の中には布目圧痕を留めており、型の段が転写されたと考えられる。

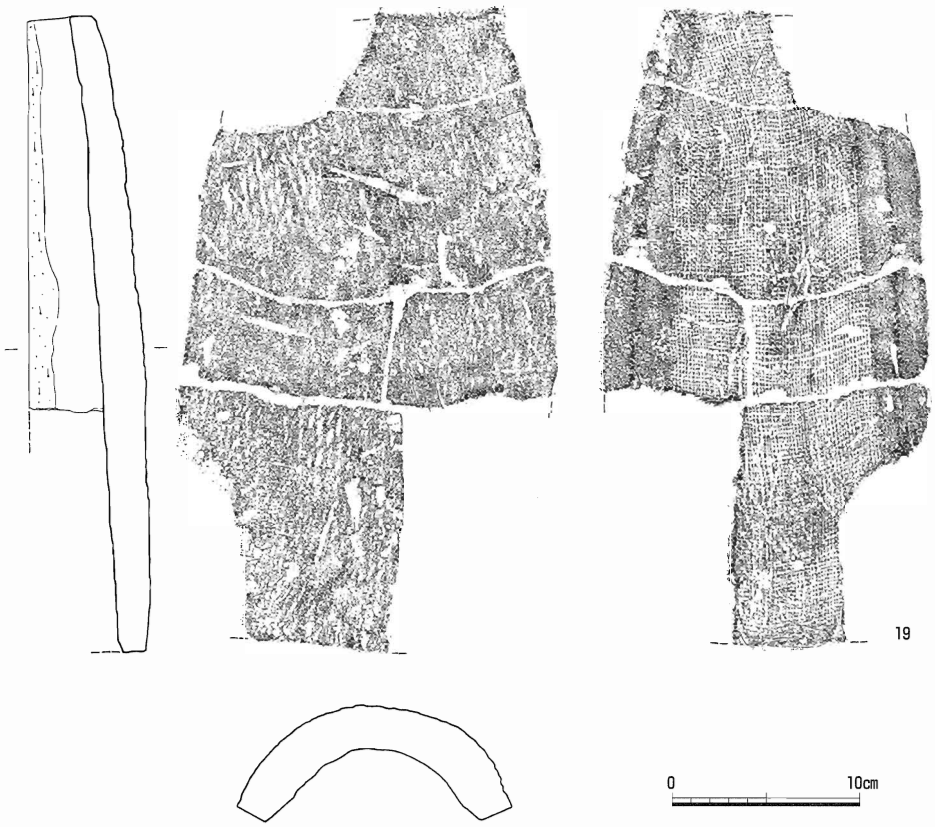
第24図47は一方の側縁を欠くが、長さが39.9cmであることが分かり、幅15cm程度で割れている。同様に一方の側縁を残し、長辺方向に比較的長く接合できたものには第24図50～第25図54があるが、幅は概ね10～14cmである。石見国分寺跡では焼成前に平瓦を分割した熨斗瓦が出土しており、その幅は12.5cmである(2)。47と50～54は比較的これに近い幅で割れており、平瓦を意図的に割って熨斗瓦とした可能性も考えられる。51・52の凸面には離れ砂が認められる。

第24図48・49、第25図55・56は側縁または端部が残るもので、55・56は端部に沿って沈線が入っている。48は凸面にガラス質の融着物があり、49は離れ砂が付着する。

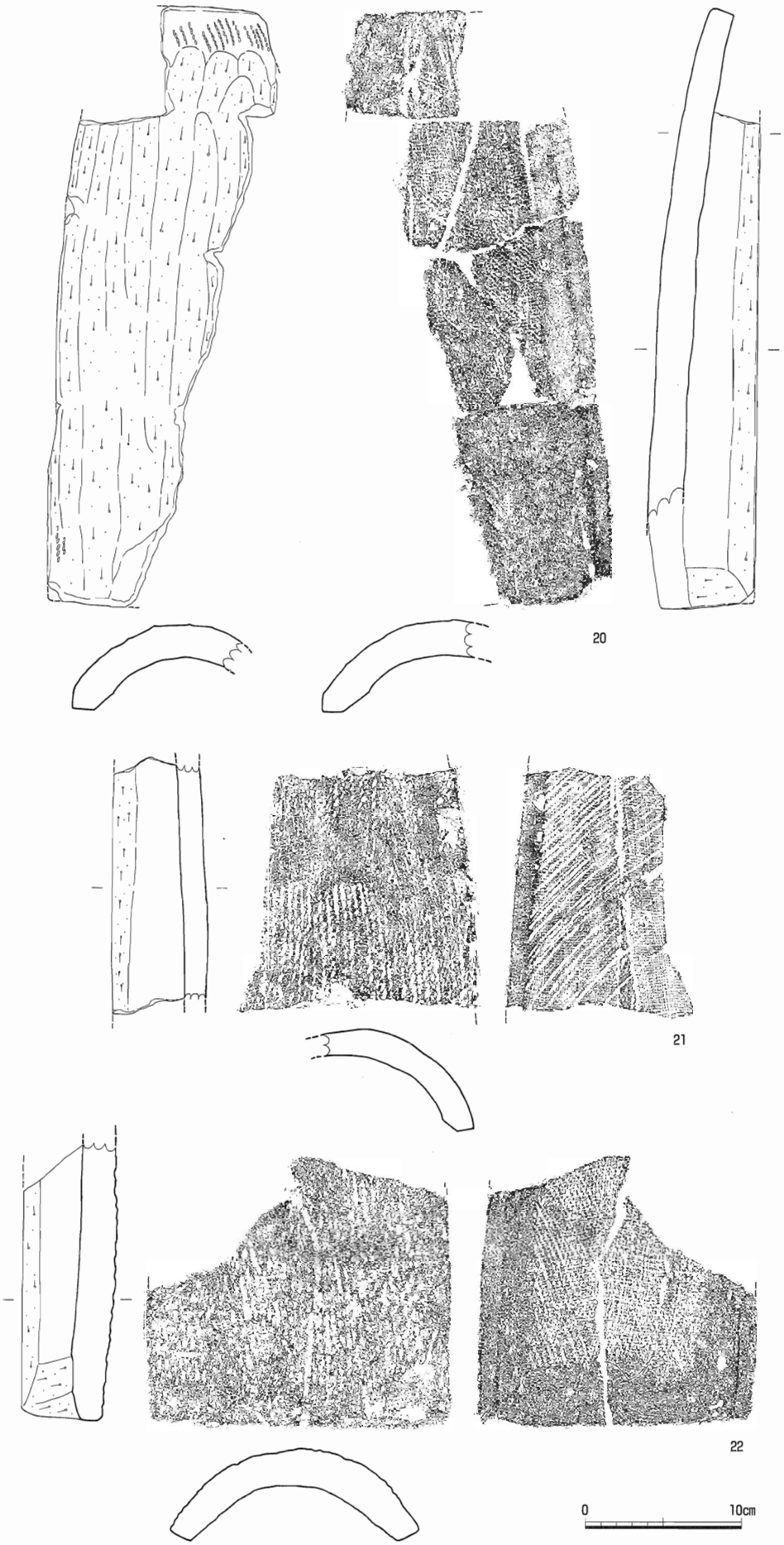
第25図57～59は平瓦を2枚貼り合わせた痕跡をもつものである。57は凸面の剥離部に縄目タタキ、58は凹面側の剥離部にも布圧痕が認められることから、タタキ調整まで施したものを貼り合わせて1枚の平瓦に成形したものと見られる。

第26図60～63は凹面の布目に綴じ合わせ痕が見られるものである。61・62の凸面には離れ砂が付着している。

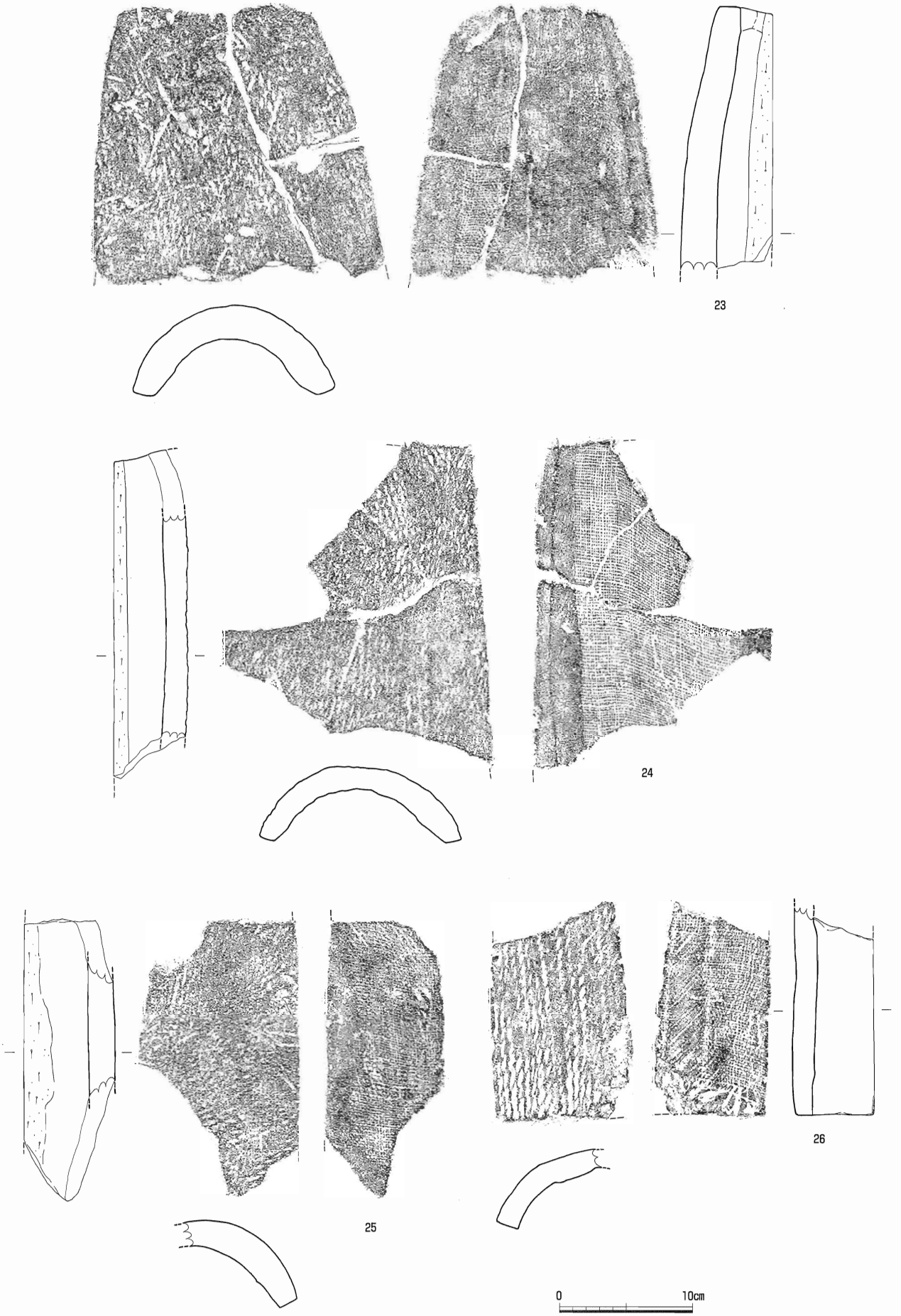




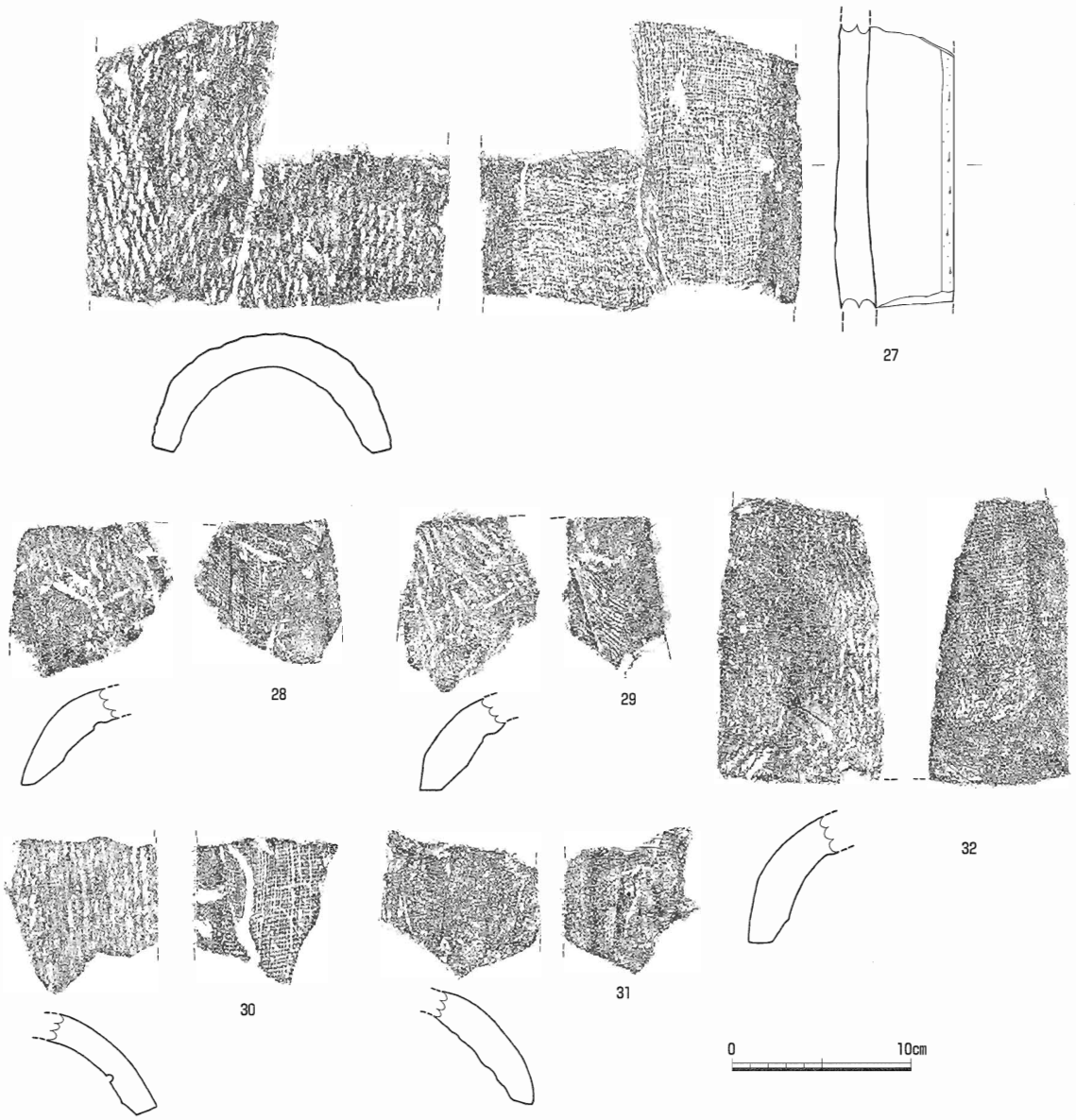
第15図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図１



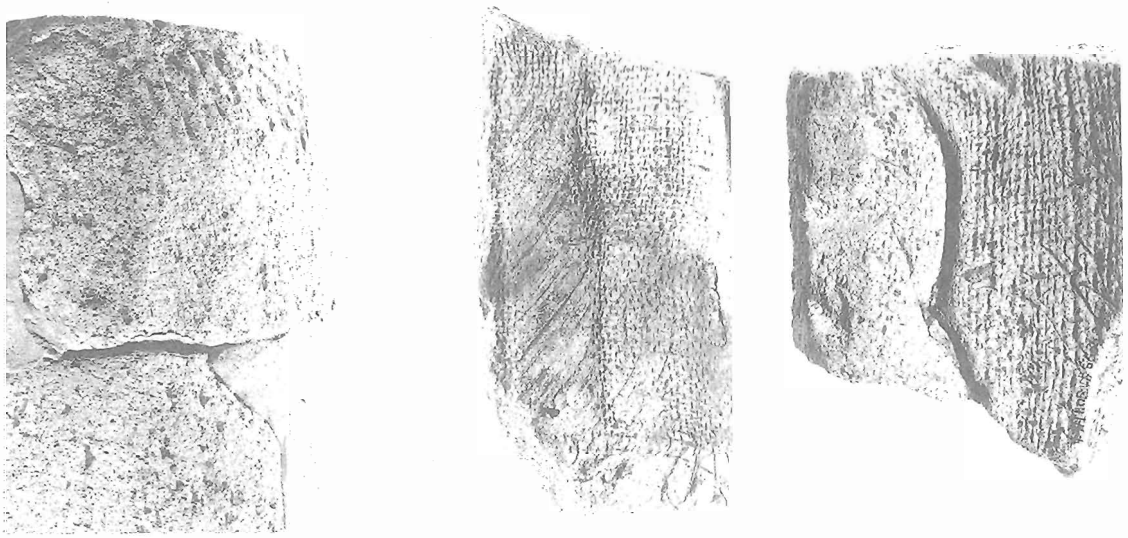
第16図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図 2



第17図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図 3

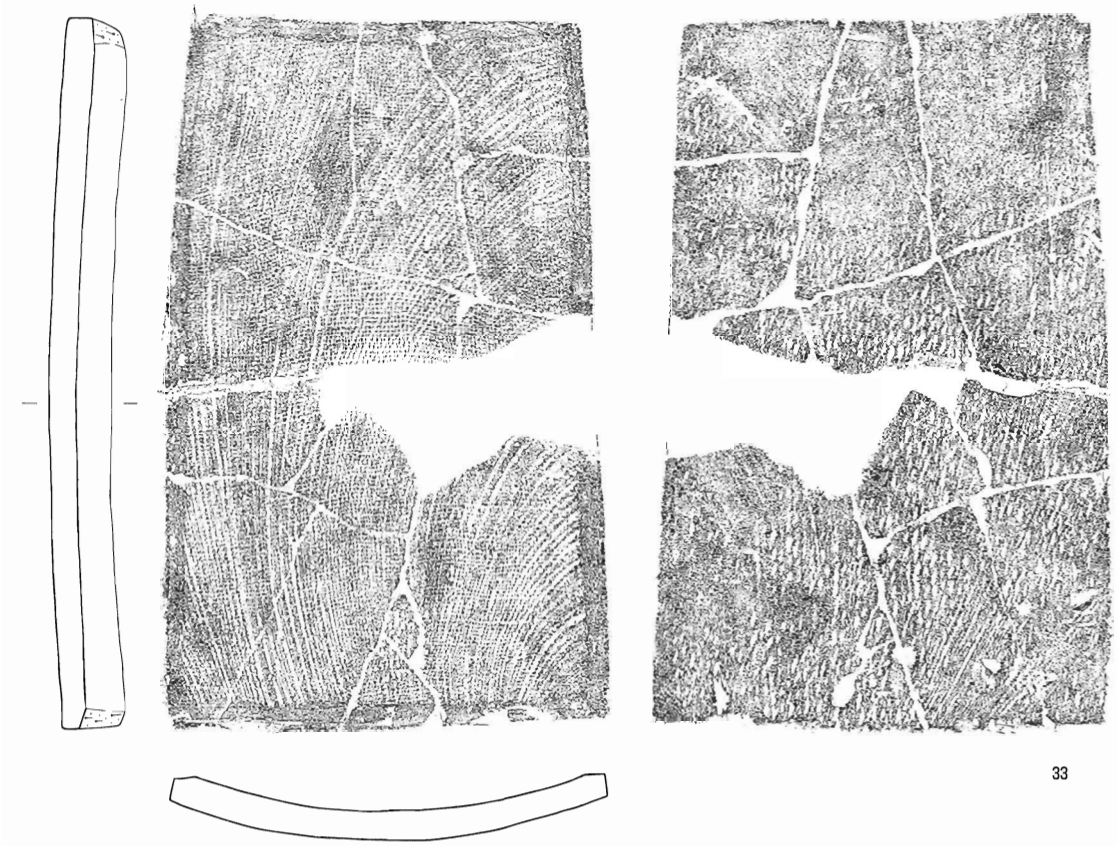


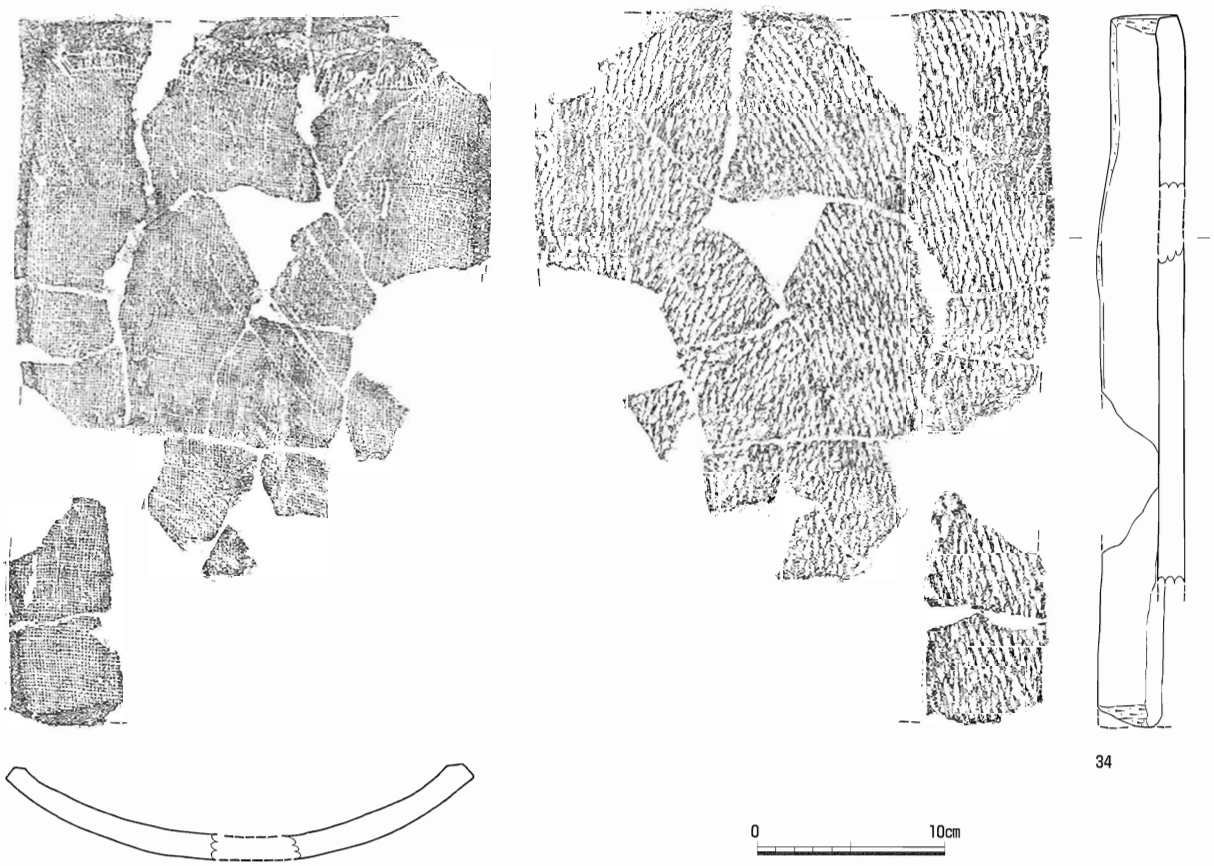
第18図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土丸瓦実測図 4



第16図20 縄目タタキのちケズリ　　第17図26 型の窪み　　第18図30 布綴じ合わせ

写真 1　丸瓦細部の状況

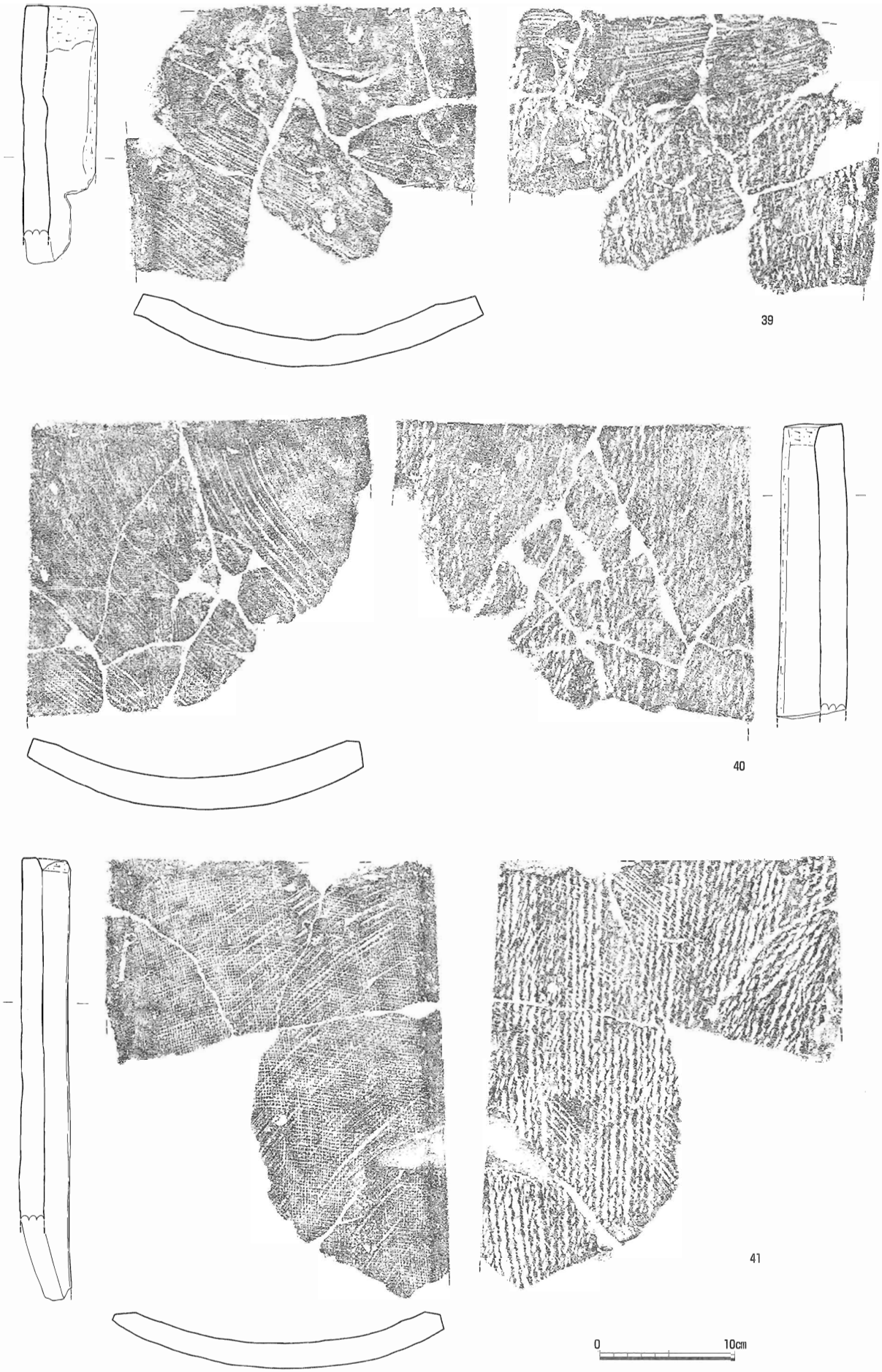




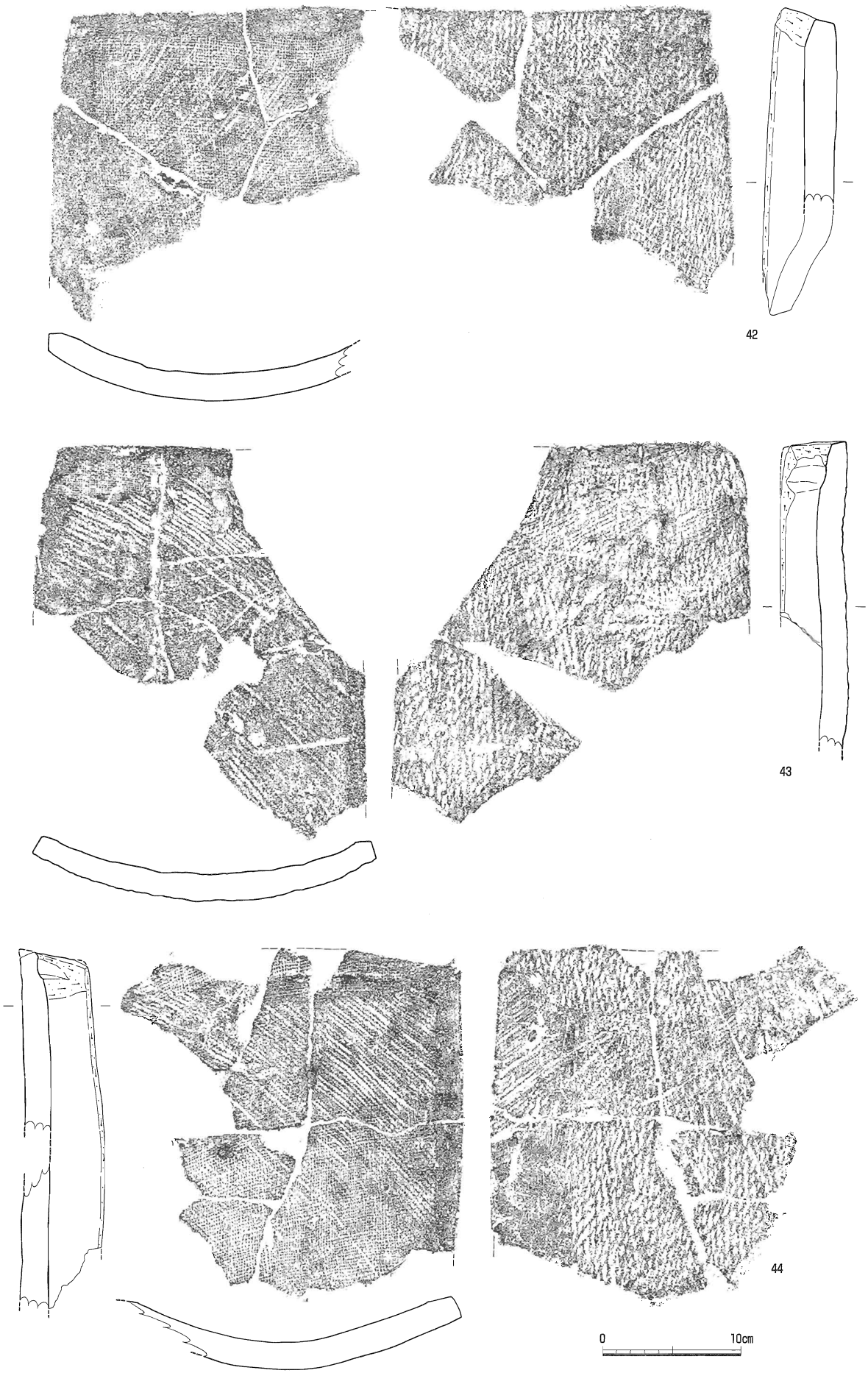
第19図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図１

第20図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図 2

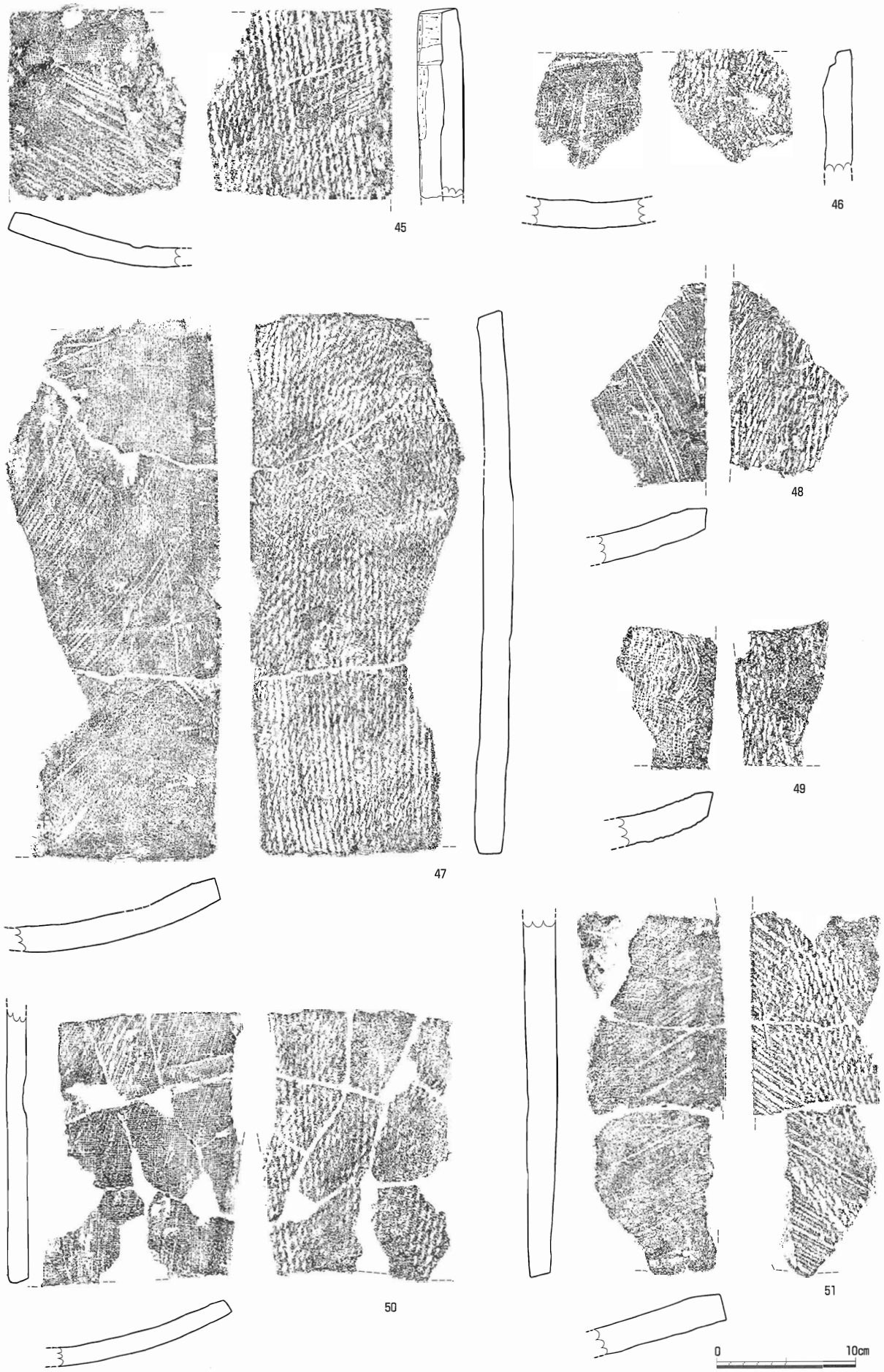
第21図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図３



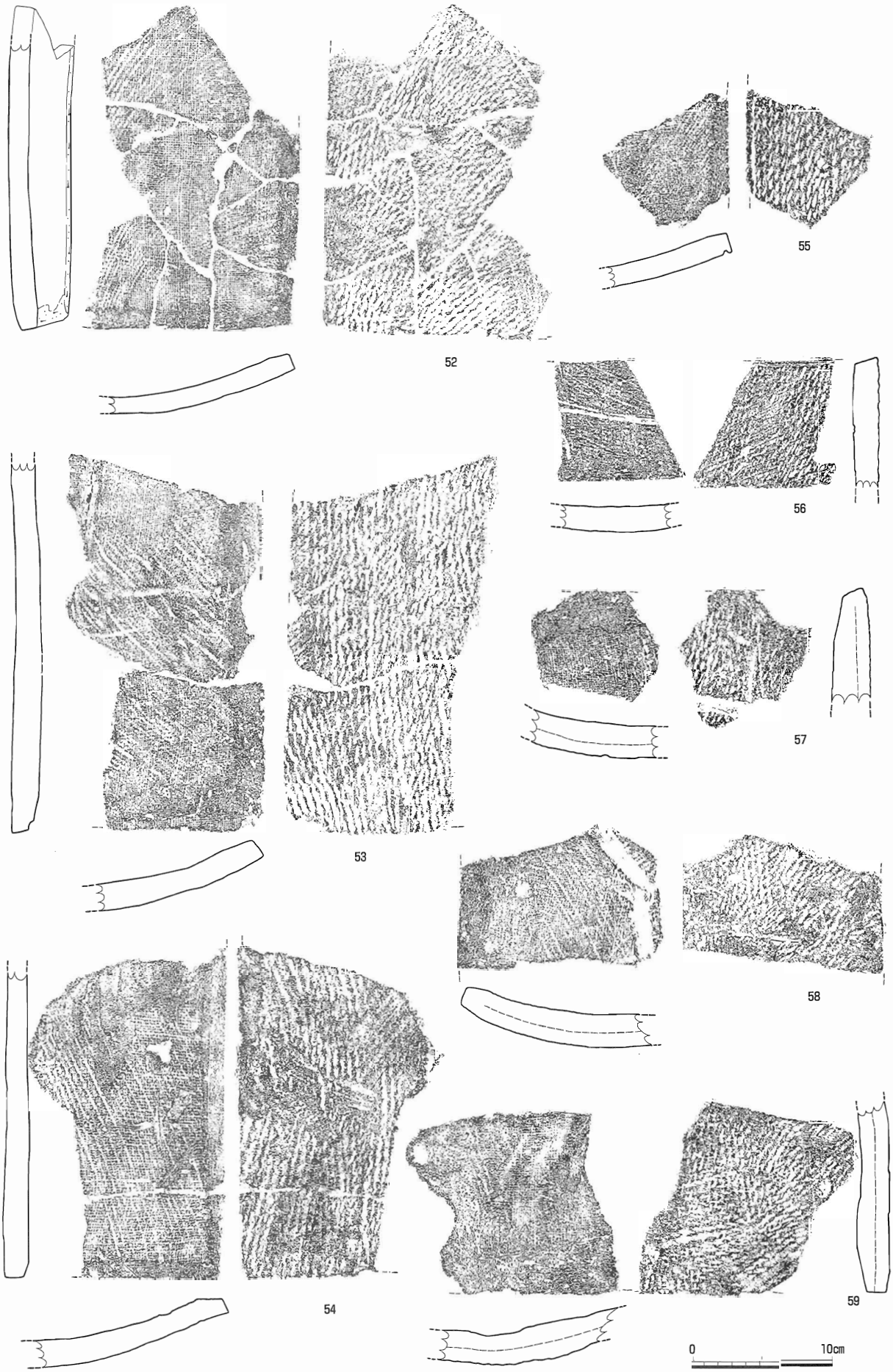
第22図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図 4



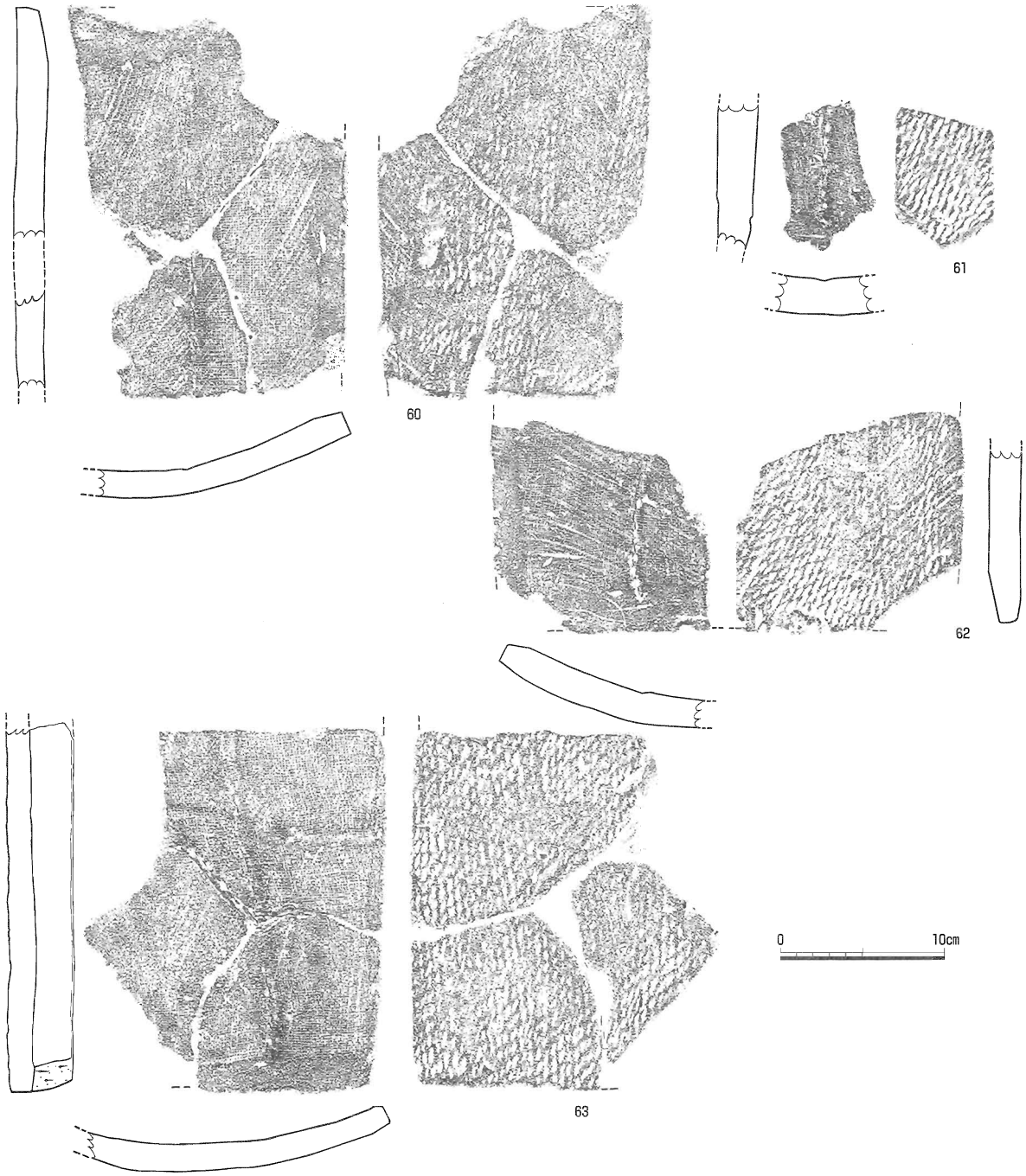
第23図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図 5



第24図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図 6



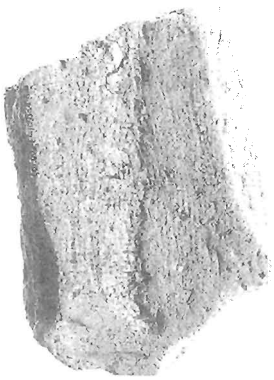
第25図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図7



第26図　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土平瓦実測図 8

第25図57 貼り合わせ痕

第25図58 貼り合わせ痕



第26図61 布綴じ合わせ

写真 2　平瓦細部の状況

（２）土坑

１号土坑（第27図上左）　礎石建物跡の北西側に位置する。やや不整な円形状を呈する浅いもので、大きさは径75～80㎝・深さ10㎝である。埋土は黒褐色土で、出土遺物はなかった。

２号土坑（第27図上右）　礎石建物跡の西4mに位置する。楕円形状を呈するもので、大きさは径90～110㎝・深さ28㎝である。底面には地山に入る扁平な石が露出しており、その上に灰色粘土（３層）が10㎝程度の厚さで敷かれている。灰色粘土の壁面には、北半部に半円形状に立て並べられた板材が残り、内法は長さ90㎝・幅60㎝である。板材の放射性炭素年代測定では、補正^{14}Ｃ年代900±40(yrBP)、暦年代AD1040-1100・AD1120-1200という結果が得られている。埋土は上層より黒色粘質土（１層）・黒褐色砂質土（２層）で、土坑の上面西半部には集石が見られた。

出土遺物には土坑壁面に用いられた板材の他、須恵器・土師器小片と土錘がある。第28図１～５は板材で、遺存状態の良いところで厚さ1～1.4㎝である。４以外は先端部が窄まるように加工されており、端部の幅が分かる１は9㎝、2は4.5㎝で、２は先端付近に孔が2つある。６は土錘で、長さ3.9㎝・幅1.5㎝・孔径0.5㎝、重さは16.7ｇである。外面には指成形痕が残る。

３号土坑（第27図下）　礎石建物跡の南東７ｍに位置する。北東から南西方向へ細長く延びるもので、北端部は北西方向に曲がっており、４号土坑を切っている。大きさは長さ5.6m・幅1.1～1.9m・深さ20～35㎝で、北端の屈曲部は長さ1.1m・幅0.8mである。埋土は上層より灰色砂（１層）・暗灰色粘質土（２層）・暗灰色砂（３層）となる。

出土遺物には土師器と磨製石斧がある。第28図９・10は土師器坏で、ともに外傾する体部をもち、外面底部に回転糸切り痕を残す。11は磨製石斧で、塩基性片岩製である。刃部を欠損しており、現状で長さ14.2㎝・幅5.1㎝・厚さ3.9㎝である。

４号土坑（第27図下）　礎石建物跡の南東6mに位置する。円形状を呈するものであるが、南半部は保育園建設時に破壊されている。現状で径1.8m・深さは1.4mと深く、横断面形は逆台形状である。埋土は上層より黒褐色粘質土(1層)・灰色砂(2層)・暗黒褐色粘質土(3層)・暗灰色砂(4層)となる。

出土遺物には須恵器と土師器がある。第28図７は須恵器坏で、外傾する体部をもち外面底部に回転糸切り痕を残す。８は土師器坏で、外傾する体部をもち外面底部に回転糸切り痕を残す。

（３）柱穴

Ｐ.12（第27図中左）　礎石建物跡の西１ｍで確認されたもので、瓦溜を切っていることから、礎石建物跡の後に掘り込まれたと見られる。柱根が残っており、掘立柱建物跡または柵列のような施設に伴うと考えられるが、柱穴の配列などは明らかにできなかった。ピットは２つが並んでおり、東には柱根、西には礎盤状の板石が入っている。大きさは東が径42㎝・深さ６㎝、西が径38㎝・深さ５㎝で、柱根は径18㎝・高さ45㎝が残っていた。埋土は黒褐色土（１層）であるが、西側ピットの上層には黄灰色粘土（２層）が認められた。

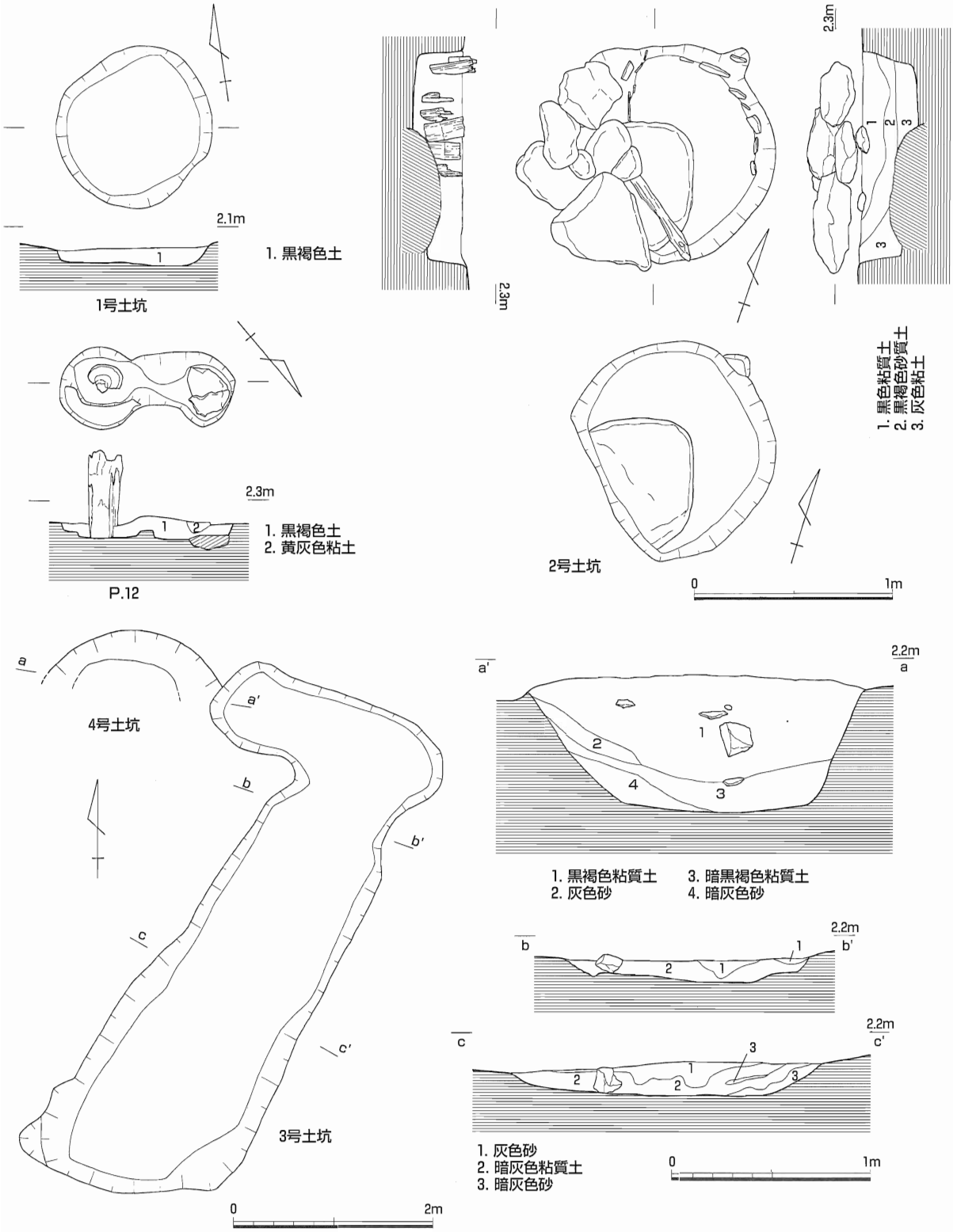
（４）石敷道（第29図）

調査区の東側で東西方向に約12mの範囲で確認されたもので、東側へ入る小さな谷の方向へと延びている。道は保育園建設時に破壊を受けて分断されており、遺存状態は良好ではない。石材は比較的軟質で、深さ10㎝程度の浅い掘り込みの内部に幅1.3～1.6mの範囲で敷き詰められる。道に平行する側溝は認められなかった。

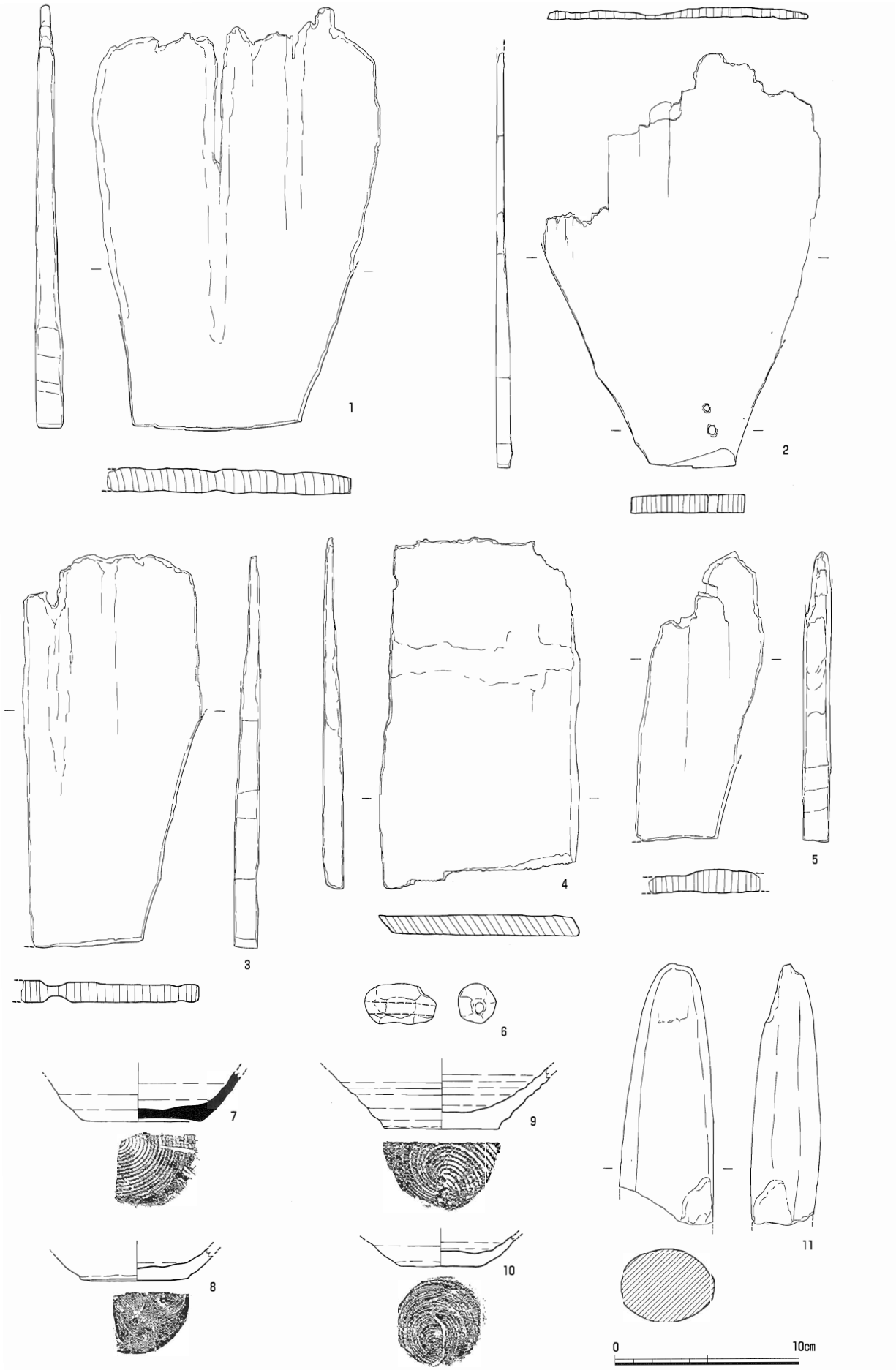
出土遺物には寛永通宝があり、江戸時代のものと見られる。

（５）溝状遺構

１号溝・２号溝（第29図）　石敷道の北側に位置するもので、両者はほぼ平行して南西から北東方向に延びる。１号溝は切り合い関係から礎石建物跡より後に営まれたことが分かっており、西側では石敷道にほぼ平行し、東側では北へとやや反れる。確認された長さは１号溝が14m・２号溝が６mで、幅は35～55㎝・深さは５㎝ほどと浅い。

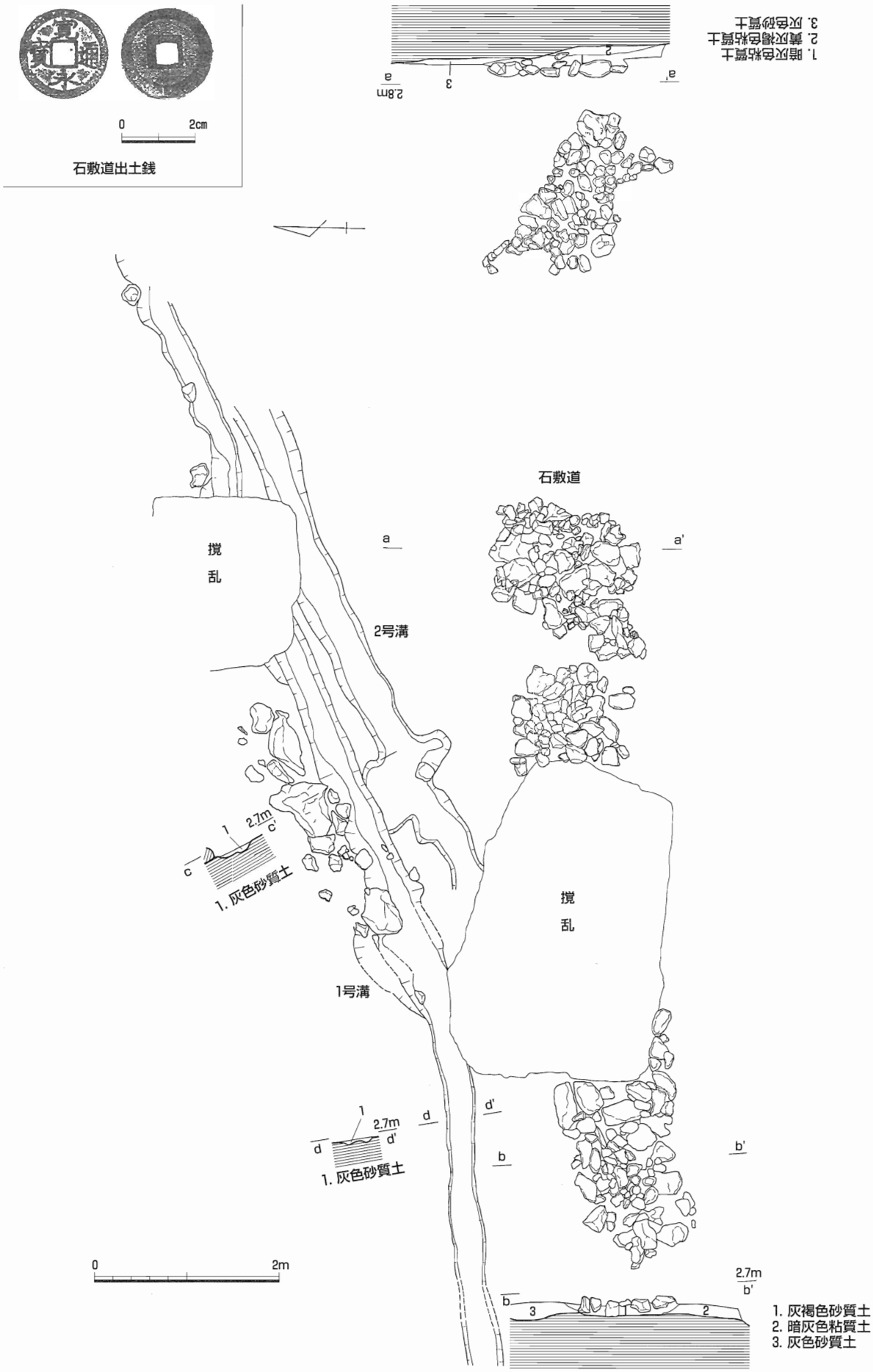


第27図　中祖遺跡Ⅲ区土坑他実測図

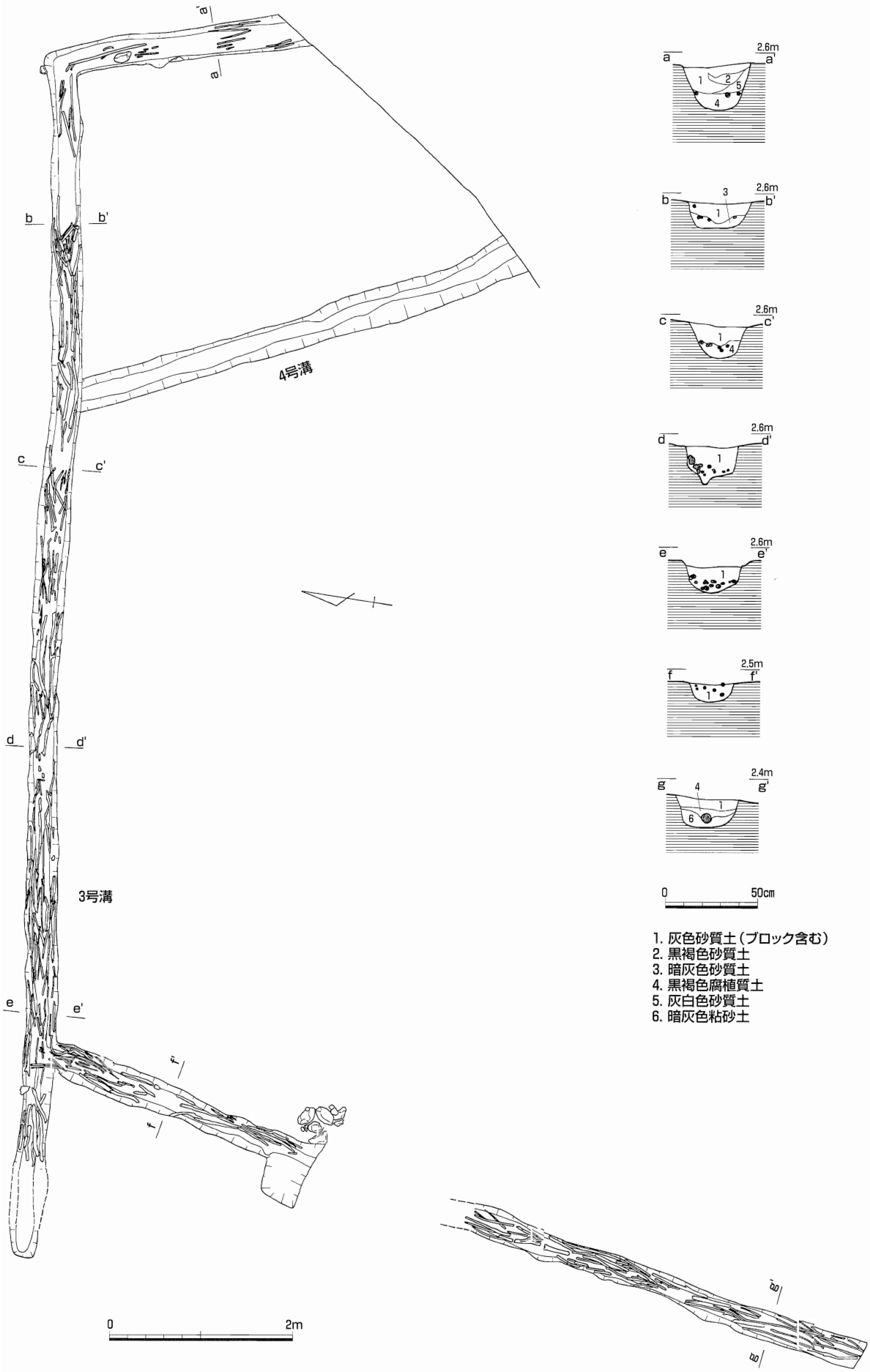


1～6,2号土坑　7・8,4号土坑　9～11,3号土坑

第28図　中祖遺跡Ⅲ区土坑出土遺物実測図



第29図　中祖遺跡Ⅲ区石敷道及び１号溝・２号溝遺構実測図



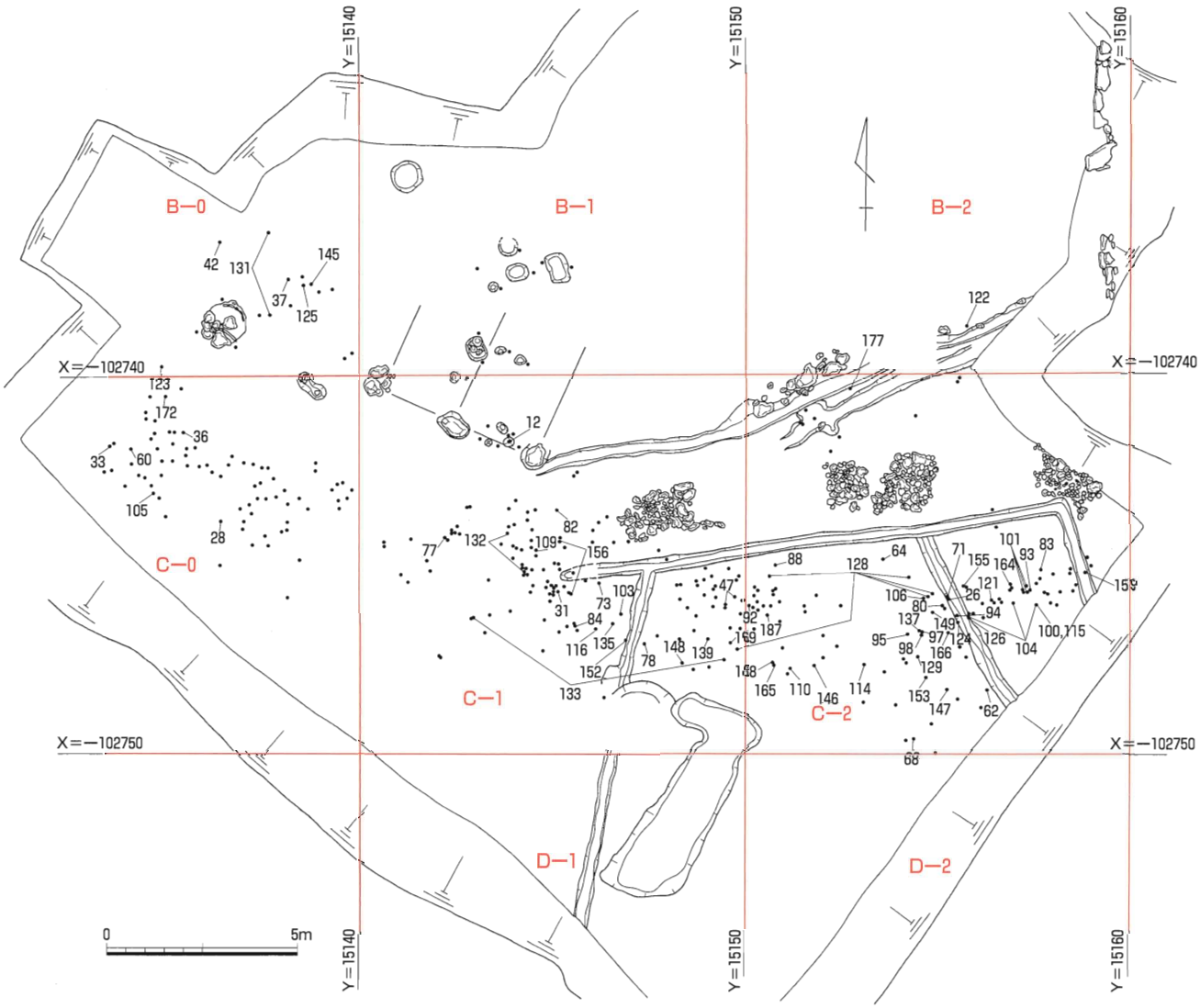
第30図　中祖遺跡Ⅲ区３号溝・４号溝遺構実測図

３号溝・４号溝(第30図)　石敷道の南側に位置するものである。３号溝は柴を入れて埋め込んだ暗渠で、石敷道に平行して東西方向に延び、東西で南側へと屈曲する。調査区内の東端部では石敷道を切っており、石敷道の後に掘られたものであることが分かり、幅30～40cm・深さ20～30cmである。４号溝は３号溝に切られる溝で、柴は入っておらず素掘りである。３号溝からは肥前系磁器と在地陶器が出土しており、江戸時代終わり頃のものと見られる。

（６）遺構に伴わない遺物

遺物は出土位置を1点ずつ記録しているが、掘削中に出土したものは調査区全体に10m方眼で設定したグリッド(B-0・B-1…)ごとに取り上げた。点上げした遺物は調査区南側の地形が低くなるところを中心に分布しており、その多くは礎石建物跡など遺構がある緩斜面上方側から落ち込んだものと考えられる。

出土遺物には土師器・須恵器・焼塩壺・陶磁器・石器・砥石・鉄器などがある。第32図64～66は土師器甕の口縁部である。いずれも複合口縁をもっており、67はその底部で僅かに平底を残し、内面には指押えが認められる。68は土師器短頸壺で、外面に斜行刺突文などが施文される。69は土師器鼓形器台で、内面にケズリが入る。70～75は土師器高坏で、70の坏部底面には半貫通の孔がある



第31図　中祖遺跡Ⅲ区遺物出土状況実測図

粘土盤、73～75には厚く粘土が充填されている。74の外面には赤色顔料が塗布される。76・77は土師器低脚坏の脚部で、外面にはともに赤色顔料が塗布される。78は土師器坏で、内湾する口縁部をもっており、外面底部は静止ケズリ、内面はミガキである。

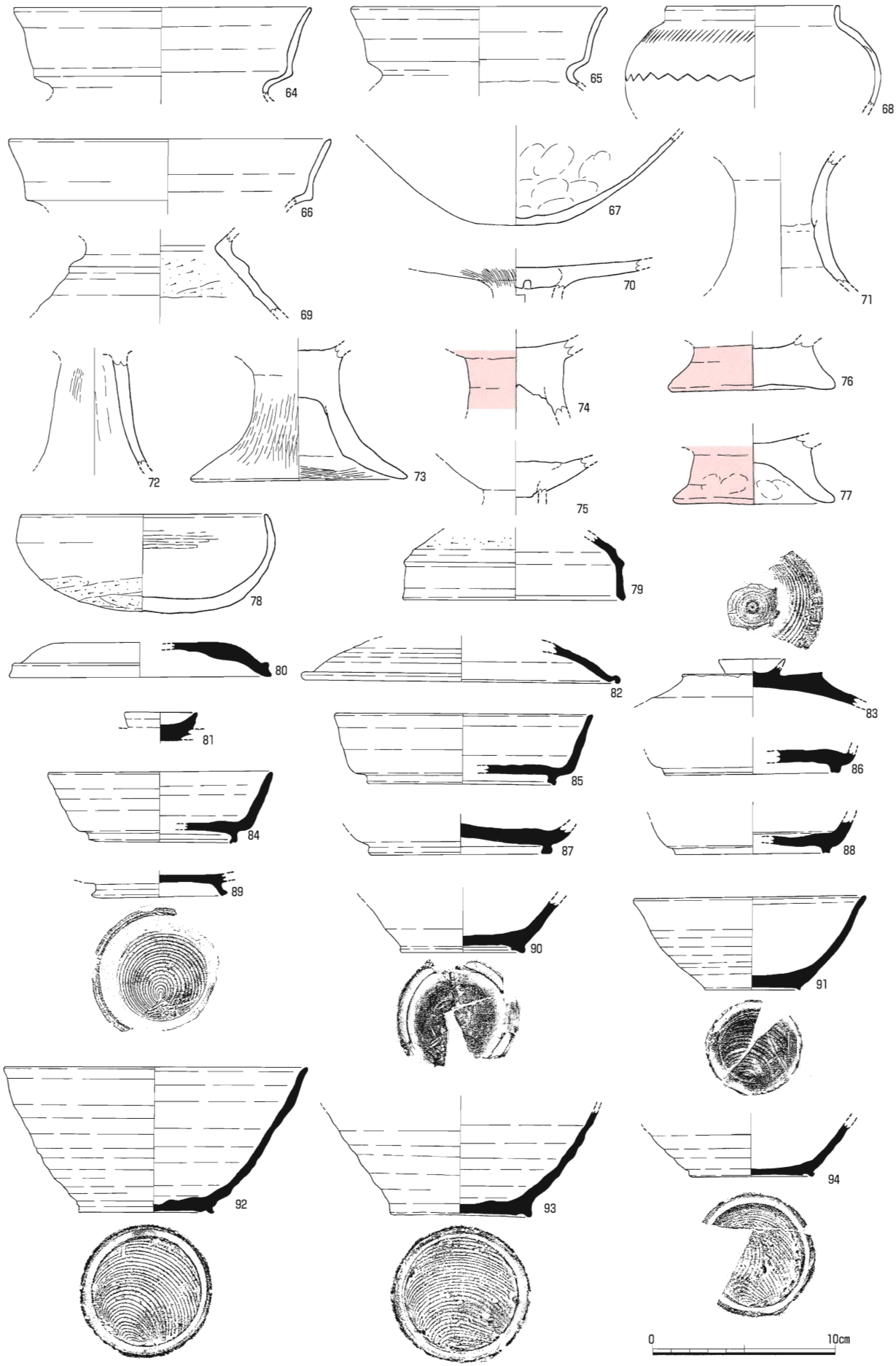
第32図79は須恵器坏蓋で、口縁が直立し頂部との境に稜をもっており、口唇は鑿刃状に面をもつ。80～83も須恵器坏蓋で、80は口縁端部が直立し肥厚するもので、82は端部が屈曲し稜をもつ。81・83は頂部に輪状つまみが付いており、後者の頂部には回転糸切り痕が残る。84～第34図123は須恵器坏である。84～88は底部に直立する低い高台を有するもので、その内側はいずれも回転ナデ調整され切り離し痕は残っていない。84・85はやや外傾する口縁部をもっている。89・90は外側に広がる高台をもち、89の底部には回転糸切り痕が残る。91～第33図96は底部が回転糸切りで、その外周を強くナデて高台状にしたものである。91・92は体部にやや丸味があり端部が僅かに外反する口縁部をもっており、前者は口径12.6㎝であるのに対し、後者は口径16.4㎝とやや大きい。97は焼き歪みが著しいが、口縁端部が外反し、底面には回転糸切り痕を残す。98～第34図119は無高台の坏で、外傾する直線的な口縁をもち、底部には回転糸切り痕を残すものである。120・121はやや器高が高く丸味のある体部をもっており、122は同種のものの底部と見られ回転糸切り痕が残る。123は底部にヘラ切り痕を留めるものである。124～127は皿で、124は低い高台が付くが、その他は無高台のもので、底部にはいずれも回転糸切り痕が残る。

第34図128～第35図135は須恵器壺である。128はなで肩で、外反する口縁部をもつ特徴的な器形をもつ。底部は平底で、周囲に回転ヘラケズリが入っており、胴部外面はカキメ調整される。129は外傾する口縁部で、端部に稜をもっている。130は高台付きの小形壺底部と見られ、底面に回転糸切り痕が残る。131は肩部が張る器形をもつもので、外面下半は回転ヘラケズリののち回転ナデである。132～135は底部で、平底である。136・137は須恵器甕の口縁部である。ともに口縁外面に稜をもち、後者の体部内面には同心円状の当て具痕が残る。138は須恵器高坏の脚部で、端部外面に稜をもち、内面にはしぼり目が認められる。

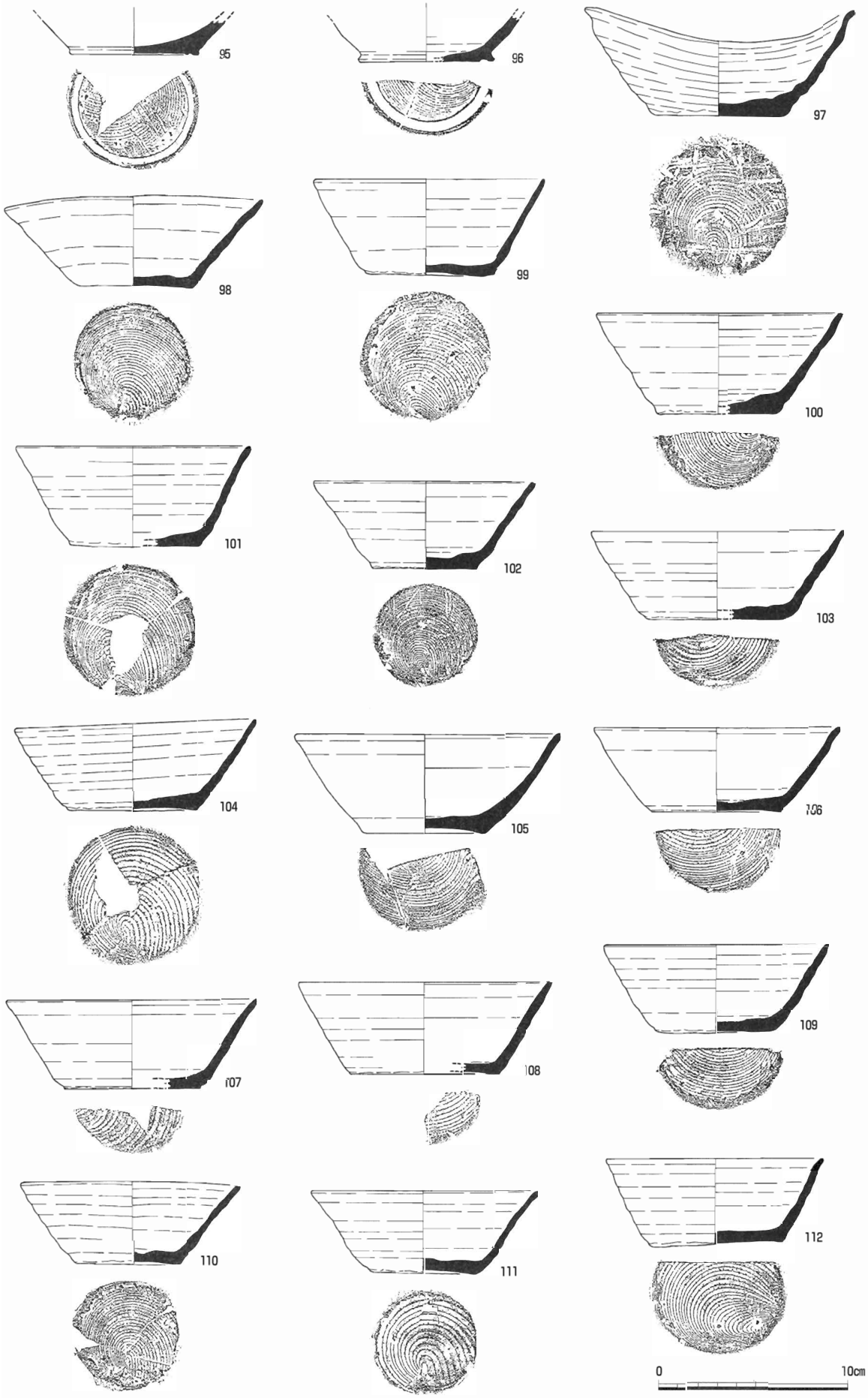
第35図139～141は土師器の高台付坏底部で、高台はいずれも外側に開く形態をとるが、139・141の高台は低いのに対し、140は足高高台となっており、底面にはいずれも回転糸切り痕を残す。また、139の内面底部には焼成前に大きく「佐右」とヘラ書きされている。142～147は無高台の坏で、142・143・147のように外傾する直線的な口縁をもつものと、144・145のように口縁がやや丸味を帯びて立ち上がるものがある。底部は回転糸切りがほとんどであるが、146はヘラ切りである。148～151は土師器皿で、底部にはいずれも回転糸切り痕が見られる。

第36図152～161は土師器甕である。152は口縁が外反し、肩部が張るもので、胴部外面はハケメ、内面はケズリである。153～160は肩部が張らず長胴となることが想定されるもので、口縁部は短く屈曲する153～156・160のようなものと、口縁がやや長く外反する157～159・160のようなものがある。153～160の胴部内面はいずれもヘラケズリであるが、外面には155にケズリ、159にカキメが認められる。また、161は比較的器壁が薄く、胎土も精良なもので、胴部外面には格子タタキ、内面にはナデまたは無文当て具痕が認められる。

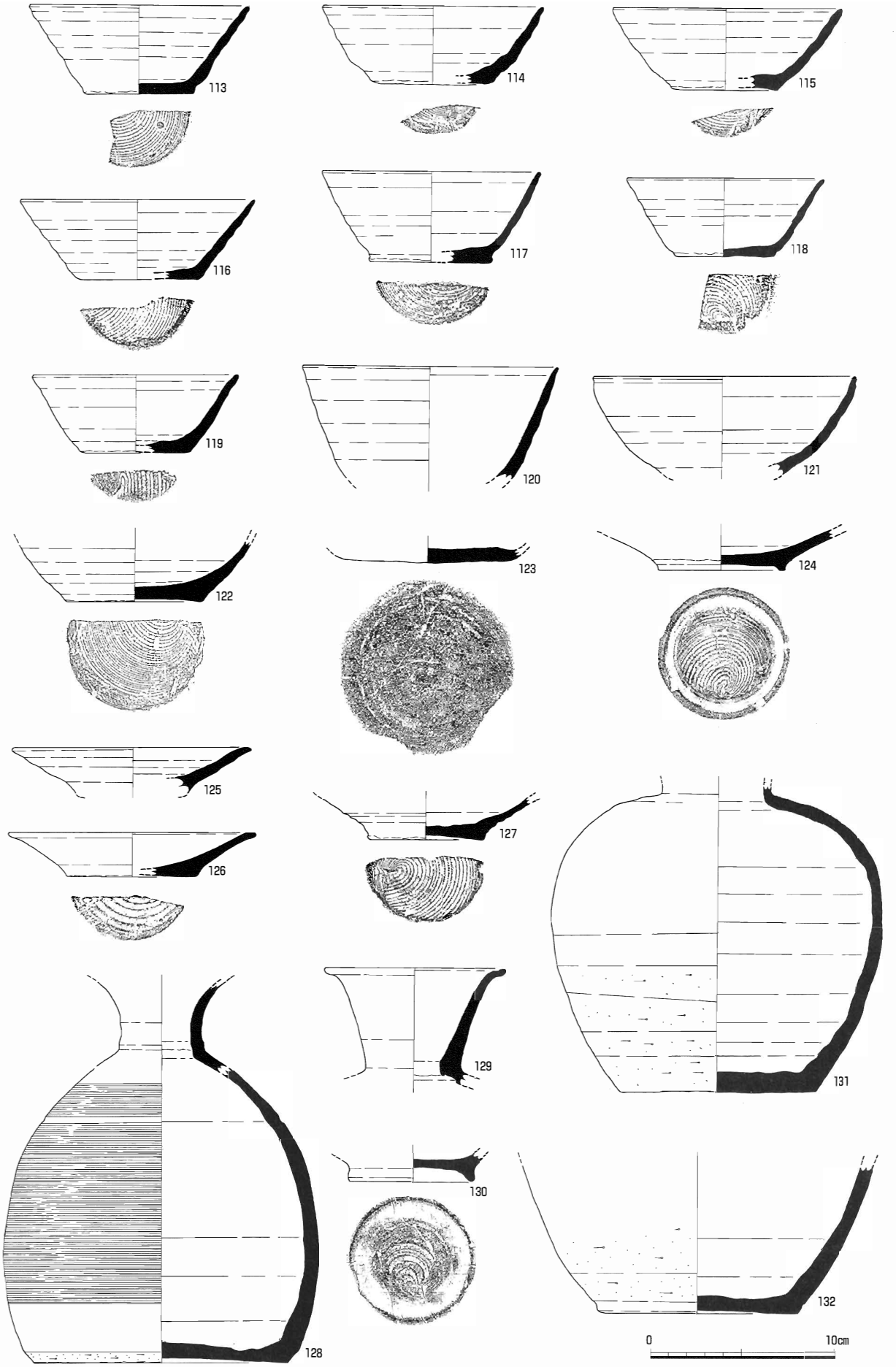
第36図162～第37図178は焼塩壺である。器形はいずれも口縁部が直立し、胴部が長く、丸い底部をもつものと見られる。成形は型作りで行われるため、外面には指押え、内面には布目圧痕が認められる。このうち、168は胴部下半の遺存状況が比較的良いもので、底部外面には2次的に火を受けた際に生じた表面の剥離が観察できる。また、内面の布目には167～169・171で綴じ合わせ痕が確



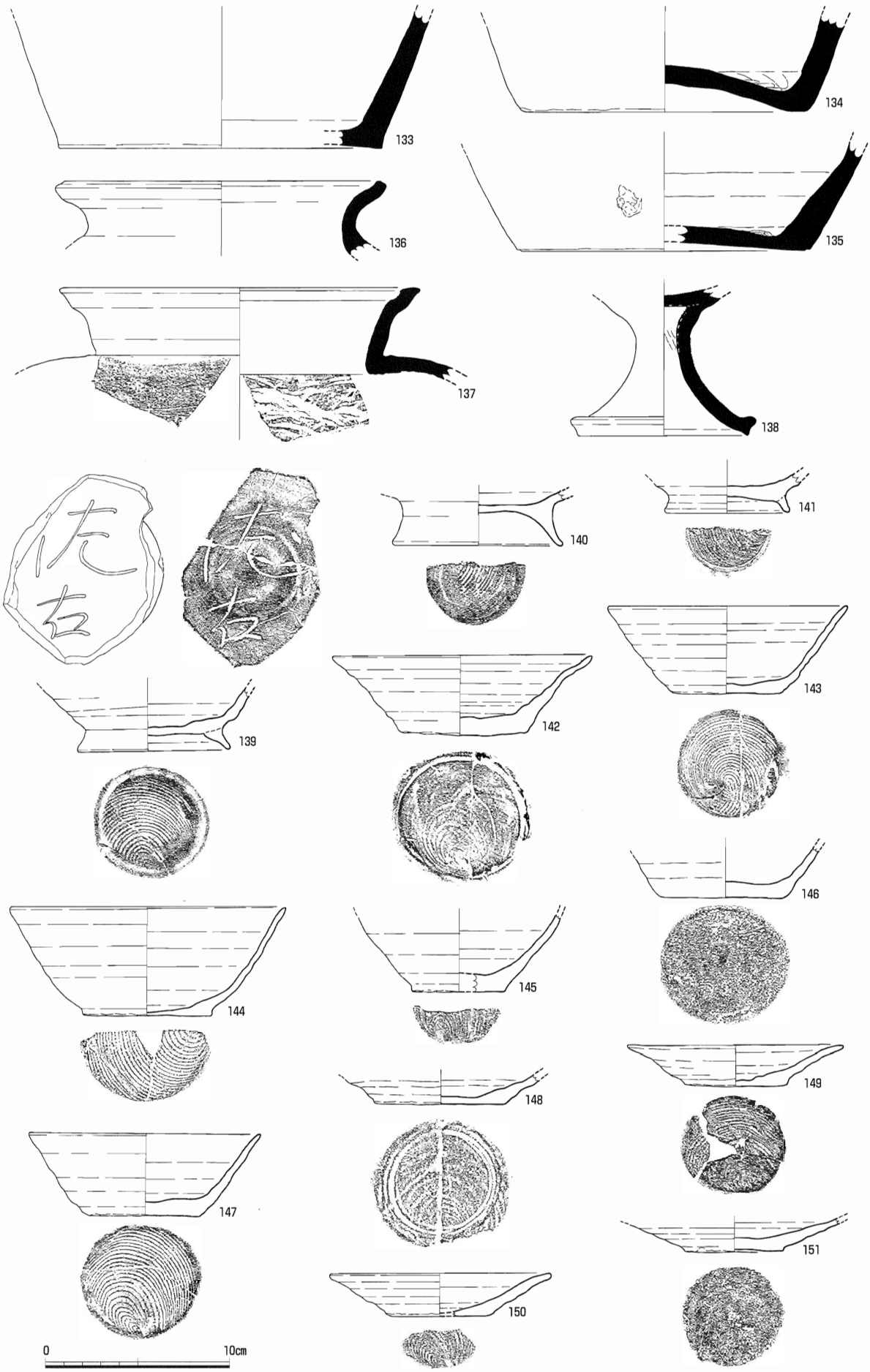
第32図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図１



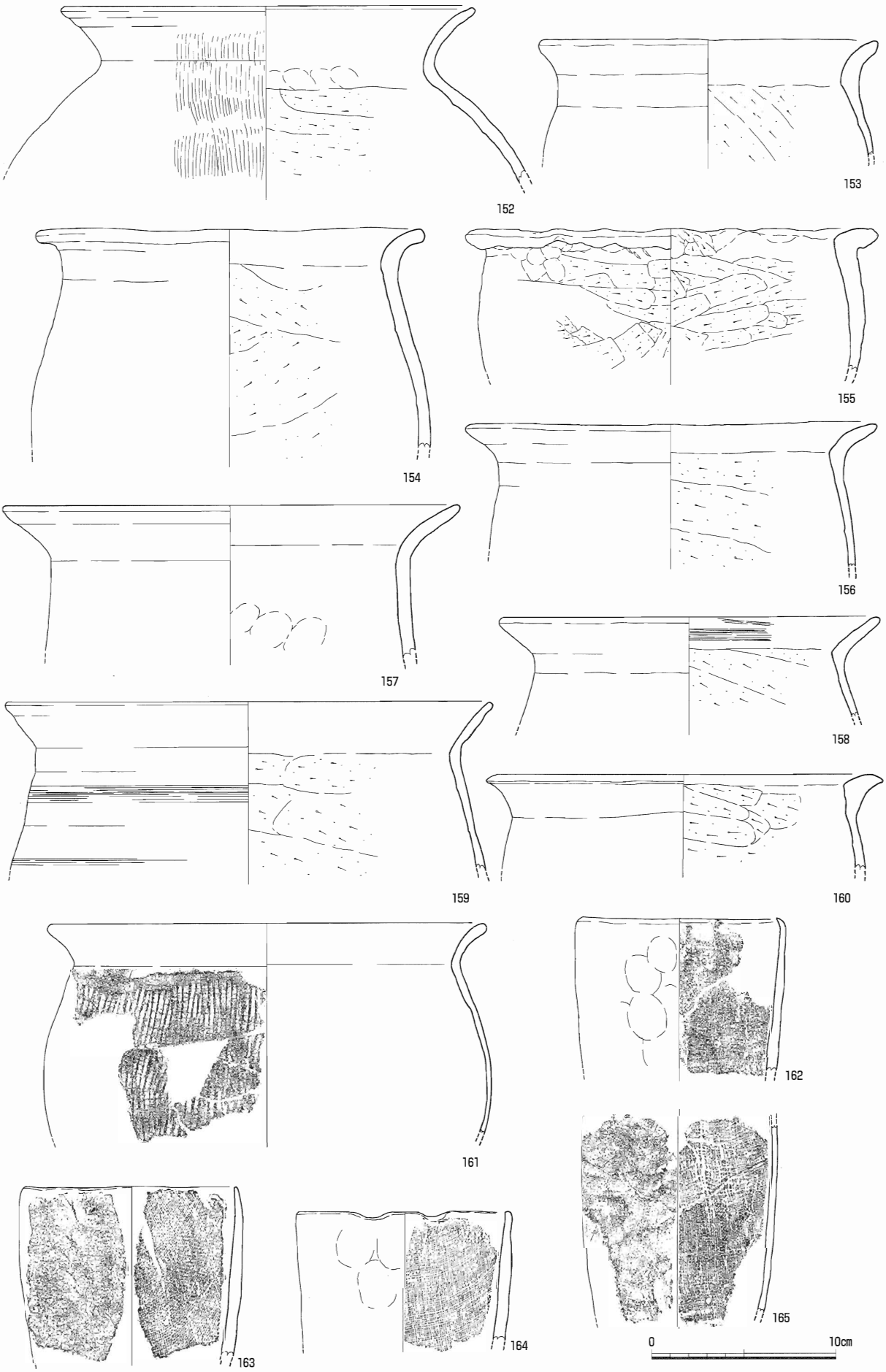
第33図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図 2



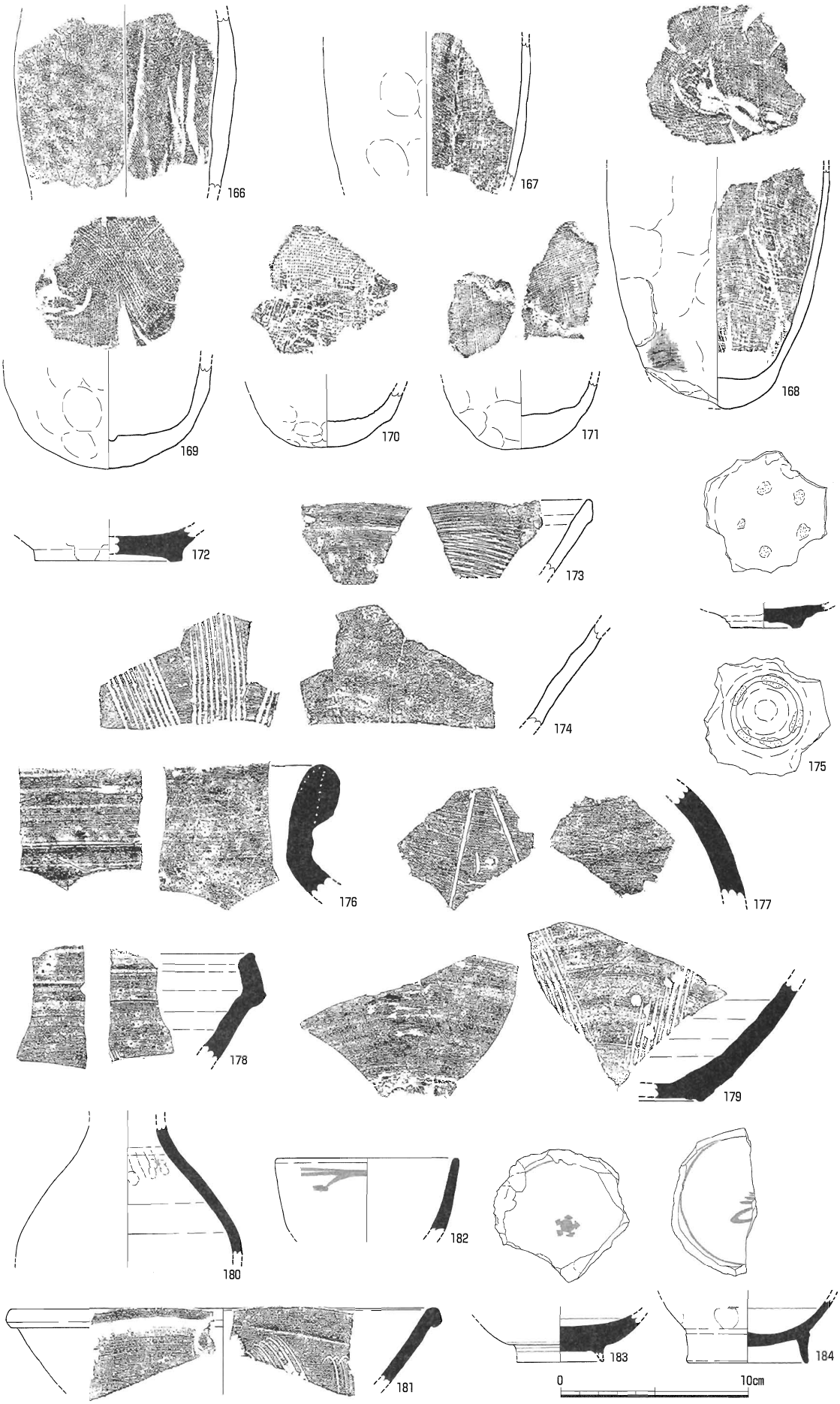
第34図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図 3



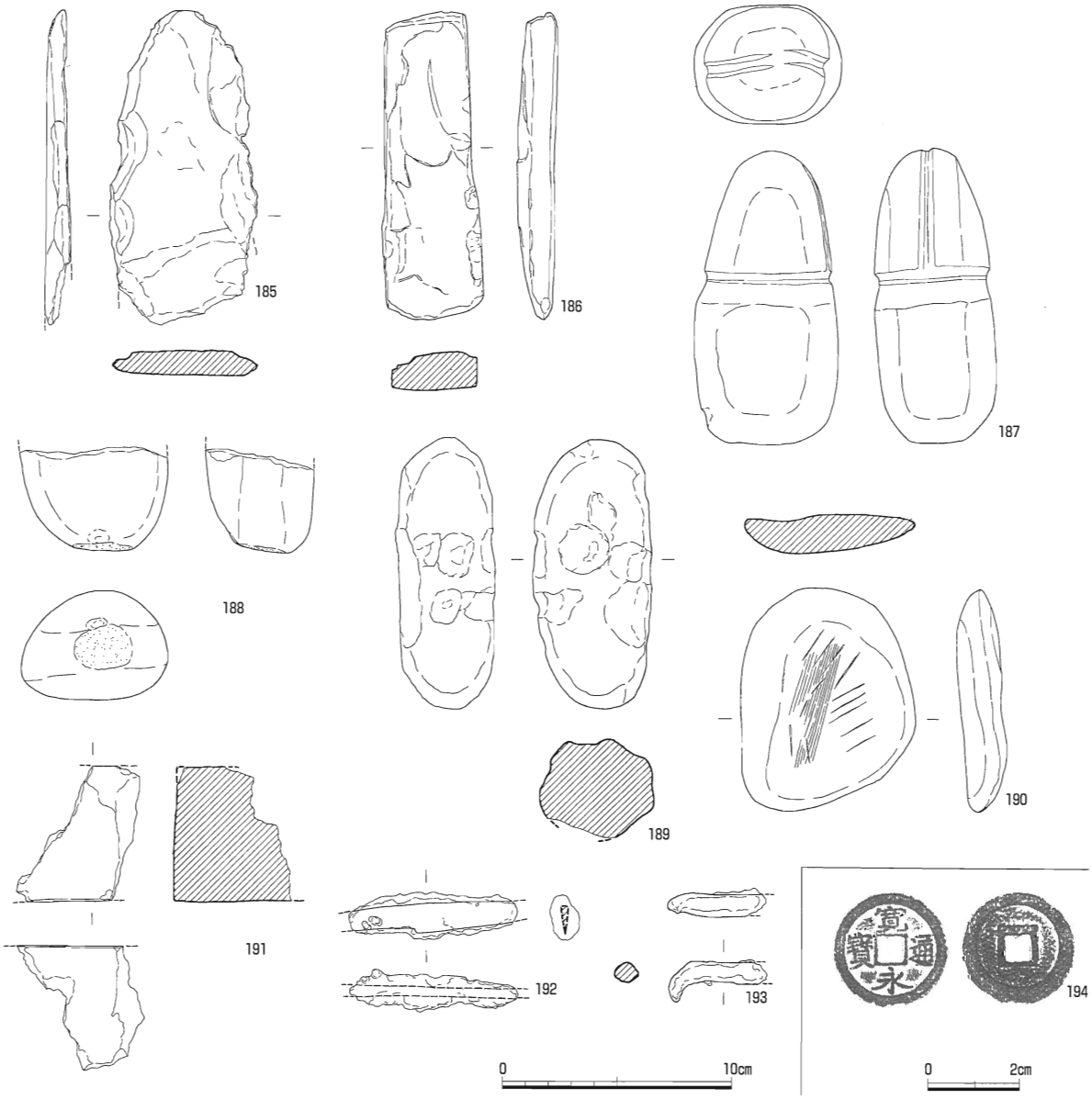
第35図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図 4



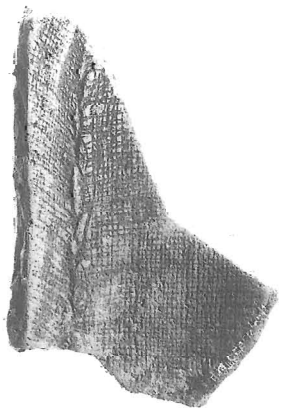
第36図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図 5



第37図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図 6



第38図　中祖遺跡Ⅲ区出土遺物実測図７



第37図167 綴じ合わせ痕

第37図168 綴じ合わせ痕

第37図171 綴じ合わせ痕

写真３　焼塩壺細部の状況

認された。

陶磁器の構成は第２表に示したとおりである。

第37図172は白磁碗の底部で、内面に施釉されるが、高台は無釉である。

173・174は瓦質の擂鉢である。173は玉縁状をなす口縁部で、片口に成形されており、内面にはハケメが入る。174は体部で内面には粗い摺目があり、外面はハケメののちナデである。

175は朝鮮碗で、見込みと高台畳付けに砂目が見られる。

176～180は備前である。176は甕で、口縁が玉縁状をなす。177は甕または壺の肩部で、外面にヘラ書きがある。178・179は擂鉢で、口縁はやや内傾して立ち上がり内面には粗い摺目が入る。180は徳利で、内面にしぼり目が残る。

181は肥前擂鉢で、口縁部は玉縁状をなし片口に成形され、内面には粗い摺目が入る。口縁端部のみ施釉される。182は肥前陶胎染付碗である。183と184は肥前染付で、後者は高い高台をもつ広東碗である。

第38図185から191は石器である。185は凝灰岩製の打製石斧で刃部を欠損しており、現状で長さ13.3cm・幅6.4cm・厚さ1.1cmである。186は砂岩製の打製石斧で、両刃の刃部をもち、長さ13.4cm・幅4.3cm・厚さ1.6cmである。187は石英安山岩(デイサイト)製の有溝石錘で、石錘の上半部に逆Ｔ字状に交わるように浅い溝が彫られており、大きさは長さ12.8cm・幅6.2cm・厚さ5.1cm・重さは514.2gである。188は斑糲岩の敲石で端部に敲打痕がある。189は凝灰岩の磨石・敲石で、側面に敲打痕が見られる。190は凝灰岩の円礫を砥石としたもので、擦痕と利器痕が残る。191は火山礫凝灰岩製砥石の破片で、使用面は2面である。

192は鉄製の刀子で、現存長7.4cmである。軟Ｘ線撮影の結果、片関であることが確認されており、刃部幅1.3cm・茎幅1.0cmである。193は鉄釘の先端部で、現存長4.2cmである。194は寛永通宝である。

以上の遺物のうち、土器・陶磁器の時期は、64～70が古墳時代前期、73～79が古墳時代中期、80～172が奈良時代後半から平安時代、173～180が室町時代、181～184は江戸時代である。

第２表　中祖遺跡Ⅲ区陶磁器構成表

種　別	器種	点数
白　磁	碗Ⅳ類	1
	碗	1
青　磁	碗Ⅰ類	2
	碗B２類	1
	碗B４類	2
	特殊品	1
	碗	4
青　花	皿	4
朝　鮮	碗	2
備　前	擂鉢	7
	壺・甕	16
	徳利	1
中世陶器	不明	1
瓦　質	風炉	1
	擂鉢・こね鉢	16
土師器	鉢	1
小　計		61
肥前・瀬戸磁器	碗・皿	205
肥前陶器	擂鉢	8
	甕	9
	鉢	12
	碗・皿	50
在地陶器		52
小　計		336
不明陶磁器		67
合　計		464

第５節　総　括

中祖遺跡は、縄文時代後期から江戸時代にかけて営まれた複合遺跡である。発掘調査は仁摩温泉津道路の橋脚建設地のみを対象としたため、遺跡の全体像が把握できたわけではないが、今回の調査によっていくつかの重要な知見を得ることができた。

本調査地点のうち、砂丘の後背湿地に当たるⅡ区では、ヤナギ属の立ち株と杭列が検出された。花粉分析の結果、平安時代頃には湿地ではありながら常時水浸きの状態ではなく草地環境になっていたことが考えられる。室町時代には畑作地となっていることから、後背湿地が次第に乾燥し、耕地化されて行く過程を示すものと言える。Ⅲ区は丘陵の裾部に位置しており、後背湿地のⅠ区・Ⅱ区と比べれば安定した環境にあった。その西側に広がる砂丘地を含め、縄文時代後期、古墳時代前期・中期の遺物が出土しており、断続的ながらも集落が営まれてきたことが分かる。とりわけ奈良・平安時代の礎石建物跡が明らかになったことは、公的な施設が置かれていたことを示すものとして注目されよう。ここでは、Ⅲ区で確認された礎石建物跡の時期と構造を検討し、周辺遺跡との比較を通して遺跡の性格を考えてみたい。

（１）出土土器の検討

中祖遺跡Ⅲ区では礎石建物跡付近と調査区南側の地形が低くなったところを中心に遺物が出土した。一部に弥生・古墳時代に遡るものも含まれるが、奈良・平安時代の須恵器・土師器が主体となっており、基本的には礎石建物跡に関わる遺物と考えられる。これらは土坑や溝などの遺構に伴うものではなく遺物包含層で検出されているため、出土状況から新旧や共伴関係等を窺うことはできない。また、遺物の種類や量も型式学的な検討が十分行える状況にはないが、石見では当該期の須恵器編年がいくつか提示されており、それらに導かれながら位置づけを検討することとする。

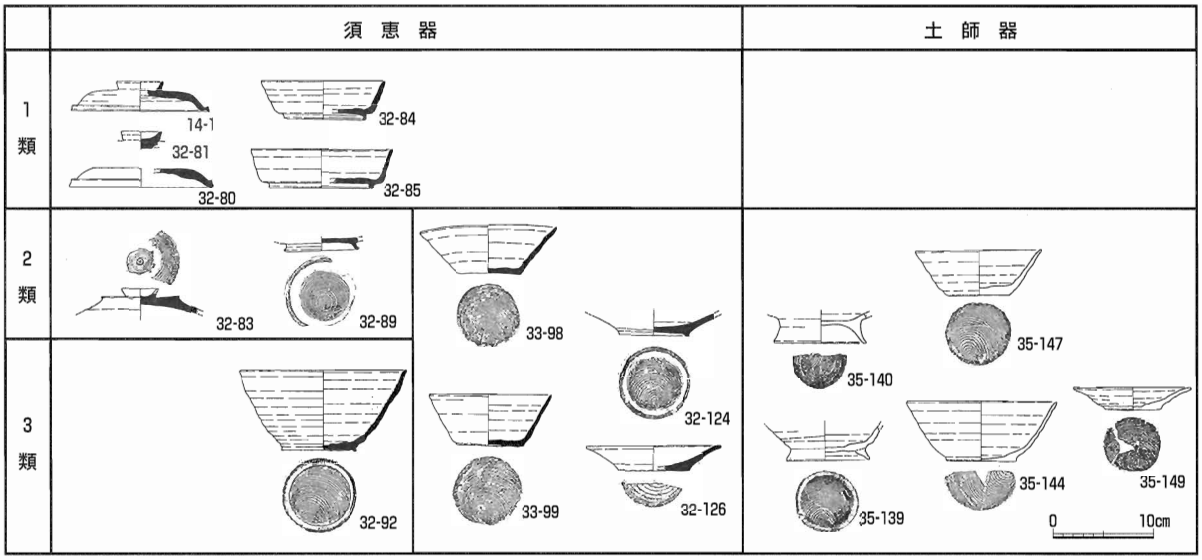
須恵器　須恵器のうち坏は、蓋と身の形状と蓋の有無から概ね3類に分けることが可能である。

１類　蓋は輪状つまみ、口縁端部は直立し肥厚するもので、頂部は回転ナデ調整される(第14図1・第32図80～82)。身は外傾する口縁部と直立する高台をもち、底部は回転ナデ調整されて切り離し痕は残さない(第32図84～88)。これらは江津市久本奥窯跡の須恵器編年Ⅵ期のものと形態的によく類似しており[3]、８世紀後半頃に位置づけられる。

２類　蓋は輪状つまみ、頂部は回転糸切り痕を残し平坦である(第32図83)。身はやや外側に広がる高台をもち、底部には回転糸切り痕が残る(第32図89)。頂部に回転糸切り痕を残す蓋は大田市仁摩町古市遺跡１区で見られ、共伴関係は明らかでないが底部に回転糸切り痕を残す高台付坏も出土している[4]。１類が切り離し痕を丁寧に調整するのに対し調整を省略する点で後出する要素をもっており、蓋を伴わない３類に先行する段階のものと考えられる。

３類　蓋を伴わない坏で、底面には回転糸切り痕を残し、周囲を強くナデることにより低い高台状とする(第32図91～94・第33図95・96)。同様なものは大田市白坏遺跡自然流路で「延喜九年(909年)」と墨書された木簡を伴って出土しており、10世紀前後のものと見られる[5]。

Ⅲ区出土遺物の中で最も多く確認されている須恵器は、外傾する口縁部をもち底部に回転糸切り痕を残す無高台の坏(第14図2～4・第33図97～第34図119)である。これは白坏遺跡、 大田市八石遺跡[6]などで出土しており、同様に回転糸切り痕を調整しない２類～３類に併行すると思われる。皿は高台が付くもの(第34図124)と付かないもの(126)があるが、いずれも底部に回転糸切り痕を残す。124と同様な皿は江津市半田浜西遺跡SD04でも出土しており、その中には９世紀後半とされる灰釉



第39図　中祖遺跡Ⅲ区出土須恵器・土師器分類図

碗が含まれている[7]。その他の器種では、壺(第34図128)が肩の張らない特徴的な器形をもつ。これと類似したものには京都府篠窯跡群出土須恵器の中に見られる篠壺Ⅱと呼ばれるものがあり、９世紀中葉～後葉の頃のものとされる[8]。

土師器　高台をもつ坏を除けば、２～３類の須恵器無高台坏や皿とほぼ同様な特色を備えており、須恵器との前後関係を考える必要はないと思われる。高台付きの坏(第35図139～141)は、高台端部が外反し、足高高台(140)が含まれるなど須恵器とは異なる様相を示す。足高高台の坏は浜田市古市遺跡SK2009で土師器皿・須恵器皿とともに出土した例がある[9]。また、松江市出雲国府跡８号土坑・16号土坑では９世紀後半～10世紀前半の緑釉陶器を共伴することから[10]、概ねこの頃のものと見ておきたい。

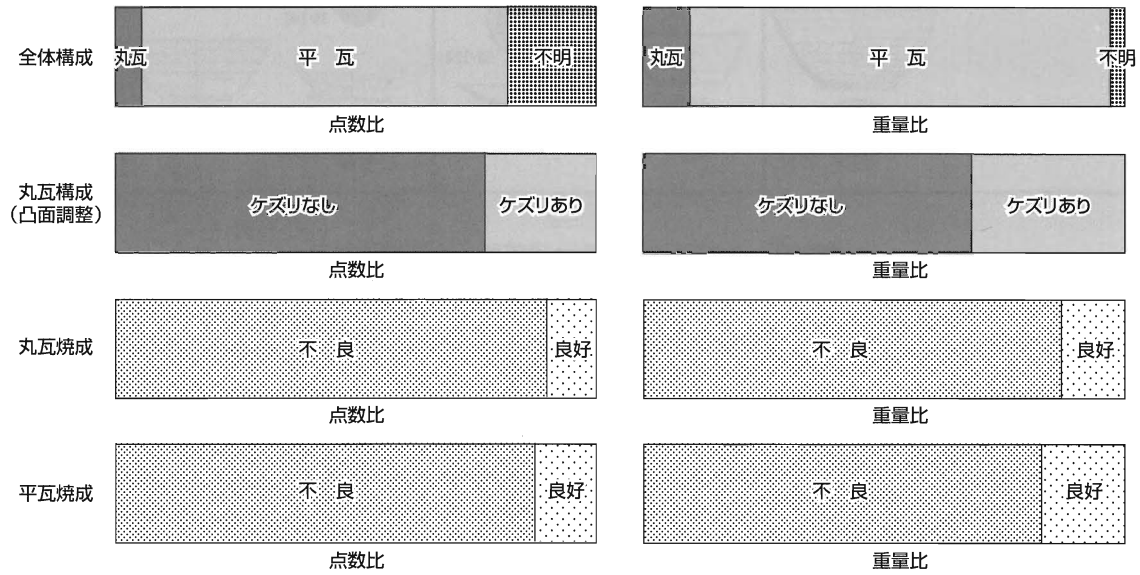
（２）出土瓦の検討

瓦の構成　Ⅲ区礎石建物跡に伴って検出された瓦溜は丸瓦と平瓦で構成されており、軒瓦は全く含まれていない。瓦片の総点数は2742点で、そのうち丸瓦は145点(5.3％)、平瓦は2092点(76.3％)である。丸瓦と平瓦の比率は重量で見ると、総重量262.9kgのうち、丸瓦は24.2kg(9.2％)、平瓦は234.5kg(89.2％)となる。復原された瓦の重さは丸瓦が1.7kg、平瓦が2.41kgであることから、それぞれの重量をこれで割ると平瓦が約97枚、丸瓦が約14枚あった計算となる。また、瓦の隅部の点数は、丸瓦が29点、平瓦は232点が確認されており、隅部は１枚あたり４つであることから、丸瓦が7.25枚、平瓦が58枚あったことが想定される。小片のため丸瓦か平瓦か判別不能のものがある他、後世の攪乱などもあり建物に使用された瓦がすべて回収されているとは言えないが、丸瓦と平瓦の構成は重量からは１：７、隅部の数からは１：８程度の比率となるものと考えられ、丸瓦に対して平瓦が多く用いられた傾向を窺うことができる。

丸瓦　丸瓦は端部が残るものはすべて無段の行基式で、有段の玉縁式は含まれていない。成形は布を巻いた筒状の内型に糸切りで分割した粘土板を当て、一部に離れ砂を用いながら縄を巻いた工具で叩く。分割は第15図18のように横断面形が半円形を呈し2分割されたものと、同図19のように湾曲が浅く３分割の可能性が考えられるものがある。丸瓦凸面の縄目タタキは未調整のものが多いが、第16図20のようにタタキののちケズリ調整されたものがある。ケズリの無いものと有るものの

第３表　中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡出土瓦の構成

		破片点数	重量(kg)	隅部点数	焼成不良		焼成良好	
					点数	重量(kg)	点数	重量(kg)
丸　瓦	ケズリなし	111	16.4	19	103	15.4	8	1.0
	ケズリあり	34	7.8	10	27	5.5	7	2.3
	小　計	145	24.2	29	130	20.9	15	3.3
平　瓦		2,092	234.5	232	1,827	193.4	265	41.1
不　明		505	4.2	0	488	3.9	17	0.3
合　計		2,742	262.9	261	2,445	218.2	297	44.7

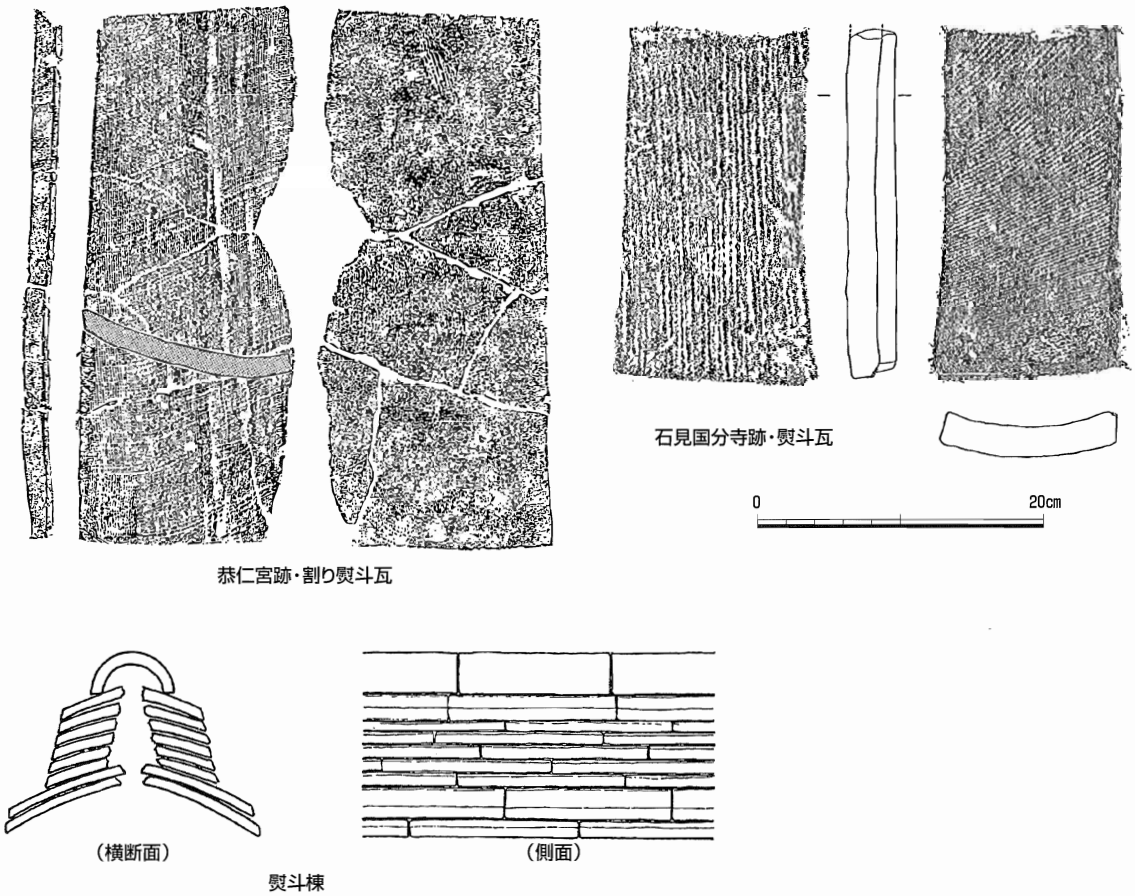


第40図　中祖遺跡Ⅲ区出土瓦構成図

比率は、点数では前者が111点(76.6％)に対し後者が34点(23.4％)、重量では前者が16.4kg(67.8％)、後者は7.8kg(32.2％)で、ケズリが入るものは比較的少ない。凹面は側縁や端部にケズリ調整を施すものがほとんどであるが、第17図26のように無いものも含まれる。焼成は不良で色調が灰白色系をしたものが大半で、一部に良好で青灰色系を呈するものが含まれる。その割合は、点数では前者が130点(89.6％)、後者が15点(10.4％)、重量では前者が20.9kg(86.4％)に対し後者は3.3kg(13.6％)である。

平瓦　平瓦は端部が鉛直方向を向くものが多く、凹面に模骨痕を残すものは含まれないことから１枚作りと見られる。凹凸両面には粘土板に分割した際の糸切り痕を留めたものがあり、凸形台の上に布を敷き粘土板を置いた後、離れ砂を用いながら縄を巻いた工具で叩いている。凹面の周囲にはケズリが加えられていることから、ある程度乾燥した段階で凸形台から凹形台の上に載せ替え、調整を行ったものと考えられる。平瓦凸面の縄目タタキには、丸瓦のようにケズリ調整されるものはない。焼成は不良で色調が灰白色系をしたものが多く、良好で青灰色系を呈するものが少ない点は丸瓦と同様である。両者の比率は、点数では焼成不良が1827点(87.3％)、良好が265点(12.7％)、重量では前者が193.4kg(82.5％)に対し後者は41.1kg(17.5％)である。

屋根の復原　Ⅲ区礎石建物跡に伴う瓦は、丸瓦・平瓦とも凸面に縄目タタキをもつもののみで構成される。丸瓦の一部には縄目タタキののちケズリ調整が加えられたものも含まれるが、その他の調整手法や成形法には大きな違いは見られず、比較的単純な様相をもつ。また、丸瓦・平瓦とも焼成不良なものが８～９割方を占める点でも同様で、礎石建物の創建時に搬入された瓦がほとんど補修を受けることなく使われた一括性の高い資料と考えられる。



第41図　熨斗瓦と熨斗棟

丸瓦と平瓦の比率は、1：7、または1：8程度と丸瓦に対して平瓦が多いのが特徴である。これは総瓦葺屋根を考えた場合、著しく不均衡な割合と言わざるを得ない。例えば京都府恭仁宮跡大極殿地区では丸瓦533枚に対し平瓦1179枚で1：2.2、塔院地区では丸瓦801枚に対し平瓦1362枚で1：1.7と算出されており(11)、中祖遺跡の瓦の構成とは全く異なっている。古代の瓦葺き建物跡には総瓦葺きの他に甍棟・熨斗棟と呼ばれる屋根の棟だけを瓦葺きとしたものがあり(12)、中祖遺跡の瓦は平瓦が極端に多いこと、軒瓦を含まないことから、熨斗棟であった可能性が考えられる。

熨斗棟は基部に平瓦、中段に熨斗瓦をそれぞれ2列に積み、上部に丸瓦を載せて構成されるが、中祖遺跡では平瓦を縦方向に割って用いた割り熨斗瓦(13)と見られるものが含まれる。第24図47・50・51、第25図52～54がそれで、幅が概ね10～15cmと石見国分寺跡で出土した熨斗瓦の幅12.5cmに近いことから、その可能性が考えられよう。したがって、中祖遺跡Ⅲ区の礎石建物跡は、屋根の棟のみに瓦を用いた熨斗棟の建物であったことが想定される。

瓦の生産地　石見における瓦窯跡は現在のところ、江津市久本奥窯跡(14)・浜田市石見国分寺瓦窯跡(15)・重富Ⅳ区瓦窯跡(16)、益田市本片子窯跡(17)が知られている。

このうち、久本奥窯跡は須恵器と瓦を焼いた瓦陶兼用の地下式登り窯で、最終操業に当たる3次床面では丸瓦と平瓦が焼成されている。丸瓦は、凸面にケズリ調整があり行基式の基部をもつⅠ類、凸面に縄目タタキがあり行基式のⅡ類、凸面に縄目タタキがあり玉縁式のⅢ類があるが、平瓦は、凸面に縄目タタキをもつもののみで、側部の形状からⅠ類とⅡ類に分けられている。

石見国分寺瓦窯跡は半地下式の平窯で、窯壁に軒瓦や平瓦が使われる。調査が古く焼成品を特定

することは難しいようであるが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・磚が確認されている。丸瓦は玉縁式で、縄目タタキののちケズリまたはナデが加えられる。平瓦は１枚作りで、凸面に縄目タタキ、凹面は布目圧痕を残すものの他、ケズリののちナデ調整されたものもある。

重富Ⅳ区瓦窯跡は地下式登り窯で、軒丸瓦・丸瓦・平瓦が焼成されている。丸瓦は行基式のみで、凸面はハケメまたはナデ調整が加えられており、粘土円筒からの分割には糸切り技法が使われる。平瓦は桶巻作りで、凸面がナデ調整される一類とハケメ調整される二類からなり、凹面は布目圧痕があるが、一部にケズリ調整されたものも含まれる。

本片子窯跡は須恵器と瓦を焼いた瓦陶兼用の地下式登り窯で、瓦には丸瓦・平瓦・隅切瓦がある。丸瓦は凸面がケズリ調整されたもので、凹面に糸切り痕と布目圧痕を残す。平瓦は桶巻作りで、凸面はケズリまたはナデ調整されている。

中祖遺跡Ⅲ区礎石建物跡に用いられた瓦は、丸瓦・平瓦とも凸面が縄目タタキのものを主体とすること、丸瓦はすべて行基式であること、平瓦は１枚作りであること、焼成不良で色調が灰白色系を呈するものが大半を占めることなど斉一的な様相をもち、１ヶ所で同時に製作されたものである可能性が高い。瓦の製作手法に見られる特色は、丸瓦の一部にケズリ調整されたものを含むことなど合わせ考えると、石見の瓦窯跡の中では中祖遺跡の南西約13㎞と地理的にも近い久本奥窯跡出土の瓦と最も類似している。ただし、久本奥窯跡の丸瓦には凹面の側縁部・両端にケズリが施されないこと、総じて焼成の良好なものが多いことなどの違いも見られる。

今回の調査に伴って行った瓦の胎土分析では、中祖遺跡出土瓦はよくまとまった分布領域を示しており、一括性の高さを裏付けることができた。その一方、久本奥窯跡・石見国分寺瓦窯跡・重富Ⅳ区瓦窯跡・天王平廃寺との比較ではいずれとも胎土が一致するものはなく、これらとは別の場所で製作された瓦であることが明らかになっている。このうち、久本奥窯跡とは瓦の類似点が多いことから製作技術の共通性が窺えるが、分析結果は同系統の技術をもつ別の窯が存在することを想定させるものと言えよう。

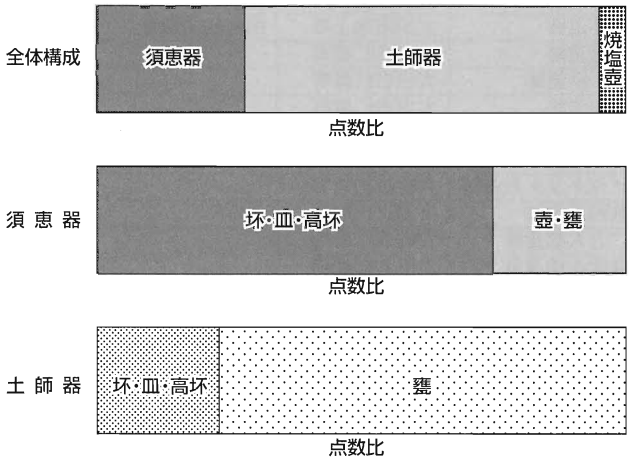
（３）礎石建物跡の性格

建物跡の構造と時期　中祖遺跡Ⅲ区の礎石建物跡は、２間×２間の小規模な建物で、現在のところ周辺では関連施設は確認されていない。出土瓦の検討結果からは、この建物は総瓦葺きではなく棟のみに瓦を用いる熨斗棟の建物であったことが明らかになった。また、時期は8世紀後半から10世紀前後までと、奈良時代後半から平安時代前半の比較的長い期間にわたり存続していたと思われる。検出された建物跡が１棟のみであり、遺構の配置から遺跡の性格を窺うことはできないが、熨斗棟とはいえ瓦を使用した施設であることから、寺院や官衙など公的な施設と考えられる。

出土土器の構成　中祖遺跡Ⅲ区で出土した遺物の構成を見てみると、総破片点数3404点のうち須恵器が957点(28.0％)、土師器が2278点(67.0％)、焼塩壺が169点(5.0％)と土師器が多いことが注目される。土師器は坏・皿・高坏といった供膳具もあるが、最も多いのは炊飯具として使われた甕である。須恵器では坏が多く、皿・高坏の他、貯蔵具である壺・甕が含まれる。仏堂と目される建物跡が検出された邑智郡邑南町大地ノ元遺跡[18]や鹿足郡吉賀町前立山遺跡[19]では、鉄鉢形土器や長頸瓶など仏教関係の遺物が出土しているが、中祖遺跡では見られない。焼塩壺は固形塩を作るための容器で、砲弾形・丸底を呈し、内面に布圧痕が残る六連式と呼ばれるものである。塩はこの容器ごと流通しており、集落遺跡の他、寺院や官衙などでの出土例も目立つが、中祖遺跡では総点数の

第4表 中祖遺跡Ⅲ区土器構成表

種別	器種	点数	計
須恵器	坏蓋	31	957
	坏	673	
	皿	8	
	高坏	1	
	甕	130	
	壺	114	
土師器	坏	487	2,278
	皿	12	
	高坏	7	
	甕	1,772	
製塩土器	焼塩壺	169	169
合　計		3,404	3,404



第42図　中祖遺跡Ⅲ区出土土器の構成図

5.0%と一定量含まれる点が注意されよう。このように見ると、礎石建物跡または付近では炊飯・供膳が行われていたことを想定することができ、仏具的な遺物が含まれない点から寺院・仏堂であったとは考えにくい。

建物跡の性格　礎石建物跡の構造は2間×2間の方形で総柱建物であるところに特色があり、倉庫または楼閣風の建物が考えられる。白坏遺跡は2間×2間または2間×3間程度の小規模な掘立柱建物跡とともに人名や物品名を記した付札と見られる木簡が出土したことから、集落毎に置かれた倉庫と考えられており、「九九」木簡や墨書土器などより倉庫を管理した役人の存在も想定されている[20]。中祖遺跡で出土した文字資料は「佐右」[21]と書かれたヘラ書き土器のみであり、炊飯・供膳が行われたと見られる出土土器の組成を考慮すると、倉庫として積極的に評価するのは難しい面がある。

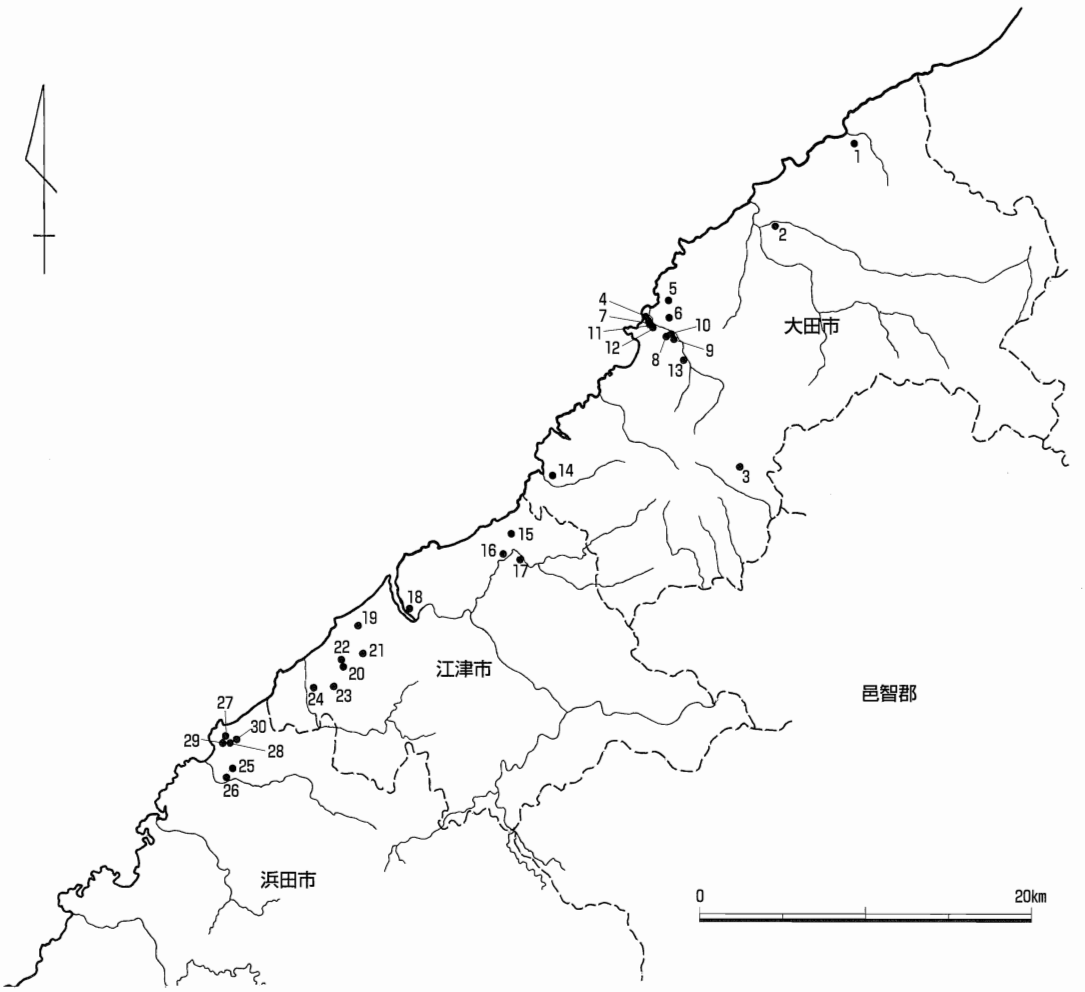
一方、楼閣風の建物跡と見た場合考えられるのが、駅家に設けられたとされる駅楼である。中祖遺跡が所在する福光地区には古代山陰道が通っていたと見られ、『延喜式』によれば出雲との国境から石見国府の間に波祢・託農・樟道・江東・江西の5ヶ所に駅家が置かれている。福光地区はそのうちの樟道駅の比定地となっており[22]、山陰道は第5章第3節で論じられているように中祖遺跡付近を通過していたことが考えられる。古代の駅家は駅館院(主屋・副屋・側屋・楼ほか)と駅雑舎(屋・倉ほか)よりなっており、駅楼は駅使の到着を知らせたり通行者を監視し、時には眺望の良さから宴会にも利用されたとされる[23]。駅館院はコの字形の建物配置をとる官衙的な施設群であり、中祖遺跡Ⅲ区が駅館院とは言えないが、周辺の未調査部分に関連施設が広がるとすれば駅家に関わる施設の一部であったとも考えられる。

現段階では遺跡の性格を特定することはできないが、①邇摩郡家の出先機関に伴う倉庫、②山陰道樟道駅の駅楼、③山陰道樟道駅の駅雑舎としての倉庫などの可能性を考えておきたい。

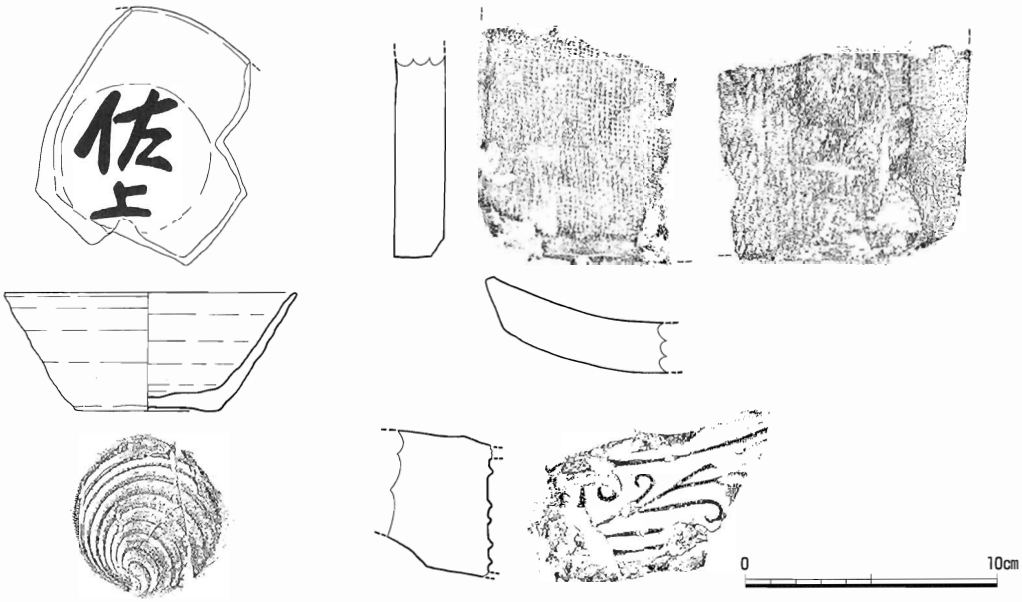
周辺の関連遺跡　周辺地域における奈良時代から平安時代前半の関連遺跡は第5表に示したとおりである。中祖遺跡と同様に布目瓦が出土した遺跡としては、寺院跡や窯跡を除けば大田市仁摩町大寺遺跡[24]・入石遺跡[25]・善興寺橋遺跡[26]、江津市都治農協裏遺跡[27]・宮倉遺跡[28]・前田遺跡[29]・古八幡付近遺跡[30]があげられる。いずれも遺構に伴うものはなく遺跡の実態は不明であるが、瓦の出土から中祖遺跡のような施設が付近に存在することが考えられる。また、瓦は出土していないが、

第5表　周辺地域における奈良時代から平安時代前半の遺跡

番号	遺　跡　名	所　在　地	遺　　構	特　　記　　遺　　物	文　献
1	天王平廃寺	大田市波根町	塔基壇・心礎	水煙・軒丸瓦・文字瓦・瓦	註（35）
2	八石遺跡	大田市長久町	掘立柱建物跡・加工段	円面硯	註（6）
3	白坏遺跡	大田市水上町	掘立柱建物跡	木簡・墨書土器・ヘラ書き土器	註（5）
4	坂灘遺跡	大田市仁摩町			註（24）
5	立平浜遺跡	大田市仁摩町			註（24）
6	大寺遺跡	大田市仁摩町		瓦	註（24）
7	毘沙門遺跡	大田市仁摩町			註（24）
8	入石遺跡	大田市仁摩町		瓦	註（25）
9	ヒヨトリヶ市遺跡	大田市仁摩町			註（25）
10	京円原遺跡	大田市仁摩町			註（25）
11	仁万大橋遺跡	大田市仁摩町			註（26）
12	善興寺橋遺跡	大田市仁摩町		瓦	註（26）
13	古市遺跡	大田市仁摩町	掘立柱建物跡		註（4）
14	中祖遺跡	大田市温泉津町	礎石建物跡	瓦・ヘラ書き土器	本報告書
15	波来浜遺跡	江津市後地町	火葬墓	丸鞆・巡方・鈸具	註（32）
16	都治農協裏遺跡	江津市都治町		瓦	註（27）
17	高津遺跡	江津市都治町		ヘラ書き土器	註（36）
18	長田千軒遺跡	江津市渡津町			註（27）
19	久本奥窯跡	江津市嘉久志町	登窯跡・加工段	軒丸瓦・鴟尾・瓦	註（3）
20	宮倉遺跡	江津市二宮町	加工段	軒平瓦・瓦・墨書土器	註（21）
21	前田遺跡	江津市二宮町		瓦	
22	半田浜西遺跡	江津市二宮町	溝	円面硯・風字硯・土製分銅・石帯・奈良三彩	註（3）
23	飯田Ｃ遺跡	江津市二宮町	加工段	転用硯・風字硯・土製分銅	註（30）
24	古八幡付近遺跡	江津市敬川町	加工段	瓦	註（30）
25	下府廃寺	浜田市下府町	塔基壇・金堂基壇・心礎	軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾・鬼瓦・瓦	註（37）
26	横路遺跡	浜田市下府町	掘立柱建物跡	風字硯・土製分銅・緑釉陶器・軒丸瓦・瓦	註（38）
27	前場紙漉遺跡	浜田市国分町		瓦	註（39）
28	石見国分寺跡	浜田市国分町	塔基壇	軒丸瓦・軒平瓦・瓦・誕生釈迦仏立像	註（2）
29	石見国分寺瓦窯跡	浜田市国分町	平窯跡	軒丸瓦・軒平瓦・瓦	註（2）
30	石見国分尼寺跡	浜田市国分町		軒丸瓦・軒平瓦・瓦	註（2）



第43図　周辺地域における奈良時代から平安時代前半の遺跡



第44図　江津市宮倉遺跡出土遺物実測図

硯や石帯など役人の存在が窺える遺物が検出された遺跡には、大田市八石遺跡[31]、江津市波来浜遺跡[32]・半田浜西遺跡[33]・飯田Ｃ遺跡[34]がある。

これらの遺跡が所在する地域には、前述した山陰道との関連から言えば託農・樟道・江東・江西の駅家が存在すると見られるが、瓦の出土地は中祖遺跡を含め既に８ヶ所が知られており、駅家の数よりも多い。したがって、これらの中には邇摩郡家やその出先機関、館、あるいは寺院などの施設も含まれていると考えられよう。石見における奈良・平安時代遺跡の様相は、まだ十分に明らかになっていないのが実情であり、今後資料が蓄積された段階でこうした遺跡の検討が行われることが望まれる。

註

(1)島根県教育委員会『中祖遺跡範囲確認調査報告書』2007年

(2)浜田市教育委員会『史跡石見国分寺跡・県史跡石見国分尼寺跡』2006年

(3)島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　1995年

(4)仁摩町教育委員会『原田遺跡外発掘調査報告書』2001年

(5)大田市教育委員会『白坏遺跡発掘調査概報』1989年

(6)大田市教育委員会『八石遺跡』2000年

(7)前掲註(3)に同じ。

(8)伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号 京都府埋蔵文化財調査研究センター　1990年

(9)浜田市教育委員会『古市遺跡発掘調査概報』1995年

(10)島根県教育委員会『史跡出雲国府跡』１　2003年

(11)京都府教育委員会『恭仁宮跡発掘調査報告』瓦編　1984年

(12)ａ,上原真人「平安貴族は瓦葺邸宅に住んでいなかった」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会編　真陽社　1988年

ｂ,大橋泰夫「瓦葺建物の復元」『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編　奈良文化財研究所　1984年

(13)焼成後の平瓦を縦に裁断した割り熨斗瓦は恭仁宮跡SX9841などで知られている。

京都府加茂町教育委員会『恭仁宮(京)跡発掘調査概要』1999年
⒁前掲註(3)に同じ。
⒂前掲註(2)に同じ。
⒃島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1992年
⒄益田市教育委員会『本片子遺跡・木原古墳』1982年
⒅石見町教育委員会『大地ノ元遺跡』1999年
⒆島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1980年
⒇前掲註(5)に同じ。
(21)土師器の内面にヘラ書きされた「佐右」の意味は現在のところ不明と言わざるを得ないが、江津市宮倉遺跡では須恵器の内面に「佐上」と墨書されたものが確認されている(第44図)。
江津市教育委員会『宮倉遺跡』1993年
(22)小林俊二「国府と郡衙と駅路」『温泉津町誌』上巻　温泉津町　1994年
(23)木本雅康『古代の道路事情』吉川弘文館　2000年
(24)島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XⅢ集　1987年
(25)仁摩町教育委員会『五丁遺跡群発掘調査報告書』1999年
(26)仁摩町教育委員会『仁万大橋・善興寺橋遺跡』2005年
(27)門脇俊彦「古代」『江津市誌』上巻 江津市 1982年
(28)前掲註(21)文献に同じ。
(29)江津市教育委員会 梅木茂雄氏の御教示による。
(30)島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ　1999年
(31)前掲註(6)に同じ。
(32)江津市『波来浜遺跡発掘調査報告書』1973年
(33)前掲註(3)に同じ。
(34)前掲註(30)に同じ。
(35)島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅱ集　1970年
(36)江津市教育委員会『高津遺跡』2005年
(37)浜田市教育委員会『下府廃寺跡』1993年
(38)浜田市教育委員会『横路遺跡(原井ヶ市地区)』1998年
(39)浜田市教育委員会『浜田市遺跡詳細分布調査－国府地区Ⅰ－』2002年

第6表　中祖遺跡出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	調査区	出土地点	層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	調整・手法の特徴	胎　土	焼成	色調	備考
4—1	Ⅰ		2層 3層	弥生	甕	—	—	外面： 内面：	2mm大の石英他含む	良好	黄白色	
4—2	Ⅰ			土師器	甕	(16.1)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・指押え・ケズリ	4mm大の小礫含む	良好	外面：茶褐色	口縁一部に黒斑あり
4—3	Ⅰ		2層	須恵器	坏蓋	(13.4)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	3mm大までの石英他含む	良好	青灰色	外面に自然釉
4—5	Ⅰ		9層	土師器	坏	—	—	外面：回転糸切りか 内面：回転ナデ	密（長石をわずかに含む）	良好	灰白色	
4—6	Ⅰ		3層	土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：	密	不良	淡褐色	
4—7	Ⅰ			青磁	碗	—	—	外面： 内面：	密	良好	緑灰色	陰刻文
8—1	Ⅱ		5層	青磁	稜花皿	—	—	外面： 内面：	密	良好	淡緑色	陰刻文
8—2	Ⅱ		3層	青磁	香炉	—	—	外面： 内面：回転ナデ	密	良好	淡緑色	脚部畳付けに離れ砂
8—3	Ⅱ		3層	白磁	碗	—	—	外面： 内面：	密	良好	釉：　淡緑色	陰刻文
8—4	Ⅱ		3層	瓦質	擂鉢	—	—	外面：ハケメのちナデ 内面：摺目	5mm大の礫含む	良好	黒褐色	
8—5	Ⅱ		2層	備前	擂鉢	(27.0)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4mm大以下の白色粒含む	良好	外面：茶褐色 内面：灰色	内面に自然釉
8—6	Ⅱ		3層	唐津	皿	—	—	外面：ケズリのち回転ナデ 内面：胎土目	密だが4mm大の礫含む	良好	釉：　灰白色 胎土：明褐色	
8—7	Ⅱ		3層	唐津	皿	—	—	外面： 内面：胎土目	0.5mm大以下の白色粒を少量含む	良好	釉：白色 地：灰白色～黄白色	
14—1	Ⅲ	礎　石 建物跡		須恵器	坏蓋	(13.7)	2.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	2mm大の礫含む	良好	青灰色	口唇に色調差
14—2	Ⅲ	礎　石 建物跡		須恵器	坏	11.2	4.5	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	外面に重ね焼き痕 口縁一部に自然釉
14—3	Ⅲ	礎　石 建物跡	6層	須恵器	坏	12.9	4.7	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（1～3mm大の白色粒を少量含む）	良好	灰色	
14—4	Ⅲ	礎　石 建物跡		須恵器	坏	(12.4)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
14—5	Ⅲ	礎　石 建物跡		須恵器	皿	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3mm大の石英他含む	良好	淡青灰色	内面に重ね焼き、色調差あり
14—6	Ⅲ	礎　石 建物跡		須恵器	甕	(20.2)	—	外面：回転ナデ・平行タタキ 内面：回転ナデ・同心円文当て具痕	密（2mm大以下の白色粒をわずかに含む）	良好	青灰色	
14—7	Ⅲ	礎　石 建物跡		土師器	甕	(21.4)	—	外面：横ナデ・格子タタキ 内面：横ナデ・指押え	2mm大までの石英、雲母含む	良好	暗褐色	
14—8	Ⅲ	礎　石 建物跡		土師器	甕	(27.4)	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：ケズリ	3mm大までの礫含む	良好	外面：明黄褐色 内面：橙色	
14—9	Ⅲ	礎　石 建物跡		製塩	焼塩壺	—	—	外面：ナデ 内面：布目圧痕	3mm大までの石英多く含む	良好	暗赤褐色	
14—10	Ⅲ	礎　石 建物跡		弥生	高坏	—	—	外面： 内面：しぼり目	細かい砂粒多く含む	普通	外面：灰褐色 内面：淡黒褐色	
14—11	Ⅲ	礎　石 建物跡		青磁	碗	—	—	外面： 内面：	密	良好	淡緑色	陰刻文
14—12	Ⅲ	礎　石 建物跡	4層	土製品	土錘			外面： 内面：	密	良好	灰白色	
14—13	Ⅲ	礎　石 建物跡		土師器	鉢	—	—	外面：ハケメ・ナデか 内面：ハケメ	3mm大以下の白色粒含む	やや不良	黄褐色	
28—6	Ⅲ	2号土坑		土製品	土錘			外面： 内面：	密	良好	黒褐色	
28—7	Ⅲ	4号土坑		須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
28—8	Ⅲ	4号土坑		土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰褐色	
28—9	Ⅲ	3号土坑		土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	淡褐色	
28—10	Ⅲ	3号土坑		土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（赤色粒子含む）	良好	灰白色	
32—64	Ⅲ	C－2	6層	土師器	甕	(16.2)	—	外面：風化により不明 内面：風化により不明	2mm大の礫含む	普通	淡褐色	
32—65	Ⅲ	B－0	4層	土師器	甕	(13.2)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリか	細かい石英・雲母含む	やや不良	外面：灰褐色 内面：黒褐色	
32—66	Ⅲ	C－2	6層	土師器	甕	(17.6)	—	外面： 内面：横ナデ	細かい砂粒含む	普通	淡褐色	
32—67	Ⅲ	C－2	6層	土師器		—	—	外面： 内面：指押え	2mm大の石英他含む	普通	外面：灰褐色 内面：灰白色	外面に黒斑あり
32—68	Ⅲ	C－2	3層	土師器	短頸壺	(9.6)	—	外面：不明 内面：ナデ	1～2mm大の石英・雲母を含む）	普通	灰白色	
32—69	Ⅲ	C－2	5層	土師器	鼓形器台	—	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	2mm大の礫含む	良好	淡黄色	
32—70	Ⅲ	C－1	5層	土師器	高坏	—	—	外面：ハケメ 内面：	細かい石英・雲母含む	普通	灰白色	
32—71	Ⅲ	C－2	6層	土師器	高坏	—	—	外面：風化により不明 内面：風化により不明	3mm大以下の白色粒・透明粒・赤色粒を多く含む	良好	淡褐色	
32—72	Ⅲ	C－1	4層	土師器	高坏	—	—	外面：ハケメか 内面：	4mm大の礫含む	普通	灰褐色	
32—73	Ⅲ	C－2	6層	土師器	高坏	—	—	外面：ハケメ 内面：ナデ・ハケメ	2～3mm大までの砂粒含む	不良	灰褐色	
32—74	Ⅲ	D－2	5層	土師器	高坏	—	—	外面：横ナデ 内面：ミガキ	2mm大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	外面：淡褐色 内面：暗灰色～赤灰色	外面に赤色顔料残る

32—75	Ⅲ	C－2	6層	土師器	高坏	—	—	外面：風化により不明 内面：風化により不明	1.5㎜大以下の白色粒を少量含む	良好	外面：明橙色 内面：淡橙色	
32—76	Ⅲ	B－0	4層	土師器	低脚坏	—	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：	4㎜大以下の白色粒・褐色粒・透明粒を多く含む	良好	淡褐色	外面の一部に赤色顔料残る
32—77	Ⅲ	C－1		土師器	低脚坏	—	—	外面：指押え 内面：指押え・横ナデ	4㎜大までの礫多く含む	普通	褐色	外面赤色顔料塗付
32—78	Ⅲ	C－2	6層	土師器	坏	(13.2)	5.5	外面：ナデ・静止ケズリ 内面：ミガキか	2㎜大までの砂粒含む	普通	灰白色～灰褐色	
32—79	Ⅲ	C－1	5層	須恵器	坏蓋	—	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
32—80	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏蓋	14.3	1.9	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	密（1.5㎜大以下の白色粒を多く含む）	良好	青灰色～灰色 （自然釉：透明～淡オリーブ色）	
32—81	Ⅲ	C－0	4層	須恵器	坏蓋	4.0	0.9	外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ	2㎜大以下の白色粒を含む	良好	灰色	
32—82	Ⅲ	C－1		須恵器	坏蓋	(17.2)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密(2㎜大以下の白色粒･黒色粒を含む)	良好	灰白色	
32—83	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏蓋	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密(1.5㎜大以下の白色粒･黒色粒を含む)	良好	灰白色	
32—84	Ⅲ	C－1	5層	須恵器	坏	12.2	4.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	密（1㎜大以下の粗粒を含む）	良好	青灰色	
32—85	Ⅲ	C－2	5層 6層	須恵器	坏	(14.0)	3.9	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	2㎜大の石英含む	良好	青灰色	
32—86	Ⅲ	C－0	5層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	3㎜大までの礫含む	良好	青灰色	
32—87	Ⅲ	C－2	5層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密（1㎜大以下の白色粒・黒色粒を多く含む）	良好	灰白色 （自然釉：透明）	外面に自然釉がかかる
32—88	Ⅲ	C－1		須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	2.5㎜大以下の白色粒含む	良好	外面：灰色 内面：灰白色	外面から底部にかけて自然釉かかる
32—89	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	内面に重ね焼き痕跡
32—90	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ	密（1㎜大以下の白色粒、黒色粒を少量含む）	良好	灰白色	
32—91	Ⅲ	C－1 C－2	5層 6層	須恵器	坏	(12.6)	5.2	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密(1㎜大以下の白色粒、黒色粒を含む)	良好	青灰色	
32—92	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	16.4	8.0	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（1㎜大以下の石英を含む）	良好	青灰色	
32—93	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2㎜大の長石含む	不良	灰白色	
32—94	Ⅲ	C－0 C－2	5層 6層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ・静止ナデ	密(1㎜大以下の白色粒･黒色粒を含む)	良好	灰白色	
33—95	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ･ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密(0.5㎜大以下の白色粒･黒色粒を含む)	良好	灰白色	
33—96	Ⅲ	C－1	4層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2㎜大の石英含む	良好	青灰色	
33—97	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(14.2)	5.7	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ・ナデ	密（1㎜大以下の白粒 を含む）	良好	青灰色～暗青灰色	内面、外面口縁に自然釉 口縁外面に色調差
33—98	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	13.6	4.9	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	外面：青灰色・暗青灰色 内面：暗青灰色	
33—99	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	12.1	5.2	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（一部に5㎜大長石を含む）	良好	淡青灰色	
33—100	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(12.8)	5.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	4㎜大の長石含む	良好	淡青灰色	
33—101	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	12.3	5.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（1㎜大以下の黒粒を含む）	良好	淡青灰色	
33—102	Ⅲ	C－1	4層	須恵器	坏	(11.6)	4.7	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2㎜大の石英含む	良好	淡青灰色	
33—103	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(13.2)	4.7	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3㎜大の石英含む	良好	青灰色	
33—104	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(12.7)	4.9	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3㎜大までの礫含む	不良	灰白色～青灰色	
33—105	Ⅲ	C－0 C－2	6層 5層	須恵器	坏	13.9	5.3	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（1㎜大以下の白色粒、黒色粒、わずかに含む）	やや不良	白色	
33—106	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	13.0	4.5	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	密（3㎜大以下の白色粒、透明粒をわずかに含む）	良好	青灰色～灰褐色	
33—107	Ⅲ	C－0	4層	須恵器	坏	(13.2)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	1㎜大以下の白色粒を含む	良好	灰色	
33—108	Ⅲ	B－0	5層	須恵器	坏	(13.2)	4.9	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	2㎜大以下の白色粒・黒色粒含む	良好	灰白色	
33—109	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(11.8)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2㎜大の礫含む	やや不良	灰白色～青灰色	口縁外面に重ね焼き痕跡
33—110	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	11.8	4.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	5㎜大までの石英他含み粗い	良好	暗青灰色	口縁外面に重ね焼き痕跡
33—111	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	11.8	4.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2㎜大の礫含む	良好	青灰色	
33—112	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(11.4)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
34—113	Ⅲ	C－1	5層	須恵器	坏	(12.0)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	紫灰色	
34—114	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(12.0)	4.3	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰色～暗青灰色	
34—115	Ⅲ	C－2	6層	須恵器	坏	(12.4)	4.5	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3㎜大の礫含む	良好	外面：青灰色～暗青灰色 内面：青灰色	口縁に自然釉がかかる 外面に重ね焼き痕跡

34—116	Ⅲ	C−1	5層	須恵器	坏	(12.6)	4.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3mm大の石英含む	良好	青灰色	口縁端部に色調差 重ね焼き痕跡
34—117	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	坏	(11.8)	5.0	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	5mm大の礫含む	良好	青灰色	
34—118	Ⅲ	C−3	6層	須恵器	坏	(10.6)	4.3	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	3mm大の礫含む	良好	暗灰色	
34—119	Ⅲ	C−0	4層	須恵器	坏	(11.2)	4.3	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ・静止ナデ	1mm大以下の白色粒を含む	良好	灰白色	
34—120	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	坏	(13.8)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密（1mm大以下の白色粒を含む）	不良	口縁部：暗灰色 体　部：灰白色	
34—121	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	坏	(14.3)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	2mm大の礫含む	やや不良	外面：灰白色～青灰色 内面：青灰色～暗青灰色	
34—122	Ⅲ	B−2		須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密（1.5mm大以下の黒色粒、白色粒をわずかに含む）	良好	青灰色	内面の一部が自然釉で荒れている
34—123	Ⅲ	B−0	5層	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・ヘラ切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰白色	
34—124	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2mm大以下の白色粒、透明粒を含む	良好	灰褐色～灰白色	
34—125	Ⅲ	B−0		須恵器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
34—126	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	Ⅲ	(13.4)	—	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	2mm大以下の白色粒を多く含む	良好	青灰色	
34—127	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	
34—128	Ⅲ	C−1 C−2	6層 4層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・カキメ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・指押え	1～2mm大の白色粒、黒色粒を多く含む	良好	青灰色（自然釉：暗灰色）	体部下半の一部に自然釉がかかる
36—129	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密（1mm大以下の黒色粒、白色粒を多く含む）	良好	灰白色 （自然釉：青～透明）	うすく自然釉がかかる
34—130	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	壺か	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	内面一部わずかに灰かぶり
34—131	Ⅲ	C−0	4層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリのち回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	密（一部に3mm大の石英を含む）	良好	青灰色 （一部灰白色）	
34—132	Ⅲ	C−1 C−2 D−2	5層 5層 6層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ヘラケズリのち回転ナデか・切り離し後多方向へのナデ 内面：回転ナデ・指押え	1～3mm大の白色粒、黒色粒を多く含む	良好	灰色～灰白色	
35—133	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・ナデ 内面：回転ナデ	密（2mm大以下の白色粒、透明粒を含む）	良好	外面：青灰色 内面：灰白色	
35—134	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・ケラ切りのちナデ 内面：回転ナデ・ナデ	粗（7mm大以下の白色粒を多く含む）	良好	青灰色	
35—135	Ⅲ	C−1	5層	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・ナデ 内面：ナデ・一部手持ちヘラケズリのちナデ	密（2mm大以下の白色粒、透明粒を多く含む）	良好	灰白色 （自然釉：灰色）	体部の一部に自然釉がかかる
35—136	Ⅲ	C−1	4層	須恵器	甕	(17.0)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	2mm大の礫含む	良好	青灰色	
35—137	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	甕	(19.5)	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・同心円文当て具痕	密（6mm大以下の白色粒を少量含む）	良好	青灰色	
35—138	Ⅲ	C−2	6層	須恵器	高坏	—	—	外面：回転ナデ・ナデか 内面：回転ナデ・しぼり目	5mm大以下の白色粒をわずかに含む）	良好	灰白色（自然釉：淡オリーブ色）	うすく自然釉がかかる
35—139	Ⅲ	C−1	6層	土師器	坏	—	—	外面：横ナデ・回転糸切り 内面：横ナデ	密	不良	灰白色	見込みに「佐右」のヘラ書き
35—140	Ⅲ	C−2	6層	土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	1mm大の小礫含む	良好	灰褐色	
35—141	Ⅲ			土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	0.5mm大以下の白色粒・黒色粒・橙色粒含	良好	黄褐色	
35—142	Ⅲ	D−1	5層	土師器	坏	14.1	4.5	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	普通	暗褐色	
35—143	Ⅲ	C−2	6層	土師器	坏	(13.0)	4.8	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	灰褐色	
35—144	Ⅲ	C−2	6層	土師器	坏	(15.0)	6.0	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	細かい砂粒含むが密	不良	灰白色	
35—145	Ⅲ	B−0	4層	土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	1mm大以下の黒色粒含む	良好	外面：橙褐色 内面：暗褐色	
35—146	Ⅲ	C−2	6層	土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・ヘラ切り 内面：回転ナデ	2mm大の礫含む	不良	灰褐色	
35—147	Ⅲ	C−2	6層	土師器	坏	12.6	4.5	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2mm大の小礫含む	普通	灰褐色	
35—148	Ⅲ	C−1		土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切りのち底部に2条の円形沈線 内面：回転ナデ	密	良好	外面：灰白色 内面：灰褐色	
35—149	Ⅲ	C−2	6層	土師器	Ⅲ	11.8	2.3	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	不良	灰白色	
35—150	Ⅲ	C−2	5層	土師器	Ⅲ	(12.2)	2.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	1mm大以下の黒色粒・赤色粒を多く含む	良好	淡褐色～白色	
35—151	Ⅲ	D−2	6層	土師器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	細かい砂粒含む	不良	灰白色	
36—152	Ⅲ	C−1	6層	土師器	甕	(22.8)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・指押え・ケズリ	5mm大までの礫含む	良好	明褐色	
36—153	Ⅲ	C−2	6層	土師器	甕	(18.6)	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	2mm大の礫含む	良好	茶褐色	外面一部に煤付着
36—154	Ⅲ		6層	土師器	甕	(21.2)	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大までの礫含む	不良	外面：黄橙色 内面：灰白色	
36—155	Ⅲ	C−2	6層	土師器	甕	(22.4)	—	外面：指押え・ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	3mm大以下の白色粒を多く含む	良好	外面：明橙色～明褐色 内面：褐色	
36—156	Ⅲ	C−1	5層	土師器	甕	(24.4)	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	3mm大までの礫含む	不良	外面：浅黄橙色 内面：褐灰色	

36—157	Ⅲ	C−0	5層	土師器	甕	(24.7)	—	外面: 横ナデか 内面: 横ナデか・指押え	2㎜大以下の白色粒・赤色粒を含む	良好	淡黄橙色	外面に煤が付着
36—158	Ⅲ	C−2	6層	土師器	甕	(20.1)	—	外面: 横ナデ 内面: ハケメか・ケズリ	1㎜大以下の白色粒・赤色粒を含む	良好	明橙色～淡褐色	
36—159	Ⅲ	C−2	6層	土師器	甕	(26.4)	—	外面: 横ナデ・カキメ 内面: 横ナデのちヘラケズリ	4㎜大の砂粒含む	良好	外面: 黒褐色 内面: 褐色	外面に煤が付着
36—160	Ⅲ	B−1	4層	土師器	甕	(21.6)	—	外面: 横ナデ・ケズリのちナデか 内面: ケズリ	2㎜大以下の白色粒を含む	良好	外面: 褐色～明褐色 内面: 淡灰褐色	
36—161	Ⅲ	B−0 C−0	4層	土師器	甕	(23.4)	—	外面: 横ナデ・格子タタキ 内面: 横ナデ・無文当て具痕	0.5㎜大以下の白色粒を含む	良好	褐色～淡赤橙色	
36—162	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	3㎜大の礫含む	良好	橙褐色	
36—163	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 押え 内面: 布目圧痕	2㎜大までの礫含む	良好	褐色	
36—164	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	5㎜大までの茶色礫含む	良好	灰褐色	
36—165	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: ナデ 内面: 布目圧痕	3㎜大の礫含む	良好	淡褐色	
37—166	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	1㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	明橙色	
37—167	Ⅲ	C−1	5層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指圧痕 内面: 布目圧痕	5㎜大の礫含む	普通	橙褐色	布の綴じ合わせ痕あり
37—168	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: ナデ・一部に布目 内面: 布目圧痕	3㎜大の石英、茶色礫含む	良好	淡褐色～褐色	
37—169	Ⅲ	C−1	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	10㎜大までの茶色礫含む	良好	灰褐色	内面に布綴じ合わせ痕
37—170	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	4㎜大以下の白色粒・褐色粒を含む	良好	浅黄橙色	
37—171	Ⅲ	C−2	6層	製塩	焼塩壺	—	—	外面: 指押え 内面: 布目圧痕	5㎜大の礫含む	良好	明褐色	
37—172	Ⅲ	C−0		白磁	碗	—	—	外面: 内面:	密(黒色微粒子含む)	良好	灰白色	
37—173	Ⅲ	C−1	4層	瓦質	鉢	—	—	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ・カキ目	密	やや不良	灰色	
37—174	Ⅲ	B−0	4層	瓦質	擂鉢	—	—	外面: ハケメのちナデ 内面: 摺目	3㎜大の礫含む	良好	黒褐色	
37—175	Ⅲ	D−2	5層	朝鮮	碗	—	—	外面: 高台に砂目 内面: 見込み砂目	密	良好	灰オリーブ色	
37—176	Ⅲ	B−1	5層	備前	甕	—	—	外面: 内面:	粗い	良好	赤紫褐色	
37—177	Ⅲ	C−2		備前	壺・甕	—	—	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ	1㎜大以下の紫灰色粒・白色粒を含む	良好	外面: 紫灰色 内面: 淡褐色	
37—178	Ⅲ	C−1	5層	備前	擂鉢	—	—	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデ・摺目	1㎜大以下の白色粒・黒色粒を含む	良好	紫褐色	
37—179	Ⅲ	C−6	5層	備前	擂鉢	—	—	外面: 回転ナデ・切り離しのちナデか 内面: 回転ナデのち摺目	1㎜大以下の白色粒・黒色粒を多く含む	良好	紫灰色	内部と底部に自然釉
37—180	Ⅲ	C−2	4層	備前	徳利	—	—	外面: 内面: 回転ナデ・指押え	2.5㎜大以下の白色粒含む	良好	外面: 茶褐色 内面: 灰色	軽くしぼり目がつく
37—181	Ⅲ	C−2	4層	肥前	片口鉢	(22.8)	—	外面: 回転ナデ 内面: 回転ナデのち摺目	密	良好	釉:暗褐色 地:赤褐色	
37—182	Ⅲ	C−2	4層	肥前	碗	(9.6)	—	外面: 内面:	密	良好	灰色	
37—183	Ⅲ		3層 4層	肥前	碗	—	—	外面: 内面:	密	良好	白色	こんにゃく印判見込み圏線内五弁花
37—184	Ⅲ	北東	3層	肥前	碗	—	—	外面: 内面:	0.5㎜大以下の黒色粒を多く含む	良好	白色	見込みに「寿」か

第7表　中祖遺跡出土瓦観察表

挿図番号	調査区	出土地点	層位	種別	器種	長さ(cm)	広端幅(cm)	狭端幅(cm)	調整・手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
4—4	Ⅰ		3層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面: 布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	6㎜大の礫含む	不良	灰白色	
15—18	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	37.6	(15.0)	10.4	凹面: 布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ・ケズリ	4㎜大の礫含む	不良	灰白色～淡黒褐色	凸面に離れ砂付着
15—19	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	34.1	—	—	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	3㎜大までの砂粒含む 1㎜大までの雲母微量に含む	不良	灰白色	
16—20	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	丸瓦	38.9	—	—	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ・ケズリ	4～5㎜大の礫・石英含む	不良	灰白色	
16—21	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	丸瓦	—	—	—	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ・一部ナデ	8㎜大の礫含む5	良好	凹面: 淡青灰色 凸面: 暗灰色	
16—22	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	15.5	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	3㎜大までの砂粒含む	不良	灰白色	
17—23	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	9.7	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	3㎜大の砂粒含む	不良	灰白色	
17—24	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	—	凹面: 布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	3㎜大までの砂粒含む	不良	灰白色	
17—25	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	—	凹面: 糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	2㎜大の砂粒含む	不良	灰白色	
17—26	Ⅲ	礎石建物跡	6層	瓦	丸瓦	—	—	—	凹面: 糸切りのち布目圧痕 凸面: 縄目タタキ	5㎜大の礫含む	不良	灰白色	凹面に型圧痕
18—27	Ⅲ	礎石建物跡	7層	瓦	丸瓦	—	—	—	凹面: 布目圧痕・ケズリ 凸面: 縄目タタキ	5㎜大までの砂粒含む	不良	淡灰白色	

18—28	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	—	凹面：目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	2mm大の砂粒含む	不良	灰白色	凹面に綴じ合わせ痕
18—29	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキのちケズリ	2～3mm大の礫含む	不良	灰白色	凹面に綴じ合わせ痕
18—30	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	丸瓦	—	—	—	凹面：布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	5mm大の礫含む	不良	灰白色	凹面に綴じ合わせ痕
18—31	Ⅲ	礎石建物跡	5層	瓦	丸瓦	—	—	—	凹面：布目圧痕・ケズリ 凸面：ケズリ	2mm大の砂粒含む	不良	灰白色	凹面に型圧痕
18—32	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	丸瓦	—	—	—	凹面：布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ・ケズリ	2mm大の砂粒含む	不良	灰白色	凹面に型圧痕
19—33	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	38.2	23.5	20.5	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3mm大までの礫含む	普通	灰褐色	
19—34	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	(24.9)	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	2mm大の石英・雲母含む	良好	黒褐色	
20—35	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	38.8	(26.0)	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3mm大の礫含む	不良	灰白色	
20—36	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	平瓦	39.5	23.8	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	7mm大までの礫含む	良好	淡青灰色	
21—37	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	平瓦	38.1	—	23.2	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	4mm大の礫含む	普通	灰褐色	
21—38	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	(26.8)	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・一部指圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	6mm大の礫含む	良好	灰白色～淡黒褐色	凸面に離れ砂付着
22—39	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	(24.7)	凹面：糸切りのち布目圧痕・ナデ・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	10mm大の石英含む	やや不良	凹面：灰白色～黒褐色	
22—40	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	24.0	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	5mm大の礫含む	普通	灰褐色	
22—41	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	22.9	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	4mm大の礫含む	普通	灰褐色	
23—42	Ⅲ	礎石建物跡	4層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3～4mm大の礫含む	良好	灰白色～淡黒褐色	
23—43	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3mm大までの砂粒含む	不良	灰白色	端部付近に段
23—44	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	9mm大の礫含む	良好	凹面：黒褐色 凸面：灰白色～黒褐色	端部付近に段
24—45	Ⅲ	礎石建物跡	5層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3mm大の礫含む	やや不良	淡褐色	端部付近に段
24—46	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	3mm大の砂粒含む 2mm大までの雲母微量に含む	不良	灰白色	端部付近に段
24—47	Ⅲ	礎石建物跡	6層	瓦	平瓦	39.9	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	8mm大の礫含む	普通	灰褐色	
24—48	Ⅲ	礎石建物跡	6層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	10mm大までの礫含む	良好	青灰色	凸面一部にガラス質付着物
24—49	Ⅲ	礎石建物跡	5層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面：布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大までの砂粒含む	良好	灰褐色	凸面に離れ砂付着
24—50	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大の礫含む	不良	灰白色	
24—51	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	2mm大の礫含む	不良	凹面：灰白色 凸面：灰白色～淡黒褐色	凸面に離れ砂
25—52	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大の礫含む	良好	淡黒褐色	凸面に離れ砂
25—53	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	4mm大の礫含む	不良	灰白色	
25—54	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ・ケズリ	3mm大の礫含む	不良	灰白色	
25—55	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	2mm大の礫含む	不良	灰褐色	凸面の端部沿いに沈線
25—56	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	5mm大までの砂粒含む	不良	淡褐色	凸面の端部沿いに沈線
25—57	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	2mm大までの砂粒含む	不良	灰白色	貼り合わせ
25—58	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大までの砂粒含む	不良	淡褐色	貼り合わせ
25—59	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大までの砂粒含む	不良	灰白色	貼り合わせ
26—60	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	5mm大の礫含む	不良	灰白色	凹面に綴じ合わせ痕
26—61	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	10mm大の礫含む	不良	灰白色	凹面に綴じ合わせ痕 凸面に離れ砂
26—62	Ⅲ	礎石建物跡	6層	瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：糸切りのち縄目タタキ	3mm大の礫含む	不良	灰白色	凸面に離れ砂付着
26—63	Ⅲ	礎石建物跡		瓦	平瓦	—	—	—	凹面：糸切りのち布目圧痕・ケズリ 凸面：縄目タタキ	4mm大までの砂粒含む 2mm大までの雲母微量に含む	不良	灰白色	

第8表　中祖遺跡出土木製品観察表

挿図番号	調査区	出土地点	層位	種　別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	加工・使用状況	樹　種
28−1	Ⅲ	2号土坑		板材	23.2	15.6	1.4	両側縁が先端に向けて窄まるように加工される。	
28−2	Ⅲ	2号土坑		板材	22.8	14.5	1.0	両側縁が先端に向けて窄まるように加工される。先端部付近に孔が2つあり。	
28−3	Ⅲ	2号土坑		板材	21.5	9.8	1.2	片側の側縁が先端に向けて窄まるように加工される。一方は欠損。	
28−4	Ⅲ	2号土坑		板材	19.3	10.9	1.2	周囲はすべて破面。	
28−5	Ⅲ	2号土坑		板材	15.9	6.1	1.3	片側の側縁が先端に向けて窄まるように加工される。一方は欠損。	

第9表　中祖遺跡出土金属製品観察表

挿図番号	調査区	出土地点	層位	種　別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形態の特徴	備　考
38−192	Ⅲ	C−1	5層	刀子	7.3	1.3	0.4	酸化土砂が厚く付着するが、X線撮影の結果、片関と判明。	
38−193	Ⅲ	C−1	6層	鉄釘	4.3	1.2	0.9	酸化土砂付着。先端部曲がる。	

第10表　中祖遺跡出土石製品観察表

挿図番号	調査区	出土地点	層位	種　別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	加工及び使用状況	石　材
14−14	Ⅲ	礎　石 建物跡		砥石	6.3	4.0	3.5	118	上面・下面・両側面の4面を使用するが、端部は使用せず。	砂岩
14−15	Ⅲ	礎　石 建物跡		砥石	8.5	5.0	4.8	231	上面と下面の2面を使用する。	砂岩
14−16	Ⅲ	礎　石 建物跡		砥石	9.8	2.9	1.3	62	上面が使用面。下面は欠損。	凝灰質頁岩
14−17	Ⅲ	礎　石 建物跡		磨製石斧	13.3	5.0	3.6	450	刃部は欠損。側面に成形時の敲打痕あり。端部にも敲打痕。	塩基性片岩
28−11	Ⅲ	3号土坑		磨製石斧	14.2	5.1	3.9	408	刃部は欠損。	塩基性片岩
38−185	Ⅲ	B−0	4層	打製石斧	13.3	6.4	1.1	136	刃部は欠損。一部磨面あり。	凝灰岩
38−186	Ⅲ	D−2	6層	磨製石斧	13.4	4.3	1.6	141	刃部は両刃。片面は自然面。	砂岩
38−187	Ⅲ	C−2	6層	有溝石錘	12.8	6.2	5.1	514	上半部に逆T字状に溝が巡る。	石英安山岩
38−188	Ⅲ	C−1	5層	敲石	4.5	6.4	4.8	196	端部に敲打痕。片側は欠損。	斑糲岩
38−189	Ⅲ	C−2	6層	磨石・敲石	11.7	5.2	4.4	266	側面に敲打痕。一部に磨面あり。	凝灰岩
38−90	Ⅲ	C−1	5層	砥石	9.7	7.5	1.9	133	扁平な円礫を使用。片面に使用面と深い利器痕あり。	凝灰岩
38−191	Ⅲ	B−1	3・4層	砥石	5.2	6	5.0	95	砥石の小片で、使用面は2面のみ残る。	火山礫凝灰岩

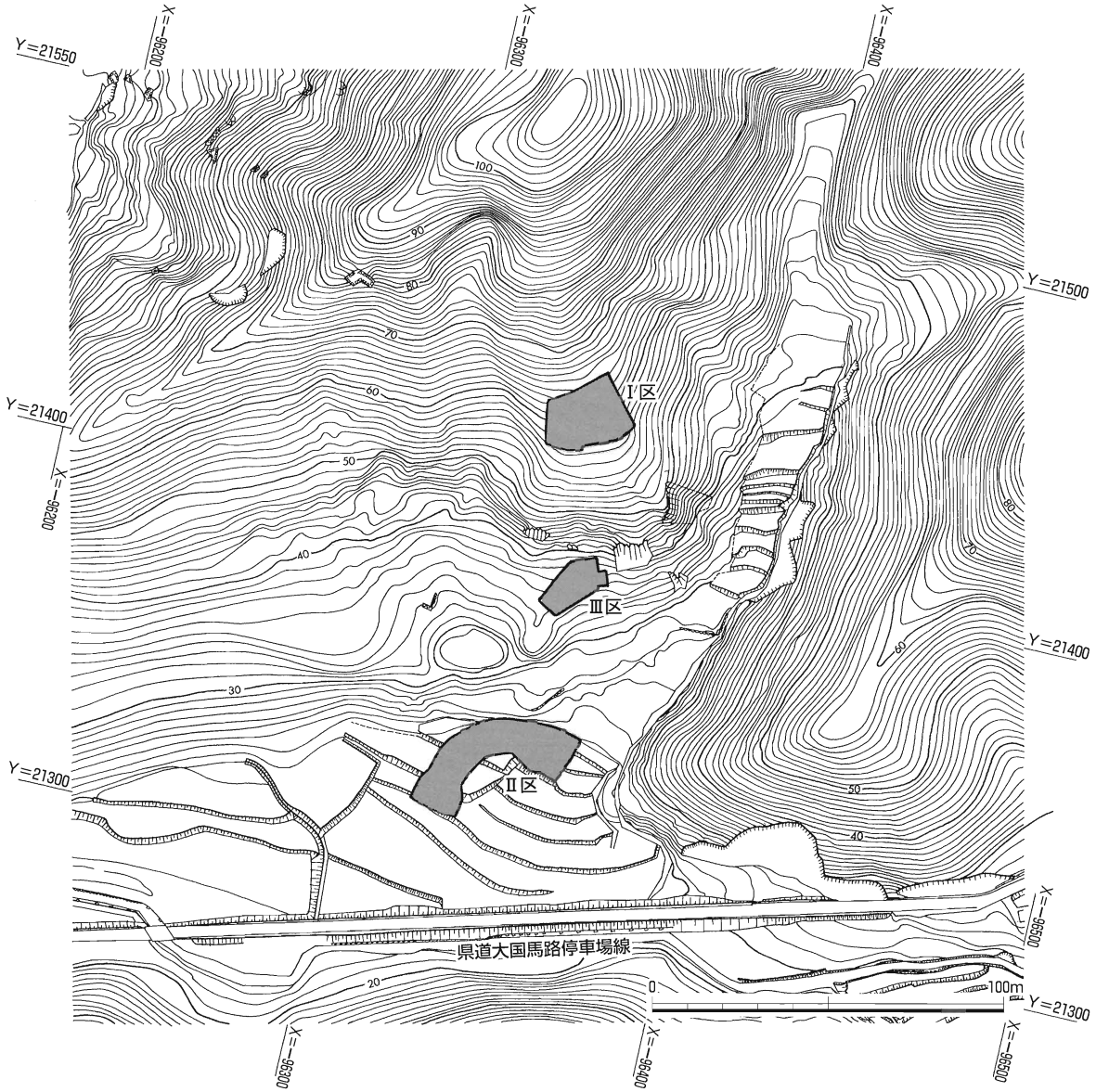
第４章　ナメラ迫遺跡の調査

第１節　遺跡の概要

ナメラ迫遺跡は県道大国馬路停車場線が通る狭い谷沿いの丘陵斜面に位置する。古墳時代から室町時代にかけて営まれた複合遺跡で、調査を行った集落跡の他、事業地外には横穴式石室もある。調査は平成18年度に丘陵斜面の工事用道路用地と丘陵上の本線用地、平成19年度に本線の橋脚用地を対象として行った。トレンチ調査の結果、平成18年度の工事用道路用地と平成19年度の本線橋脚用地で遺構・遺物が確認され、前者をⅠ・Ⅱ区、後者をⅢ区と呼称して本調査を実施した。

Ⅰ区は標高60mほどの丘陵中腹にあり、斜面がやや緩やかになった段状の地形を呈する。検出された遺構は土坑２基で、周辺で奈良時代の須恵器が出土したことから、この頃のものと思われる。なお、事業地外ではあるが、Ⅰ区の北西側斜面で横穴式石室をもつ古墳１基が確認されている。

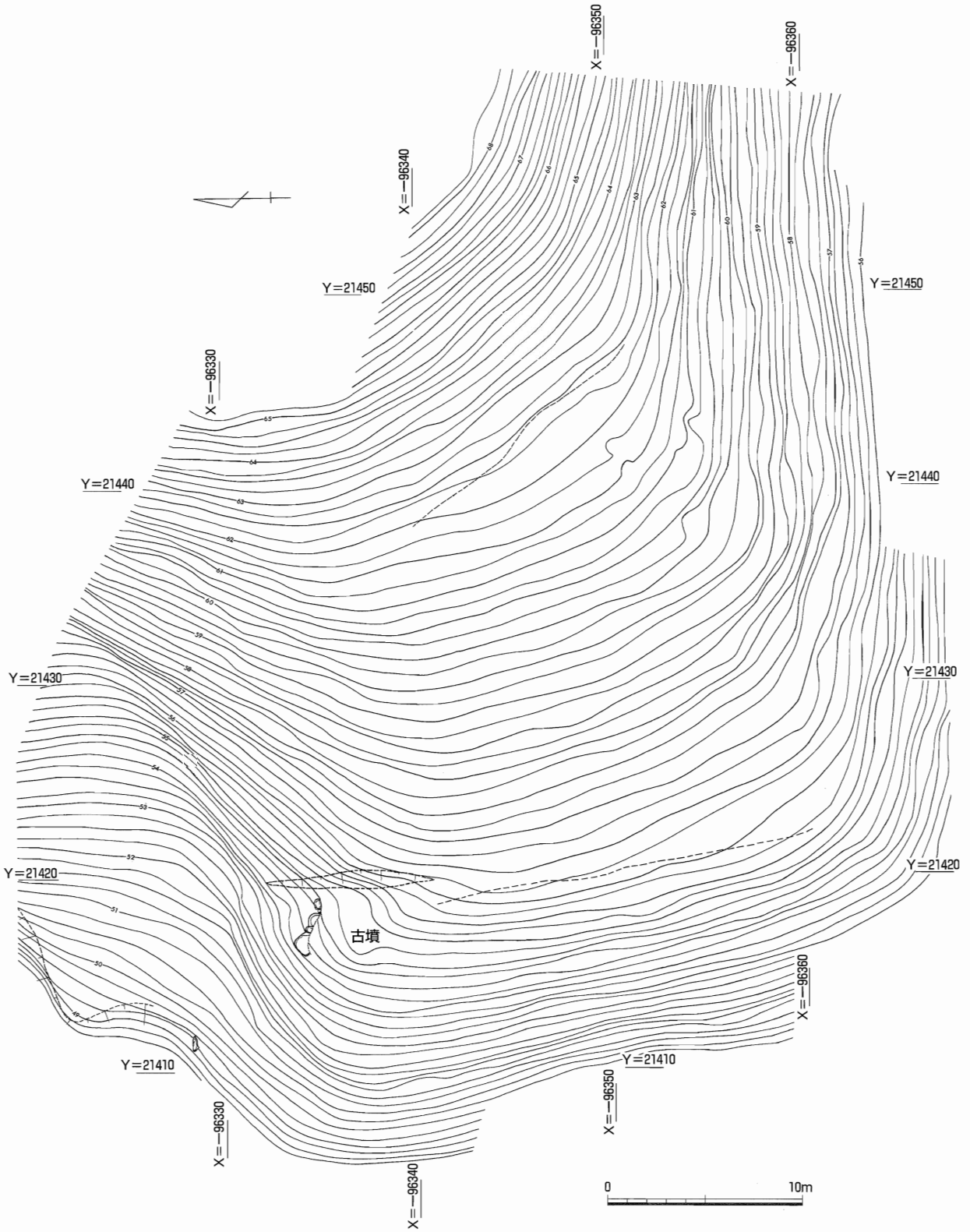
Ⅱ区は標高20mあまりの丘陵緩斜面に位置する。遺構は古墳時代中期の竪穴遺構１基、中期～後期の溝跡１条のほか、室町時代の掘立柱建物跡２棟が確認された。このうち、溝跡は調査区を横断して丘陵斜面上方へと延びており、埋土中からは須恵器・土師器が多量に出土した。幅10mの工事



第45図　ナメラ迫遺跡調査区配置図

用道路を対象としたため遺跡の全体像は不明であるが、その状況より古墳時代中・後期の集落跡が調査区両側の緩斜面へと広がることが考えられる。

Ⅲ区は標高35m前後の丘陵斜面にあり、Ⅰ区とⅡ区の中間地点に位置する。径７mほどの盛土遺構と掘立柱建物跡１棟が確認されており、盛土遺構は古墳の可能性も考えて調査を行ったが、古墳ではないことが判明している。



第46図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区調査前地形測量図

第２節　Ⅰ区の調査

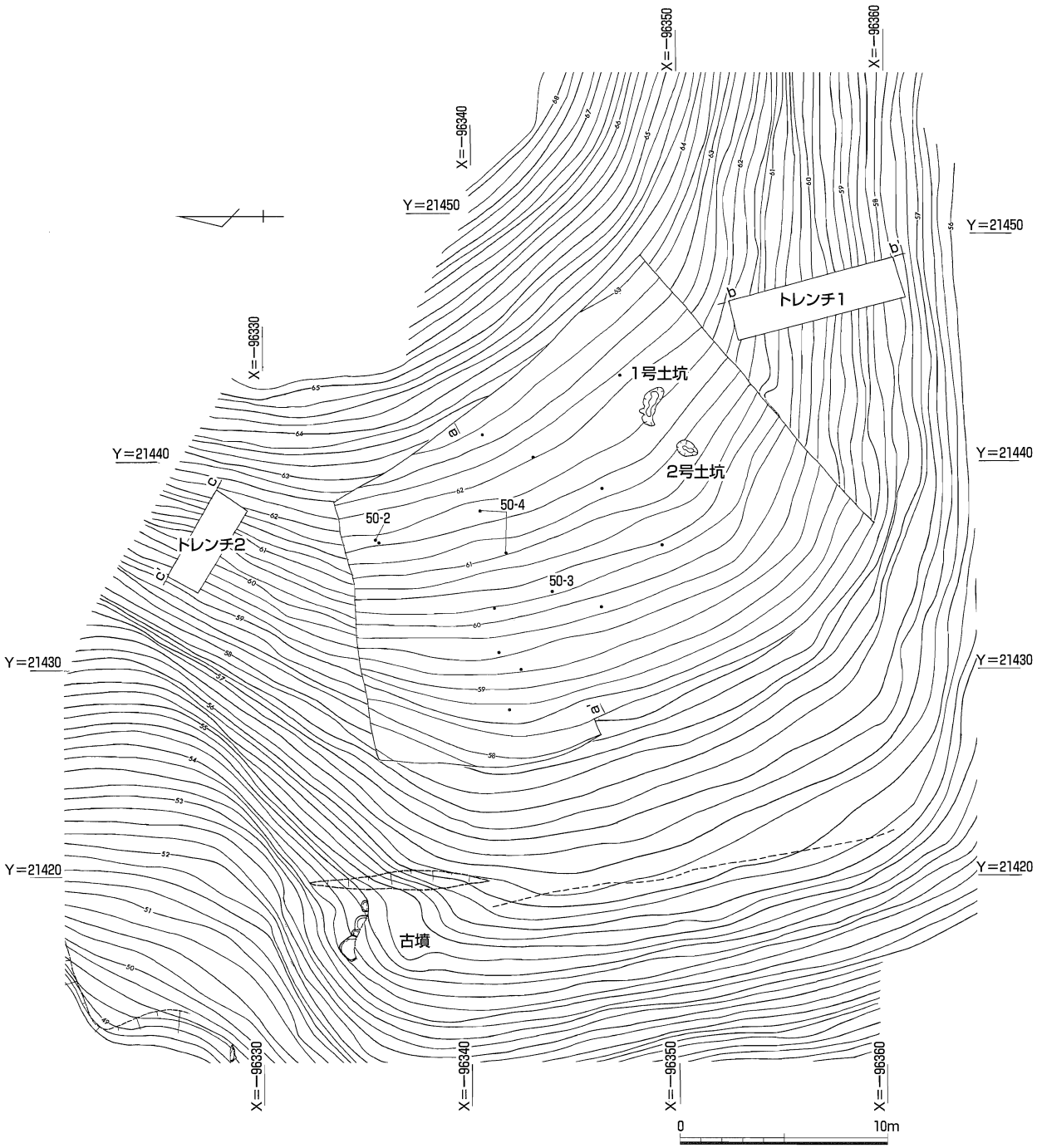
Ⅰ区は丘陵斜面にあり、標高53～62mほどの傾斜がやや緩やかになった地点に位置する。

本調査区は表土下10～30cmで地山に達し、堆積土は小礫を含む黄褐色土(３層)が見られる。遺構は土坑２基が検出されており、調査区の南側寄りに位置している。

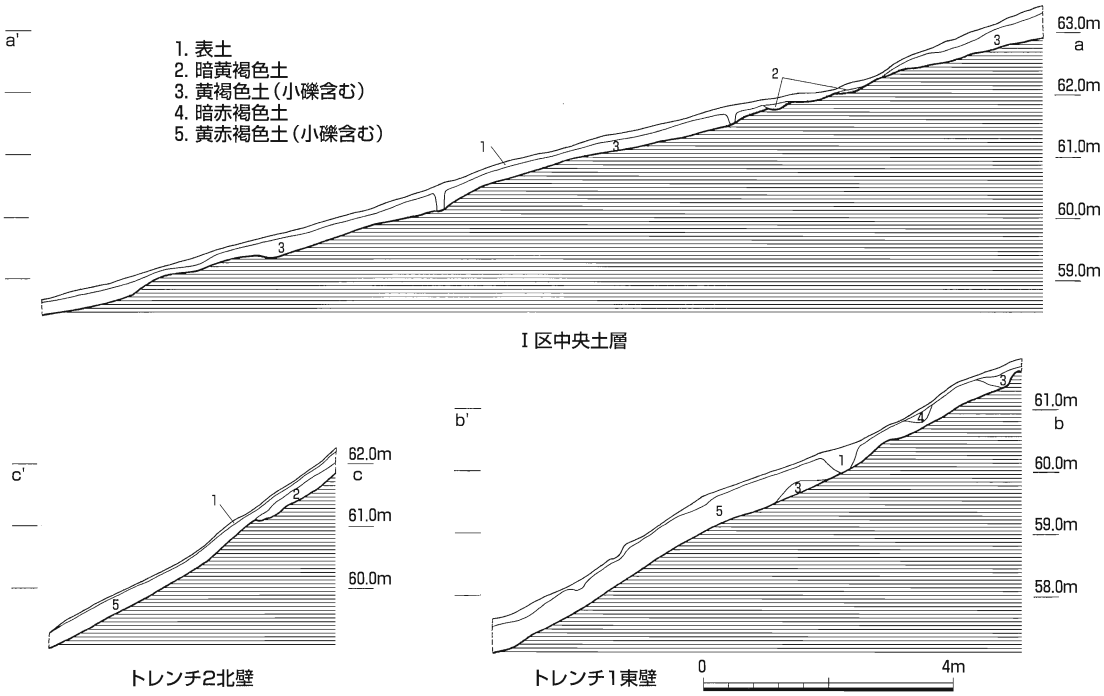
なお、遺跡の範囲を確認するために調査区の南側斜面に設定したトレンチ１では表土下50cm、トレンチ２では15～30cmで地山に達し、ともに基本的には小礫を含む黄赤褐色土(５層)が堆積していたが、遺構・遺物は検出されなかった(第48図)。

(１) 土坑

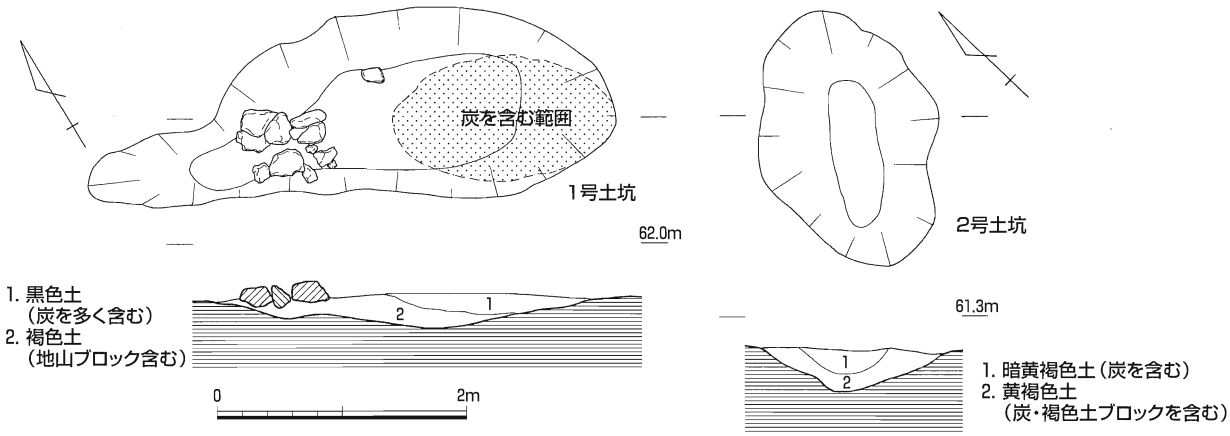
１号土坑(第49図左)　調査区の南東側に、ほぼ斜面に平行するように営まれた不整形な土坑であ



第47図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区調査後地形測量図



第48図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区土層実測図



第49図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区土坑実測図

る。大きさは長さ4.3m・幅0.6～1.5m、深さは15～27cmと浅い。土坑の西側は幅が狭く張り出すように延びており、張り出し部分の基部には転石10数個がまとめて置かれている。埋土は上層より炭を多く含む黒色土(1層)、地山ブロックを含む褐色土(2層)よりなる。炭を多く含む黒色土は土坑の東側にあって楕円形状を呈し、長径0.9m・幅0.5m・深さ8cmである。

出土遺物には鉄片(第50図1)がある。周囲は全て破面となっており、長さ7.5cm・幅6.5cm・厚さ0.3cmほどのものである。堆積土に含まれる炭の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正^{14}C年代1180+40BP、暦年代AD720～740年、AD770～970年という結果が得られている。

2号土坑(第49図右)　調査区の南東側に斜面に直交するように営まれた不整形な土坑で、1号土坑の南東側1.5mに位置する。大きさは長さ2.15m・幅1.5m、深さは35cmである。埋土は上層より炭を含む暗黄褐色土(1層)、炭・褐色土ブロックを含む黄褐色土(2層)よりなっており、1層は土坑の中央部に半レンズ状に堆積している。出土遺物はなかった。

（２）遺構に伴わない遺物

遺物は須恵器坏のみが出土しており、調査区の全体に散在している。

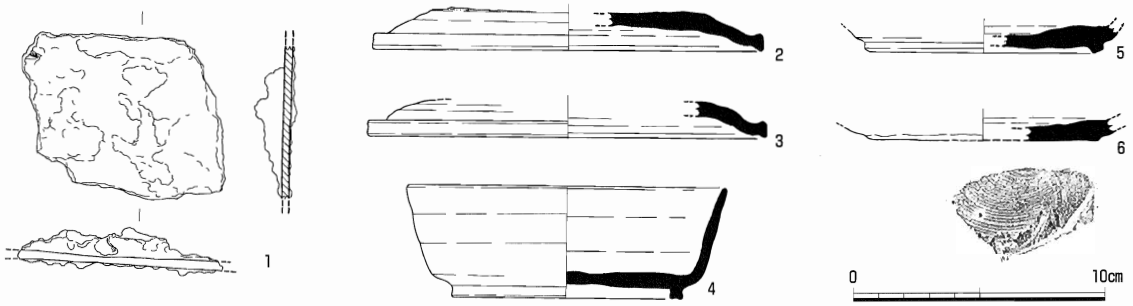
第50図２・３は坏蓋の口縁部で、口唇はともに下方に肥厚する。２の頂部には回転ヘラケズリが認められる。

４・５は高台付きの坏身である。４は外傾する口縁をもち、高台は低く直立するもので、底部はヘラ切りの後、回転ナデ調整される。５はやや外側へ開く短い高台をもち、底部は回転ナデ調整される。６は無高台の坏身の小片である。底部には回転糸切り痕を残す。

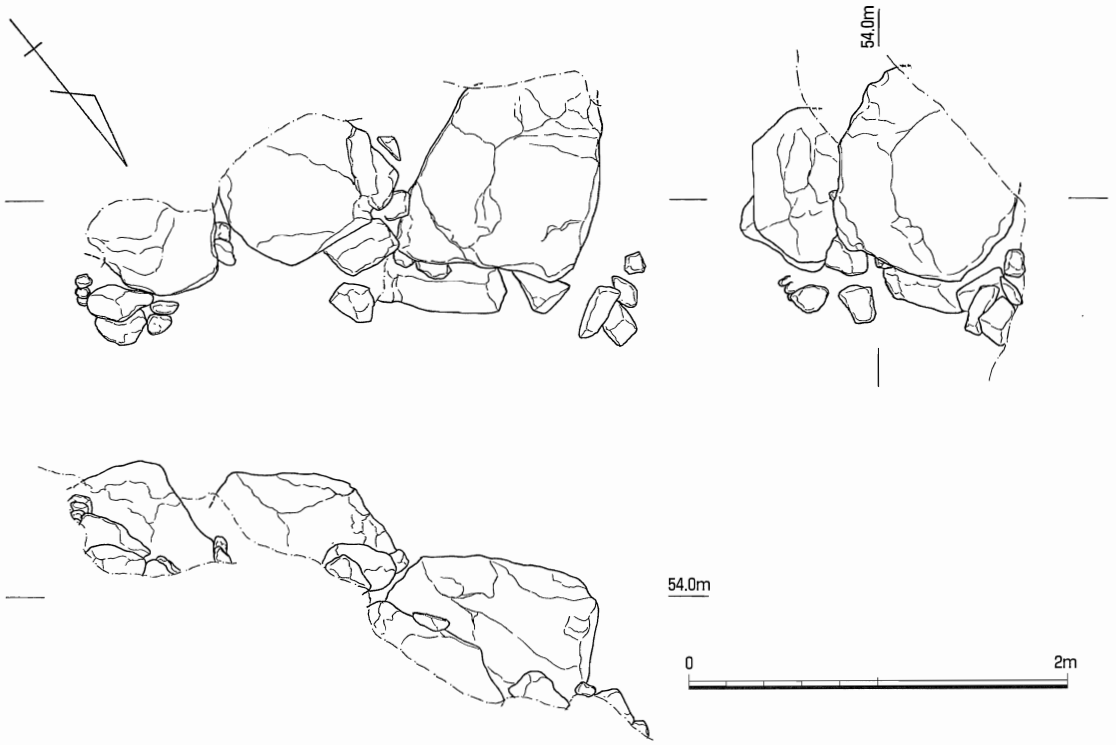
（３）古墳（第51図）

Ⅰ区の北西側斜面に位置するもので、横穴式石室の天井石が露出している。

墳丘は後世の道により削られているが僅かに地形に変化が認められ、６～７m程度のものと見られる。石室は天井石3個が露出しており、北側の天井石は石室内に落ち込んでいる。北西方向に開口するものと見られ、開口部には側壁と見られる石材も露出する。規模は現状で、長さ2.7m・幅１mほどである。遺物は確認されていない。



第50図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区出土遺物実測図



第51図　ナメラ迫遺跡Ⅰ区古墳横穴式石室実測図

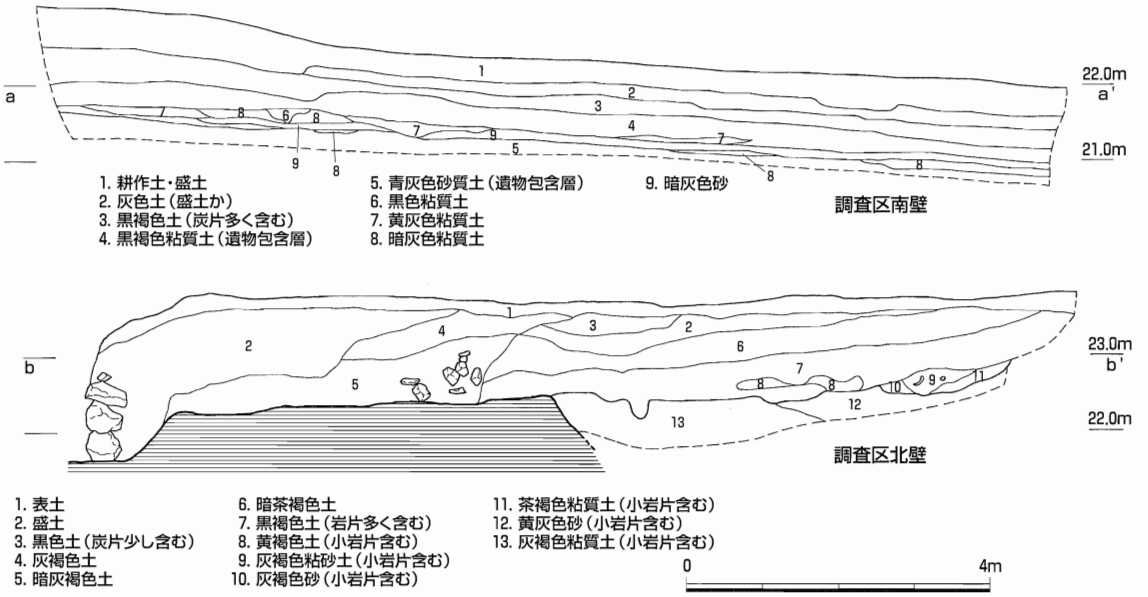
第３節　Ⅱ区の調査

Ⅱ区は丘陵裾部にあり、標高20～23m前後の緩斜面に位置する。

調査地は水田として利用されていたところで調査前に地形の改変を受けていたが、調査区中央部分には削平を受けず遺構が残った部分があり、竪穴遺構・溝状遺構・１～２号掘立柱建物跡が検出された(第52図)。遺構は基本的には地山に掘り込まれるが、溝状遺構付近には自然にできた小さな埋没谷があり、一部はその埋土から掘削される。調査区北壁の層序(第53図下)は表土・盛土を除去すると、上層から暗茶褐色土(６層)・岩片を多く含む黒褐色土(７層)・小岩片を含む黄灰色砂(12層)があり、溝状遺構は埋没谷の埋土である12層の上に掘り込まれる。また、調査区南端部は東西方向に延びる谷の一部に当たっており、調査区南壁(第53図上)の層序は表土・盛土を除去すると、基本的には上層から岩片を多く含む黒褐色土(３層)・黒褐色粘質土(４層)・黄灰色粘質土(７層)・暗灰色砂(９層)・青灰色砂質土(５層)の順に堆積しており、４層と５層が遺物包含層となっている。

遺構は２号建物跡以外には切り合い関係があり、竪穴遺構→溝状遺構→１号建物跡の順に営まれたことが明らかである。竪穴遺構と溝状遺構は、前者が古墳時代中期、後者が中期～後期にかけてのもので、両者とも調査区外へと延びており、この時期の遺構が周辺に広がっているものと見られる。掘立柱建物跡は2棟あり、ともに室町時代のものと思われる。２号建物跡はかなり削平を受けており、構造がある程度分かるのは1号建物跡のみである。斜面を段状に加工した平坦面に営まれた２×２間の建物で、主軸を南北方向においている。

第52図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構配置図



第53図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区調査区北壁・南壁土層実測図

（１）竪穴遺構（第54図）

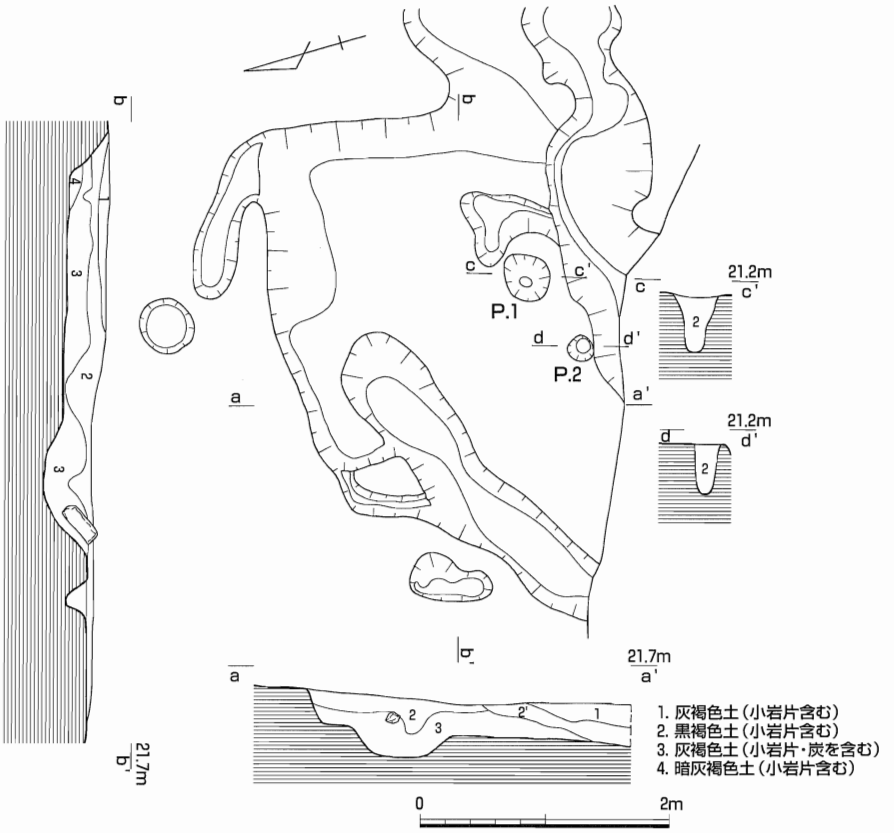
調査区の北半部に位置し、調査区外へ延びるものと見られる。溝状遺構により南側を切られており、これに先行して営まれたことが明らかである。

平面形は北東と北西に隅部をもつことから、長方形を呈するものと思われるが、西側は南西方向へ広がるように溝が掘られており、不整形である。大きさは現状で南北2.8m・東西3.2m、深さは25～33㎝である。床面ではピットが２つ確認されており、P.１が径35㎝・深さ45㎝、P.２が径20㎝・深さ40㎝である。

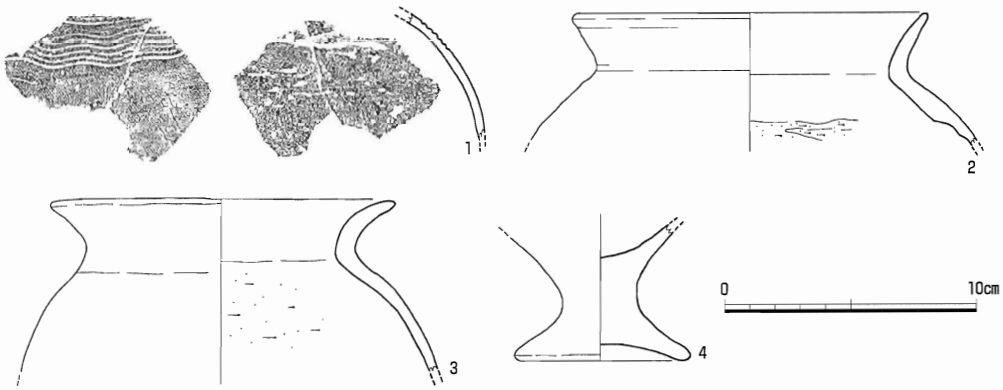
埋土は基本的には２層で上層より小岩片を含む黒褐色土(2層)・小岩片と炭を含む灰褐色土(3層)よりなるが、a-a'断面ではこれを切る溝状遺構の埋土である１層と２'層が見られ前後関係が確認できる。

遺存状態が良好でないため断定はできないが、平面形が長方形状を呈すること、床面に柱穴と見られるピットがあることから竪穴住居跡の可能性が考えられる。

出土遺物としては土師器甕・低脚坏がある。第



第54図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構実測図



第55図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴遺構出土遺物実測図

55図１は甕の肩部で、器壁が薄く、外面に波状文、内面にはケズリが施される。２・３は口縁が「く」の字状に屈曲する単純口縁の甕である。２は頸部内面にナデ、胴部内面はともにケズリである。４は低脚坏の脚部とも見られるが、通常のものより脚部が高く、高坏との中間的な様相をもっている。これらの遺物のうち、１は古墳時代前期に遡り、２～４は中期以降のものと見られる。

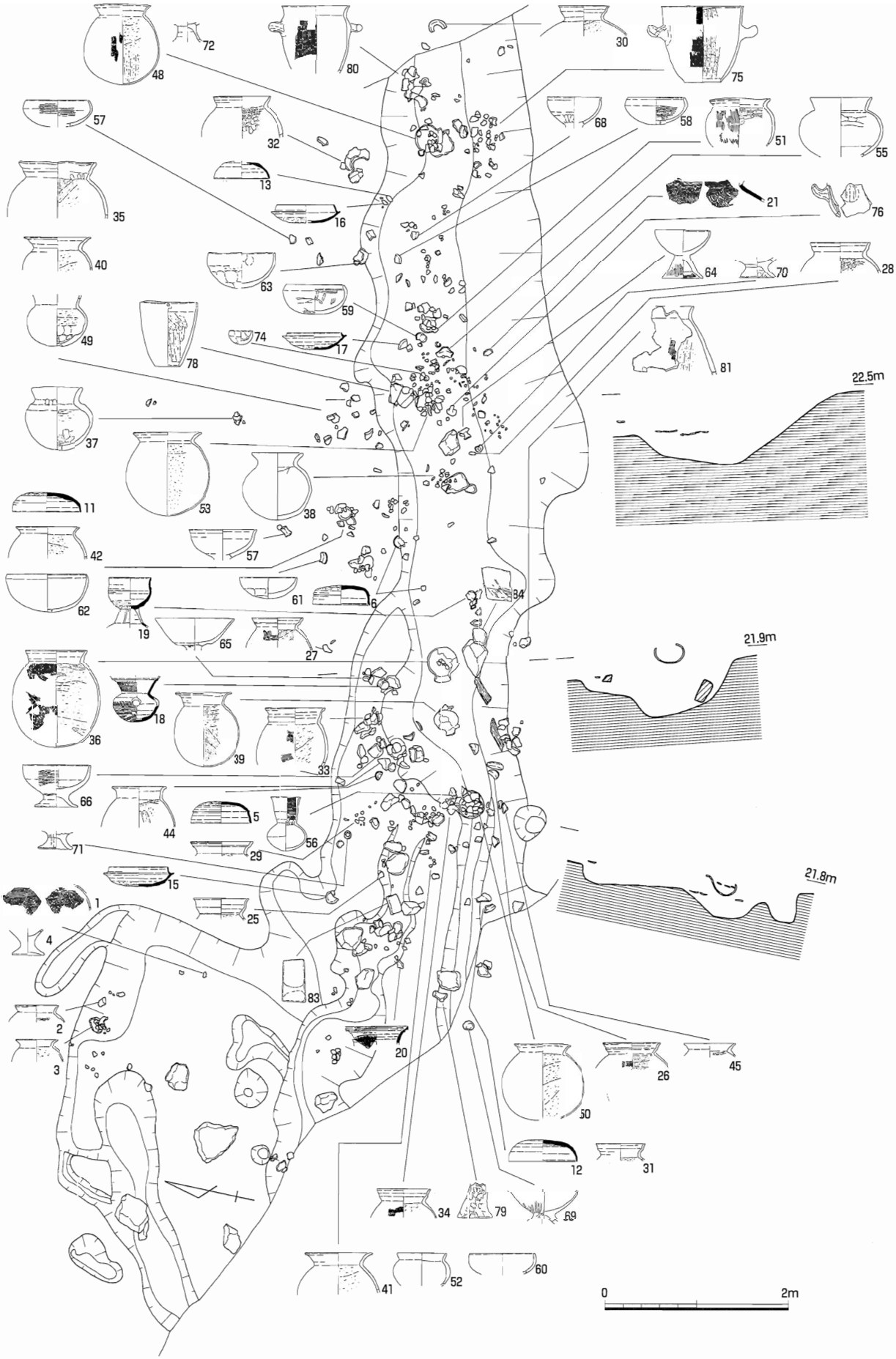
（２）溝状遺構（第56・57図）

調査区の中央部に位置するもので、丘陵斜面に直交するように主軸をほぼ東西方向にとり、調査区外へと延びている。竪穴遺構を切り、溝状遺構の上に１号建物跡が造られる関係にあり、竪穴遺構の後、１号建物跡の前に営まれたことが明らかである。検出した長さは17m・幅は東端で1.5m・西側で2.2mと斜面を下るにしたがって広くなっており、深さは0.4～0.7mである。埋土は地点によって異なる様相を見せる。a-a′断面では上層より岩片を含む灰色粘土（１層）・岩片を含む灰色砂(2層)・岩片を含む暗灰色砂（３層）・岩片を含む灰色粘砂（４層）、b-b′断面では上層より岩片を含む灰色砂(2層)・岩片を含む暗灰褐色土（５層）・岩片を含む灰褐色土（６層）、c-c′断面では上層より小岩片を含む黄褐色土（４層）・小岩片を含む暗黒褐色土（５層）が堆積している。

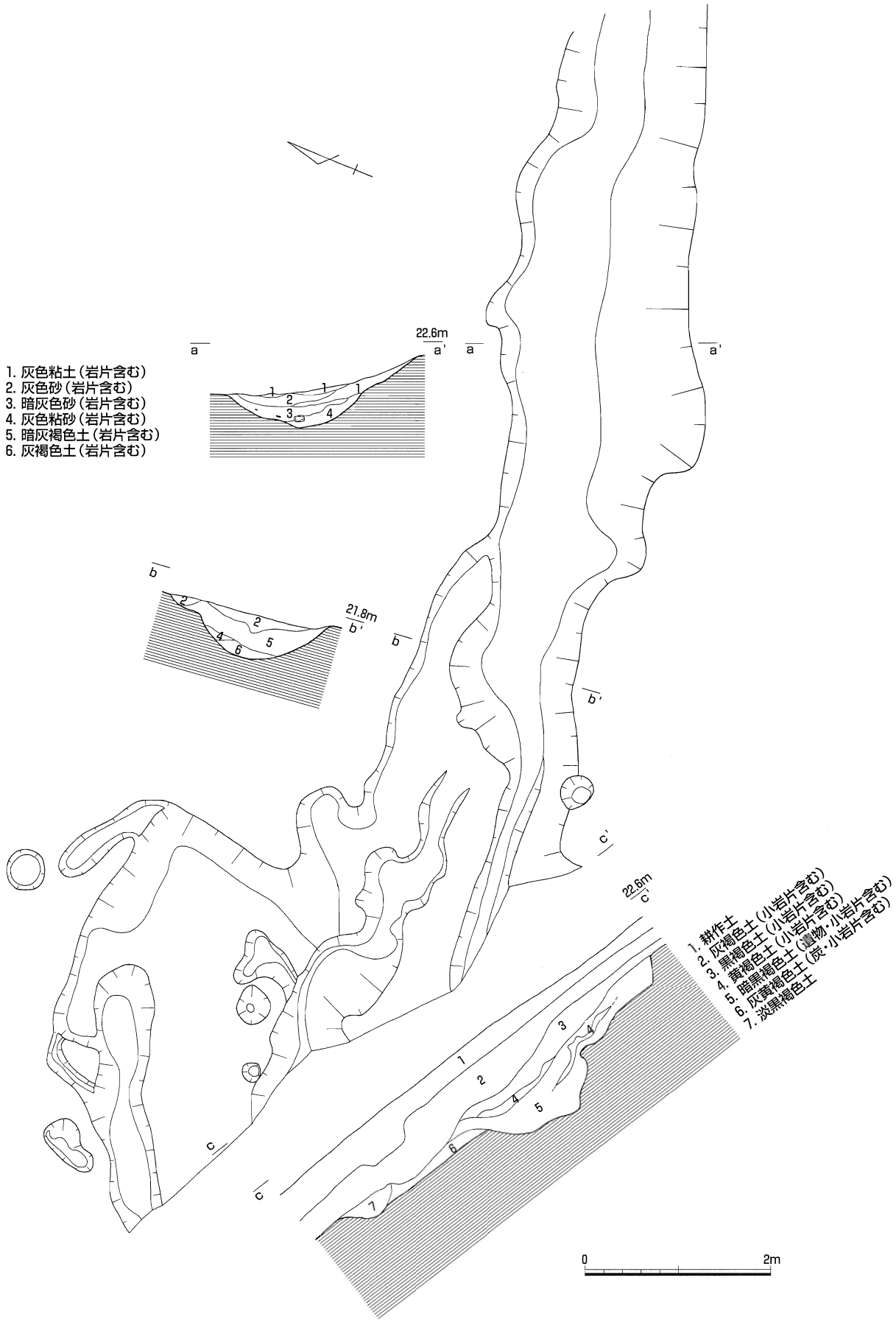
出土遺物には須恵器蓋坏・瓹・脚付碗・甕・壺、土師器甕・壺・坏・高坏・低脚坏・甑、竈、土製支脚、刀子、砥石がある。いずれも溝の底面より浮いた状態で出土しており、溝がある程度埋まった段階で廃棄されたものと見られるが、土師器甕の完形品が数個体含まれる他、瓹が口縁を下にして倒立した状態(図版65-1)で確認された点が注意される。

第58図５～17は須恵器蓋坏である。このうち5～10は頂部と口縁部の境に明瞭な稜をもつ坏蓋で、口縁部は直立する。口唇は端部がやや凹むもの（５・７・８）と鑿刃状になるもの（６・９）があり、頂部にはいずれも回転ヘラケズリが施される。11～13は頂部と口縁部の境にあった明瞭な稜が失われ、丸味を帯びた器形をもつ坏蓋である。11・12は口径が14.6～14.8cmと大きく、ともに頂部には回転ヘラケズリが施されており、11には頂部と口縁部の境に僅かに稜が残る。13は口径12.1cmと小さく、頂部にヘラ起こし痕を残している。14～17は口縁にかえりをもつ坏身である。14は口唇が鑿刃状になった長いかえりをもち、底部には回転ヘラケズリが僅かに認められる。15・16は単純な口唇をもち、14に比べればかえりが短いもので、底部には回転ヘラケズリが施される。17はかえりが短く内傾するもので、底部は周辺にのみ回転ヘラケズリが入り、焼成前に数条の沈線がヘラで描かれる。

第58図18は須恵器瓹で、短く太い頸部と丸底をもつ。頸部と胴部外面に波状文が施されており、胴部下半はカキメと一部にケズリ、底部には平行タタキが見られる。19は須恵器脚付碗で、口縁は



第56図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区竪穴及び溝状遺構遺物出土状況実測図



第57図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構実測図

緩く外反して肩部外面に稜をもち、脚部には長方形の透し孔を３方向にもつ。調整は碗の外面下半に回転ヘラケズリが施される。

第58図20～22は須恵器壺と甕である。20は壺の口縁部で、端部が上下に拡張されて縁状になっており、頸部上半には波状文と１条の稜をもっている。21は甕の肩部で外面は平行タタキののちカキメ、内面には同心円文当て具痕が残る。22は長頸壺の頸部から肩部の破片で、内面の接合部には段が見られる。

第58図23は須恵器皿である。底部の小片で、底部外面には回転糸切り痕が残る。

第59図24～第62図54は土師器甕である。24～36は口縁が屈曲または外面に稜を残す退化した複合口縁をもつものである。複合口縁が高く端部が短く外反するもの(24・25)や口縁端部に面をもつもの(28・34・36)、複合口縁の高さが低いもの(29)、口縁外面に稜を残すもの(33・35・36)などがあり、形態にはかなり違いが見られる。調整が分かるものは胴部外面がハケメ、内面はケズリである。37～53は「く」字状の単純口縁をもつものである。口縁は大きく外反するものが多いが、直立気味に立ち上がり端部のみ外反するもの(44)、口縁が短いもの(51・52)もある。調整は胴部外面がハケメ、内面はケズリのものがほとんどであるが、49の内面下半には指押えが見られる。また、49の底部は焼成後、穿孔されている。

第62図55・56は土師器壺である。55は短い口縁がやや外傾する直口壺で、胴部内面はケズリ調整される。56は長頸壺で、外傾する長い口縁と肩部が張り丸底の胴部をもつ。外面と口縁内面はヘラミガキ調整され、赤色顔料が塗布されている。

57～61は土師器坏である。57～59は内傾する口縁をもつもので、60・61は直立気味となる。57～58は内外面がヘラミガキ調整されており、59・61の底部にはケズリが見られる。62・63は坏と形状が類似したものであるが、口径・器高ともやや大きいことから鉢とした。63の外面はケズリの後ナデ調整、内外面には赤色顔料塗布されている。

64・65は土師器高坏である。64は丸味を帯びた坏部と「ハ」字状に開く脚部をもち、脚部はハケメ調整される。脚部外面には赤色顔料が残る。65は高坏の坏部で外面ににぶい稜をもつ。66～第63図73は低脚坏である。坏部はいずれも丸味を帯び碗状を呈するが、68は口縁外面に段がある。66・69の坏部外面にはヘラミガキが施され、66～69・71・72には赤色顔料が認められる。

74は手捏土器で、全面に指押えが見られ、底面には黒斑がある。

75～77・第64図80は土師器甑である。75・76・77は角状の把手をもつもの、78は把手をもたないもの、80は横方向に付けられた環状把手をもつものである。口縁の形状もそれぞれ異なっており、75は端部が僅かに屈曲、78は僅かに内湾、80は甕のように大きく外反する。調整が分かるものは外面がハケメ、内面はヘラケズリである。また、78の口縁には焼成前に穿孔された孔が1ヶ所に残り、80の胴部下半は被熱による表面の剥離が認められる。

79は土製支脚である。上部を欠いているが、底面には内刳りがあり、全体に指押えが見られる。

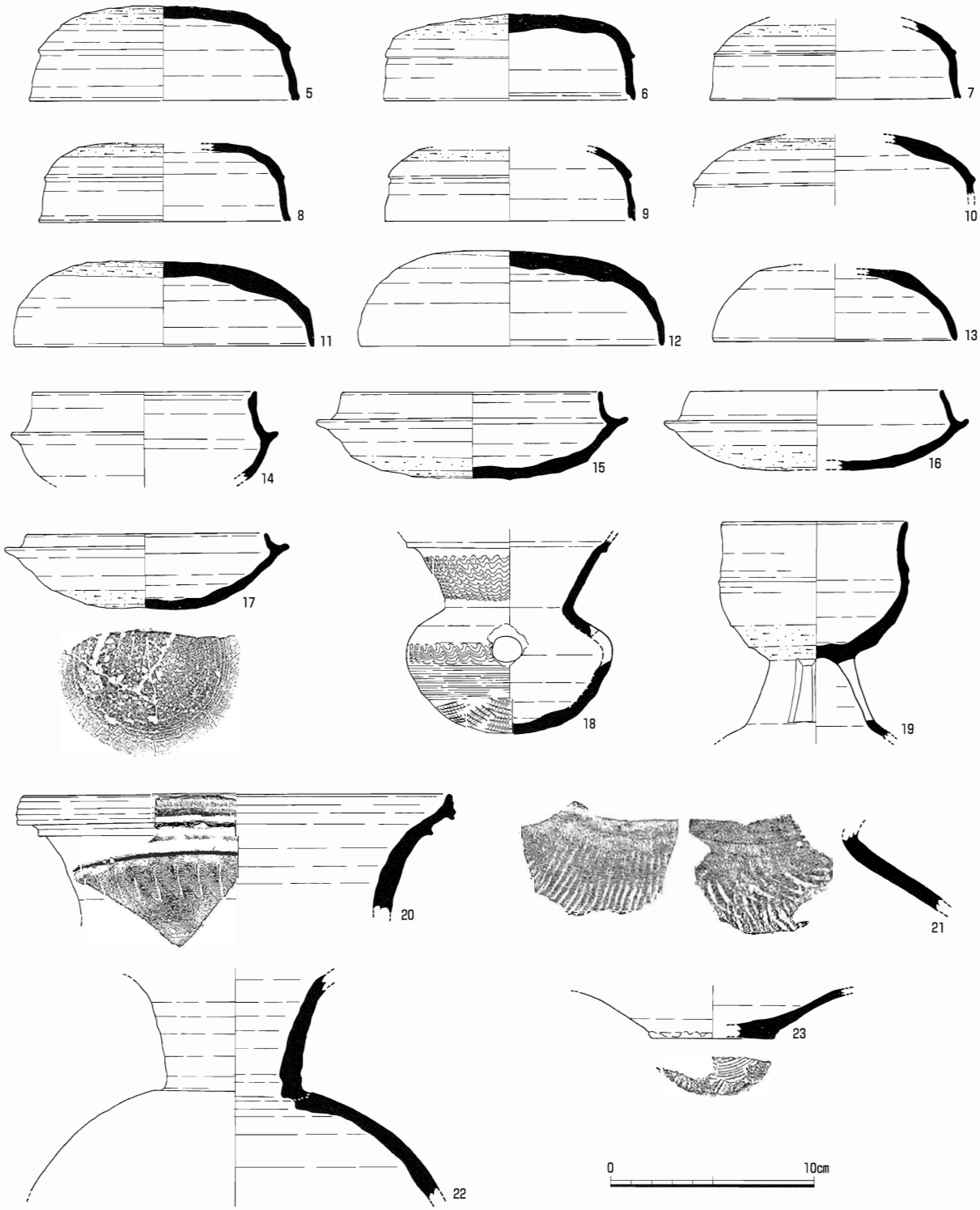
第64図81は土師器竈である。口縁は外反しており、外面にはハケメ、内面はケズリ調整されており、内外面に黒斑がある。

82は鉄製刀子である。刀身先端部の破片で、現状で長さ5.8cm・幅1.6cm・厚さ0.3cmである。

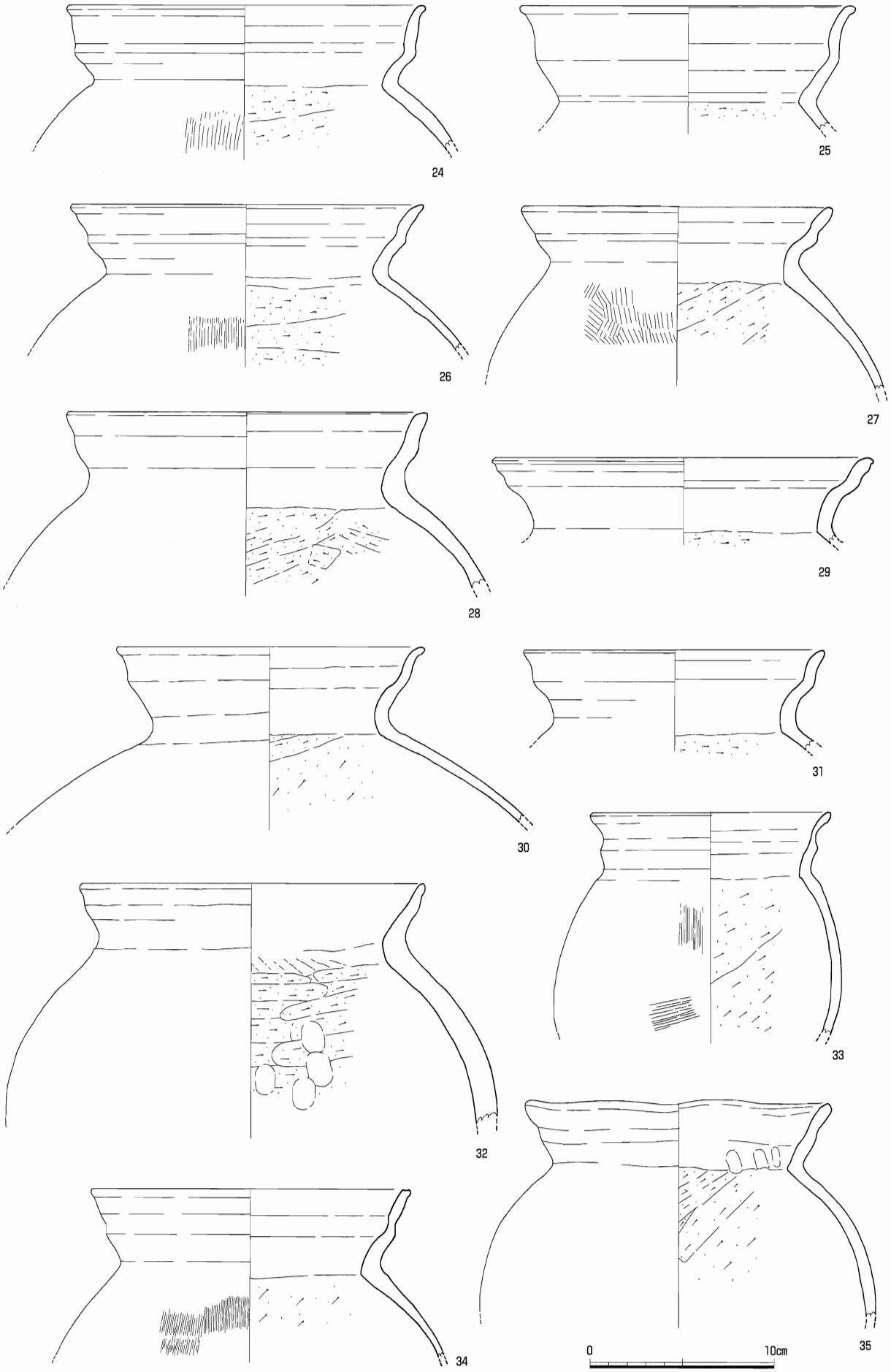
83～85は砥石である。83は長方形状を呈し、長さ21.6cm・幅11.9cm・厚さ5.1cmである。凝灰質砂岩製で、上面はやや凹むが使用痕は顕著ではない。84は2面が欠損するが、現状で長さ17.0cm・幅

14.0cm・厚さ5.5cmである。凝灰質砂岩製で、上面・下面・側面の3面がよく使用されており、上面と下面には利器痕が残る。85は先端が鋭角、もう一方の端部には浅い抉りがあり、長さ10.7cm・幅2.1cm・厚さ0.8cmである。砂岩製で、各面とも顕著な使用痕が見られる。

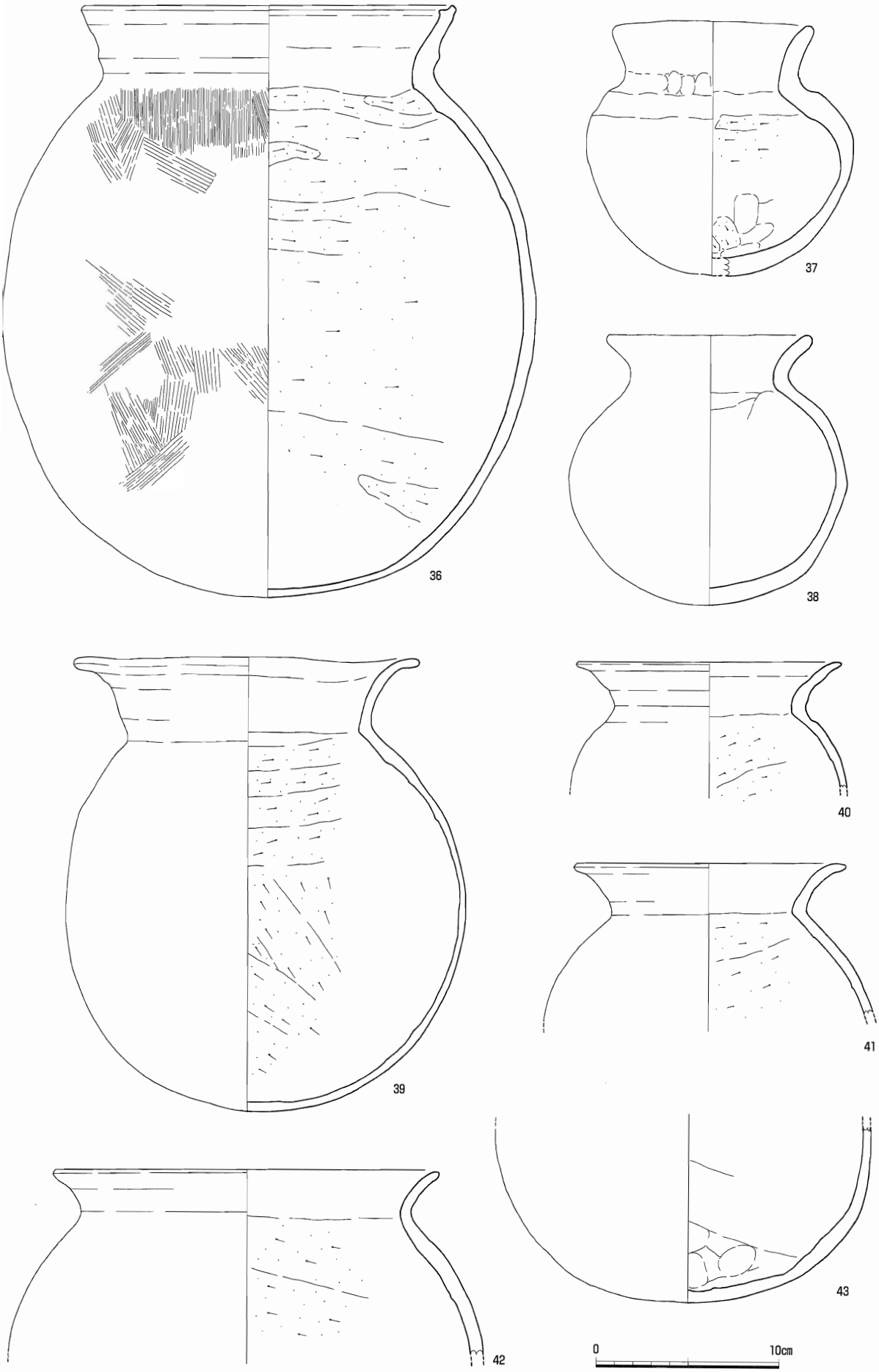
以上の遺物の時期は、第58図5～10・14・18～20・第59図24～第60図36・第62図56～第63図73が古墳時代中期、第58図11～13・15～17が古墳時代後期に位置づけられる。



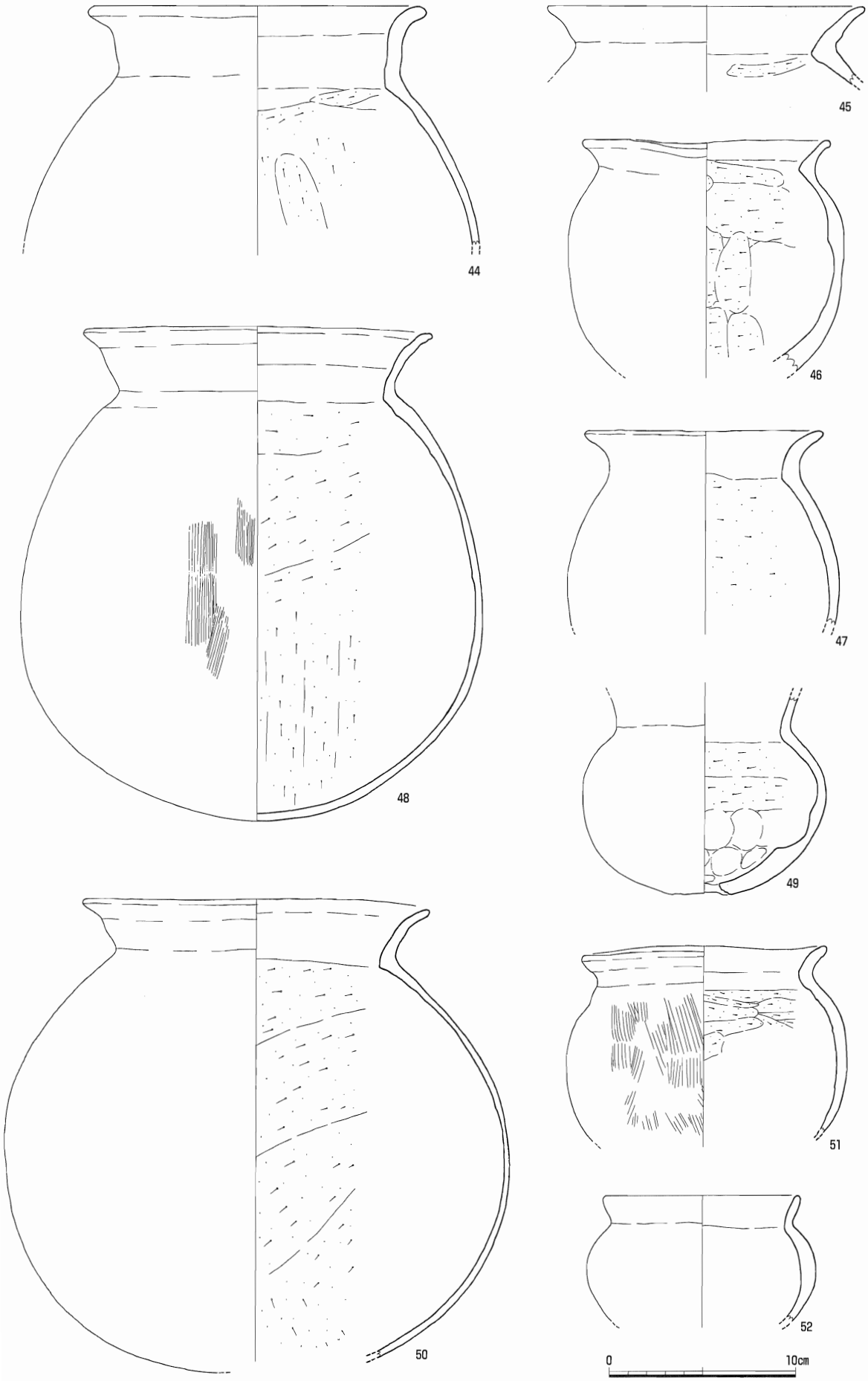
第58図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図１



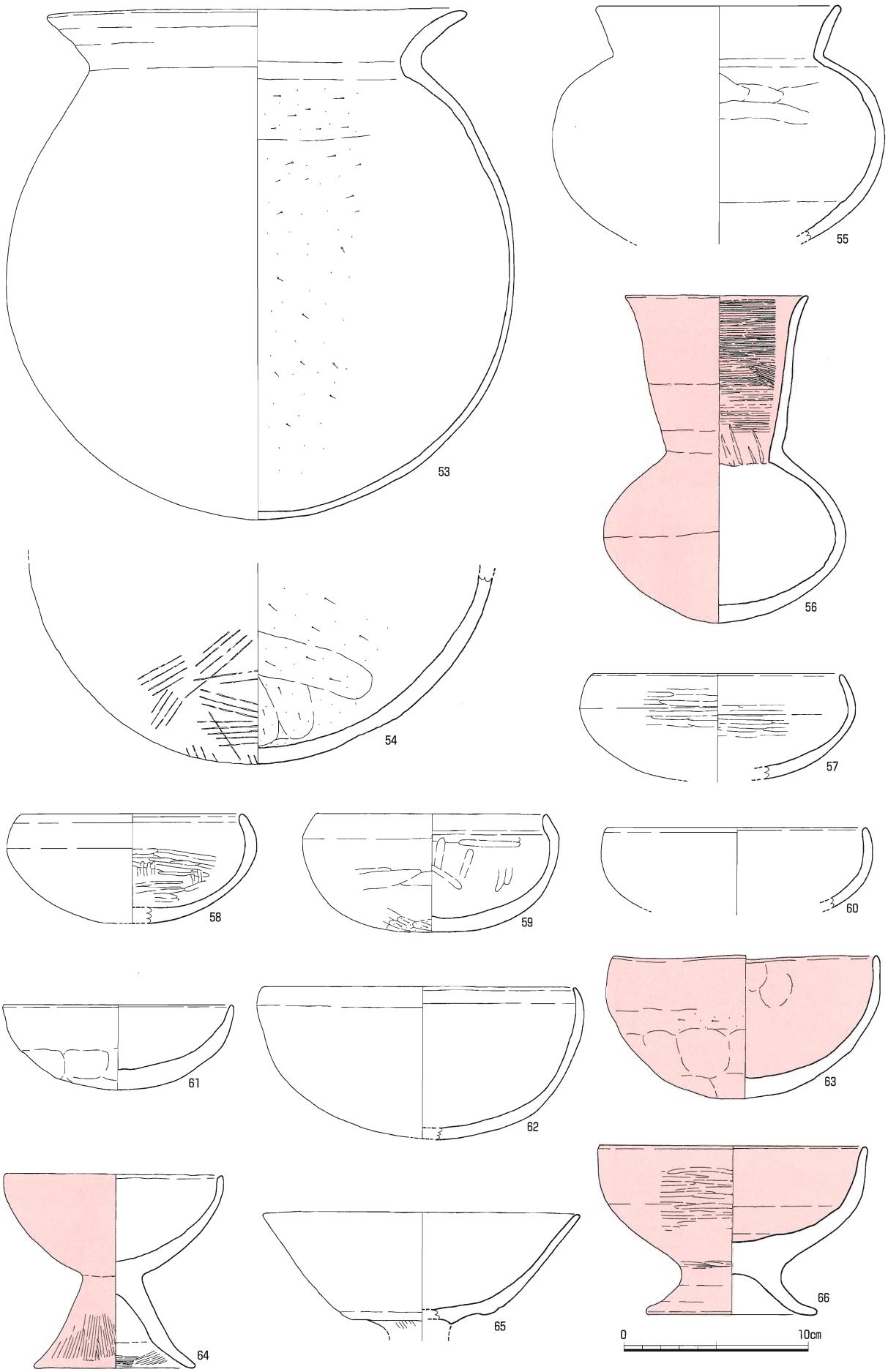
第59図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図２



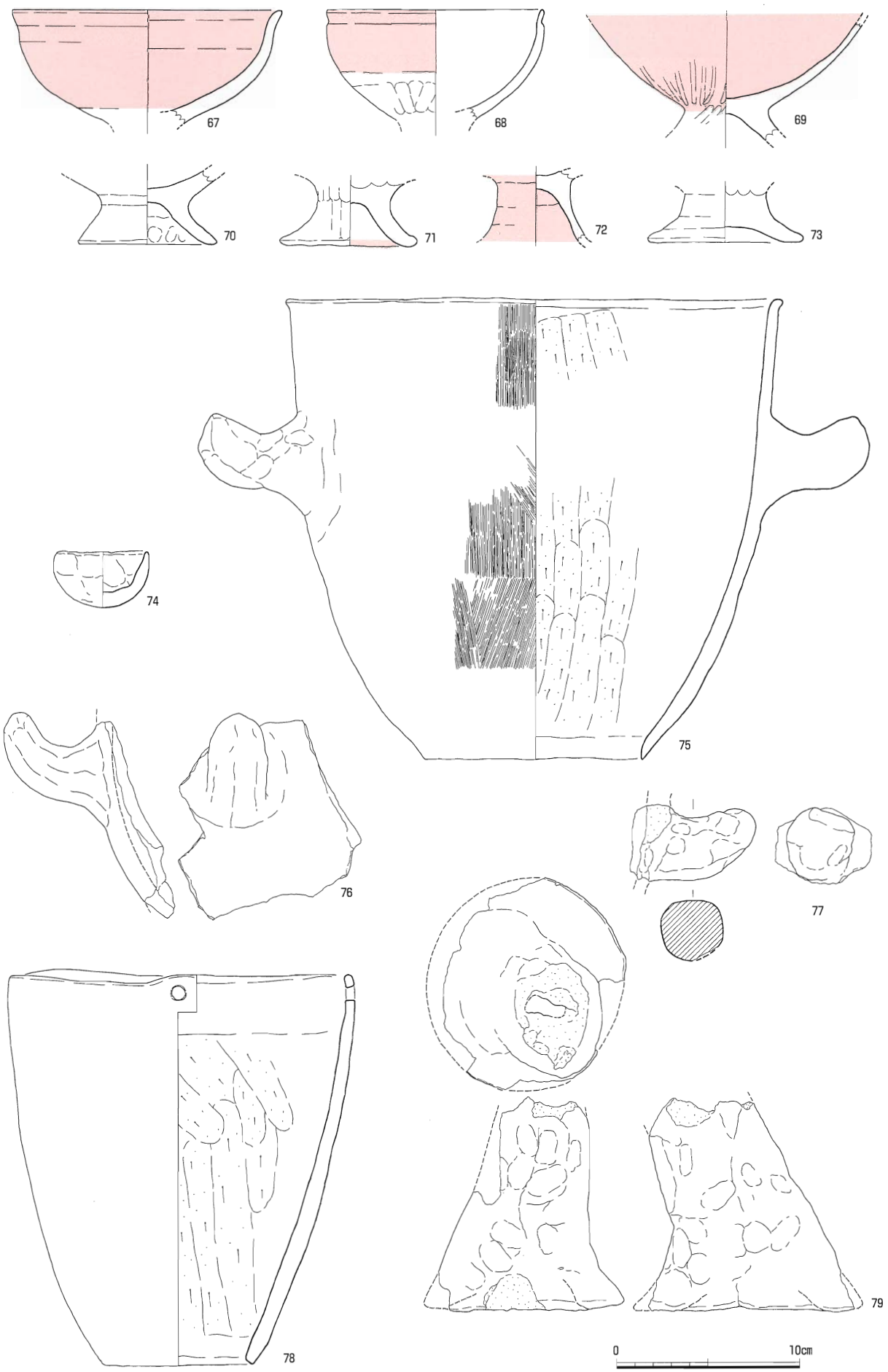
第60図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 3



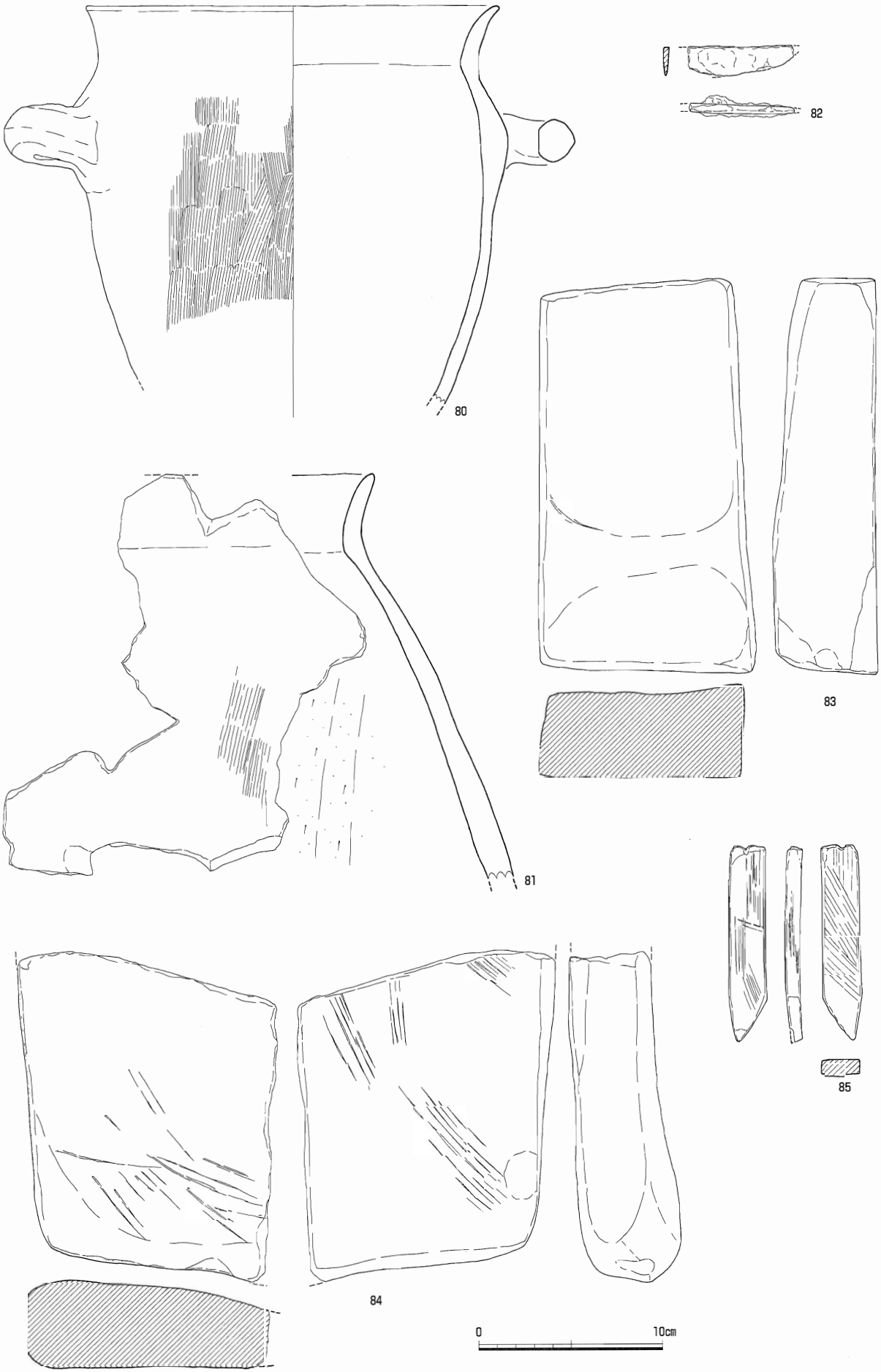
第61図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 4



第62図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 5



第63図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図６

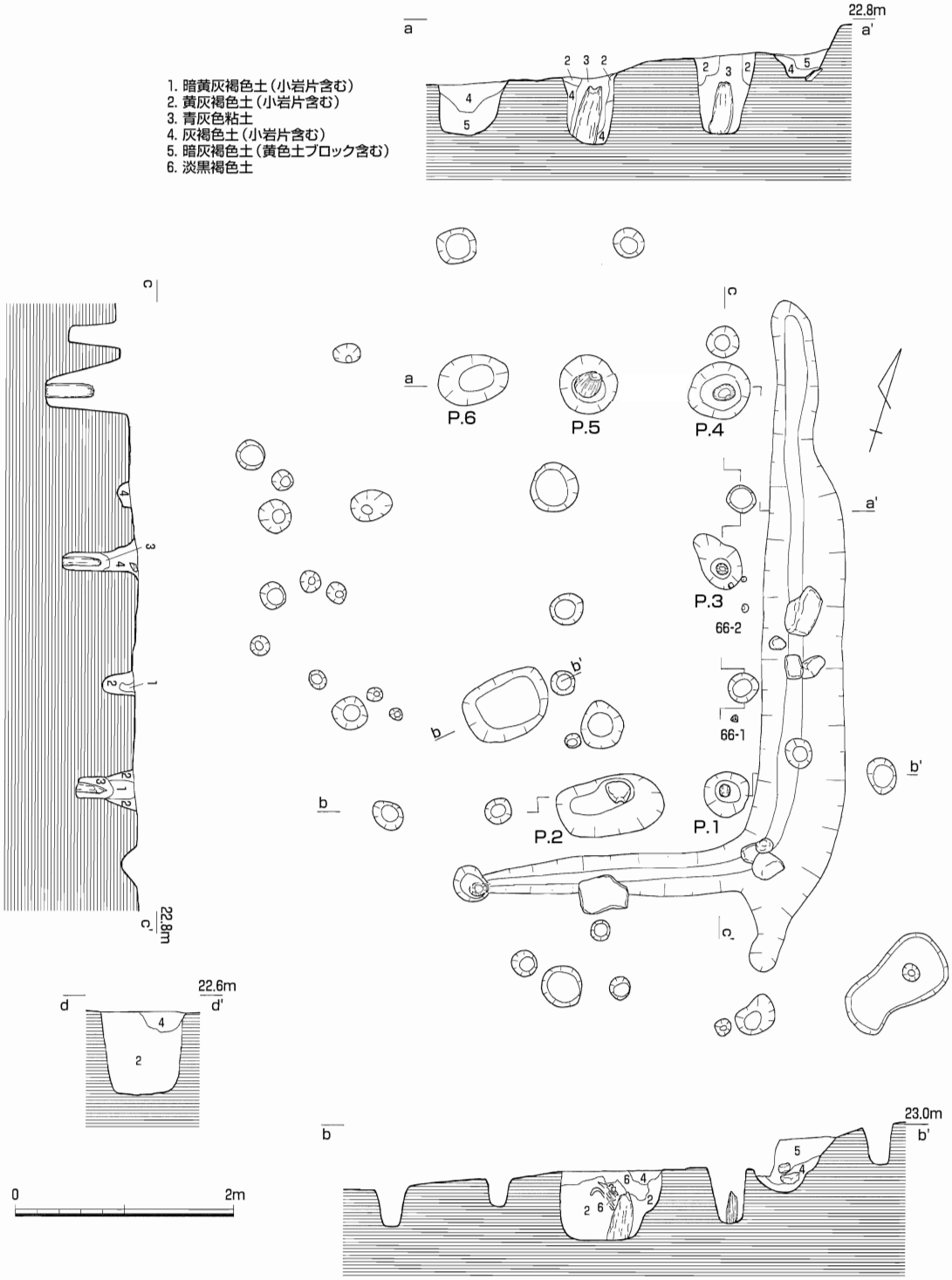


第64図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土遺物実測図 7

（３）掘立柱建物跡

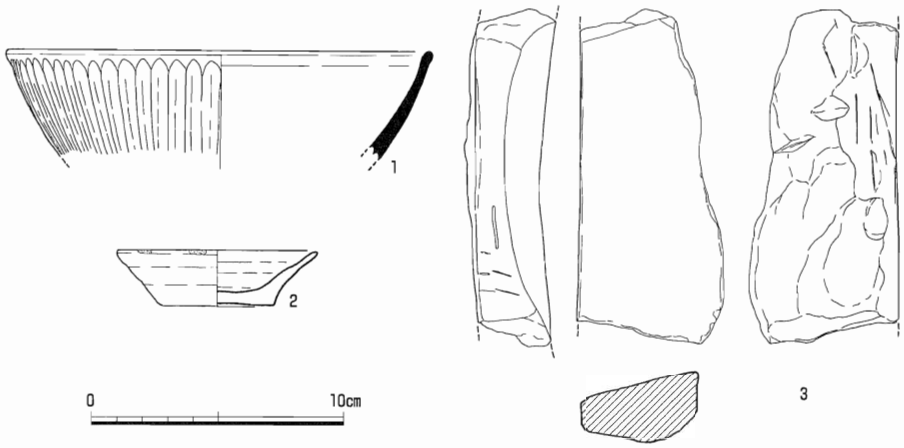
１号建物跡（第65図）　調査区中央部の緩斜面に位置し、北端部は溝状遺構の上に重複して営まれている。斜面を段状に加工した平坦面に営まれており、平坦面の丘陵側には幅15～40㎝・深さ20㎝ほどの溝がＬ字状に巡る。

建物の主軸は南北方向で、桁行は2間で3.7m、梁行も2間で2.3mの規模である。柱間は桁行のP.1とP.3が2.0m、P.3とP.4が1.6mで、梁行のP.4とP.5が1.2m、P.5とP.6が1.1mで、梁行に対し桁行の間



第65図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡遺構実測図

隔が長いが、桁行の柱間は不揃いである。柱穴は円形を呈するものが多いものの、P.2は楕円形状を呈している。大きさはP.1が径40㎝・深さ50㎝、P.2が長径90㎝・短径55㎝・深さ55㎝、P.3が径40㎝・深さ70㎝、P.4が径55㎝・深さ75㎝、P.5が径55㎝・深さ60㎝、P.6が径45～65㎝・深さ50㎝である。P.1～P.5の5つの柱穴には柱根が残っており、樹種同定の結果、すべてクリ材であった。また、P.2の柱根については、放射性炭素年代測定を行っており、補正^{14}C年代560±40BP、暦年代AD1380～1430年という結果が得られている。

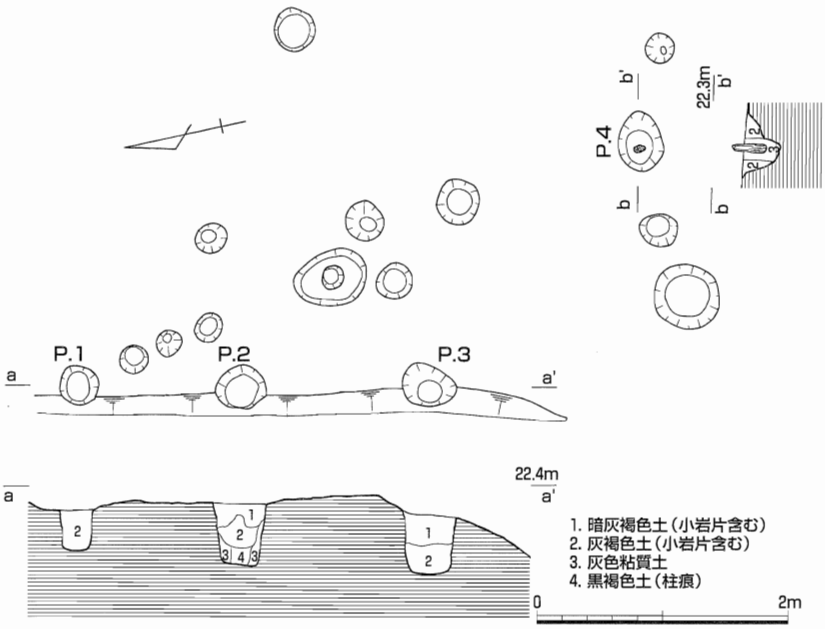


第66図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡出土遺物実測図

出土遺物には青磁・土師質土器・砥石がある。第66図1は龍泉窯の青磁碗で、外面に鎬のある幅が比較的細い蓮弁が見られる。2は小形の土師質土器皿で、底部は回転糸切りと思われる。口唇には一部に煤が付着しており、灯明皿として使われたものである。3は砂岩製の砥石で、現状で長さ13.3㎝・幅5.7㎝・厚さ2.4㎝である。上面・下面・側面が使用面で、上面は湾曲するほどよく使われており、下面・側面には利器痕が残る。時期は1から室町時代頃のものと見られる。

２号建物跡　調査区の北端部に位置するもので、１号建物跡の北6mの地点にある。水田が造成された際にかなり改変を受けており遺存状況は良好ではない。

建物の構造は明らかでないが、P.1とP.2は1.3m、P.2とP.3は1.5mの間隔で並ぶ。柱穴の大きさはP.1が径30㎝・深さ30㎝、P.2が径40㎝・深さ50㎝、P.3が径45㎝・深さ50㎝、P.4が径35～50㎝・深さ30㎝である。P.2の柱穴底付近には柱痕と見られる黒褐色土がある。また、P.4で検出された柱根は、樹種同定の結果、コナラ節と判明している。



第67図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区２号建物跡遺構実測図

（４）遺構に伴わない遺物

包含層中の遺物は出土位置を１点ずつ記録するとともに、掘削中に出土したものは調査区全体に10m方眼で設定したグリッド(E-2・E-3…)ごとに取り上げた。その出土地点は溝状遺構の周囲を除けば、南側の谷部に集中しており、多くは遺構がある丘陵上方側から入ったものと見られる。

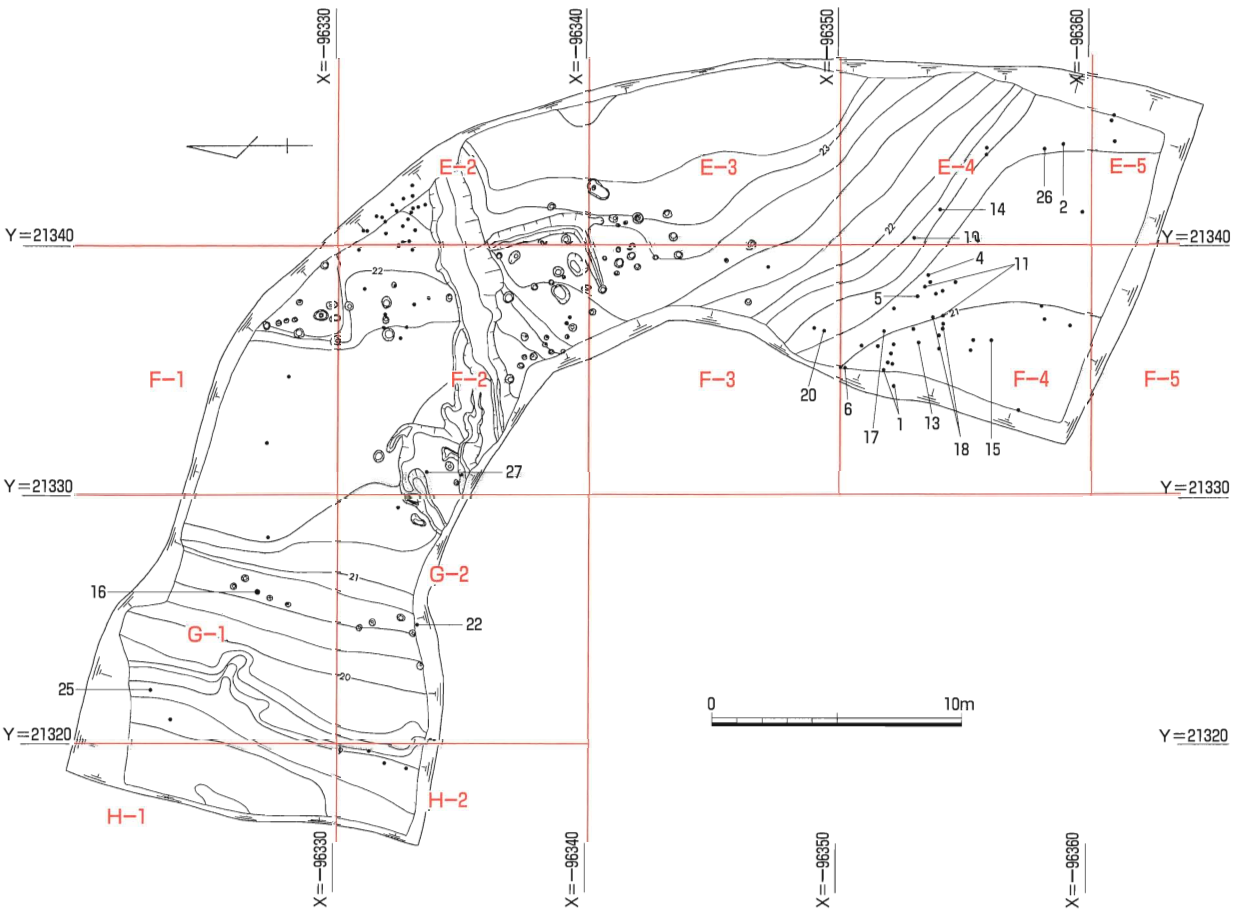
出土遺物には須恵器・土師器の他、白磁・青磁・青花・備前・肥前・炉壁・砥石などがある。

第69図１・２は須恵器蓋坏である。１の頂部に手持ちケズリ、２の底部周辺に回転ヘラケズリが入る。３～５は無高台の坏、６は皿で、底面に回転糸切り痕が残る。７・８は坏で底部の回転糸切り痕の周囲を強くナデて低い高台状にする。９・10は壺の底部、11・12は甕の胴部で内面には放射状の当て具痕が残る。

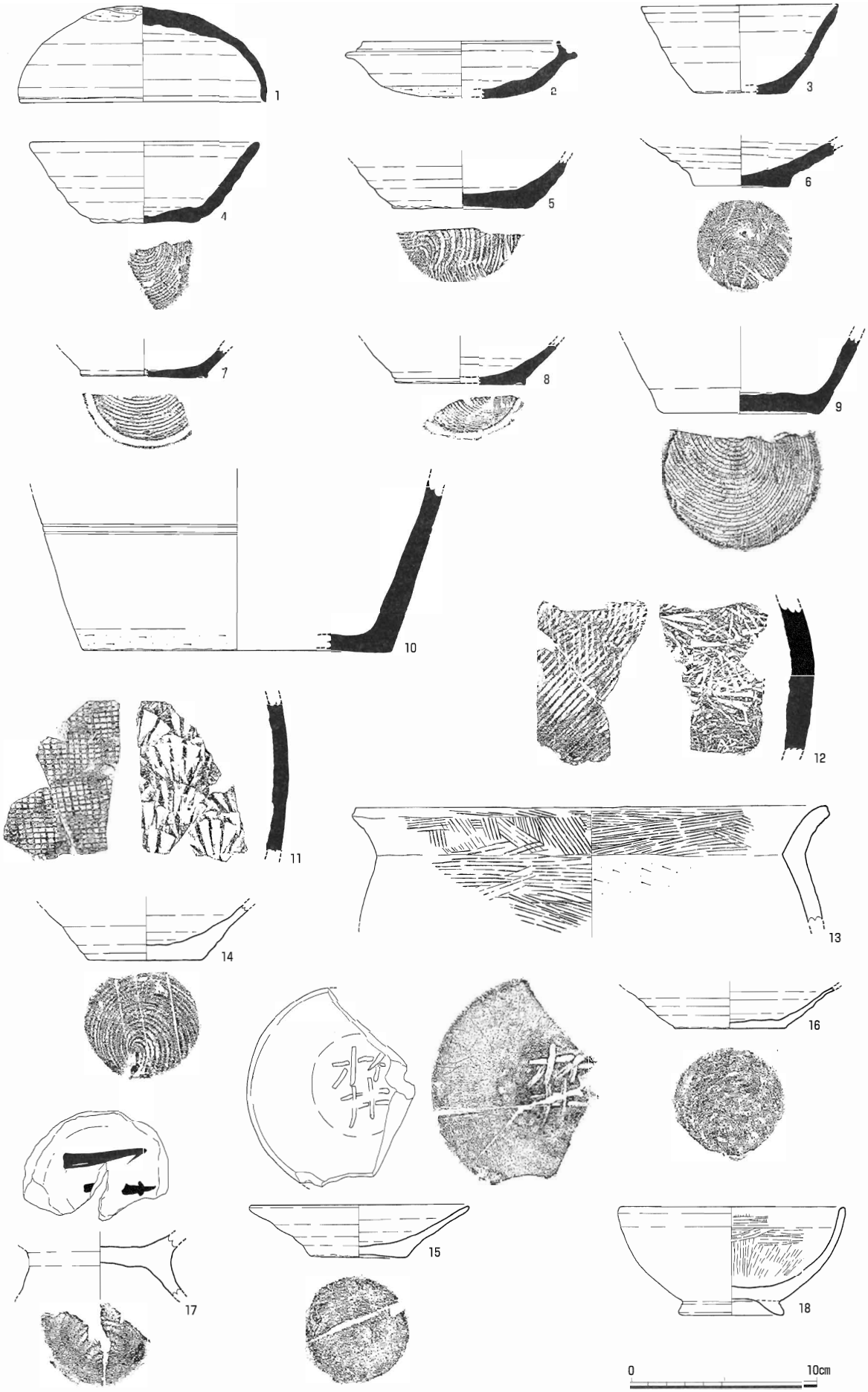
13は土師器の甕、14～16は皿である。15の内面底部には焼成前にヘラ書きで「□井」と記される。17は足高高台の坏で、内面に墨書があるが１文字であること以外不明である。18は内面が黒灰色を呈する黒色土器の坏で、外側に広がる高台をもつ。坏部内外面にはヘラミガキが見られる。

第11表　ナメラ迫遺跡Ⅱ区陶磁器構成表

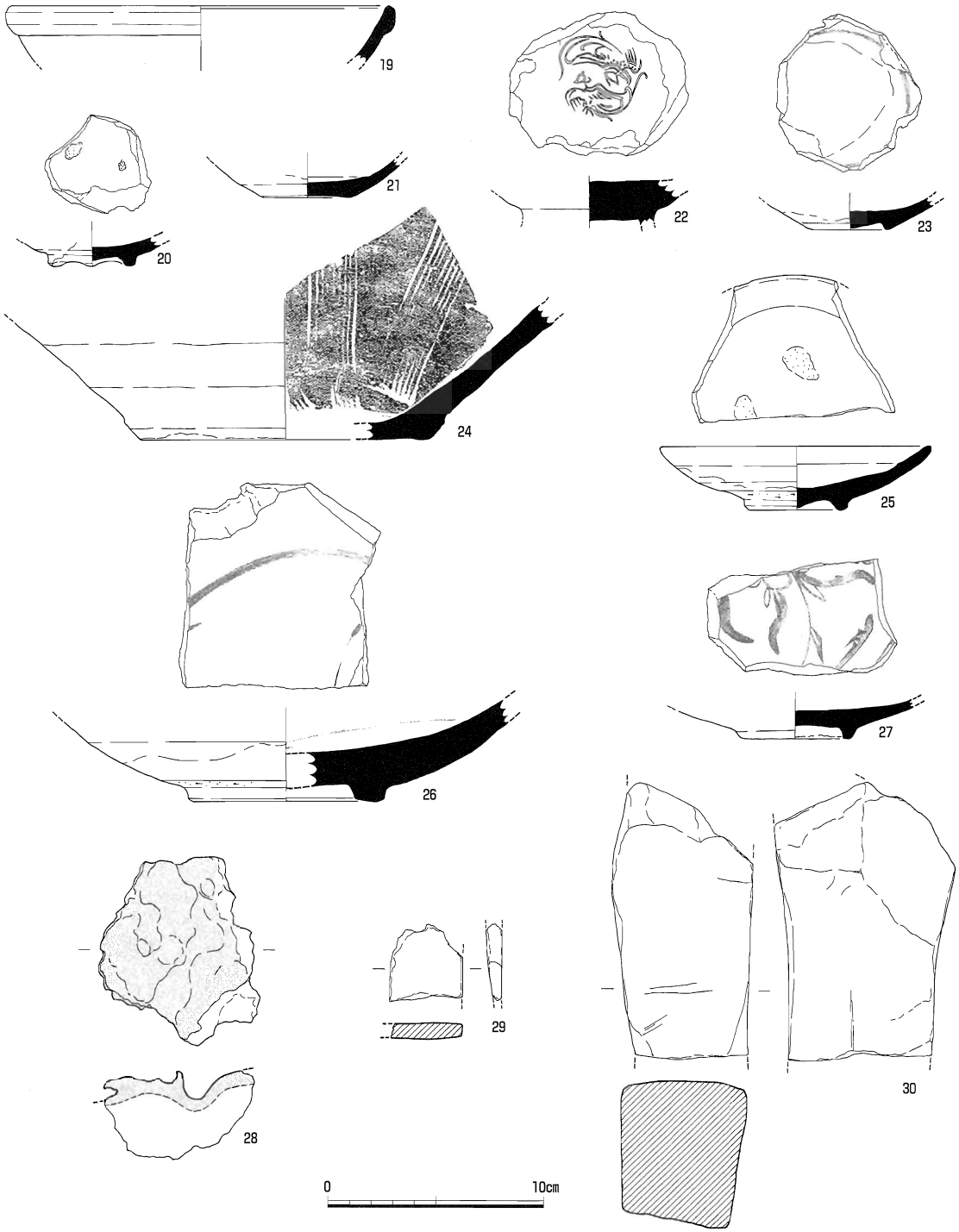
種　別	器　種	点数
白磁	碗　Ⅳ類	2
	碗　Ⅴ～Ⅶ類	1
	碗　福建系	4
	皿　Ⅵ類	1
	皿　広東系	1
	皿　森田Ｄ群	5
	皿　森田Ｅ群	3
青磁	碗　Ｂ３類	1
	碗　Ｂ４類	1
	碗　Ｄ類	1
	特殊品	1
	椀	4
青花	皿	2
	皿　漳州窯系	2
朝鮮	皿	2
備前	擂鉢	5
	壺	2
瓦質	鍋	1
	擂鉢	1
小　計		40
肥前陶器	擂鉢	2
	碗・皿	16
	灰釉	2
	鉄釉	4
肥前磁器	碗・皿	14
小　計		38
合　計		78



第68図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺物出土状況実測図



第69図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物実測図 1



第70図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区遺構に伴わない遺物実測図２

第70図19は白磁碗で口縁に玉縁が付く。20・21は白磁皿で、20は高台の4ヶ所に切り欠きがある。22は龍泉窯の青磁碗、23は漳州窯系の皿である。24は備前擂鉢で、内面の摺目はかなり摩耗する。25は肥前の皿、26は大皿で、前者には砂目がある。27は肥前系磁器の染付である。

28は炉壁で、表面に黒色のガラス質滓が付着しており、胎土中にはスサを含む。29は凝灰岩製の砥石で上面・側面・下面の3面が使用される。30も凝灰岩製の砥石で、上面1面のみに顕著な使用痕が認められる。

以上の遺物の時期は1・2が古墳時代後期末、3～19と21が平安時代、20と22～24が室町時代、25～27は江戸時代初めのものと見られる。

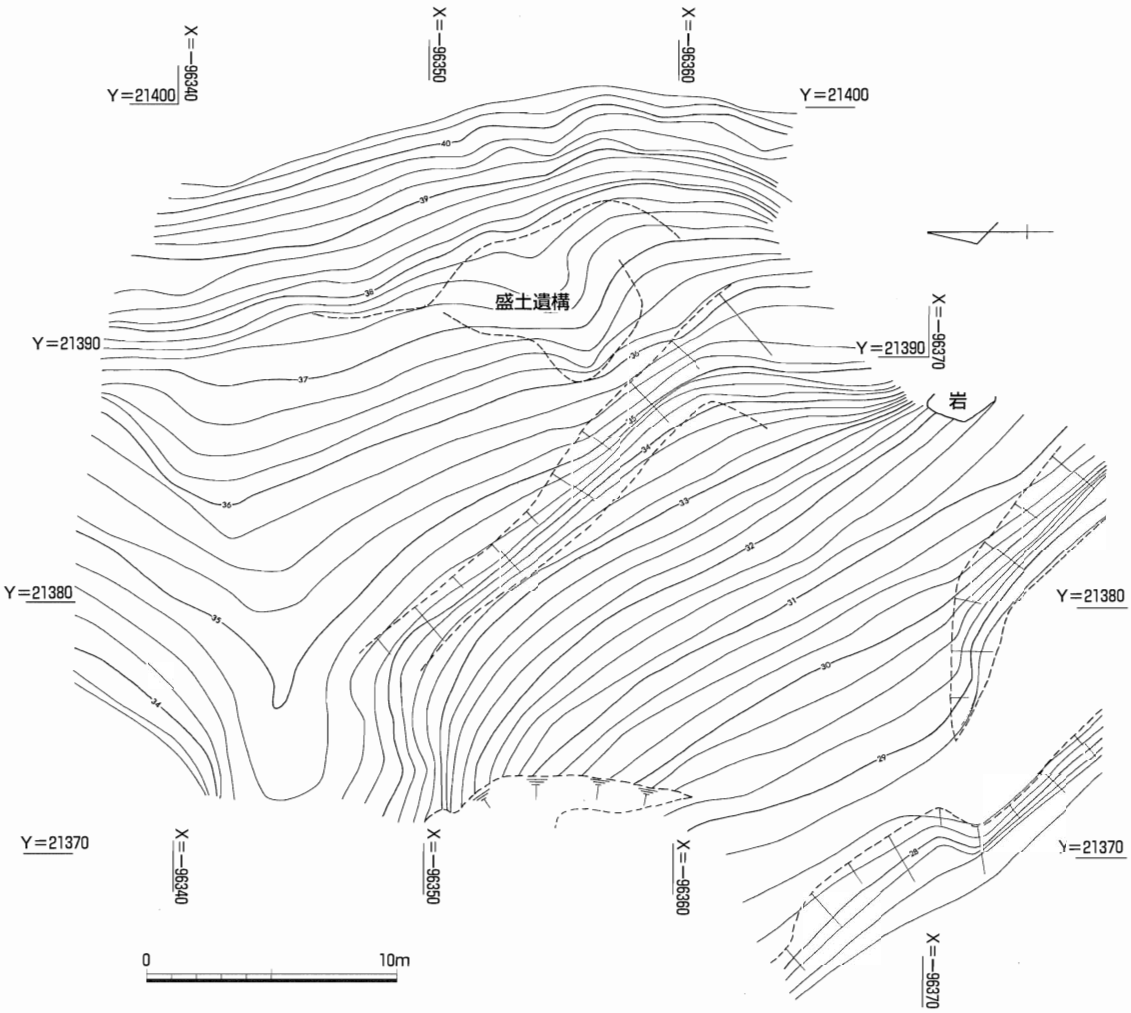
第４節　Ⅲ区の調査

Ⅲ区はⅠ区とⅡ区の間にあり、標高28～40mの丘陵斜面に位置する。

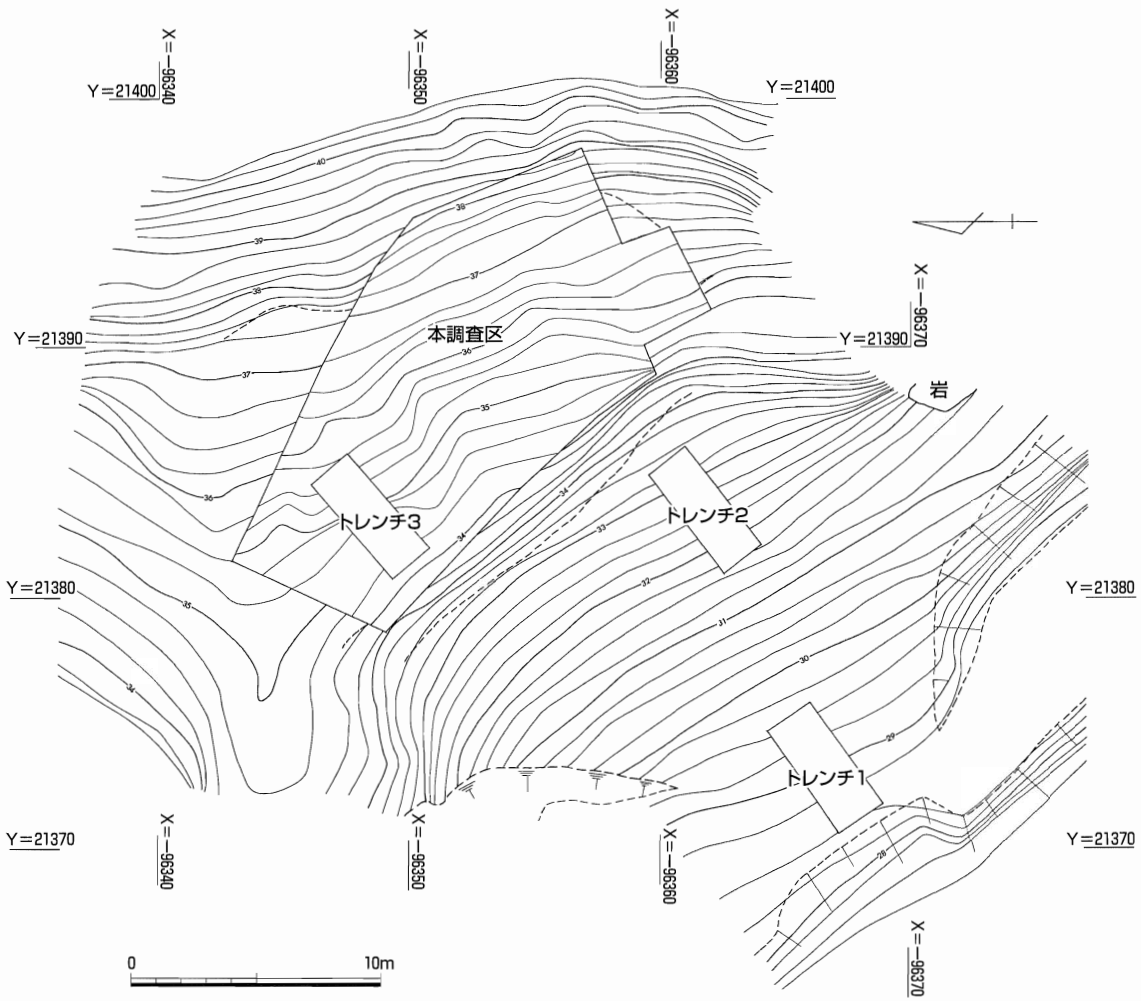
標高36～38mの地点に径6～7mほどの盛土遺構が確認され、古墳の可能性が考えられたことから設定した調査区で、盛土遺構とその周辺部について調査を行った。

遺跡の範囲を確認するために設定したトレンチ１は表土から順に灰褐色土(２層)・暗灰褐色土(３層)・黄褐色土(４層)・淡黒褐色土(５層)・黒褐色土(６層)・黄灰褐色土(７層)の順に堆積する。このうち、２～４層は平坦地を造成するために盛られた盛土で、２層からは近世の陶磁器が出土している。トレンチの東寄りには丘陵上から転落してきた高さ１m程度の大きな転石があり、下層の５～７層では遺物は出土していない。トレンチ２は表土から順に灰褐色土(２層)・淡黒褐色土(３層)の順に堆積する。３層からは鉄製刀子(第78図２)１点が出土したが、その他に遺構・遺物は確認されなかった。トレンチ２の北側は地形が段状に削られたようになっていることから、この部分の土でトレンチ１付近の盛土が行われ、裾部の平坦地が造られたものと見られる。

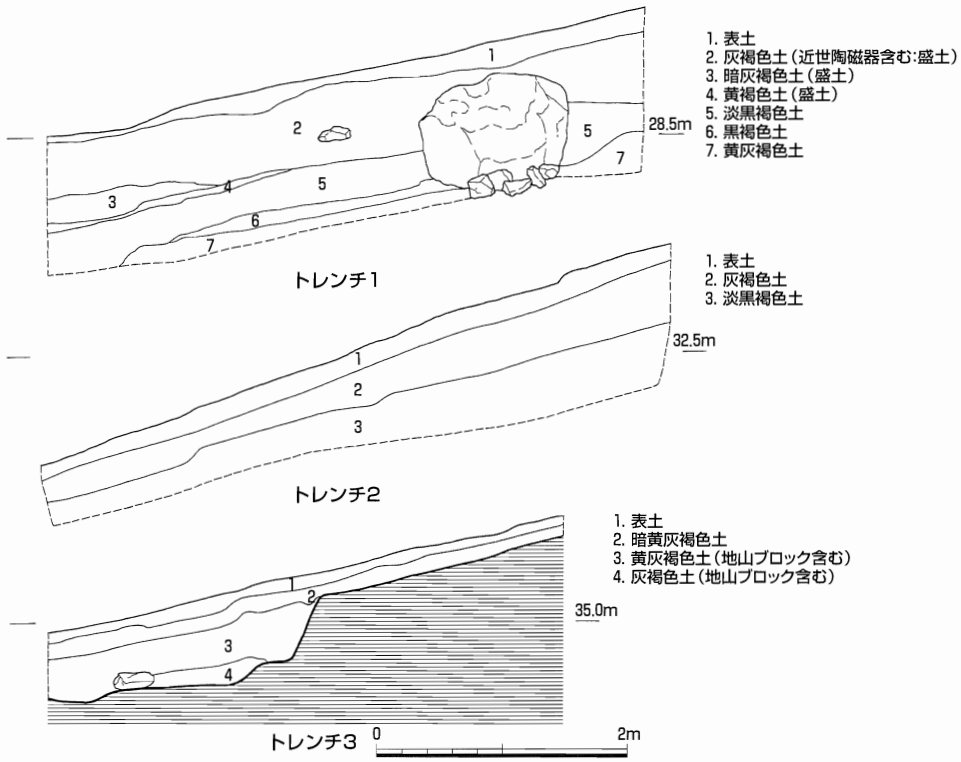
トレンチ３は盛土遺構の北西側に設定したもので、トレンチの南西側で地山を削平した加工段が検出された。この部分の層序は表土から順に暗黄灰褐色土(２層)・地山ブロックを含む黄灰褐色土(３層)・地山ブロックを含む灰褐色土(４層)となっており、加工段の床面にはピットも見られたことから、掘立柱建物跡が存在すると考えられた。したがって、本調査は盛土遺構からトレンチ３の範囲までで行うこととした。



第71図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査前地形測量図



第72図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査区配置図

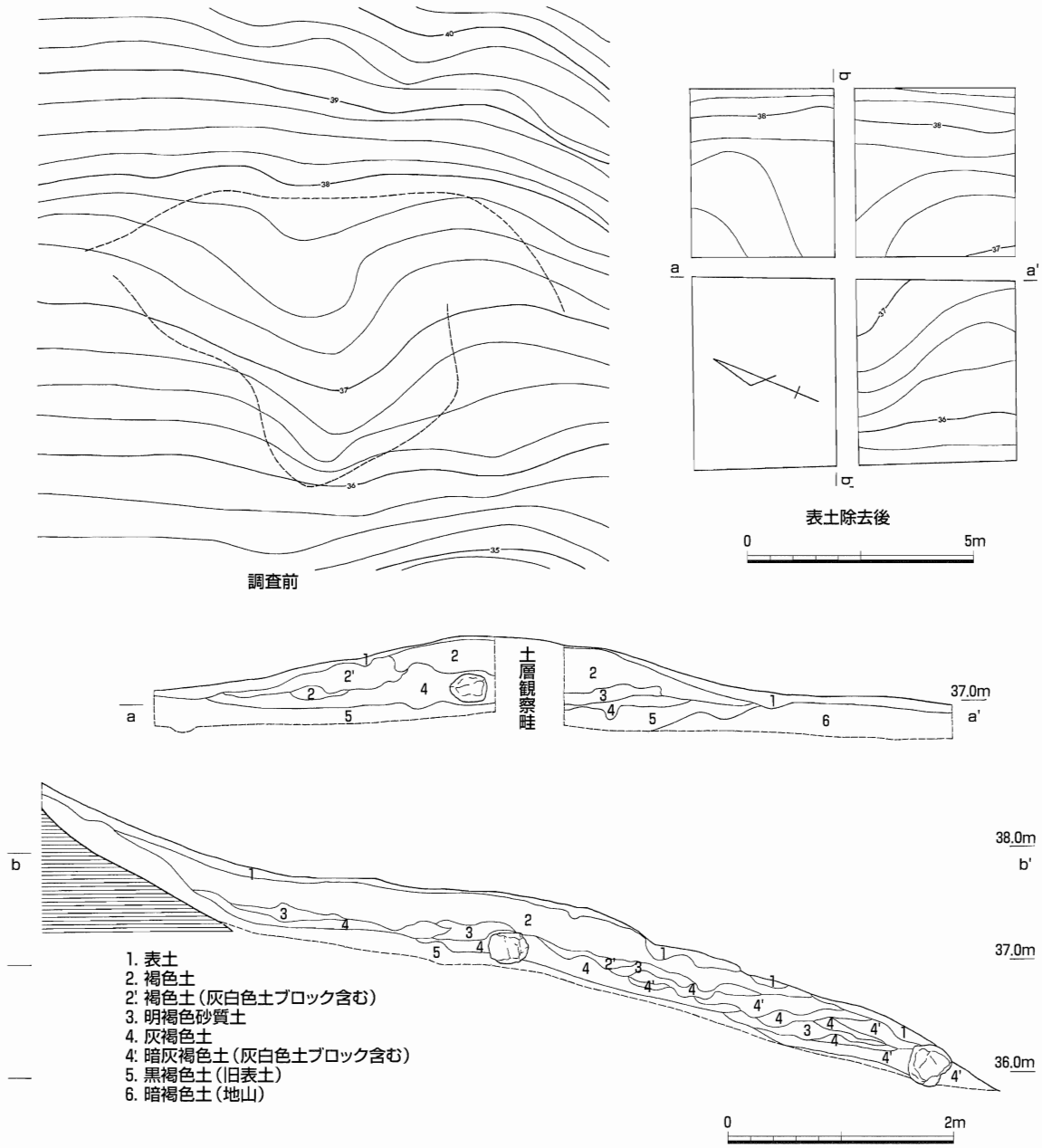


第73図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区トレンチ土層実測図

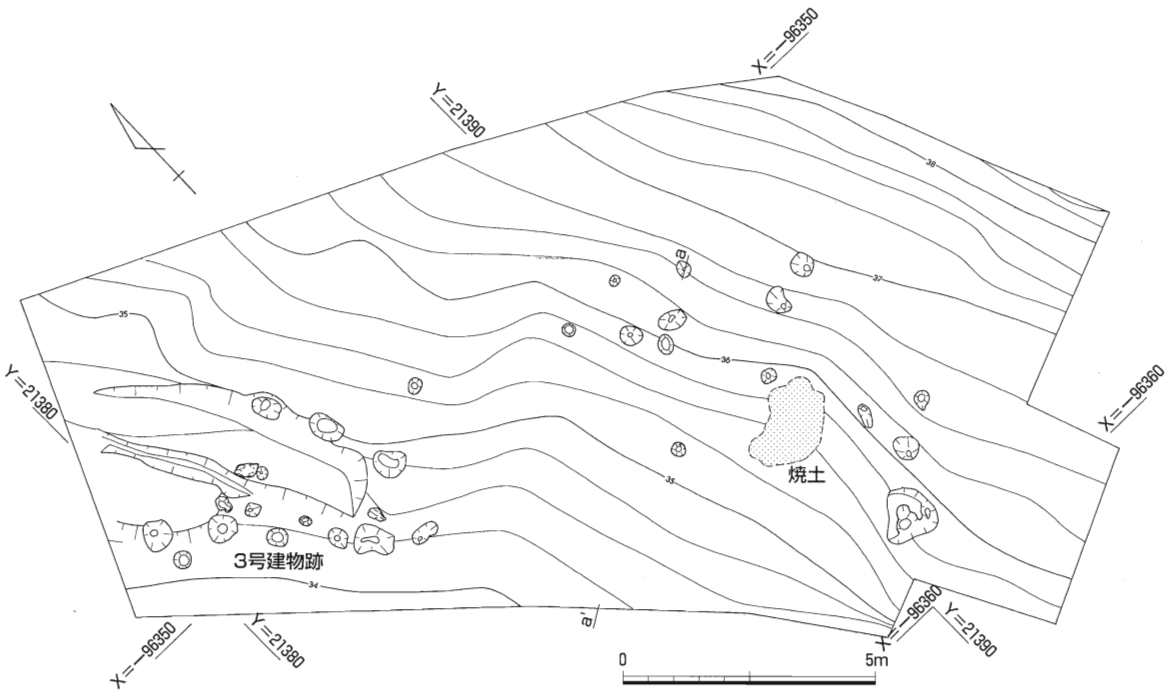
（１）盛土遺構（第74図）

調査区の東寄り斜面に位置する。南北7m・東西6mの不整形な形状をしたもので、盛土は厚いところで60㎝前後である。斜面下方のトレンチ2では刀子片も出土しており、古墳の可能性を考えて調査を行ったが、埋葬施設が確認されなかったこと、盛土の周囲に周溝が認められなかったこと、盛土から近世陶磁器が出土したことから、古墳ではないと判断した。

盛土は上半部に褐色土(2層)が比較的厚く見られ、下半部には明褐色砂質土(3層)と灰褐色土(4層)が互層状に盛られている。旧表土と見られる黒褐色土(5層)には変化はなく、地形に改変を加えることなく盛土のみが行われている。盛土中には転石も確認されているが、周囲にはこうした石材が数多く露出しており、また人為的な配置も窺えないことから、埋葬施設などとなる可能性は考えられない。



第74図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区盛土遺構実測図

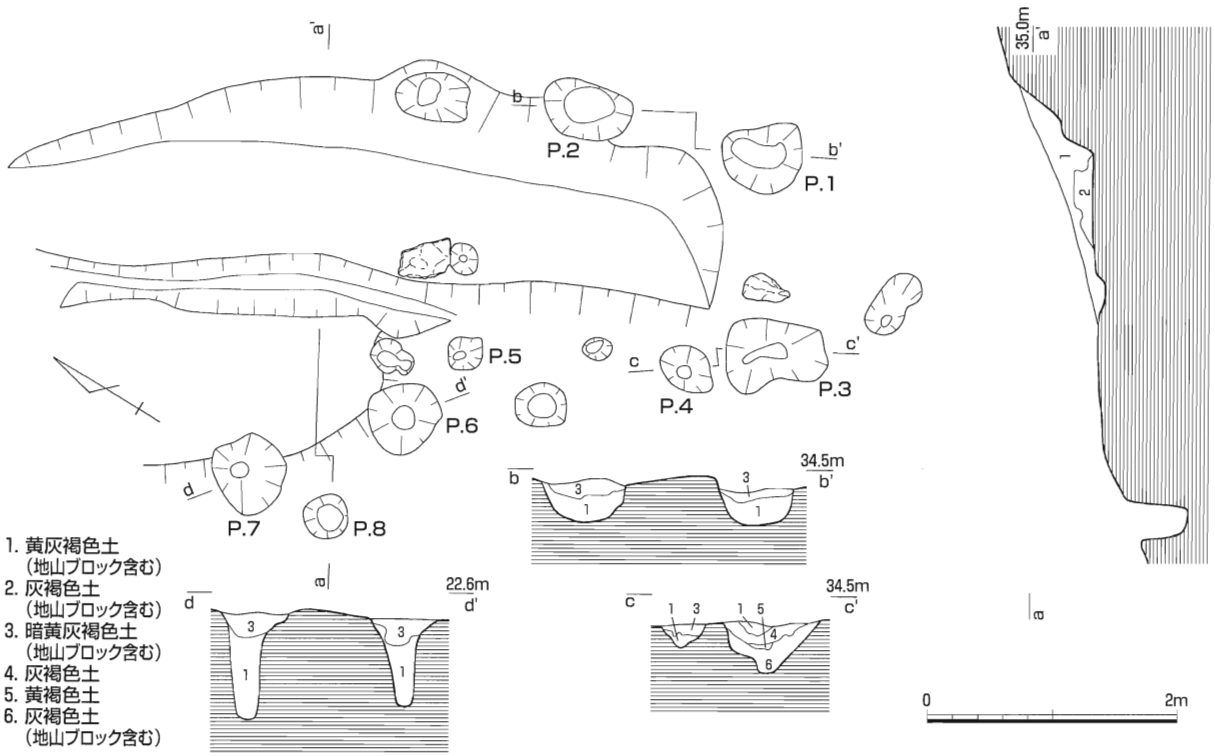


第75図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区調査後地形測量図

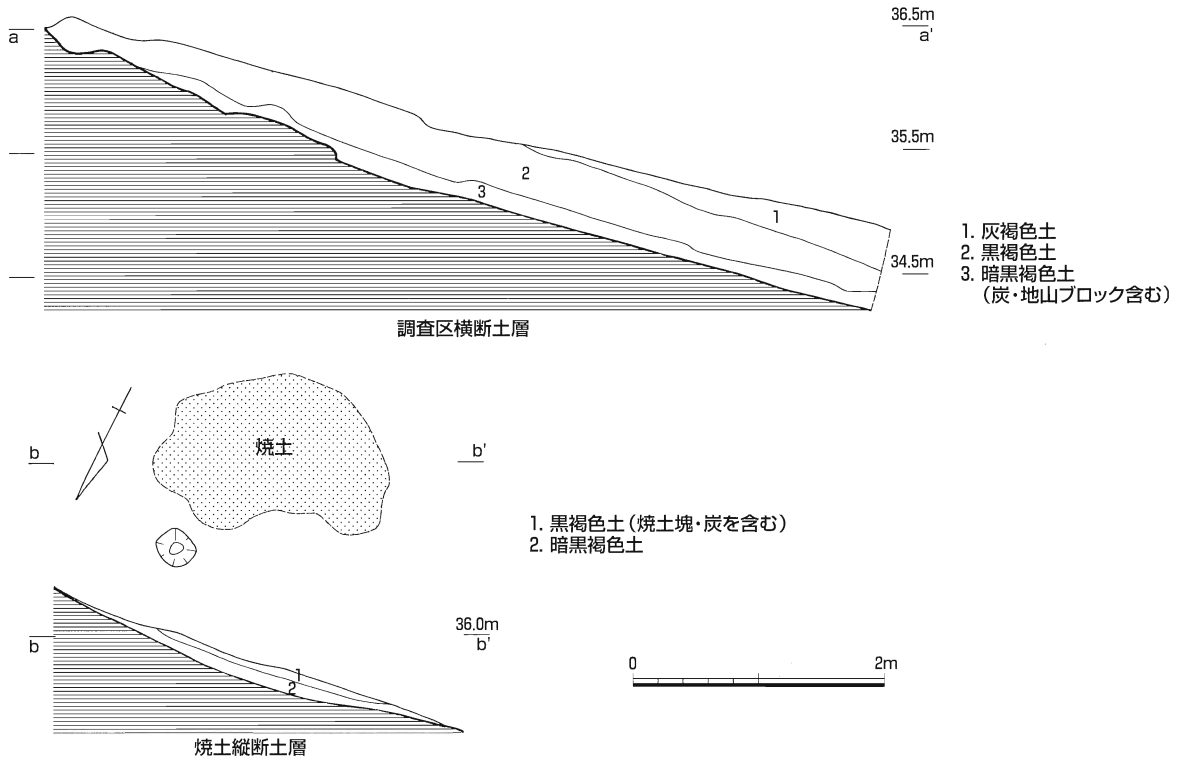
（２） ３号建物跡（第76図）

調査区の西側斜面をＬ字形に削平した平坦面に営まれたもので、平坦面の大きさは現状で長さ5.8m・幅2.5mである。

ピットは段の上と床面で検出されている。ピットの形状・深さから見ると、P.6とP.7は掘立柱建物跡の柱穴である可能性が高く、心々距離は1.3mである。調査範囲の関係から建物の構造は明らかにできない。各ピットの大きさはP.1が径50～65㎝・深さ40㎝、P.2が径45～70㎝・深さ30㎝、



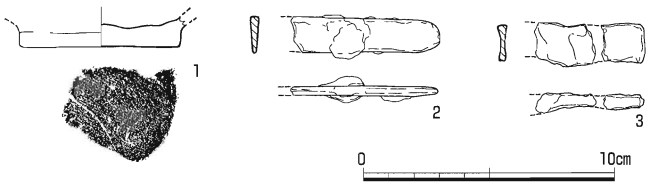
第76図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区３号建物跡遺構実測図



第77図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区横断土層・焼土実測図

P.3が径60～80㎝・深さ40㎝、P.4が径35～40㎝・深さ20㎝、P.5が径30㎝・深さ15㎝、P.6が径55㎝・深さ70㎝、P.7が径60㎝・深さ85㎝、P.8が径35㎝・深さ50㎝である。

出土遺物にはP.3で出土した鉄片(第78図3)があるが、土器等は出土しておらず時期は不明である。



第78図　ナメラ迫遺跡Ⅲ区出土遺物実測図

（３）焼土・ピット

盛土遺構の下層は、黒褐色土(２層)、炭・地山ブロックを含む暗黒褐色土(３層)となっている。２層には僅かに遺物が含まれており、近世陶磁器と土師器皿(第78図1)が出土した。３層上面には焼土と炭を含む黒褐色土の広がりが長さ1.9m・幅1.1m・厚さ７㎝の範囲で認められた。焼土はこの地点で焼かれたものではなく、２次的に動いたものである。

また、３層下面ではピット群が確認されたが、規則的な配列をもつものはなく、建物等の遺構と考えられるものは見られない。

第5節　総　括

ナメラ迫遺跡は、古墳時代中期から江戸時代にかけて営まれた複合遺跡である。狭隘な谷沿いの丘陵斜面に立地する集落跡であるが、調査範囲が工事用道路と本線の橋脚用地に限定されており、遺跡の全体像が明らかになったわけではない。ここでは、その中で注目される古墳時代中・後期、及び奈良・平安時代の遺構と遺物について若干の検討を加え、まとめとしたい。

（1）古墳時代中期・後期

集落跡　Ⅱ区の調査区中央部で検出された竪穴遺構と溝状遺構が古墳時代中・後期のものである。これらは比較的深く掘削された遺構であることから、その周辺の遺構が未検出のところは水田造成の際などに削平を受け、遺構が消滅した可能性がある。また、竪穴遺構と溝状遺構は調査区外へと延びており、周囲の丘陵斜面にこの時期の遺構が広がっていることが予想される。

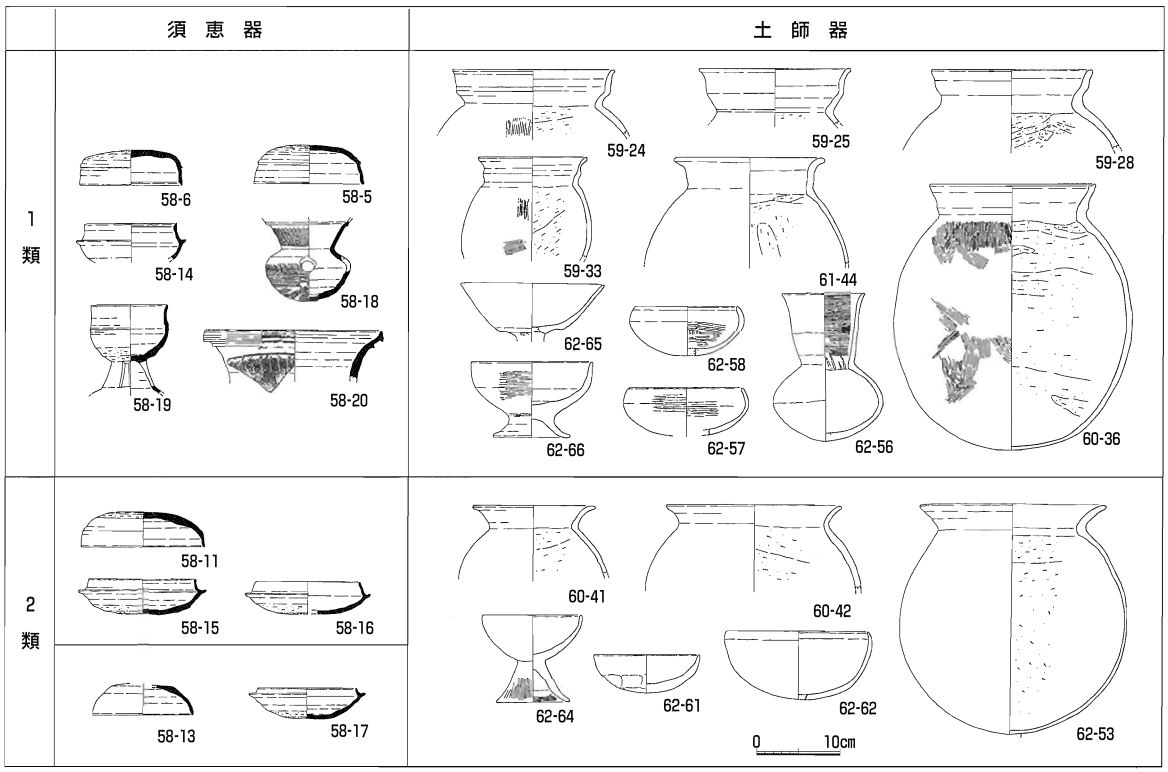
竪穴遺構は遺存状態が悪く、調査範囲にも制約があるため不明な点があるが、床面に柱穴があり竪穴住居跡の一部と見られる。溝状遺構は丘陵斜面に直交するように延びるもので、その上面を中心として多量の須恵器・土師器の他、竈・甑・土製支脚が検出されている。遺物は遺構の底面からは浮いた状態で検出されたものが多く、溝状遺構がある程度埋まった段階で遺物が廃棄されたものである。その機能は不明と言わざるを得ないが、道のようなものである可能性が考えられる。遺跡の性格は住居跡や道の可能性が考えられる遺構があること、炊飯具である土師器甕の他、竈・甑・土製支脚などが出土していることから、集落跡と見て大過ないものと思われる。

集落の時期は、竪穴遺構で古墳時代前期の土師器甕片が出土しており、前期に遡る可能性もある。しかし、今回検出された遺物の多くは後述するように古墳時代中期後半から後期を主体とするものであり、遺構の時期はこの頃と見てよかろう。周辺地域において古墳時代中期後半から後期の遺物が出土した遺跡としては仁摩町仁万の坂灘遺跡[1]・善興寺橋遺跡・仁摩大橋遺跡[2]、同宅野の猛鬼遺跡[3]、同大国の清石遺跡[4]・ヒヨトリヶ市遺跡・入石遺跡[5]などがあり、平野部のほか猛鬼遺跡のような海岸沿いや、ナメラ迫遺跡のような狭隘な谷筋にも集落が広がっている。

須恵器・土師器　溝状遺構より出土した遺物は時期幅が認められるが、遺物群の中には一定のまとまりが見られ、一括遺物として把握できるものもある。図版63-2は土師器甕(第62図53)と甑(第63図78)の出土状況で、両者は接する位置で確認された。図版64-3と図版65-1･2は須恵器蓋坏(第58図5)・碗(同図18)などの出土状況で、これらに伴うようにして土師器甕(第59図33・第61図44)・高坏(第62図65)・低脚坏(同図66)が検出されている。また、図版65-3は須恵器蓋坏(第58図11)で、土師器甕(第60図42)・鉢(第62図62)が重なって出土した。こうした共伴関係と遺物の特色から溝状遺構の出土遺物を大別したのが第79図である。

1類　須恵器は蓋坏・碗・脚付碗・壺がある。坏蓋は口縁部が直立し口唇は鑿刃状のもの(第58図6･9)と口縁部がやや開き口唇が凹むもの(同図5･8)に分けられる。土師器には甕・高坏・低脚坏・坏・長頸壺がある。甕は口縁部が屈曲し複合口縁となるもの(第59図24～31･34)と外面に複合口縁の痕跡である稜を残すもの(同図32･33･35･第60図36)の他、口縁部が直立気味に立ち上がり端部のみ外反するもの(同図39･第61図44)がある。

須恵器はその特色から見て石見地域でも導入初期の段階に当たるものであり、浜田市日脚1号窯跡[6]に併行すると考えられる。日脚1号窯跡の出土品には蓋坏・高坏・碗・直口壺・短頸壺・壺・甕がある。あまり良好な資料には恵まれないが、蓋坏にはナメラ迫遺跡に見られる2種類が認めら



第79図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区溝状遺構出土土器分類図

れる他、灰原出土のものに脚付碗に近い形態の碗が含まれる。これらは陶邑編年では、概ねTK23またはTK47段階のものに比定できよう(7)。

土師器は前に見た土器の共伴関係から、甕のうち口縁外面に稜を残す第59図33と口縁が直立し端部が外反する第61図44、高坏は坏部外面に稜のある第62図65、低脚坏は第62図66が１類の須恵器に伴うものと見られる。甕のうち口縁部が屈曲し複合口縁となったものは、口縁外面に稜を残すものよりも型式学的には先行すると見られるが、ほぼ同じ頃の資料と見られる清石遺跡土器溜や猛鬼遺跡の出土遺物には両者の特色を示すものが含まれており、ここでは一括する。内傾する口縁をもつ坏(第62図57～59)は丁寧なミガキ調整、長頸壺(同56)はミガキ調整に加え赤色顔料の塗布が見られ、低脚坏(同図66)に近い特色が見られるので１類に含めた。これらの遺物を出雲の古墳時代中期土器の編年(8)と対比してみると、須恵器の出現から生産の開始期に当たるⅢ～Ⅳ期に近い特色を示しており、石見東部における古墳時代中期の土師器は出雲に比較的近い様相をもつものと考えられる。

２類　須恵器は蓋坏があり、口径が大きく頂部または底面に回転ケズリが入る第58図11･12･15･16と、口径が小さく回転ヘラケズリの入らない同図13・底部の回転ヘラケズリを欠く同図17に分けられる。前者は陶邑編年のTK10、後者はTK209～217に併行するものと見られる。

土師器は甕と高坏・坏・鉢がある。甕は口縁が大きく「く」字形に外反するもの(第60図40～42、第61図45～第62図53)のみよりなり、胴部の形状は1類が長胴状であるのに対し、胴部の張りが大きく球形に近くなる。このうち甕(第60図42)は２類では古相の須恵器蓋坏(第58図11)と土師器鉢(第62図62)を伴うことが出土状況から明らかである。土師器を細分することはできないが、須恵器には時間幅が見られるので、新相の須恵器に伴う土師器もあるものと思われる。

以上見たように、ナメラ迫遺跡の溝状遺構より出土した遺物は古墳時代中期後半を主体とし、後

期後半までの遺物を断続的に含むものであった。

（2）奈良・平安時代

土坑　Ⅰ区では奈良時代の土坑と遺物が僅かに検出された。この地点は標高58～63mの丘陵斜面にあり、傾斜が僅かに緩くなって段状の地形を呈するが、集落には不向きな地点である。出土遺物には中祖遺跡1類に併行する8世紀後半段階の須恵器蓋坏が複数個体あるが、それ以外には土器は検出されておらず、居住域であったとは考えられない。遺構には不整形な土坑2基があり、ともに埋土中に炭を多く含んでいたことから、その中で火が焚かれたものと見られる。このうち、1号土坑では放射性炭素年代測定を行っており、暦年代AD720～740年、AD770～790年と須恵器の年代に近い結果が得られている。したがって、須恵器は土坑が営まれた際に持ち込まれたものと考えて良かろう。

Ⅰ区の性格については不明と言わざるを得ないが、留意すべきはⅠ区の北西側斜面で横穴式石室墳1基が確認されていること、この平坦地からは南の方向に高山(499m)と城上山(411m)が望めることである。敢えて想定すれば、古墳を対象とした祖先祭祀や高山・城上山を対象とした祭祀などが考えられるかもしれない。

ヘラ書き土器・墨書土器　Ⅱ区の南側谷部では平安時代の須恵器・土師器・白磁などの遺物が僅かながら出土しており、その中にはヘラ書き土器と墨書土器がそれぞれ1点ずつ含まれていた。

ヘラ書き土器は土師器皿(第69図15)で内面底部に「□井」と記され、1文字めは「拓」の可能性もある。墨書土器は土師器坏(同図17)で内面底部に1文字が墨書されるが判読できない。前者は器高の低い皿であること、後者が足高高台をもつ坏であることから、時期は中祖遺跡2～3類の土師器に併行するもので、9世紀後半から10世紀前半頃と考えられる。

石見ではヘラ書き土器・墨書土器・文字瓦の出土例は多くないが、現在のところ14遺跡で知られている(第12表)。平安時代の資料が多く見られ、ナメラ迫遺跡の土師器皿のように内面底部にヘラ書きされたものは中祖遺跡と前立山遺跡があり、須恵器内面に墨書されたものには宮倉遺跡がある。いずれも平安時代のものであり、この時期に内面底部に文字を書く例が増加することが窺える。

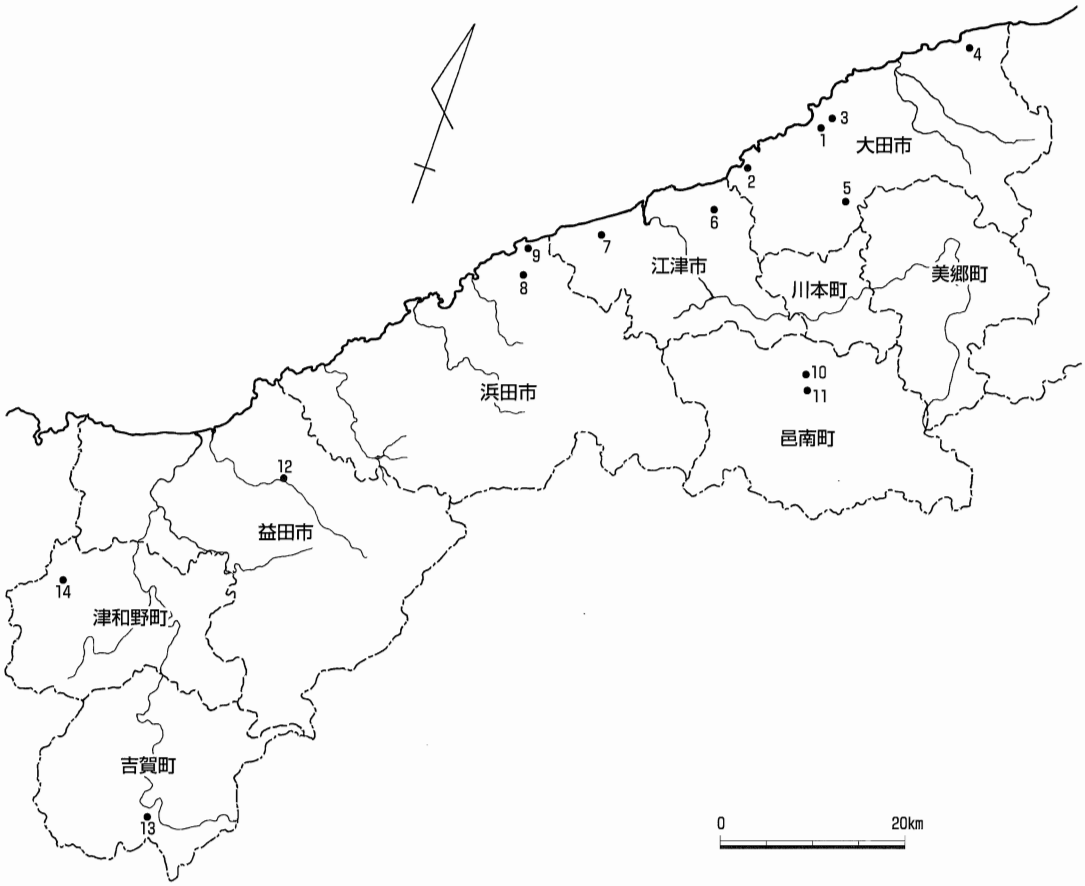
文字を記した土器・瓦が出土した遺跡は、やはり寺院跡や官衙に関わる遺跡が多い。前章で述べたように中祖遺跡と白坏遺跡は官衙関連施設、古市遺跡は石見国府との関わりが考えられる遺跡である。また、天王平廃寺・石見国分尼寺跡は寺院、大地ノ元遺跡・前立山遺跡も仏教関連施設[20]とされるものである。ナメラ迫遺跡は官衙・寺院との関わりは全く考えられない小集落であるが、限られた調査範囲で文字資料が2点出土したことは、平安時代にはこうした小集落にも文字を記した土器がある程度持ち込まれていたことを想定させるものであり、今後、公的施設以外での文字資料の出土例が増えることも考えられよう。

（3）まとめ

ナメラ迫遺跡は狭隘な谷に位置し可耕地も少なく、集落の立地条件としては必ずしも恵まれていない。しかし、限られた調査範囲の中で古墳時代中期から江戸時代の各時代にわたる遺物が検出されており、比較的安定した集落であったと思われる。古墳時代後期には集落背後の丘陵に横穴式石室墳も築造されており、この谷水田を生産基盤として有力農民が成長していたことも窺える。石見沿岸部では平野が少なく、こうした狭い谷筋に展開する集落がかなりあることも想定されるが、今回の発掘調査によって、その一端を示す資料を得ることができた。

第12表　石見におけるヘラ書き土器・墨書土器・文字瓦一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	器種	部位	種類	釈文	時期	文献
1	ナメラ迫遺跡	大田市仁摩町天河内	土師器	坏	内面底部	墨書	□	平安	本報告書
			土師器	皿	内面底部	ヘラ書き	□井	平安	
2	中祖遺跡	大田市温泉津町福光	土師器	坏	内面底部	ヘラ書き	佐右	平安	
3	五丁遺跡群	大田市仁摩町天河内	須恵器	坏	外面体部	墨書	□	平安	
4	天王平廃寺	大田市波根町	瓦	平瓦	凸面	ヘラ書き	大大大大		註(９)
5	白坏遺跡	大田市水上町	須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	上内	奈良	註(10)
			須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	大	奈良	
			須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	大	奈良	
			須恵器	坏	外面底部	墨書	梨	平安	
			須恵器	坏	外面底部	ヘラ書き	若狭氏成	平安	
6	高津遺跡	江津市都治町	須恵器	坏	内面底部	ヘラ書き	郡		註(11)
7	宮倉遺跡	江津市二宮町	須恵器	坏	内面底部	墨書	佐上	平安	註(12)
8	古市遺跡	浜田市上府町	須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	宅代	平安	註(13)
9	石見国分尼寺跡	浜田市国分町	瓦	平瓦	凹面	ヘラ書き	寺		註(14)
10	大地ノ元遺跡	邑智郡邑南町井原	須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	代田	平安	註(15)
11	寺の前遺跡	邑智郡邑南町井原	須恵器	坏	外面底部	墨書	□□		註(16)
12	酒屋原遺跡	益田市美都町東仙道	須恵器	坏蓋	外面頂部	ヘラ書き	大		註(17)
13	前立山遺跡	鹿足郡吉賀町注連川	土師器	坏	内面底部	ヘラ書き	寺	平安	註(18)
			土師器	坏	内面底部	ヘラ書き	寺	平安	
			土師器	坏	内面底部	ヘラ書き	寺	平安	
			土師器	坏	内面底部	ヘラ書き	寺	平安	
			須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	今居	平安	
			須恵器	坏蓋	外面頂部	墨書	今居	平安	
			須恵器	鉄鉢	内面体部	ヘラ書き	大		
14	大婦け遺跡	鹿足郡津和野町中川	須恵器	坏	外面底部	墨書	十		註(19)



第80図　石見における墨書土器・ヘラ書き土器他出土遺跡の分布

註

(1)島根県教育委員会「坂灘遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第XⅢ集　1987年
(2)仁摩町教育委員会『仁万大橋遺跡・善興寺橋遺跡』2005年
(3)前掲註(1)に同じ。
(4)仁摩町教育委員会『清石遺跡他発掘調査報告書』1999年
(5)仁摩町教育委員会『五丁地区遺跡群発掘調査報告書』1999年
(6)島根県教育委員会『日脚遺跡』1985年
(7)田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
(8)松山智弘「出雲における古墳時代前半期土器の様相」『島根考古学会誌』第8集　1991年
(9)島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅱ集　1970年
(10)大田市教育委員会『白坏遺跡発掘調査概報』1989年
(11)江津市教育委員会『高津遺跡』2005年
(12)江津市教育委員会『宮倉遺跡』1993年
(13)浜田市教育委員会『古市遺跡発掘調査概報』1995年
(14)島根県古代文化センター『山陰古代出土文字資料集成』Ⅰ　2003年
(15)石見町教育委員会『大地ノ元遺跡』1999年
(16)石見町教育委員会『天蔵寺・寺の前遺跡』2004年
(17)前掲註(14)に同じ。
(18)島根県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1980年
(19)津和野町教育委員会宮田健一氏のご教示による。
(20)前掲註(14)に同じ。

第13表　ナメラ迫遺跡出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	調査区	出土地点	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	調整・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
50—2	Ⅰ		須恵器	坏蓋	(15.6)	1.6	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・ナデ	3mm大の礫含む	良好	青灰色	
50—3	Ⅰ		須恵器	坏蓋	—	1.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
50—4	Ⅰ		須恵器	坏	12.6	4.5	外面：回転ナデ・ヘラ切りのち回転ナデか 内面：回転ナデ	密だが5mm大の礫含む	良好	青灰色	
50—5	Ⅰ		須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	細かい砂粒含む	良好	外面：青灰色 内面：灰白色	
50—6	Ⅰ		須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
55—1	Ⅱ	竪穴遺構	土師器	甕	—	—	外面：ハケメか 内面：ケズリ	2mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	淡褐色	
55—2	Ⅱ	竪穴遺構	土師器	甕	(14.4)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ナデ・ケズリ	密	良好	外面：赤褐色 内面：褐色	
55—3	Ⅱ	竪穴遺構	土師器	甕	(13.7)	—	外面：横ナデか・ナデか 内面：横ナデか・ケズリ	2.5mm大以下の白色粒・赤色粒を含む	良好	淡橙色	
55—4	Ⅱ	竪穴遺構	土師器	低脚坏か	—	—	外面：ナデか 内面：不明	密	良好	橙褐色	底部内面に黒斑
58—5	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	13.3	4.7	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4mm大の石英含む	良好	暗青灰色	
58—6	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	(12.4)	4.3	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	3mm大の石英他含む	良好	青灰色	
58—7	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	(12.4)	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	4mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	灰白色	外面に自然釉
58—8	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	(12.3)	3.9	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	1mm大以下の白色粒含む	良好	外面：灰色 内面：青灰色	天井部に自然釉
58—9	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	(12.4)	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	1mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	外面：暗灰色 内面：青灰色	外面に自然釉
58—10	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	—	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	1.5mm大以下の白色粒・黒色粒を含む	良好	青灰色	
58—11	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	14.6	4.2	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・ナデ	4mm大の石色礫含む	良好	青灰色	
58—12	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	14.8	4.7	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	2mm大以下の白色粒・黒色粒を多く含む	やや不良	灰白色	
58—13	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏蓋	(12.1)	—	外面：回転ナデ・ヘラ起こし痕 内面：回転ナデ	3mm大までの礫含む	良好	青灰色	
58—14	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏身	(11.0)	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密（1mm大以下の白色粒を少量含む）	良好	青灰色	
58—15	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏身	12.8	4.0	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・ナデ	密	良好	外面：暗青灰色 内面：青灰色	
58—16	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏身	(12.4)	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・ナデ	2mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	灰白色	
58—17	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	坏身	11.8	3.8	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・ナデ	3mm大の石英含む	やや不良	灰白色	外面に焼成前ヘラ描き沈線
58—18	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	甕	—	—	外面：回転ナデ・カキメ・平行タタキ 内面：回転ナデ	3mm大の礫含む	良好	青灰色～淡青灰色	
58—19	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	脚付甕	9.1	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	密	良好	淡青灰色	脚部3方向に長方形透し孔
58—20	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	2mm大の石英含む	良好	暗青灰色	
58—21	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	甕	—	—	外面：回転ナデ・平行タタキ・カキメ 内面：回転ナデ・同心円文当て具痕	3mm大以下の白色粒・黒色粒を含む	良好	灰色	
58—22	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	長頸壺	—	—	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4mm大の石英含む	良好	青灰色	
58—23	Ⅱ	溝状遺構	須恵器	皿	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切りか 内面：回転ナデ	3mm大以下の白色粒含む	良好	灰白色	
59—24	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(19.6)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大までの礫含む	良好	外面：茶褐色 内面：淡褐色	
59—25	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(18.3)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	3mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	淡橙褐色	
59—26	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(19.2)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大の礫含む	良好	暗褐色	外面一部に煤付着
59—27	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(16.8)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	7mm大以下の赤色粒・白色粒・透明粒を多く含む	良好	灰褐色～橙褐色	
59—28	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(19.4)	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	淡橙色	内面僅かに褐色の付着物
59—29	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(20.8)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	淡橙褐色	
59—30	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(16.8)	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリ	4mm大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	淡橙褐色～淡黄褐色	
59—31	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(16.4)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	5mm大までの石英他を多く含む	良好	暗褐色	
59—32	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(18.6)	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリのち一部指押え	5mm大以下の赤色粒・白色粒・透明粒を多く含む	良好	灰褐色～橙褐色	
59—33	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(12.6)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	7mm大の礫含む	良好	外面：赤褐色 内面：灰褐色	
59—34	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(17.4)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	4mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	外面：灰褐色 内面：淡黄褐色	
59—35	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(16.4)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ・指押え	1mm大以下の白色粒多く含む	良好	明橙褐色	
60—36	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(20.0)	32.4	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	1.5mm大以下の白色粒多く含む	良好	赤橙色	
60—37	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	11.0	13.6	外面：指押え・ケズリのちナデか 内面：ケズリ	5mm大以下の砂粒を多量含む	良好	外面：明褐色～黄褐色 内面：淡褐色	

60—38	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	11.0	14.8	外面：ナデか 内面：ケズリか	2㎜大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	淡橙色～淡黄褐色	
60—39	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	18.5	24.9	外面：横ナデか・ナデ 内面：横ナデか・ケズリ	5㎜大までの長石・石英含む	普通	黒褐色～茶褐色	胴部外面に煤付着 内面に黒色付着物
60—40	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(14.3)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	2～3㎜大の礫含む	やや不良	赤褐色	
60—41	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	14.8	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	5㎜大までの礫含む	良好	暗褐色	
60—42	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(21.0)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	6㎜大までの礫多く含む	良好	茶褐色	外面一部と内面に黒斑
60—43	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	—	—	外面：不明 内面：ケズリか	1㎜大以下の白色粒他を少量含む	良好	淡橙色	
61—44	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	18.0	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリ	4㎜大以下の赤色粒・白色粒・透明粒を含む	良好	淡橙褐色～暗褐色	外面に煤が付着口縁内面に褐色付着物
61—45	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(13.0)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	2㎜大以下の白色粒を少量含む	良好	浅黄橙色	
61—46	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	13.3	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリ	5㎜大以下の赤色粒・白色粒を多く含む	良好	橙褐色	
61—47	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(12.8)	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリ	7㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	外面：赤橙色 内面：淡褐色	
61—48	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(18.5)	26.7	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ	6㎜大までの石英他含む	良好	外面：赤褐色 内面：淡黒褐色	胴部外面下半に煤付着
61—49	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	—	—	外面：不明 内面：横ナデ・ケズリ・指押え	4㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	橙褐色～淡褐色	底部に直径4cm程度の穿孔
61—50	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	(18.5)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	8㎜大までの小石含み粗い	普通	赤褐色	内外面に黒斑
61—51	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	13.0	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ケズリ・ケズリのち一部ナデ	1㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	明橙色～灰褐色	
61—52	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	—	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ	1㎜大以下の透明粒・白色粒を多く含む	良好	淡褐色～灰褐色	
62—53	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	22.5	28.1	外面：横ナデ 内面：横ナデ・ケズリ	7㎜大の礫含む	良好	暗褐色	胴部中程煤付着 底面が被熱し赤褐色化
62—54	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甕	—	—	外面：ハケメ 内面：ケズリ	5㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	淡橙色～淡褐色	
62—55	Ⅱ	溝状遺構	土師器	直口壺	(13.0)	—	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ケズリか	5㎜大以下の透明粒・白色粒を含む	良好	淡黄橙色～淡褐色	
62—56	Ⅱ	溝状遺構	土師器	長頸壺	(9.9)	17.9	外面：ミガキ 内面：ミガキ	1.5㎜大以下の白色粒を多く含む	良好	褐色～赤褐色	外面と内面頸部に赤色顔料塗布
62—57	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	(13.5)	—	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	細かい砂粒含む	良好	外面：灰褐色 内面：淡黒褐色	
62—58	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	(12.0)	6.0	外面：横ナデ・ナデか 内面：横ナデ・ミガキ	密	良好	外面：淡褐色～暗灰色 内面：褐色	
62—59	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	(12.6)	6.5	外面：横ナデ・ケズリ 内面：横ナデ・ミガキか	1㎜大以下の赤色粒等砂粒を含む	良好	灰褐色	
62—60	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	(14.0)	—	外面：横ナデ 内面：横ナデ	密	良好	暗灰色～淡褐色	
62—61	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	(12.5)	4.6	外面：横ナデか・ケズリのちナデ 内面：横ナデか	5㎜大の礫含む	不良	淡褐色	
62—62	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	16.9	8.4	外面：横ナデか 内面：横ナデか	3㎜大以下の透明粒・白色粒を多く含む	良好	淡黄橙色	
62—63	Ⅱ	溝状遺構	土師器	坏	14.3	7.9	外面：ケズリのちナデ 内面：指押え	4㎜大の石英他含む	普通	茶褐色	内外面に赤褐色顔料塗布
62—64	Ⅱ	溝状遺構	土師器	高坏	(11.8)	10.6	外面：横ナデ・ハケメ・ケズリのちナデか 内面：不明	1㎜大以下の赤色粒を多く含む	良好	外面：淡橙色 内面：明橙色	外面に赤色顔料が残る
62—65	Ⅱ	溝状遺構	土師器	高坏	17.2	—	外面：ハケメ 内面：不明	0.5㎜大以下の白色粒を少量含む	良好	外面：明橙色 内面：橙褐色	
62—66	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	(14.5)	9.2	外面：ヘラミガキ 内面：横ナデ	2㎜大の石英他含む	良好	褐色～淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
63—67	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	14.7	—	外面：不明 内面：不明	密	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
63—68	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	(11.8)	—	外面：横ナデか·ケズリのちナデか 内面：不明	密	良好	淡赤橙色	外面口縁部にわずかに赤色顔料残る
63—69	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	—	—	外面：横ナデ・ミガキか 内面：ナデか	密	良好	橙褐色	内外面に赤色塗彩
63—70	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	—	—	外面：横ナデか・ナデか・指押え 内面：ナデか	3㎜大以下の白色粒・透明粒を多く含む	良好	暗灰色～橙褐色	
63—71	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	—	—	外面：ケズリ・ナデか 内面：不明	2㎜大以下の白色粒・透明粒含む	良好	橙褐色	底部内面に褐色の付着物、一部に赤色顔料か
63—72	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	—	—	外面：横ナデ・ナデ 内面：不明	密	良好	淡褐色	内外面に赤色顔料塗布
63—73	Ⅱ	溝状遺構	土師器	低脚坏	—	—	外面：ナデ 内面：不明	密	良好	淡褐色	
63—74	Ⅱ	溝状遺構	土師器	手捏土器	4.8	3.1	外面：指押え 内面：指押え	3㎜大の礫含む	良好	赤褐色	底面に黒斑
63—75	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甑	(27.2)	25.4	外面：横ナデ・ハケメ・手捏・指押え 内面：ケズリ	3㎜大以下の白色粒・透明粒含む	良好	淡黄橙色	内外面に褐色の付着物
63—76	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甑	—	—	外面：ナデ 内面：ナデか	密	良好	赤褐色	
63—77	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甑	—	—	外面：ナデおよび一部指押え 内面：不明	1㎜大以下の白色粒・透明粒含む	良好	淡黄色	
63—78	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甑	18.6	18.6	外面：ナデか・ハケメか 内面：横ナデ・ケズリ	2㎜大以下の白色粒・透明粒含む	良好	明橙色～橙褐色	内外面に暗褐色の付着物　口縁1ヶ所に焼成前穿孔
63—79	Ⅱ	溝状遺構	土師器	土製支脚	—	—	外面： 内面：	1.5㎜大以下の白色粒等含む	良好	淡黄橙色	底面に内剝りあり
64—80	Ⅱ	溝状遺構	土師器	甑	(22.3)	—	外面：横ナデ・ハケメ 内面：横ナデ・ナデか	3㎜大以下の白色粒・透明粒含む	良好	淡橙色～淡黄褐色	内外面に褐色の付着物

64—81	Ⅱ	溝状遺構	土師器	竈	—	—	外面：ハケメ 内面：ケズリ	4mm大の礫含む	良好	橙褐色	内外面に黒斑あり
66—1	Ⅱ	1号建物跡	青磁	碗	(16.8)	—	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	緑灰色	
66—2	Ⅱ	1号建物跡	土師器	Ⅲ	(7.9)	2.2	外面：回転糸切りか 内面：不明	密	不良	淡褐色	灯芯跡に煤付着
69—1	Ⅱ	F－4	須恵器	坏蓋	13.2	5.1	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	3mm大以下の黒色粒・白色粒含む	やや不良	灰白色	外面の一部が自然釉で荒れている
69—2	Ⅱ	E－4	須恵器	坏身	(10.4)	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ・静止ナデ	1mm大以下の白色粒含む	良好	外面： 内面：	外面の一部が自然釉で荒れている
69—3	Ⅱ	F－2	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	不良	白色	
69—4	Ⅱ	F－4	須恵器	坏	(12.2)	4.4	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	4mm大以下の白色粒・透明粒含む	やや不良	淡黄白色	
69—5	Ⅱ	F－4	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
69—6	Ⅱ	F－4	須恵器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	4mm大以下の白色粒・透明粒含む	やや不良	淡黄白色	
69—7	Ⅱ	F－4	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2mm大以下の白色粒含む	やや不良	淡白色	
69—8	Ⅱ	G－1	須恵器	坏	—	—	外面：回転ナデ・ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	青灰色	
69—9	Ⅱ	F－4	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデ・静止糸切り 内面：回転ナデ	3mm大以下の白色粒含む	良好	灰白色	
69—10	Ⅱ	E－4	須恵器	壺	—	—	外面：回転ナデか・回転ヘラケズリ・ナデか 内面：回転ナデ	密	良好	灰白色	
69—11	Ⅱ	F－4	須恵器	甕	—	—	外面：格子文タタキ 内面：放射状当て具痕	密	良好	外面：灰色 内面：灰白色	
69—12	Ⅱ	G－1	須恵器	甕	—	—	外面：平行文タタキ 内面：放射状当て具痕のちナデ	4mm大以下の白色粒含む	良好	紫灰色	
69—13	Ⅱ	F－4	土師器	甕	(25.3)	—	外面：ハケメ 内面：ハケメ・ケズリ	1mm大以下の白色粒等含む	良好	外面：暗灰色 内面：明褐色	
69—14	Ⅱ	E－4	土師器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密	不良	灰白色	
69—15	Ⅱ	F－4	土師器	Ⅲ	(11.8)	2.9	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	細かい雲母・石英含む	普通	褐色	ヘラ書き文字
69—16	Ⅱ	G－1	土師器	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	2mm大以下の白色粒・透明粒を多く含む	やや不良	外面：淡褐色 内面：褐色～淡褐色	
69—17	Ⅱ	F－4	土師器	坏	—	—	外面：回転ナデ・回転糸切り 内面：回転ナデ	密だが5mm大の礫含む	良好	淡褐色	内面に墨書1文字か
69—18	Ⅱ	F－4	土師器	坏	(12.0)	5.9	外面：回転ナデ・ミガキ 内面：回転ナデ・ミガキ	1mm大以下の白色粒・透明粒を含む	良好	外面：淡灰褐色 内面：黒灰色	
70—19	Ⅱ	F－4	白磁	碗	(17.3)	—	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	白色	
70—20	Ⅱ	F－3	白磁	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・胎土目か 内面：施釉	密	良好	釉：淡黄白色 地：白色	
70—21	Ⅱ	F－4	白磁	Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・回転ヘラケズリ 内面：施釉	密	良好	釉：淡黄褐色 地：淡黄白色	
70—22	Ⅱ	G－2	青磁	碗	—	—	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	釉：淡緑灰色 地：明褐色	龍泉窯
70—23	Ⅱ	G－2	青花	Ⅲ	—	—	外面：施釉 内面：施釉・回転ナデ	密	良好	釉：淡緑色	
70—24	Ⅱ	G－1	備前	擂鉢	—	—	外面：回転ナデか・ナデか 内面：摺目	4mm大以下の白色粒・褐色粒を多く含む	良好	外面：紫灰色 内面：灰白色	
70—25	Ⅱ	G－1	肥前	Ⅲ	(12.5)	3.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ・施釉・砂目	密	良好	釉：白色	
70—26	Ⅱ	E－4	肥前	大Ⅲ	—	—	外面：回転ナデ・施釉 内面：施釉	密	良好	釉：淡緑灰色 地：橙褐色	絵唐津
70—27	Ⅱ	F－2	肥前	Ⅲ	—	—	外面：施釉 内面：施釉	密	良好	淡青白色	
78—1	Ⅲ		土師器	Ⅲ	—	—	外面：糸切り 内面：回転ナデ	密	良好	暗褐色	

第14表　ナメラ迫遺跡出土金属製品観察表

挿図番号	調査区	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	形態の特徴	備　考
50－1	Ⅰ	1号土坑	鉄片	7.5	6.5	0.3	周囲はすべて破面。	
64－82	Ⅱ	溝状遺構	刀子	5.8	1.6	0.3	刀身先端部の破片。	
78－2	Ⅲ	トレンチ2	刀子	5.8	1.5	0.3	刀身先端部の破片か。	
78－3	Ⅲ	3号建物跡	鉄片	4.4	1.5	0.4	長方形状の鉄片。折損。	

第15表　ナメラ迫遺跡出土石製品観察表

挿図番号	調査区	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	加工及び使用状況	石　材
64－83	Ⅱ	溝状遺構	砥石	21.6	11.9	5.1	2420	完形品。使用痕は顕著でない。	凝灰質砂岩
64－84	Ⅱ	溝状遺構	砥石	17.0	14.0	5.5	1880	2面が欠損。上面・下面・側面を使用。上面・下面に利器痕。	凝灰質砂岩
64－85	Ⅱ	溝状遺構	砥石	10.7	2.1	0.8	36	上面・下面・両側面を使用し、擦痕顕著。一方の端部には浅い抉り。	砂岩
66－3	Ⅱ	1号建物跡	砥石	13.3	6.0	1.8	253	3面が欠損。上面と下面の一部、側面を使用。利器痕あり。	砂岩
70－29	Ⅱ	G－2	砥石	3.4	3.4	0.7	15	両端と1側面を欠損。上下両面と1側面の3面を使用。	凝灰岩
70－30	Ⅱ	G－2	砥石	12.8	6.4	8.4	900	上面1面を使用。表面黒変被熱か。	凝灰岩

第５章　付　　論

第１節　中祖遺跡の立地環境

渡辺正巳・古野　毅（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

本報告は中祖遺跡近辺の古環境（堆積環境、近辺の古植生など）を推定するために、島根県教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した花粉分析・AMS年代測定・樹種同定報告書をまとめ直したものである。

分析試料について

分析試料の採取地点は、中祖遺跡Ⅱ区である。第81図はⅡ区の平面図で、№１、２地点で花粉分析用試料を採取した。№１地点の４試料の下位に、№２地点の２試料が位置する。年代測定用試料および樹種同定用試料は、トレンチ左側に横たわる倒木である。この倒木は、現地での観察では№１地点試料№４層準で覆われていた。また第82、83図に示した各ダイアグラム中に、試料採取地点の模式柱状図および試料採取層準を示す。

分析方法及び分析結果

(1)微化石概査

花粉分析用プレパラート、及び花粉分析処理残渣を用いて、植物片、微粒炭、珪藻、火山ガラス、植物珪酸体の含有状況を調べた。含有状況は、第16表中の凡例に示した５段階にまとめている。

(2)花粉分析

処理は渡辺（1995）に従って行った。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。またイネ科花粉を、中村（1974）に従いイネを含む可能性の高い大型のイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）と、イネを含む可能性の低い小型のイネ科(40ﾐｸﾛﾝ未満)に細分している。

分析結果を第82、83図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは木本花粉総数を基数として分類群毎に百分率を算出し、木本花粉を黒塗りスペクトルで、草本花粉を白抜きスペクトルで示した。統計処理に十分な量の木本化石が検出できなかった試料では、検出できた種類を「＊」で示した。また右端の花粉総合ダイアグラムでは木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基数として、分類群毎に累積百分率として示した。

(3)AMS年代測定

酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去した後、石墨(グラファイト)に調整し、加速器質量分析計(AMS)を用いて測定を行った。

第17表にδ^{13}C補正年代、暦年較正用年代、暦年較正年代代を示した。δ^{13}C補正年代は、リビーの半減期（5568年）を用いるとともに、δ^{13}C＝-25‰となるように補正・算出した暦年較正用年代を、５年単位で丸めた値であり、西暦1950年からさかのぼった年代値である。暦年較正年代は、暦年校正用年代を暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、Oxcal Ver3.1により較正したものである。

⑷樹種同定

樹種の記載を行うと共に、顕微鏡写真を示す。

ヤナギ属　*Salix* sp.

試料№：１（W06042601）

記載：年輪は狭い。100～150μmの道管がほとんど単独ないし２～３個放射方向に複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の分布は密で、年輪の最外層で直径がやや小さくなっている。道管のせん孔は単せん孔で、道管の側壁は交互状である。道管放射組織間壁孔はふるい状を示す。放射組織は両端に１～数個の直立細胞をもつ単列異性型で、高さは５～15細胞高である。軸方向柔組織は年輪界に沿ってターミナル状に明りょうに認められる。

以上の組織上の特徴からヤナギ属と同定した。

花粉分帯

統計処理を実施した分析試料すべてで、マツ属（複維管束亜属）及びスギ属が卓越した。このことから、統計処理を行なった全試料を局地花粉帯のⅠ帯として設定した。また、現地での観察結果から、№１地点の下位に№２地点の２試料が位置することは明らかであり、層序及び花粉組成を基にｃ～ａ亜帯に細分した。以下に各花粉亜帯の特徴を下位から上位に向かって示す。

⑴Ⅰ帯ｃ亜帯（№２地点試料№２、１）

マツ属（複維管束亜属）が増加傾向を示し、スギ属が減少傾向を示す。草本花粉、胞子の割合は低い。

⑵Ⅰ帯ｂ亜帯（№１地点試料№４）

引き続きマツ属（複維管束亜属）が増加傾向を、スギ属が減少傾向を示す。草本花粉の割合は低いが、胞子の割合がやや高く、全体の35％を占める。

⑶Ⅰ帯ａ亜帯（№1地点試料№3）

引き続きマツ属（複維管束亜属）が増加傾向を、スギ属が減少傾向を示す。草本花粉の割合はさらに低くなる一方で胞子の割合は高く、全体の71％を占める。特に、イノモトソウ科、オシダ科－チャセンシダ科が高率を示す。

他地域との比較

島根県中部では花粉分析の報告が乏しく、大田市波根湖(廉・渡辺 1996)、大田市三瓶小豆原埋没林(渡辺・那須 2003)、江津市高津遺跡(渡辺 2005)での報告が知られている程度である。これらの内、大田市波根湖のデータは、およそ6300年前以降の連続的なものである。大田市三瓶小豆原埋没林のデータは、縄文時代中期及び近世のものである。さらに江津市高津遺跡のデータは、弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものである。これらの３地点の内、時期的にばらつきがあるが、三瓶

小豆原埋没林と高津遺跡のデータではスギ属花粉が卓越傾向を示す。

年代測定結果及び出土遺物から、今回の花粉分析結果がおよそ平安時代後半の植生を示していることが明らかである。前述３地点の内、波根湖での分析結果の *Cryptomeria* Subzoneは、縄文時代晩期から古代にかけての植生を反映している可能性があり、今回の分析結果と比較可能である。一方ほかの２地点では、古代の植生を反映すると考えられる層準の分析が成されておらず、今回の分析結果との比較が出来ない。

波根湖の *Cryptomeria* Sub zoneでは、マツ属（*Pinus*)が40％程度の出現率を示し、スギ属（*Cryptomeria*)、アカガシ亜属（*Cyclobalanopsis*）が10～20％程度の出現率を示す。今回の分析結果と比較すると、マツ属、アカガシ亜属の出現率は同程度であるが、スギ属の出現率は今回の分析結果が高い。またその他の樹種の出現率は、今回の分析結果が低い傾向にある。

縄文時代以降におけるスギ属花粉の地域的な出現傾向は、山陰地域中央部で低く、山陰地域東部及び西部で高い傾向にある（高原，1998)。前述の高津遺跡、三瓶小豆原埋没林の分析結果は、この傾向を示すものである。今回の分析結果で波根湖の分析結果に比べスギ属が高率を示すのも、この傾向を示すものと考えられる。

古環境復元

調査地点近辺における平安時代の古植生を推定する。

周辺の地形及び堆積物の観察から、ｃ亜帯期のころには調査地点近辺は砂丘背後の湿地（いわゆる海跡湖（ラグーン））であったと考えられる。

ｃ亜帯堆積時には、アシなどの湿生イネ科草本やカヤツリグサ科などが生い茂る環境であったと考えられる。また、さほど高率ではないもののイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）花粉も検出されることから、湿地の縁辺では水田が営まれていた可能性がある。

ｂ、ｃ亜帯境界面に、ｃ亜帯層準を貫くように杭列が認められた。水田区画溝沿いに打ち込まれたかのようにも思われるが、充分な量の花粉化石が検出されたＩ帯層準ではイネ科（40ﾐｸﾛﾝ以上）花粉がほとんど検出できなかったことから、その用途は不明のままである。上位層準から打ち込まれたものの、地下水位の影響でｂ、ｃ亜帯境界より上位が朽ち果てた可能性もある。

また、ｂ、ｃ亜帯境界付近にはヤナギ類の倒木が検出されている。このほか、シダ類胞子の割合が増加するなど、近辺での草地の存在が示唆される。したがって調査地点は、地下水位が高いものの常時水付きであった訳ではなく、時としてシダ類の生育できる程度に乾燥した環境（高層湿原？草地？）であったと考えられる。さらに、ｂ亜帯から上部のａ亜帯に向かい胞子が増加し、木本花粉が減少することから草地が徐々に拡大したと考えられる。ただし、試料№４～２層準に向かい堆積物の酸化が進んでいる。堆積物の酸化とともに花粉化石が差別的に消滅し、相対的に胞子の割合が高くなった可能性も指摘できる。

山陰地域西部あるいは東部におけるスギ属花粉の卓越は、山口県宇生賀盆地（湿原）や福井県三方低地帯で認められるスギの湿地林に由来すると考えられている（高原,1998)。今回認められたスギ属花粉の卓越も、同様にスギ主体の湿地林が周辺の平野内に分布した可能性が指摘される。

同時期のマツ属（複維管束亜属）花粉の卓越、増加傾向は、前述のように波根湖では認められている。しかし、山陰地域中央部の宍道湖堆積物の分析結果（大西，1990）では、今回の結果よりや

や遅れる傾向にある。

一般に、弥生時代以降のマツ属（複維管束亜属）の増加は、人間活動に伴う二次林（あるいはその後の「里山」化）としてのアカマツ林の拡大に伴うと考えられている。二次林化の進行は局地的な現象であり、ここでのマツ属（複維管束亜属）増加の原因を二次林化の進行に求めることは無理なことではない。また、近辺の乾燥化（草地の拡大）に伴い、草地にマツ類が進入する様子を示している可能性もある。一方で今回の調査地点は砂丘の背後であり、海岸地域に特有なクロマツ海岸林が砂丘上あるいは近辺の海岸域に分布していたと考えることにも妥当性はある。したがって、今回認められたマツ属（複維管束亜属）花粉の卓越及び増加傾向は、調査地点近辺でのクロマツ海岸林の分布及び拡大に因る可能性も指摘できる。

まとめ

中祖遺跡において実施された花粉分析結果、^{14}C年代測定結果、樹種鑑定結果の結果を基に、遺跡内での古環境変遷を推定した。主な内容は、以下の事柄である。

(1)本遺跡内の局地花粉帯として、Ⅰ帯を設定し、さらにｃ～ａ亜帯に細分とした。さらに、設定した局地花粉帯と、近隣の波根湖（大田市）、三瓶小豆原埋没林（大田市）、高津遺跡（江津市）、宍道湖湖底SB1の地域花粉帯との比較を行った。

(2)調査トレンチに横たわった根株はヤナギ属であり、その枯死年代はAMS年代測定により平安時代後半とされた。

(3)調査地点近辺の堆積環境、古植生についての主な内容は以下の事柄である。

①湿地環境から徐々に乾燥し、草地環境に変化した。拡大した草地には、マツ類が進入した可能性があるが、クロマツ海岸林の分布、拡大に因る可能性もある。

②調査地点が水田であった可能性は低いものの、上流部には水田が分布した可能性がある。

③湿地内にスギ林が分布した可能性がある。

引用文献

大西郁夫・干場英樹・中谷紀子（1990）宍道湖湖底下完新統の花粉群．島根大学地質学研究報告，9，117-127.

高原　光（1998）スギ林の変遷．図説日本列島植生史，207-223，朝倉書店.

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.，文永堂，東京.

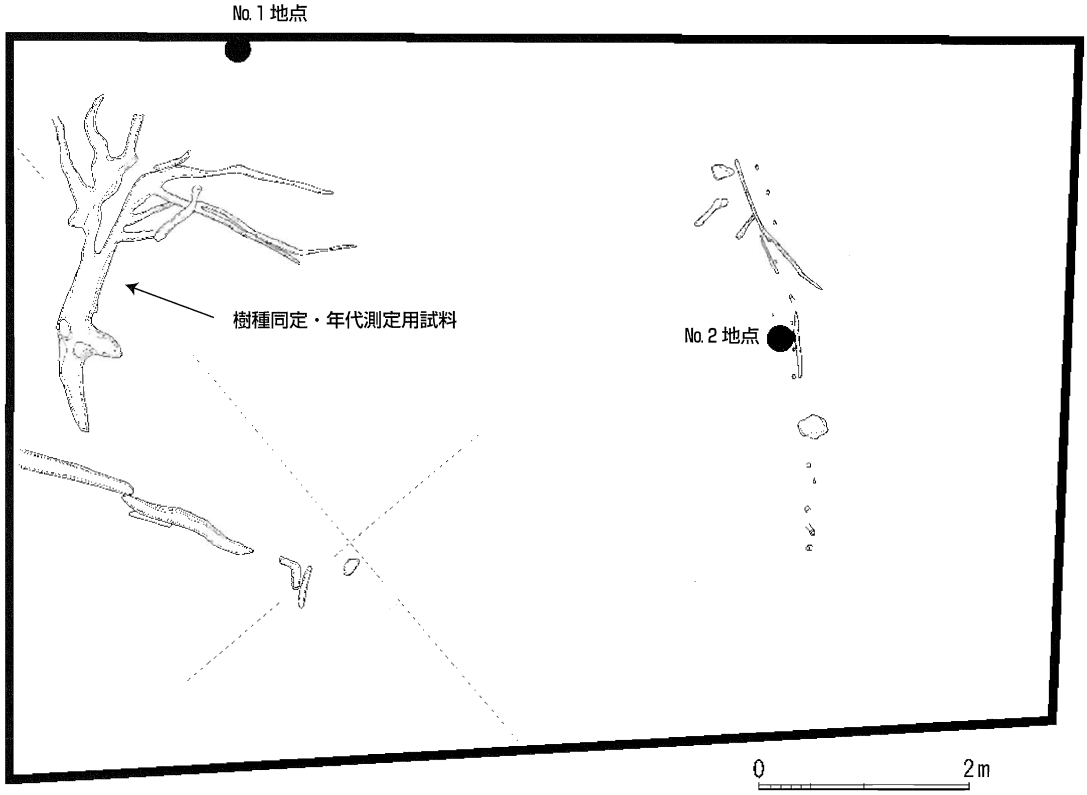
中村　純（1974）イネ科花粉について,とくにイネを中心として.第四紀研究,13,187-197.

廉　鐘權・渡辺正巳（1996）波根湖におけるOH94ボーリング試料の花粉分析．島根大学地球資源環境学研究報告15，41-46.

渡辺正巳（1995）花粉分析法．考古資料分析法，84,85.ニュー・サイエンス社

渡辺正巳・那須孝悌（2003）三瓶小豆原埋没林における花粉分析．三瓶小豆原埋没林調査報告書，3,80-87.

渡辺正巳（2005）高津遺跡発掘調査に係る自然科学分析．高津遺跡，30-45，島根県浜田農林振興センター・江津市教育委員会.



第81図　中祖遺跡Ⅱ区試料採取地点

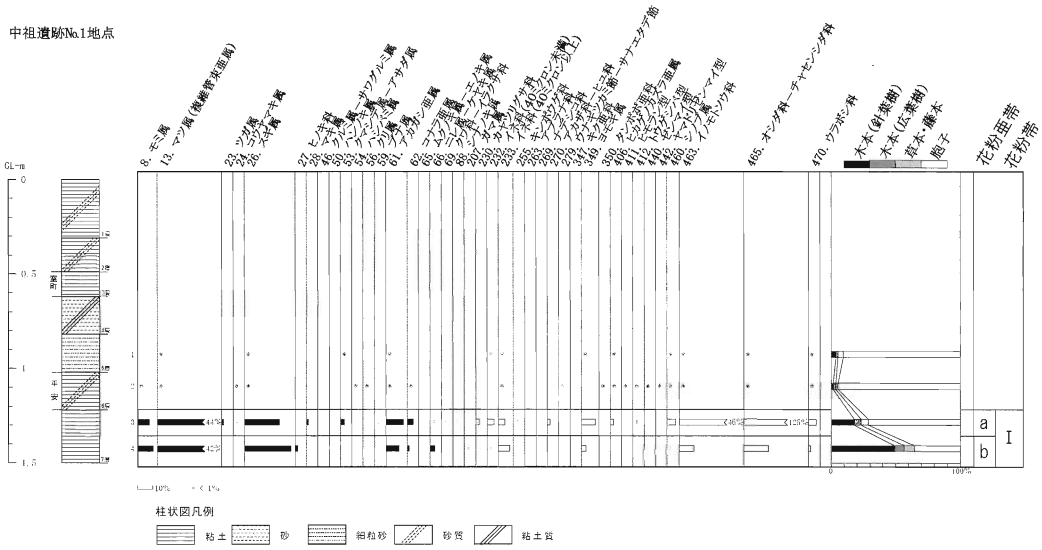
第16表　中祖遺跡Ⅱ区微化石概査結果

地点No	試料No	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ｶﾞﾗｽ	ﾌﾟﾗﾝﾄ・ｵﾊﾟｰﾙ
1	1	△×	△	△×	×	△	△
	2	△×	△	△×	×	△×	△×
	3	○	○	○	×	△	△
	4	◎	△×	○	△×	△	△×
2	1	◎	△×	△	◎	○	◎
	2	◎	△×	○	◎	○	○

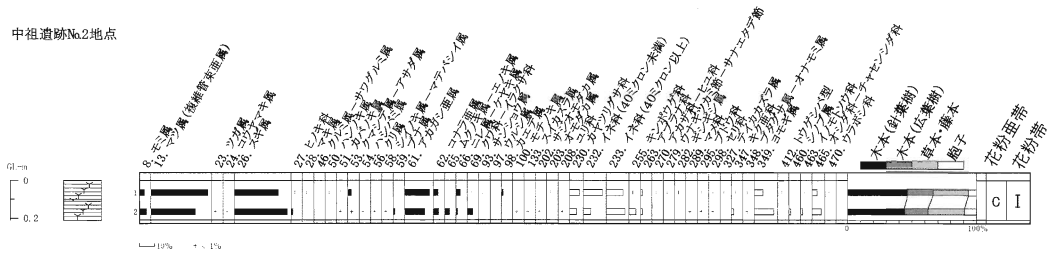
凡例 ◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない　△×：極めてまれに検出できる ×：検出できない

第17表　中祖遺跡Ⅱ区年代測定結果

試料No	状態	暦年較正用年代 (yrBP)	$\delta^{13}C$(‰)	補正^{14}C (yrBP)	暦年較正年代		測定番号 (PLD-)
					1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
NN-1	材 (最外年輪) 0.878g(dry)	977±21	-28.59±0.17	975±20	AD1090-1120(21.1%) AD1140-1150(4.1%) AD1010-1050(42.9%)	AD1010-1060(48.8%) AD1070-1160(46.6%)	6002

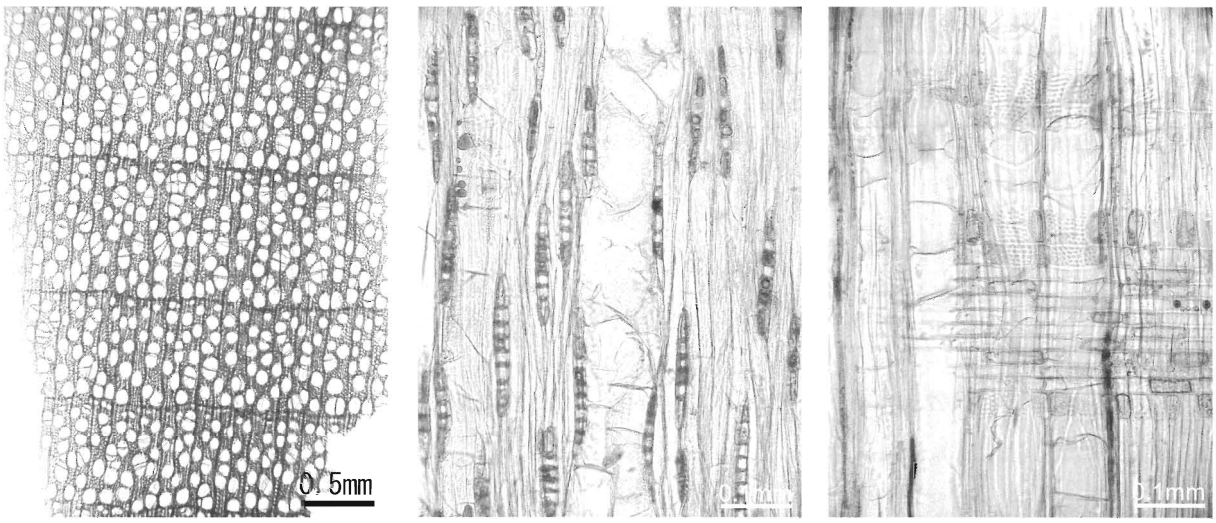


第82図　中祖遺跡Ⅱ区No.１地点の花粉ダイアグラム



第83図　中祖遺跡Ⅱ区No.２地点の花粉ダイアグラム

ヤナギ属　Salix sp.　　試料No.：１（W06042601）



横断面　　接線断面　　放射断面

写真４　出土木質遺物の顕微鏡写真

第２節　中祖遺跡出土瓦の胎土分析関係資料

中祖遺跡出土瓦の生産地を検討するため、中祖遺跡と石央・石東地域の瓦窯跡及び寺院出土瓦の胎土分析を行った。分析資料は中祖遺跡のほか、江津市久本奥窯跡[1]、浜田市石見国分寺瓦窯跡[2]・重富Ⅳ区瓦窯跡[3]、大田市天王平廃寺[4]である。

（１）中祖遺跡（大田市温泉津町福波）

礎石建物跡に伴う瓦溜出土資料である。瓦は丸瓦と平瓦で構成されており、焼成が良好で青灰色系のものと、不良で灰白色を呈するものがあるが、後者が主体を占める。丸瓦はすべて端部が無段の行基式で、凸面は縄目タタキのち未調整のものと縄目タタキののちケズリ調整されたものの２種類がある。凹面は周縁にケズリ調整を加えるものが多いが、一部にないものもある。平瓦は一枚作りで、凸面に縄目タタキが施されたもののみである。凹面は周縁にケズリが入る。

分析資料は総数50点あり、１～９が須恵質のものを含む焼成良好品、10～50が灰白色を呈する焼成不良品である。１・２と10～12は丸瓦である。このうち１は須恵質で、厚さが１㎝前後と他のものが２㎝前後あるのに対し薄い。12は凹面の側縁にはケズリが入るが、端部のケズリ調整を欠いている。

３～９と13～50は平瓦である。３・５～８は須恵質で、５は胎土や焼成の状況が久本奥窯跡の焼成良好品とよく似ている。６と８は凹面周縁部のケズリが他のものに比べて浅い。35は凸面に縄目タタキののち一部にケズリが加えられ、凹面は糸切りののち指押えが見られるもので、他の平瓦にない特色をもつ。

（２）久本奥窯跡（江津市嘉久志町）

須恵器と瓦を焼いた瓦陶兼用の地下式登り窯で、最終操業に当たる３次床面では丸瓦と平瓦が焼成されている。丸瓦は凸面にケズリ調整があり行基式の基部をもつⅠ類、凸面に縄目タタキがあり行基式のⅡ類、凸面に縄目タタキがあり玉縁式のⅢ類に分類されている。平瓦は凸面に縄目タタキをもつもののみであるが、側部の形状からⅠ類とⅡ類に分けられる。

分析資料は総数25点である。総じて焼成が良好なものが多いが、51～56は須恵質である。51～53と57～63は丸瓦である。凸面は51・60・62がケズリ、58は縄目タタキの後ケズリ、52・53・59・63は縄目タタキののち一部にナデ、61はナデ、57は縄目タタキのち未調整である。凹面は周縁にケズリがある51・60・61・62・63と、ケズリのない52・53・58・59に分けられる。

54～56と64～75は平瓦である。凸面は縄目タタキのもののみであるが、56・65・69のように一部にケズリまたはナデが加えられたものがある。凹面は周縁にケズリが入るもの54～56・64～67・70・72と、入らないもの71・73・74がある。

（３）石見国分寺瓦窯跡（浜田市国分町）

半地下式の平窯で、窯壁に軒瓦や平瓦が使われる。調査が古く焼成品を特定することは難しいようであるが、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・磚が確認されている。丸瓦は玉縁式で縄目タタキののちケズリまたはナデが加えられる。平瓦は１枚作りで凸面に縄目タタキ、凹面は布目圧痕を残すものの他、ケズリののちナデ調整されたものもある。

分析資料は総数19点である。総じて焼成が良好なものが多いが、76～83は須恵質である。84～86は丸瓦である。凸面はいずれも縄目タタキであるが、ケズリまたはナデが加えられている。凹面の周縁部は84は段状になっており、86は未調整である。また、86は厚さが１㎝前後と薄手で、凹面の

布目に綴じ合わせ痕が見られる。

76～83と87～94は平瓦である。凸面は縄目タタキのもののみであるが、76は一部にナデが加えられる。凹面は側縁部が両面から面取りされた76・80・82・83・94と、上面にケズリが入るもの88、ケズリのないもの79に分けられるが、端部が残るものはいずれも浅くケズリが加えられる。また、79と94は厚さが1㎝前後と薄手である。

（4）重富Ⅳ区瓦窯跡（浜田市旭町）

地下式登り窯で、軒丸瓦・丸瓦・平瓦が焼成されている。丸瓦は行基式のみで凸面はハケメまたはナデ調整が加えられており、粘土円筒からの分割には糸切り技法が使われる。平瓦は桶巻作りで、凸面がナデ調整される一類とハケメ調整される二類からなり、凹面は布目圧痕があるが一部にケズリ調整されたものも含まれる。

分析資料は総数20点で、焼成が良好なものと不良なものがあり、95～100は須恵質である。101と102は丸瓦である。101は凸面がハケメ調整、凹面と端部に糸切り痕を残す。凹面の周縁部にケズリは加えられていない。102は軒丸瓦片で凸面はハケメ、凹面はナデである。

95～100と103～114は平瓦である。凸面はケズリ調整される95・96・105～109、ケズリののちナデ調整される97・98、ナデ調整の99、ハケメが入る100・110～112、ハケメののちケズリまたはナデが加えられる113・114がある。凹面は107・110で周縁部にケズリの入るものがあるが、その他のものにはない。また、109は凹面にもハケメ調整が見られる。

（5）天王平廃寺（大田市波根町）

塔跡とその西側で建物跡が確認された寺院跡である。塔跡は石積みの基壇をもち、心礎の他、北辺と西辺で階段が明らかになっており、銅製の水煙も出土している。瓦は丸瓦と平瓦が大半を占めるが、軒丸瓦・隅瓦・文字瓦も含まれる。丸瓦は90％以上が端部に段のない行基式であるが、玉縁式も含まれる。凸面はケズリ調整されるものが多いが、ハケメがあるものもある。平瓦は桶巻き作りで、凸面には平行タタキ・格子タタキ・縄目タタキがある。

分析資料は総数26点で、焼成が良好なものと不良なものがあり、116～131は須恵質である。115～117は丸瓦である。凸面はいずれもケズリののちナデ調整されている。117は側縁部が遺存するが、浅いケズリが見られる

118～140は平瓦である。凸面は縄目タタキをもつ118～124・132～136、格子タタキの125～127・137～139、平行タタキの128～130・140がある。凹面は周囲にケズリを入れる118・119・125・126・129の他、ケズリのないもの131・134・136・138・140、両面から面取りされた132・135が見られる。

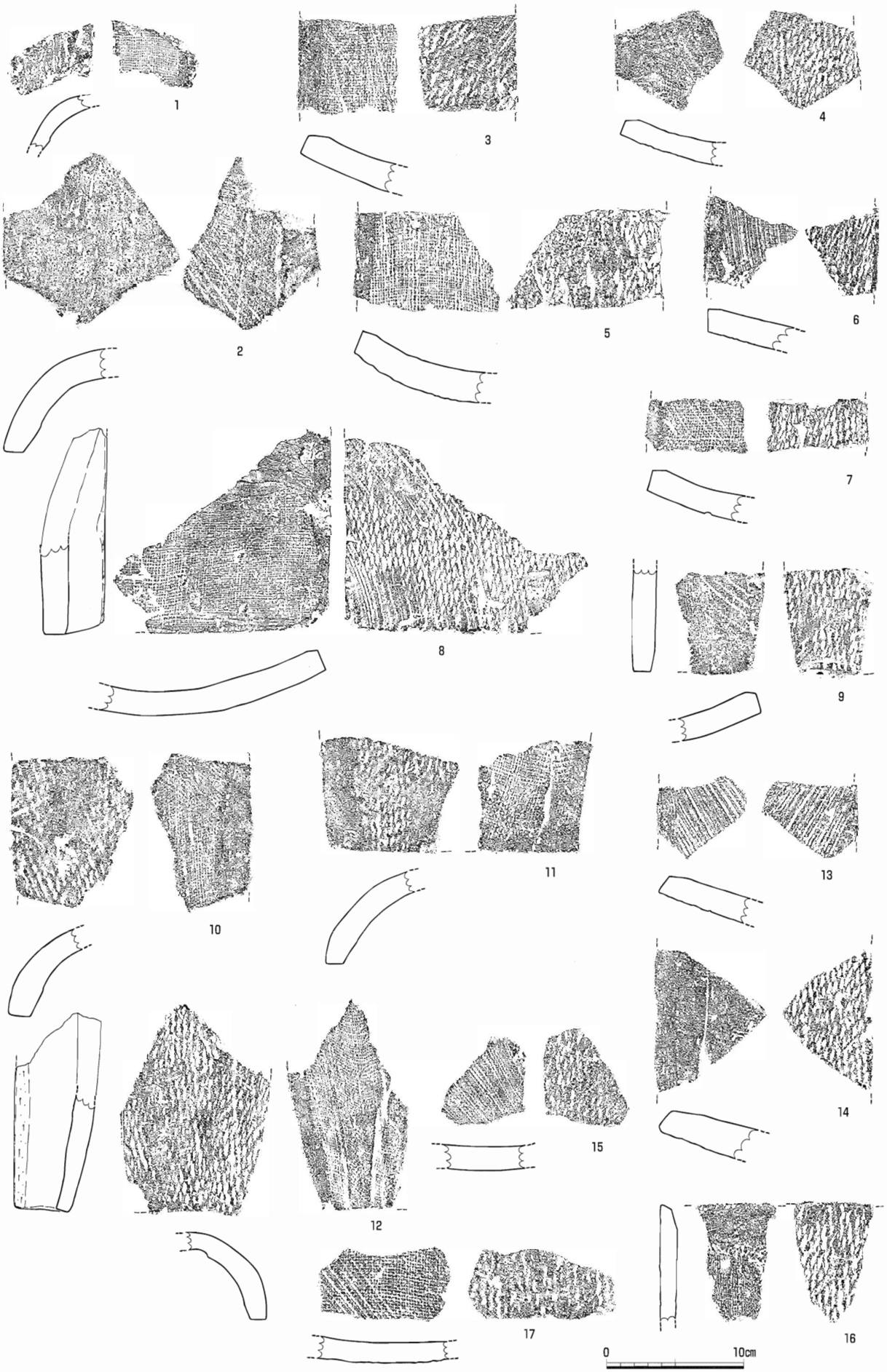
註

(1)島根県教育委員会『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　1995年

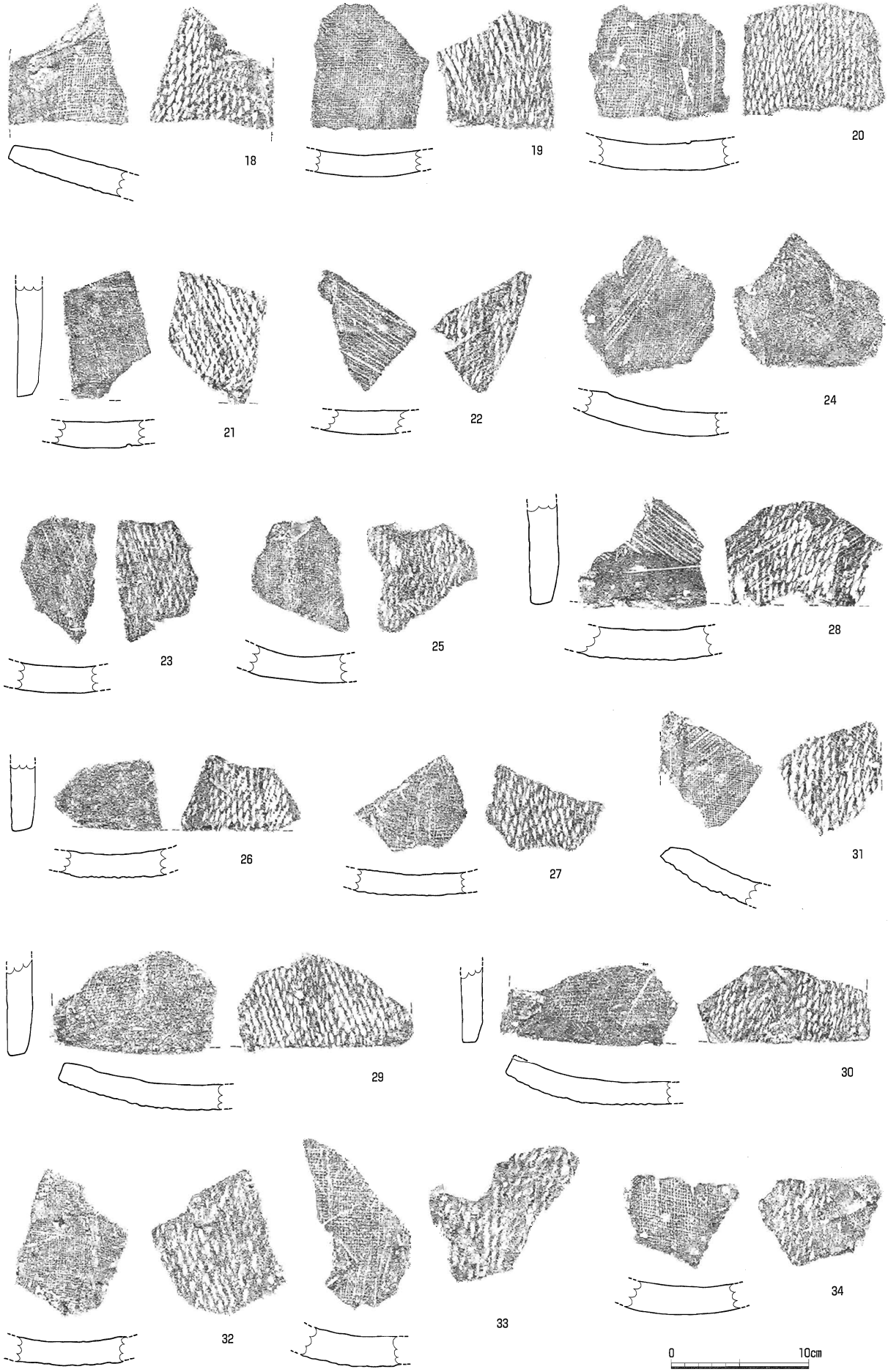
(2)浜田市教育委員会『史跡石見国分寺跡・県史跡石見国分尼寺跡』2006年

(3)島根県教育委員会『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ　1992年

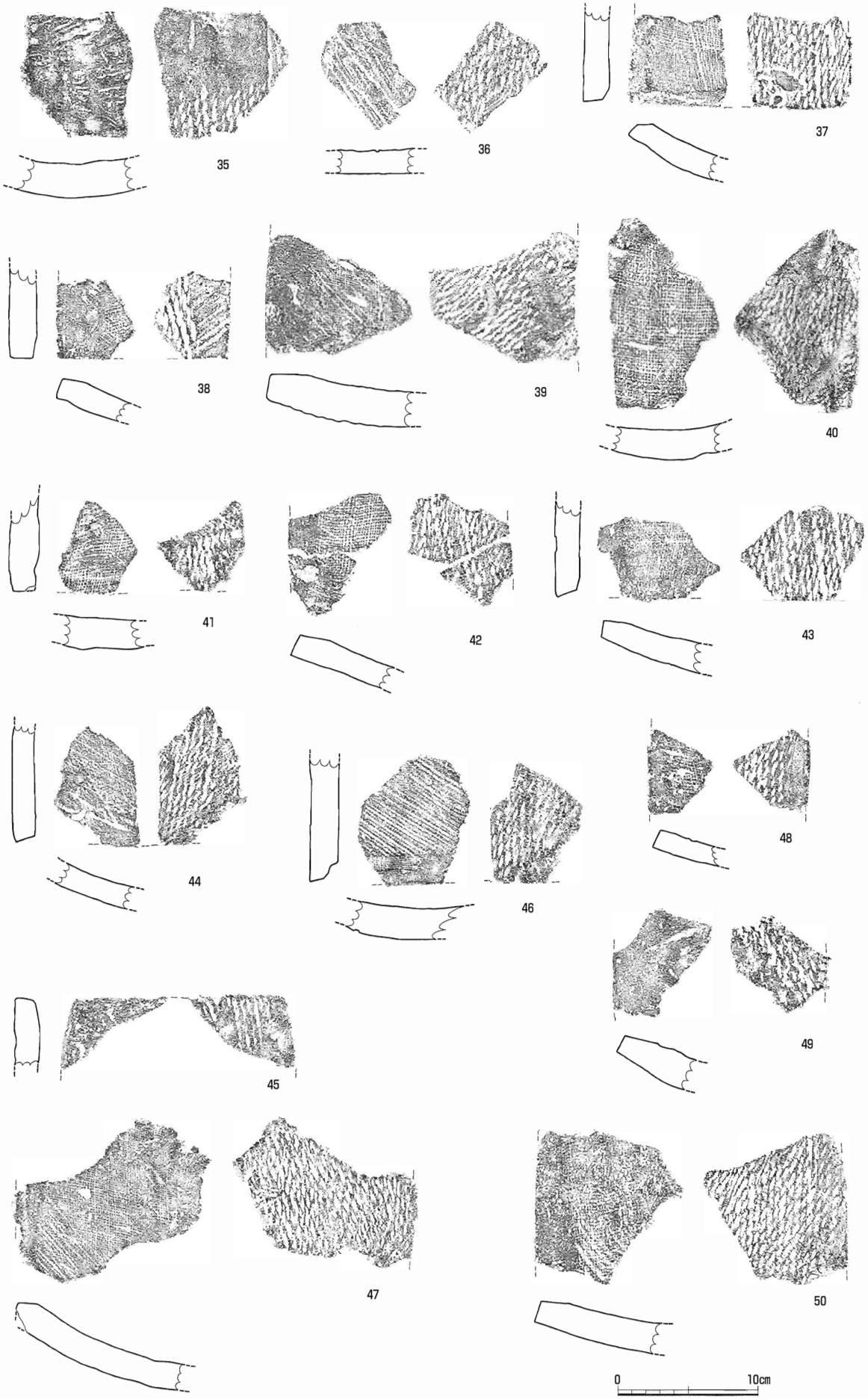
(4)島根県教育委員会「天王平廃寺」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅱ集　1970年



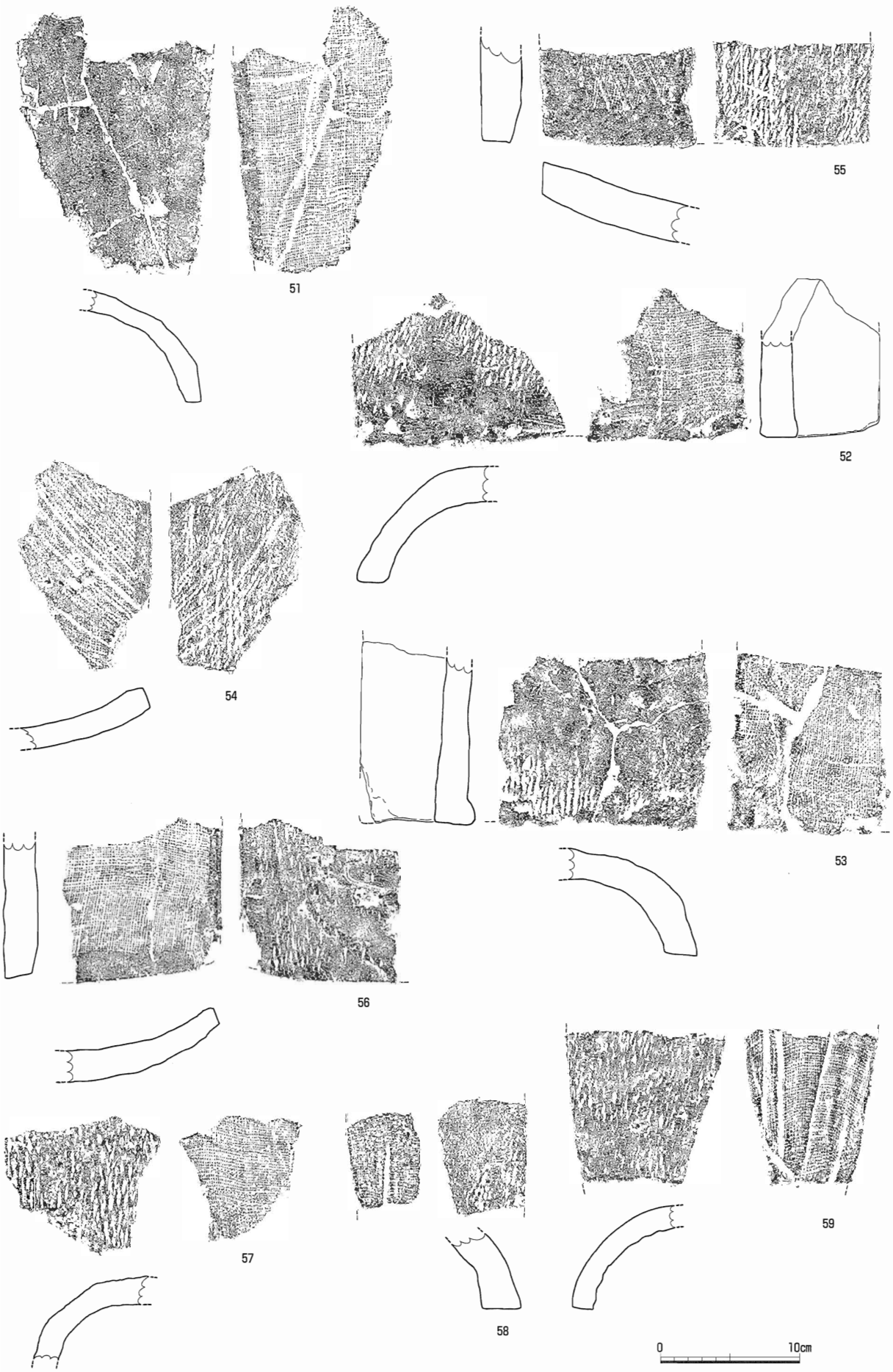
第84図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図 1



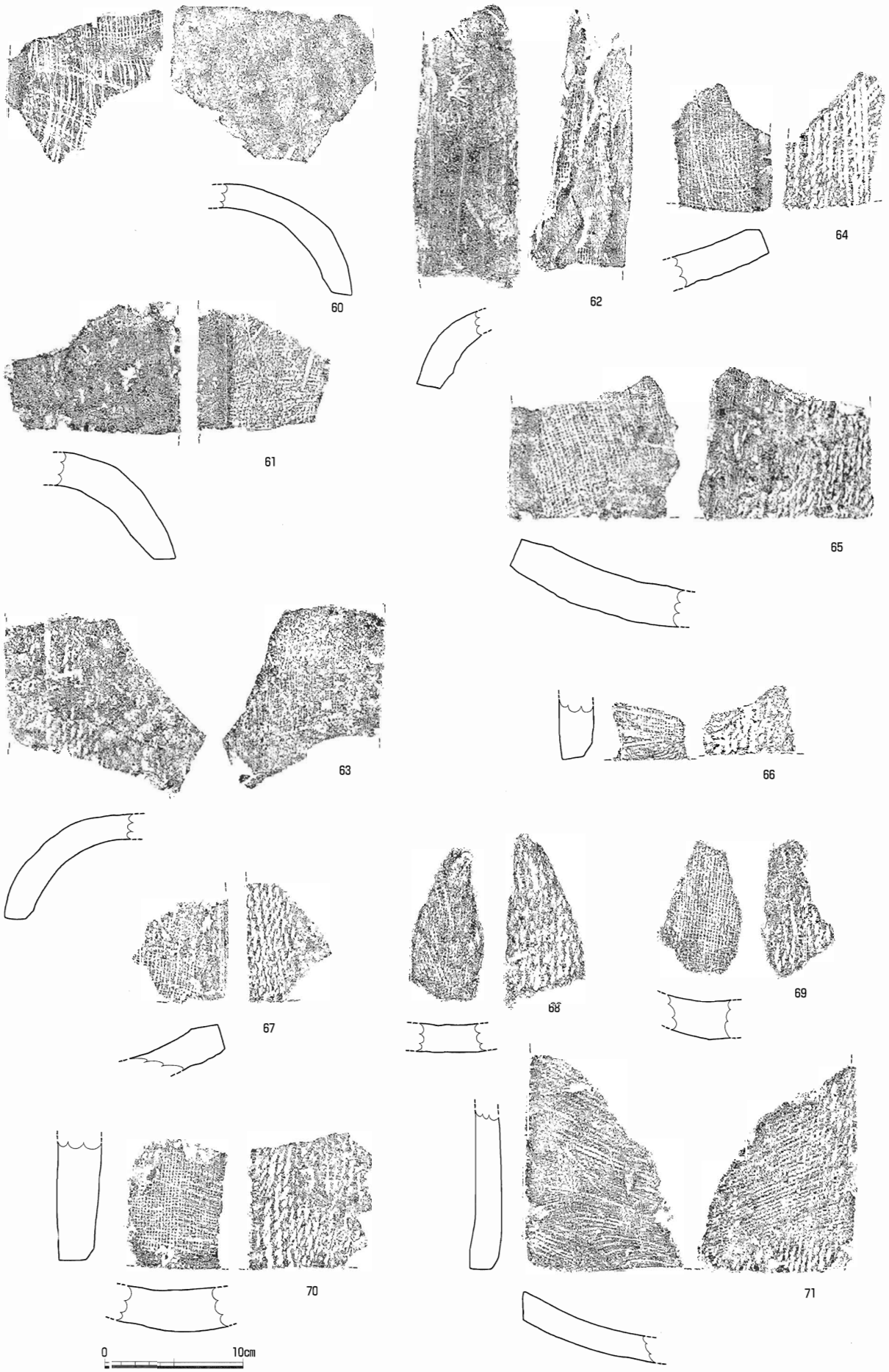
第85図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図２



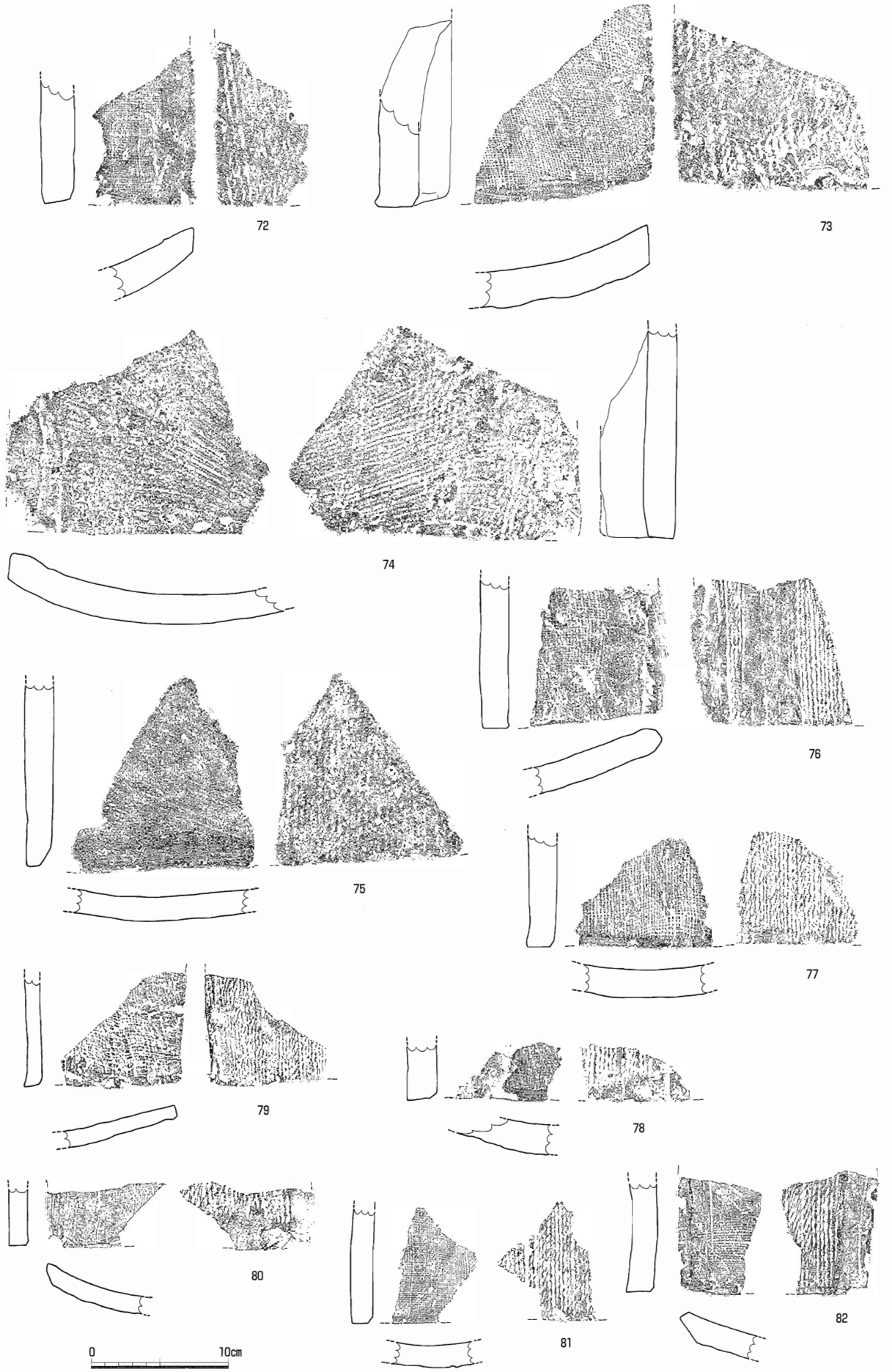
第86図　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料実測図 3



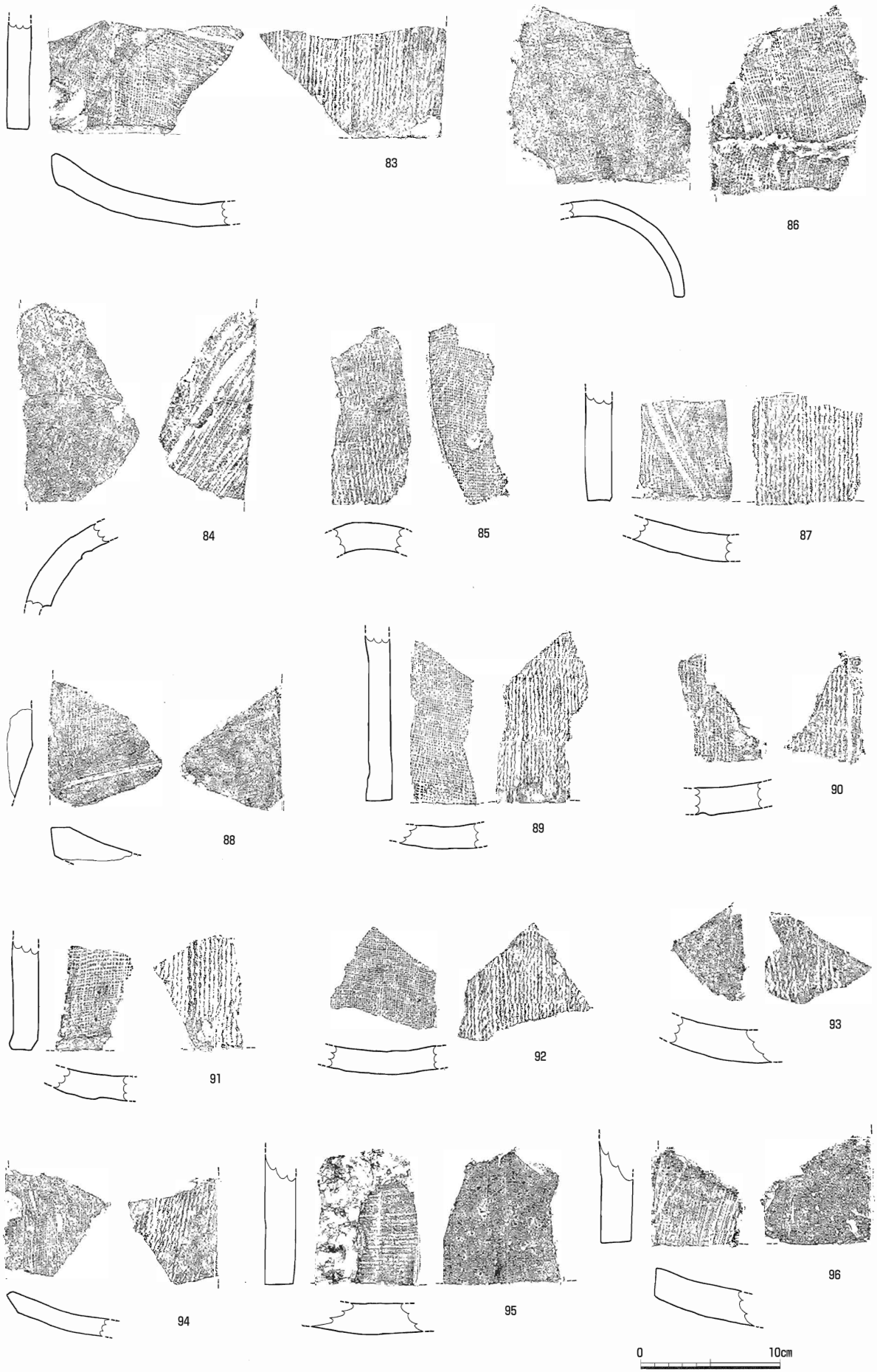
第87図　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料実測図１



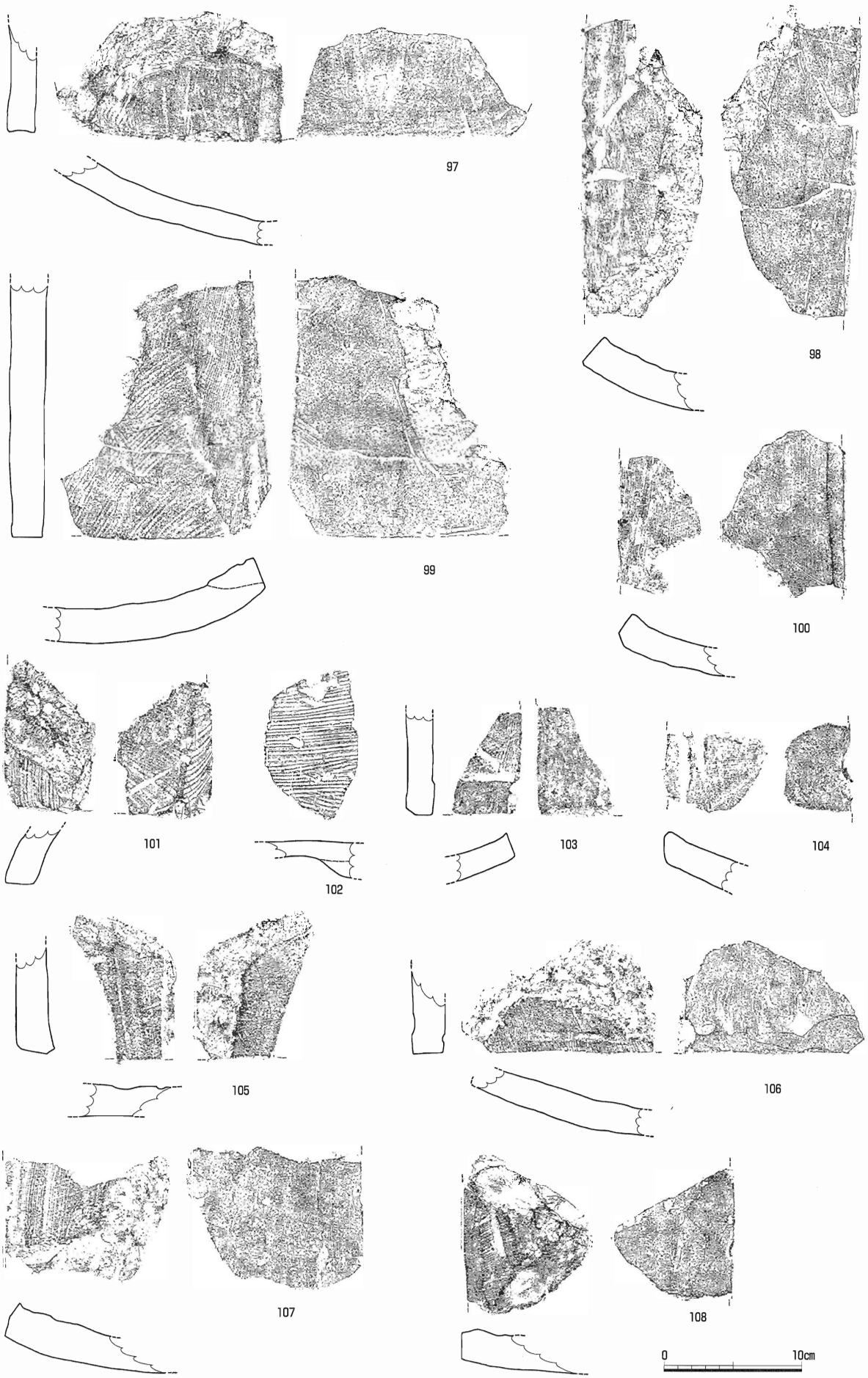
第88図　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料実測図 2



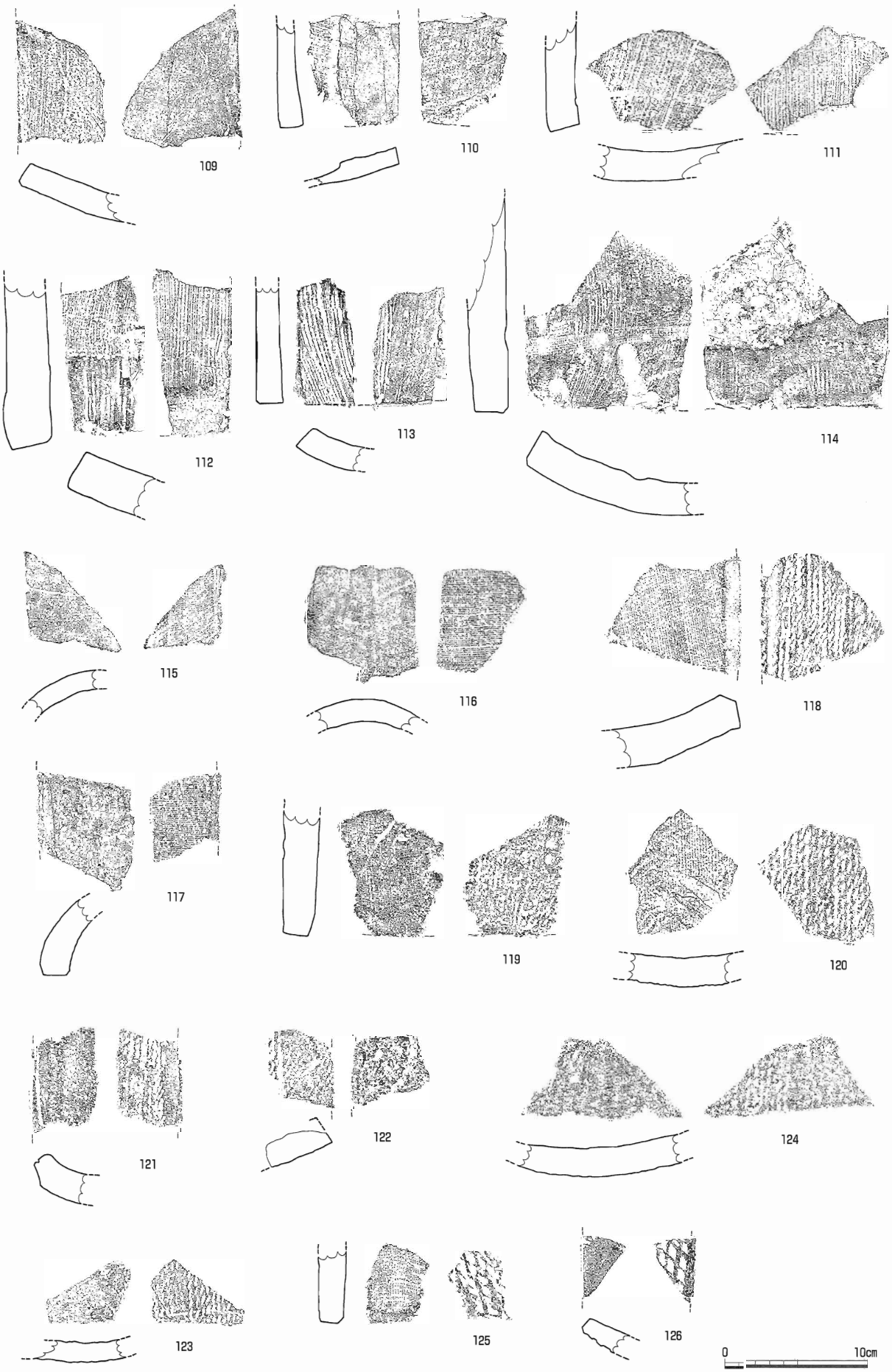
第89図　久本奥窯跡・石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図



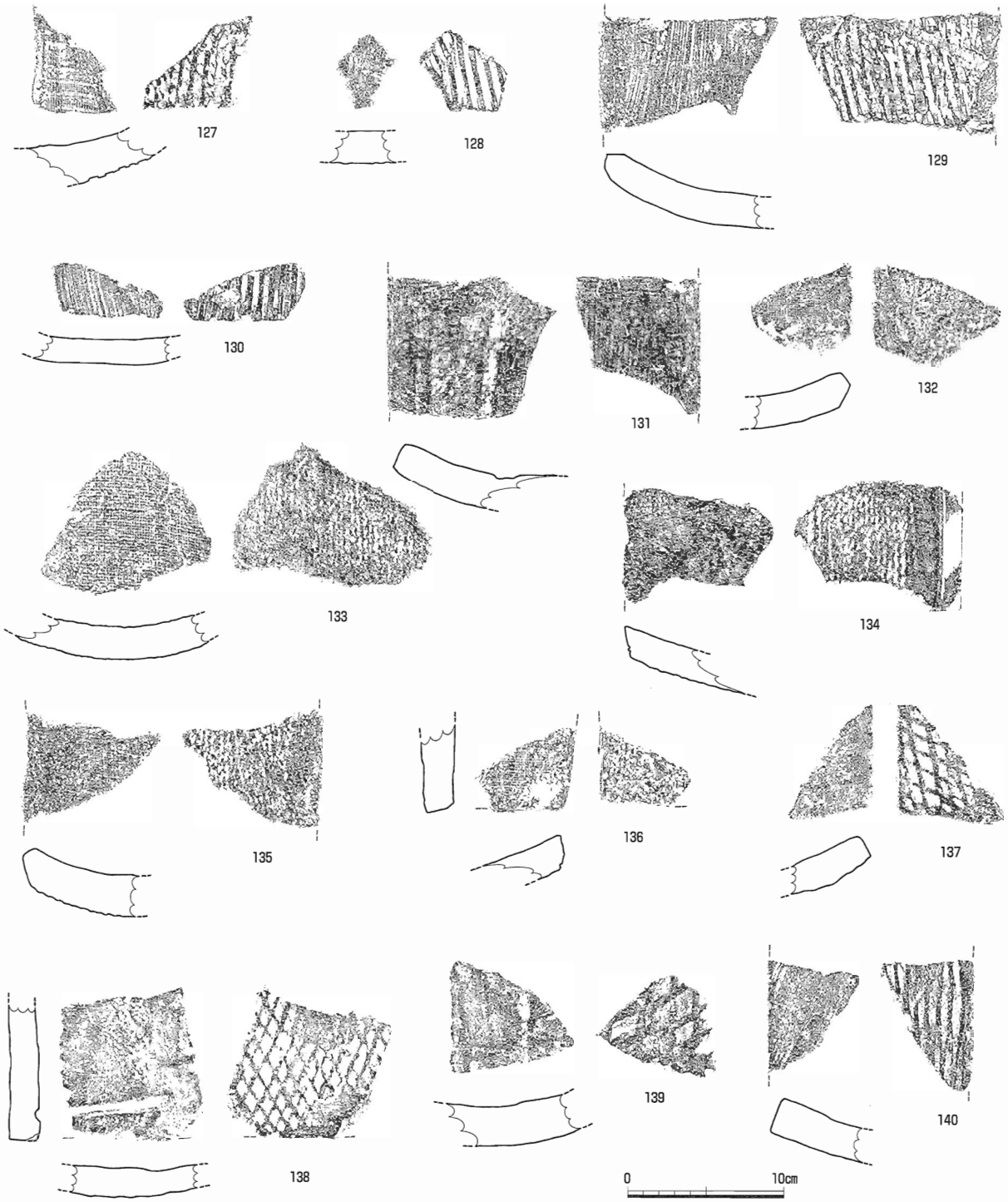
第90図　石見国分寺瓦窯跡・重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図



第91図　重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料実測図



第92図　重富瓦窯跡・天王平廃寺出土瓦胎土分析資料実測図



第93図　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料実測図

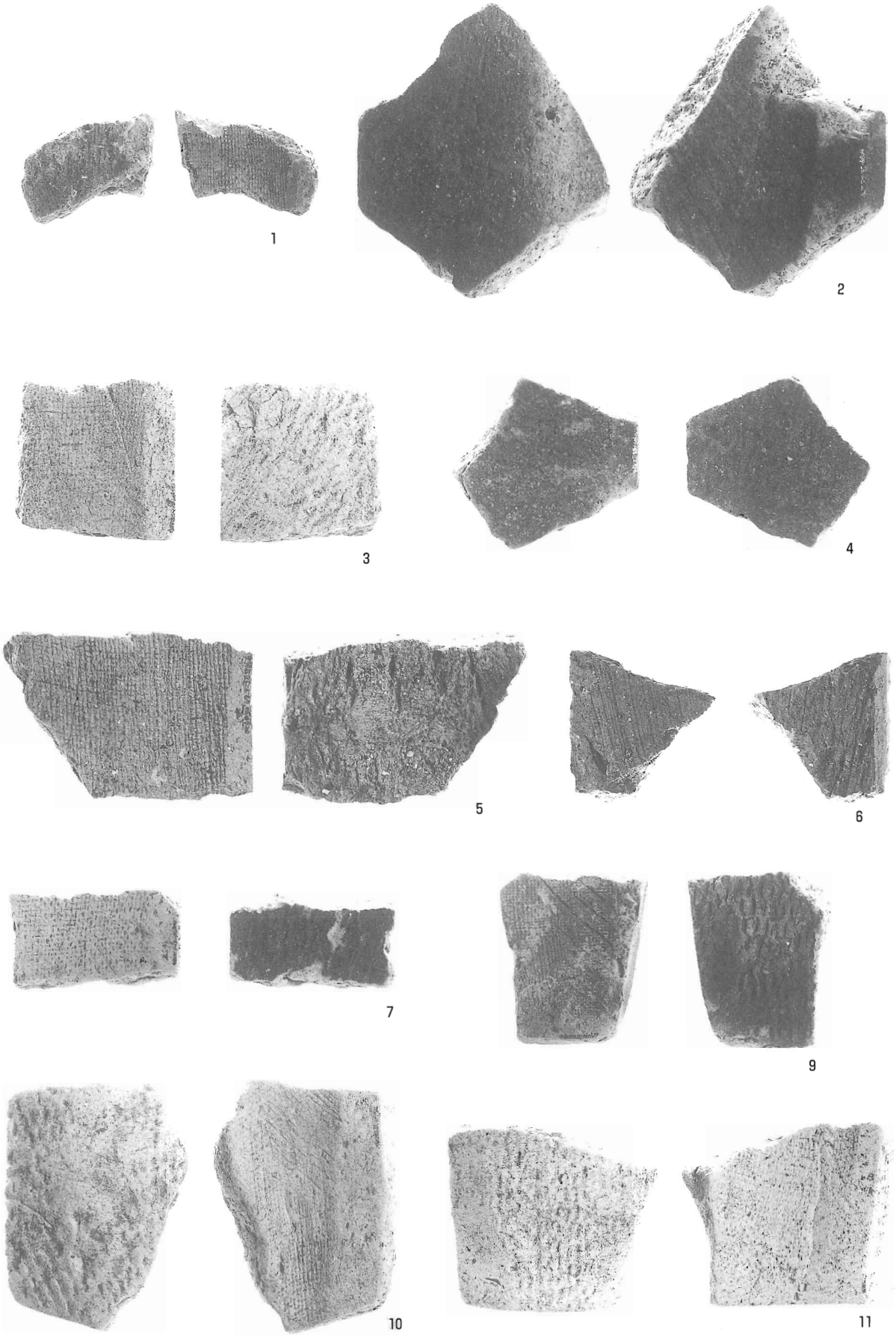
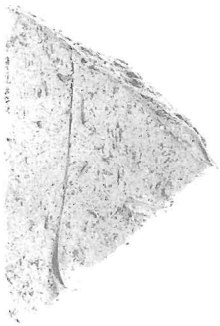


写真5　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料1

8

12



14

13

15

16

17

写真６　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料２

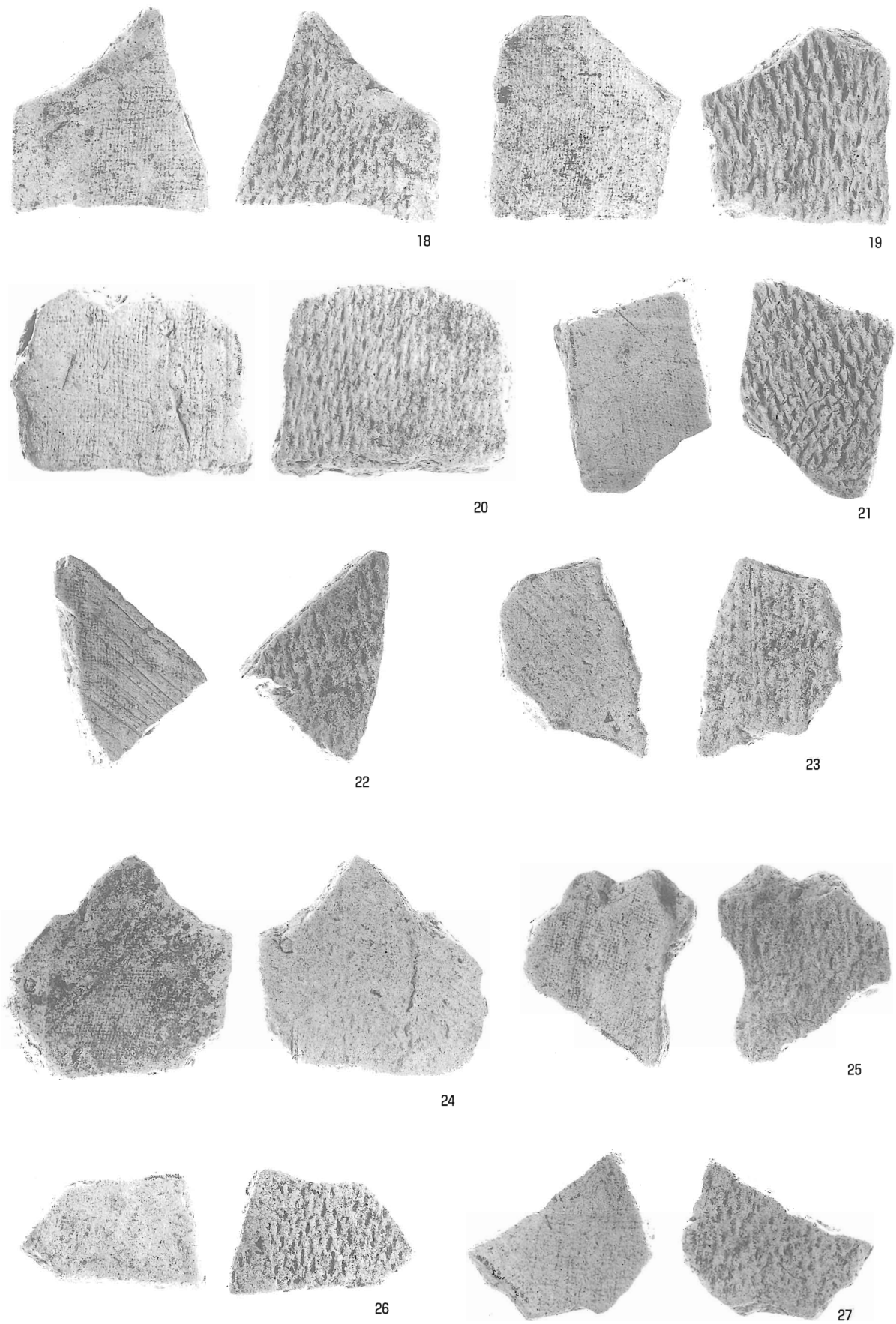


写真7　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料3

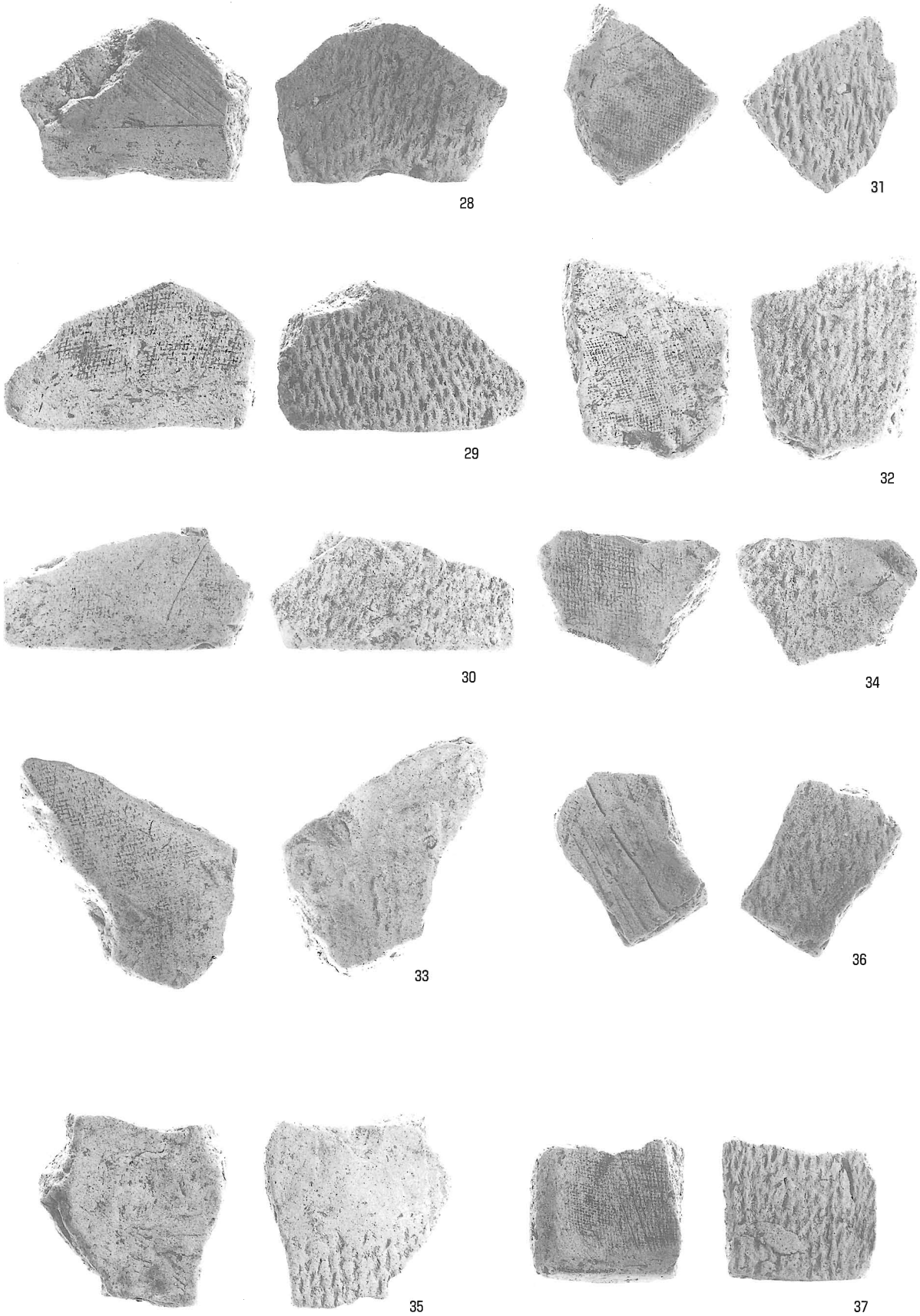
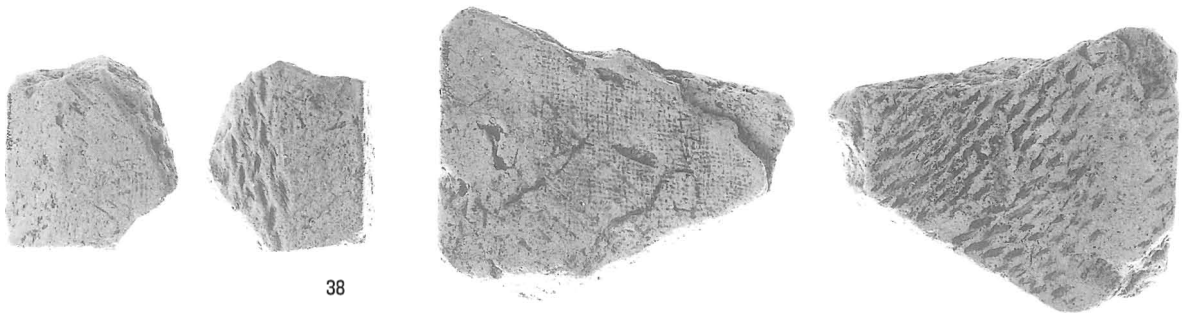
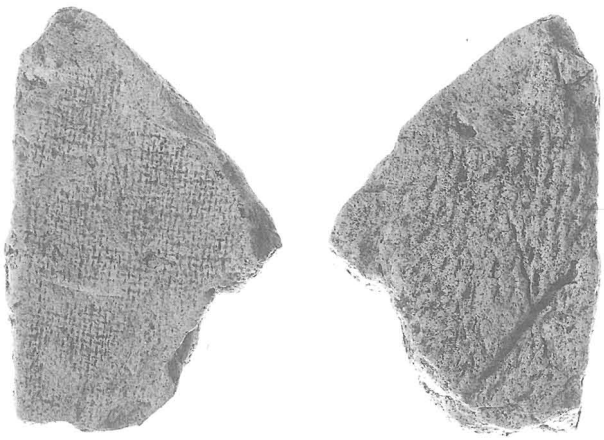


写真 8　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料 4

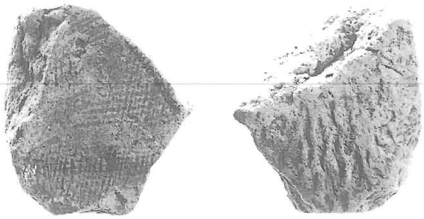


38

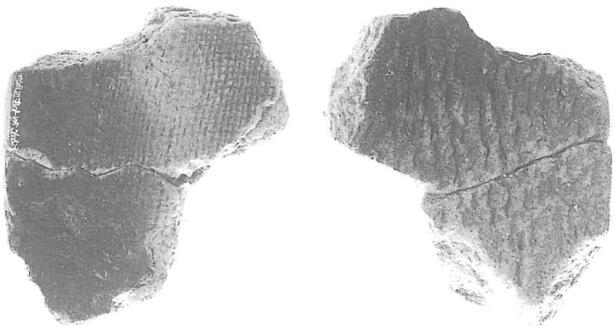
39



40

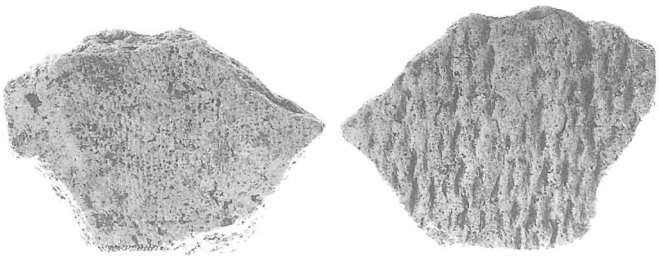


41

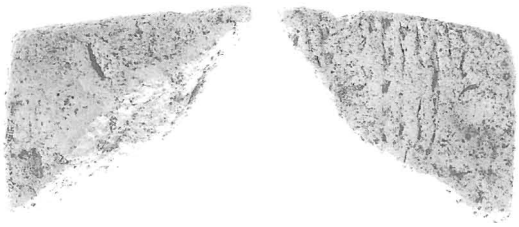


42

44



43



45

写真 9　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料 5

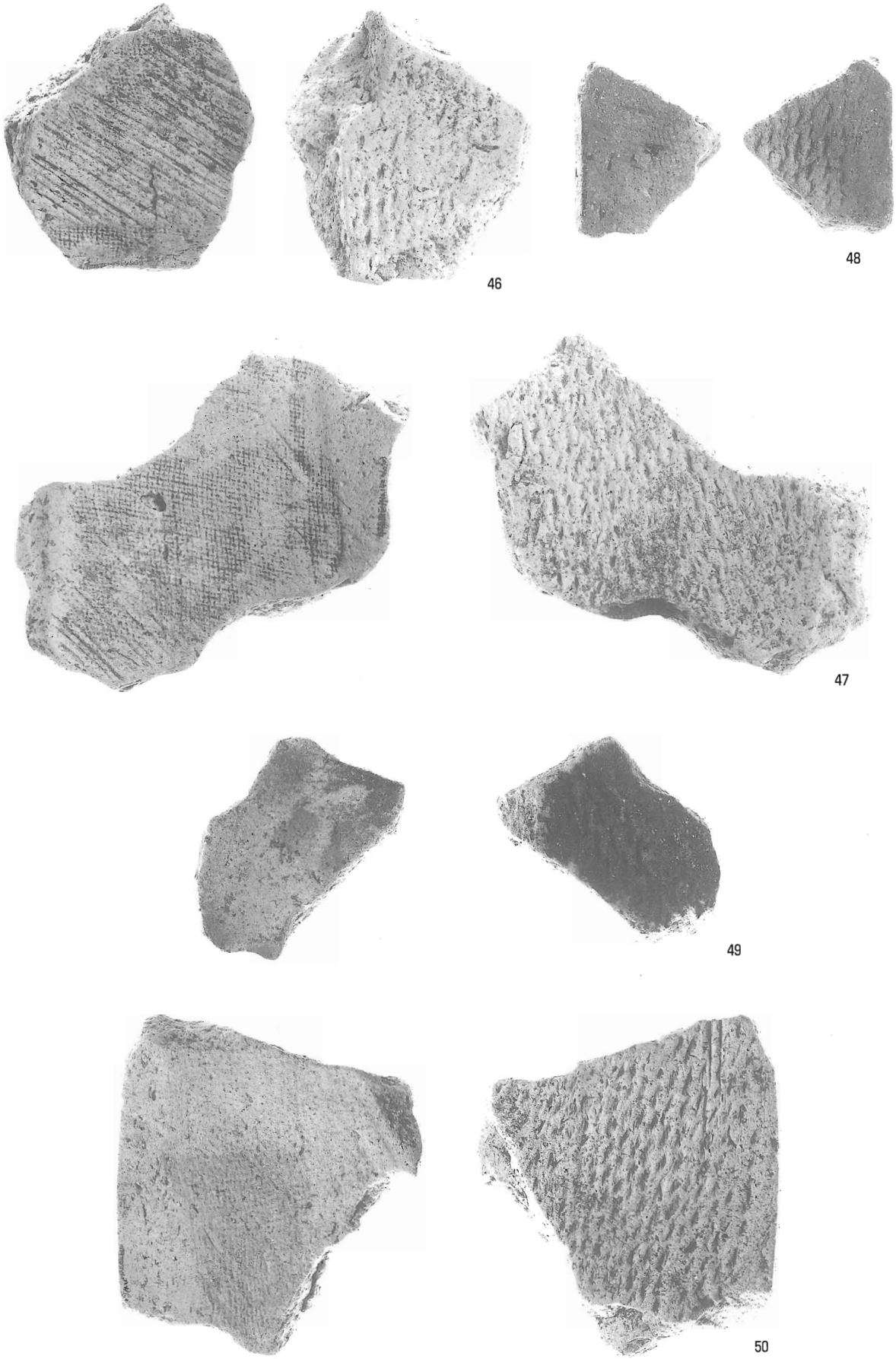
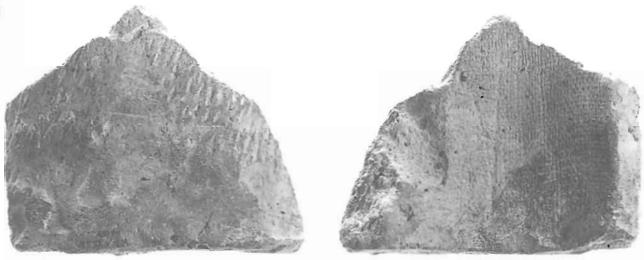
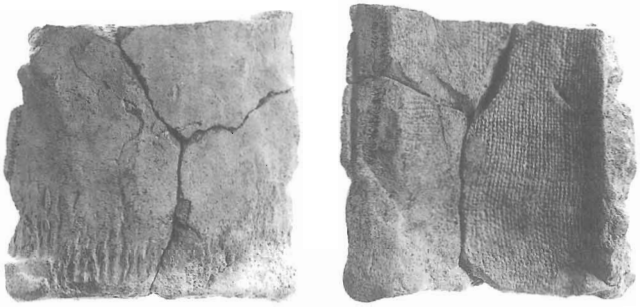


写真10　中祖遺跡出土瓦胎土分析資料 6

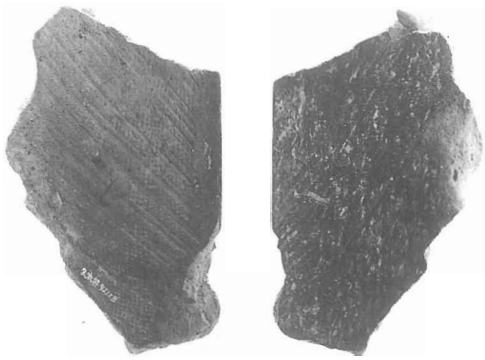
51



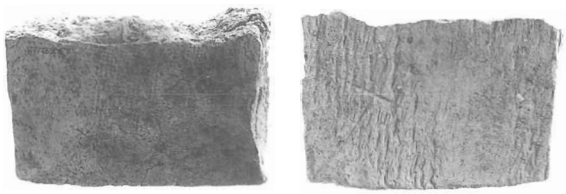
52



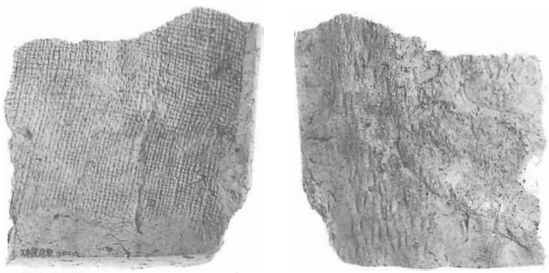
53



54

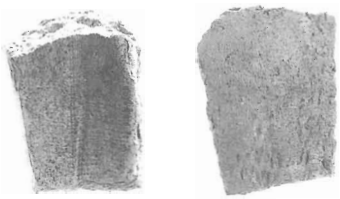


55



56

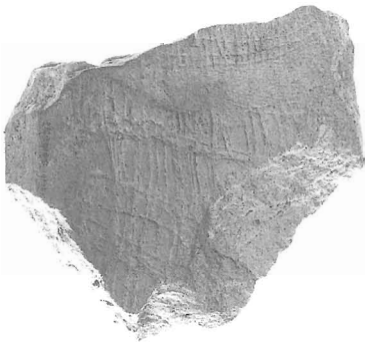
57



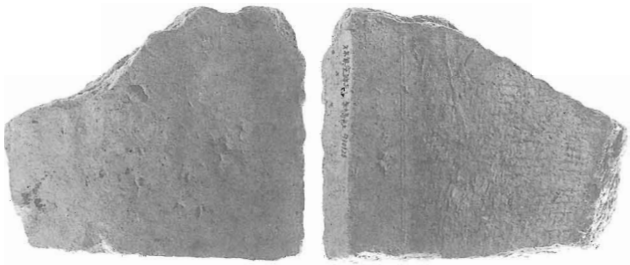
58

写真11　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料 1

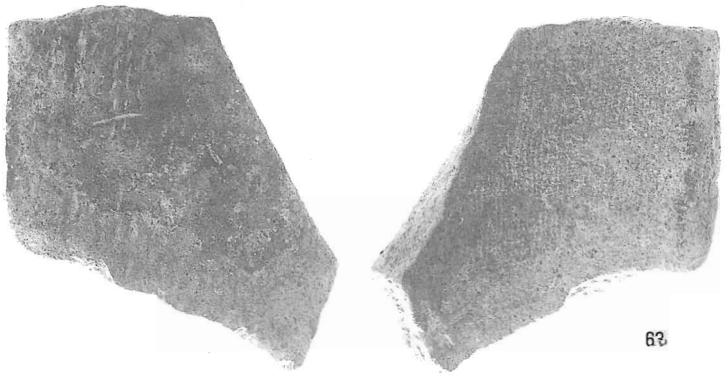
59



60



61

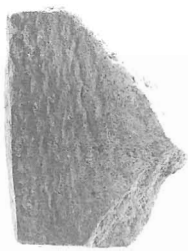


63

62

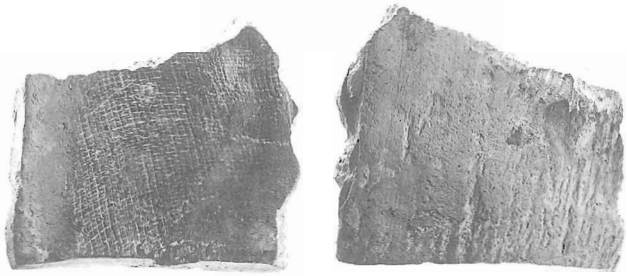
64

66



67

写真12　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料 2

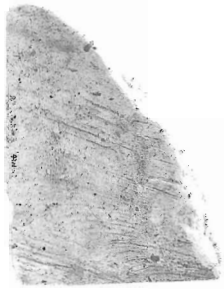


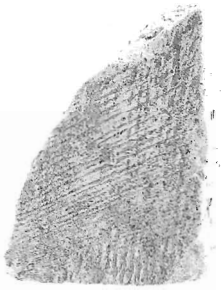
65

68

69

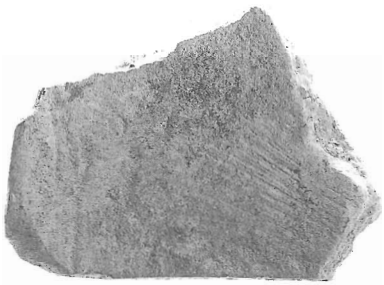
70



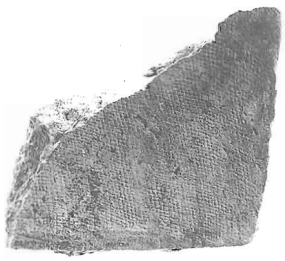


71

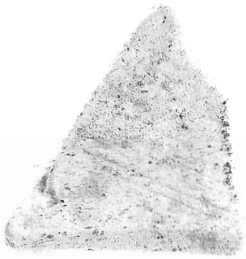
72



74

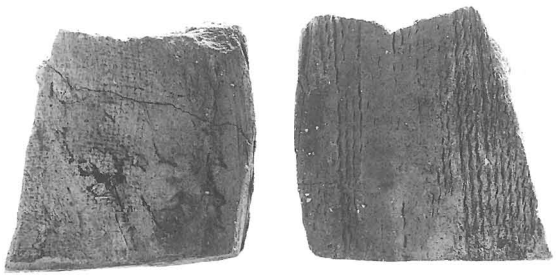


73



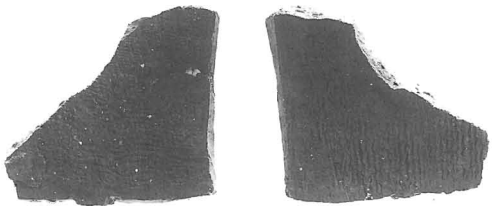
75

写真13　久本奥窯跡出土瓦胎土分析資料３

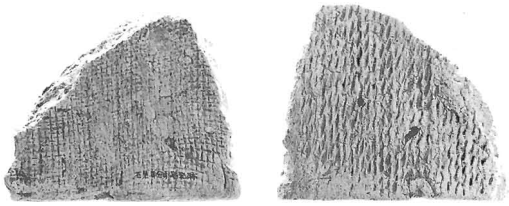


76

78

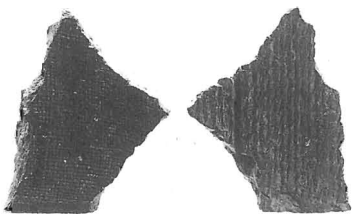


79

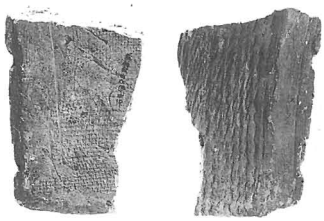


77

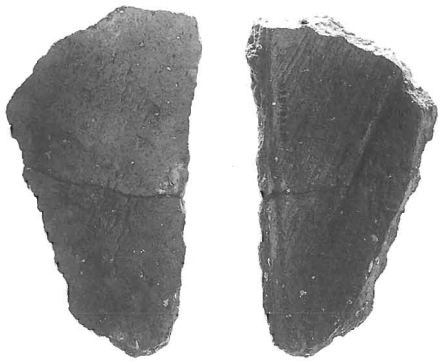
80



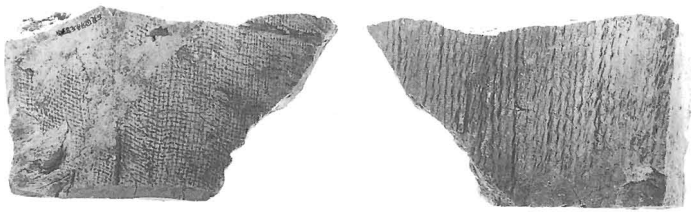
81



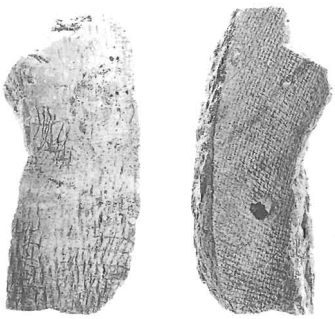
82



84

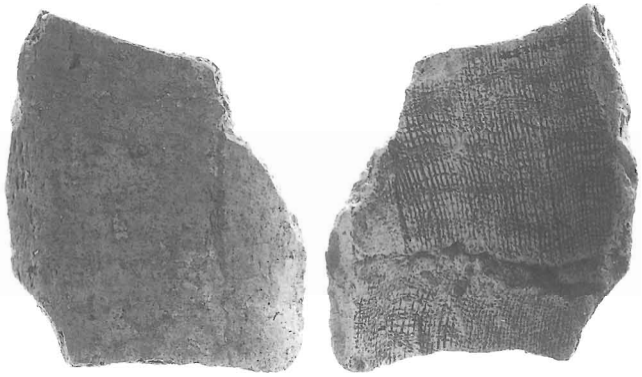


83



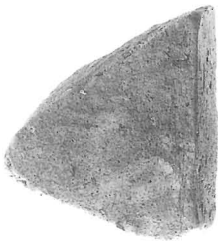
85

写真14　石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料１



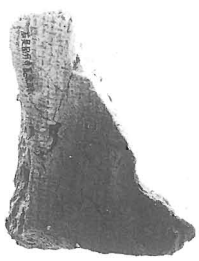
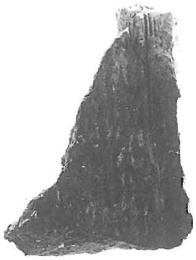
86

87



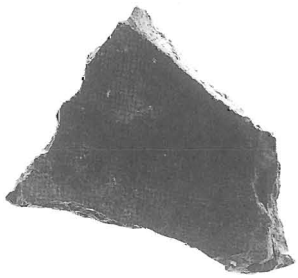
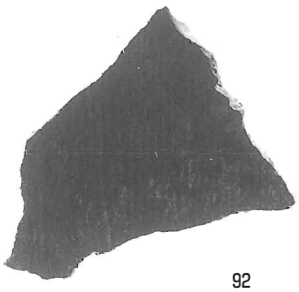
88

89

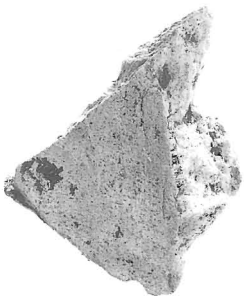



90

91

92



93

94

写真15　石見国分寺瓦窯跡出土瓦胎土分析資料２

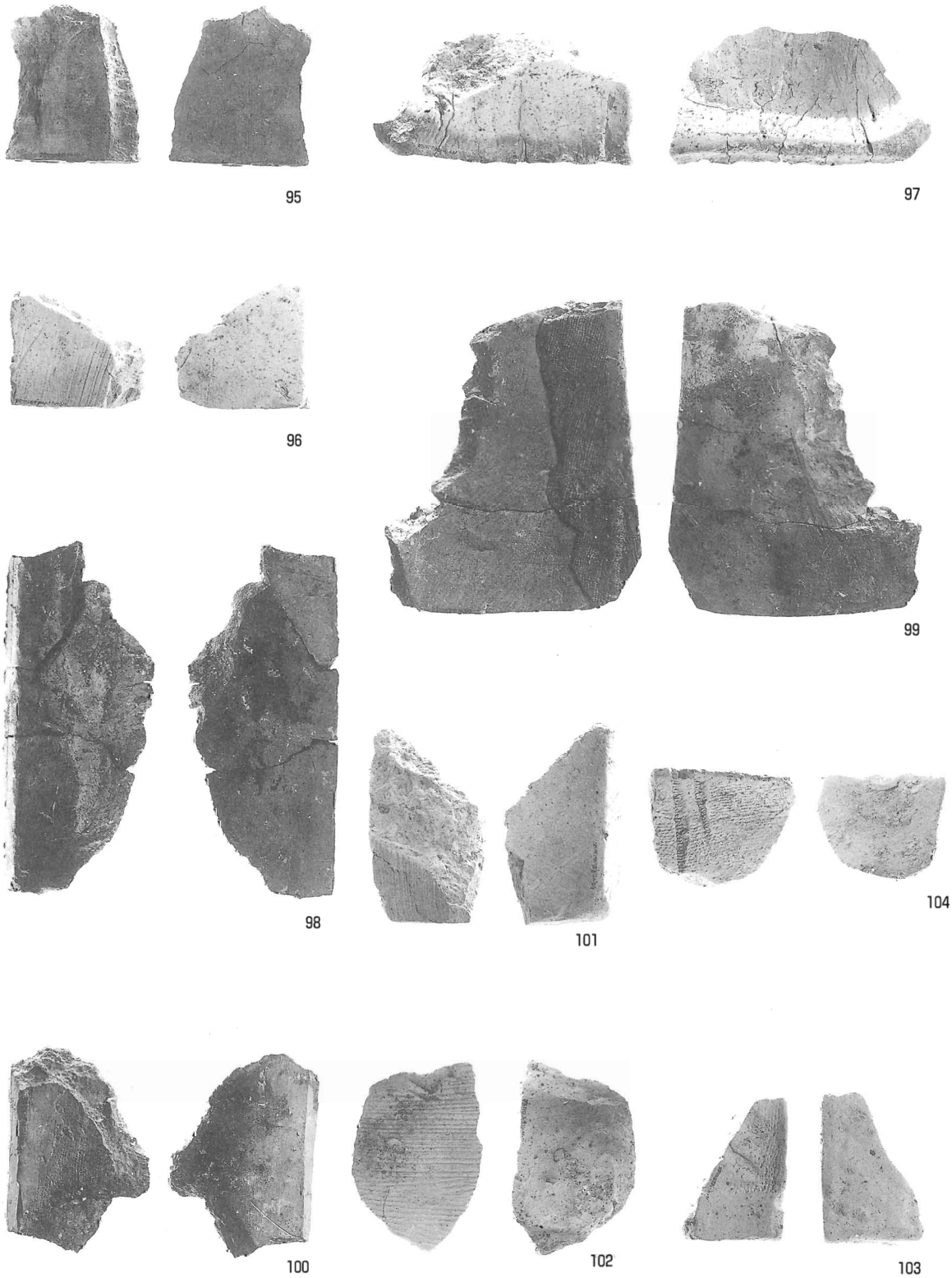


写真16　重富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料 1

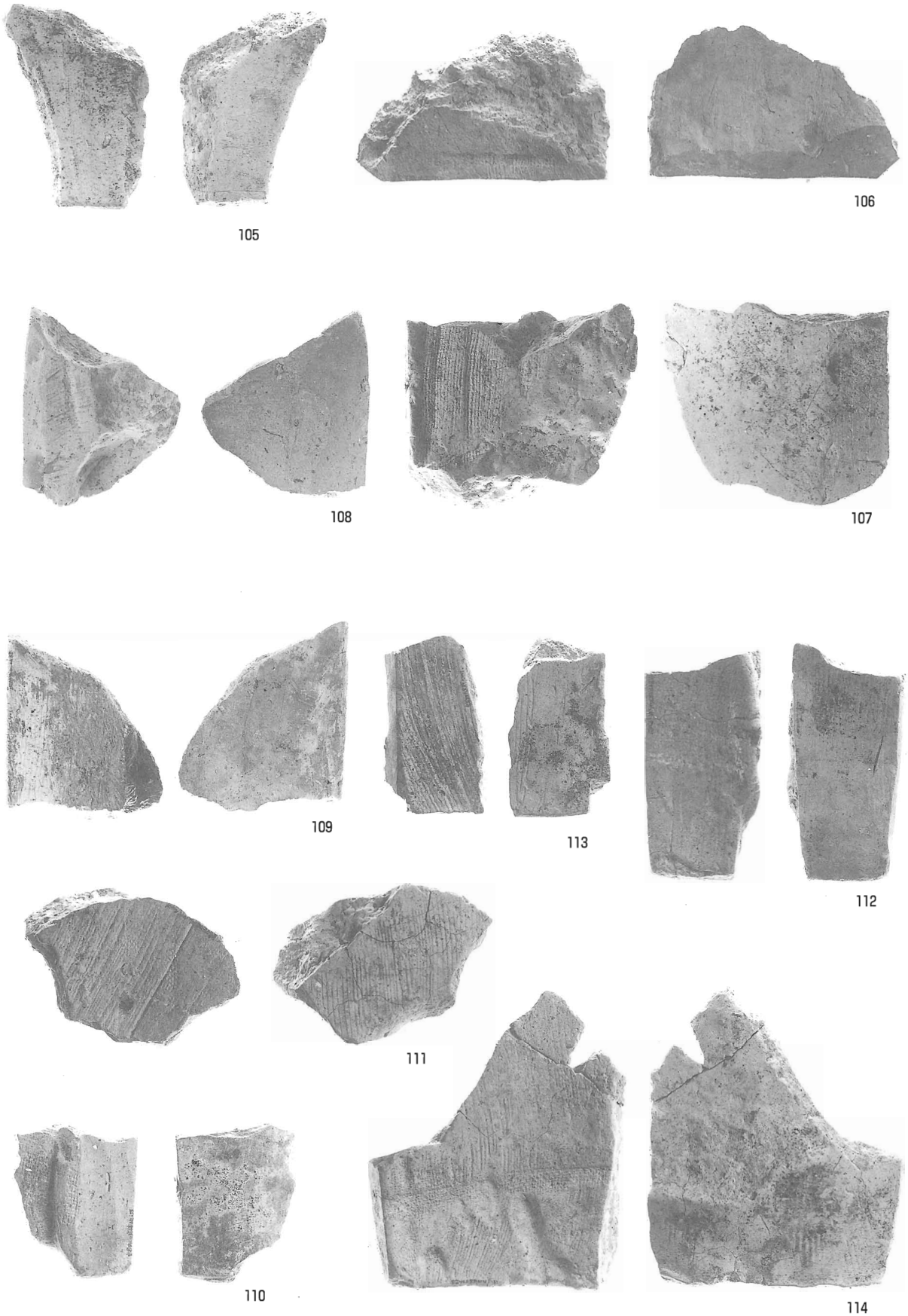


写真17　量富瓦窯跡出土瓦胎土分析資料 2

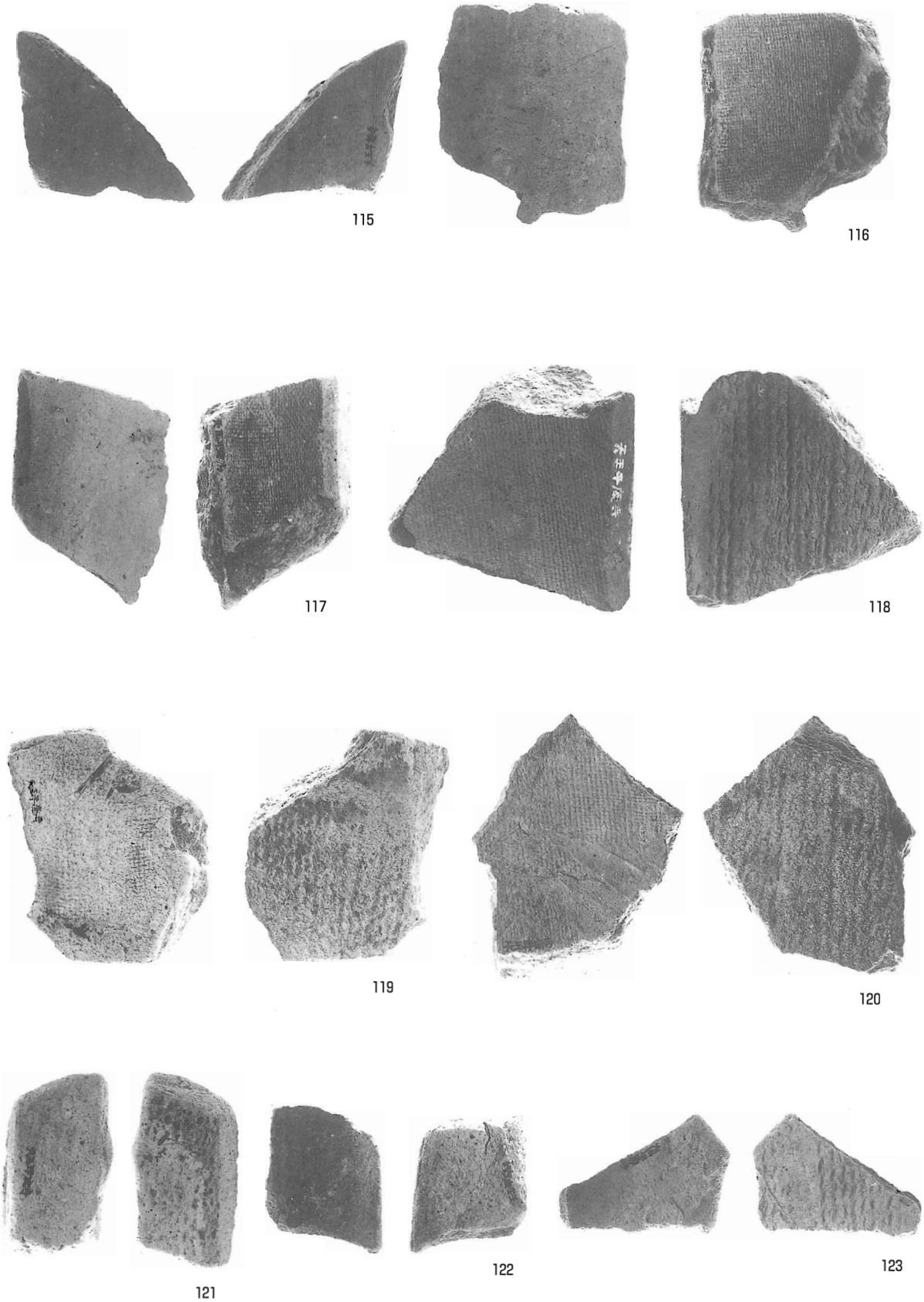
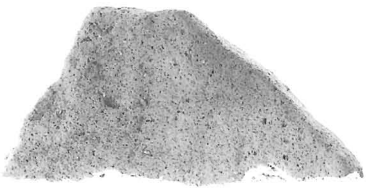
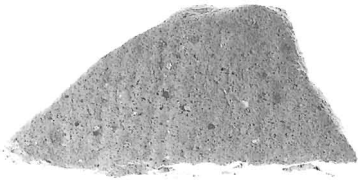


写真18　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料 1

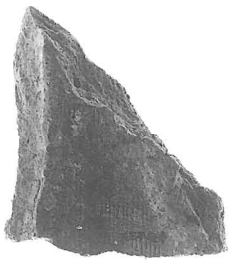


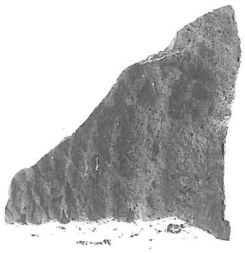


124

125

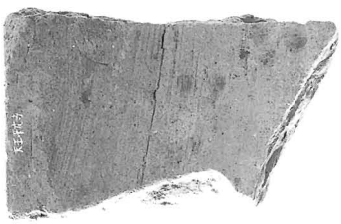
126





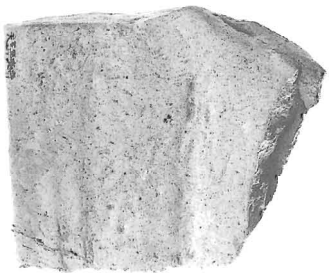
127

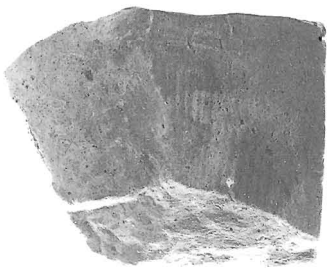
128



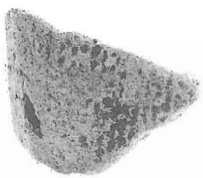
129

130



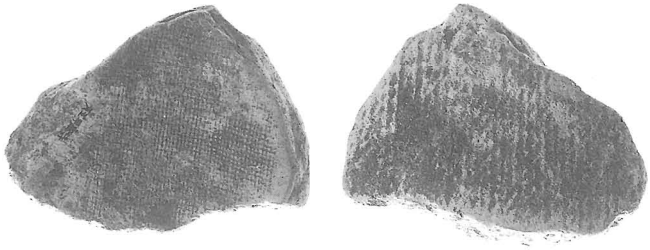


131

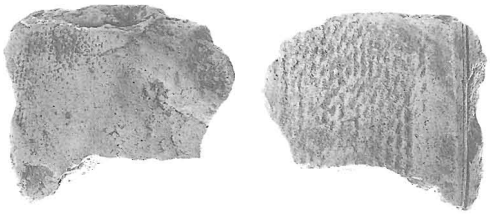


132

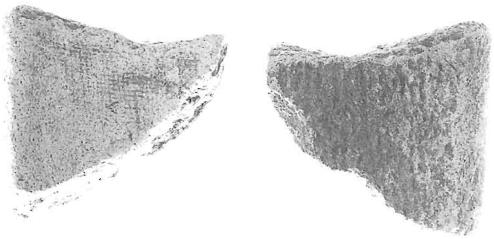
写真19　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料２



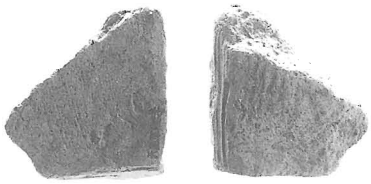
133



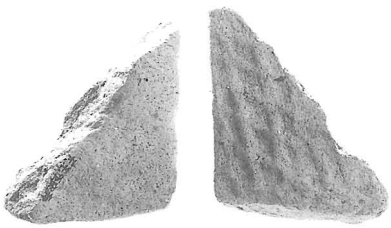
134



135

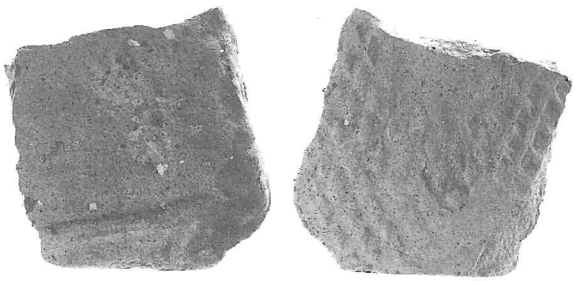


136

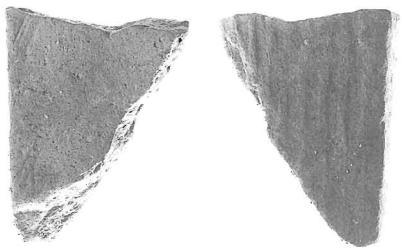


137

139



138



140

写真20　天王平廃寺出土瓦胎土分析資料 3

第３節　中祖遺跡出土瓦の胎土分析

白石　純（岡山理科大学自然科学研究所）

１．分析目的

この胎土分析では中祖遺跡の瓦葺礎石建物跡から出土している瓦（丸瓦・平瓦）の自然科学的な胎土分析を実施し、以下の瓦窯跡や遺跡出土瓦と比較することで中祖遺跡出土瓦の生産地を推定することが目的である。産地推定のために比較した遺跡は、久本奥窯跡（江津市嘉久志町）、石見国分寺瓦窯跡（浜田市国分町）、重富Ⅳ区瓦窯跡（浜田市旭町）、天王平廃寺（大田市波根町）の４遺跡である。

２．分析方法と試料

分析方法は、蛍光Ｘ線分析法と実体顕微鏡による土器表面の胎土観察の2つの方法で検討した。

蛍光Ｘ線分析法では、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から分析試料の違いについて調べた。測定した成分（酸化物）は、SiO_2、TiO_2、Al_2O_3、Fe_2O_3、MnO、MgO、CaO、Na_2O、K_2O、P_2O_5の10成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計（ｾｲｺｰｲﾝｽﾂﾙﾒﾝﾂ社製SEA2010L）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。従って、一部破壊分析である。

実体顕微鏡による土器表面の観察では、土器の胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、多量・中量・少量・まれに、の４段階で表した。

分析試料は、第18表に示した140点である。なお各遺跡の分析点数および種類は、中祖遺跡50点（丸・平瓦）、久本奥窯跡25点（丸・平瓦）、石見国分寺瓦窯跡19点（丸・平瓦）、重富Ⅳ区瓦窯跡20点（丸・平瓦）、天王平廃寺26点（丸・平瓦）である。

３．分析結果

（１）蛍光Ｘ線分析結果について

この分析では測定した10成分のうち、各遺跡で顕著な差が見られたのは、SiO_2、Al_2O_3、TiO_2、CaO、K_2Oの５成分であった。この５成分を用いて散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

その結果、第94図K_2O-CaO散布図では瓦の生産地である重富Ⅳ区・久本奥・石見国分寺の各窯跡がCaO量05%以下の低いところに集中し、各窯跡ともほぼ同じ分布域にまとまり識別が困難であった。また重富Ⅳ区と久本奥の瓦はK_2O量の違いで２つに胎土に分類できた。次に消費地遺跡の中祖遺跡と天王平廃寺出土の瓦の分布をみると、中祖遺跡の瓦は重富Ⅳ区・久本奥・石見国分寺が重複する領域に分布し、天王平廃寺の瓦は、どの領域にも入らなかった。なお天王平廃寺の瓦はK_2O・CaOの違いで３つの胎土に分類される。

第95図TiO_2-CaO散布図では、重富Ⅳ区・久本奥・石見国分寺の各瓦窯がTiO_2量の違いでほぼ識別が可能である。そして中祖遺跡の瓦は、久本奥と重富Ⅳ区が重なる領域に分布した。なお天王平廃寺の瓦はどの領域にも入らず、CaO量の違いで３つの胎土に分類された。

第96図SiO_2-Al_2O_3散布図では、重富Ⅳ区・久本奥・石見国分寺の各瓦窯がAl_2O_3量20%以上に分布し、ほぼ分布域がまとまる。それに対して中祖遺跡と天王平廃寺はAl_2O_3量が20%以下に分布する傾向がみられた。特に中祖遺跡は重富Ⅳ区・久本奥・石見国分寺の各瓦窯と明らかに識別が可能であった。

（2）実体顕微鏡観察結果について

中祖遺跡、久本奥窯跡、石見国分寺瓦窯、重富Ⅳ区瓦窯、天王平廃寺出土瓦の胎土を観察した結果、各遺跡とも以下のような特徴ある胎土であった。

〈中祖遺跡〉

1㎜前後の石英と白色粒を多量に含み、0.5㎜以下の赤色粒を含む（写真21-1・2）。

〈久本奥窯跡〉

1㎜以下の石英を多量に含み、2㎜以下の砂岩（円礫）？を少量含む（写真21-3）。

〈石見国分寺瓦窯〉

0.5㎜以下の石英を多量に含み、2㎜前後の片岩をまれに含んでいる（写真21-4）。

〈重富Ⅳ区瓦窯〉

0.5㎜以下の石英と火山ガラスを含み、素地土には非常に精良な粘土が使用されている（写真21-5）。

〈天王平廃寺〉

1㎜以下の石英と0.5㎜以下の黒雲母・火山ガラスを含んでいる（写真21-6）。

以上の観察結果から各遺跡の瓦には、特徴があり砂粒観察でも顕著な違いがあることがわかった。各遺跡出土瓦の特徴をまとめると以下のようになる。中祖遺跡出土瓦には、白色粒と赤色粒が多く混入しており、他の遺跡や産地の瓦にはみられないものである。久本奥には少量ではあるが堆積岩？の円礫が含まれている。石見国分寺には片岩が含まれていた。重富Ⅳ区ではきめの細かな粘土が使用されており、砂粒はほとんど含まれていなかった。また天王平廃寺では少量の黒雲母が含まれていた。このように、各遺跡出土の瓦にはそれぞれ特徴ある砂粒が含まれており、砂粒観察においても胎土の違いがみられた。

4．考　察

蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察法による瓦の胎土分析では、以下のことが推定される。

(1)蛍光X線分析による中祖遺跡出土瓦の分析では、中祖遺跡のTiO_2、CaO、K_2Oの各成分が重富Ⅳ区および久本奥の各窯跡の胎土に近い成分であったが、SiO_2、Al_2O_3の成分では、重富Ⅳ区・久本奥とは胎土が一致しなかった。

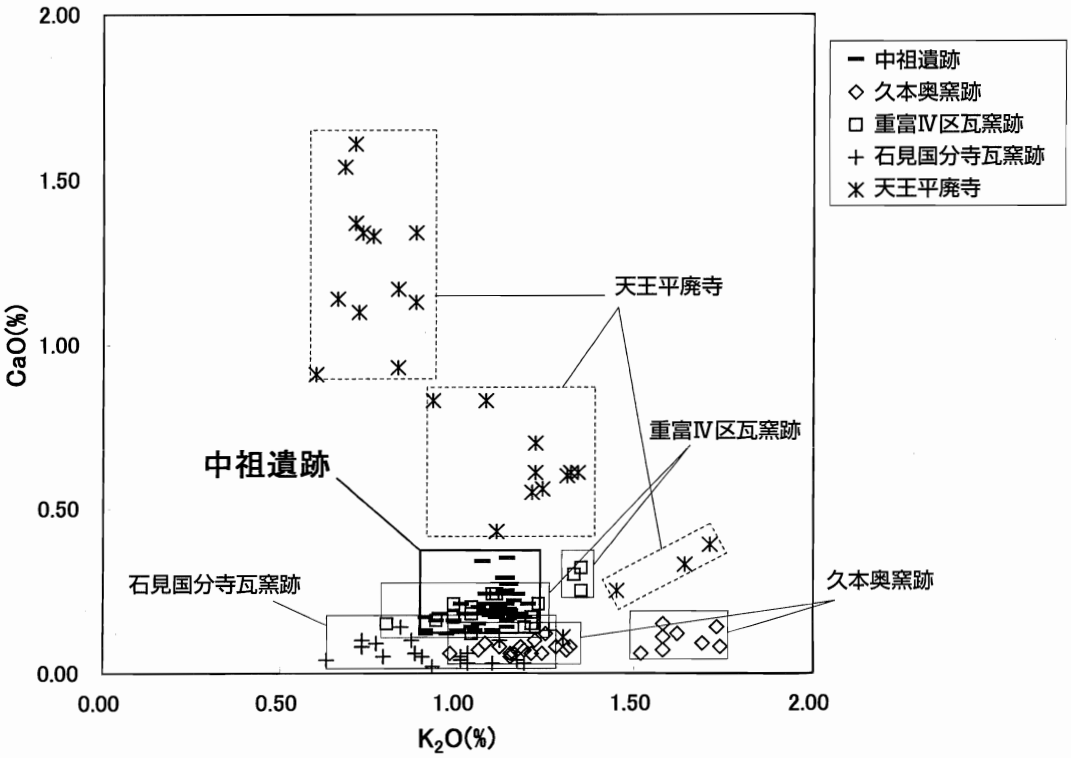
(2)実体顕微鏡による砂粒観察でも、中祖遺跡の瓦には白色粒および赤色粒の砂粒(シャモット)[1]が混入しており、ほかの瓦とは明らかに異なっていた。

以上のように蛍光X線分析と実体顕微鏡による砂粒観察の2つの胎土分析法から、中祖遺跡出土の瓦は、今回比較した久本奥窯跡、石見国分寺瓦窯、重富Ⅳ区瓦窯、天王平廃寺出土の瓦と胎土が一致しなかった。従って、別の生産地を求める必要がある。

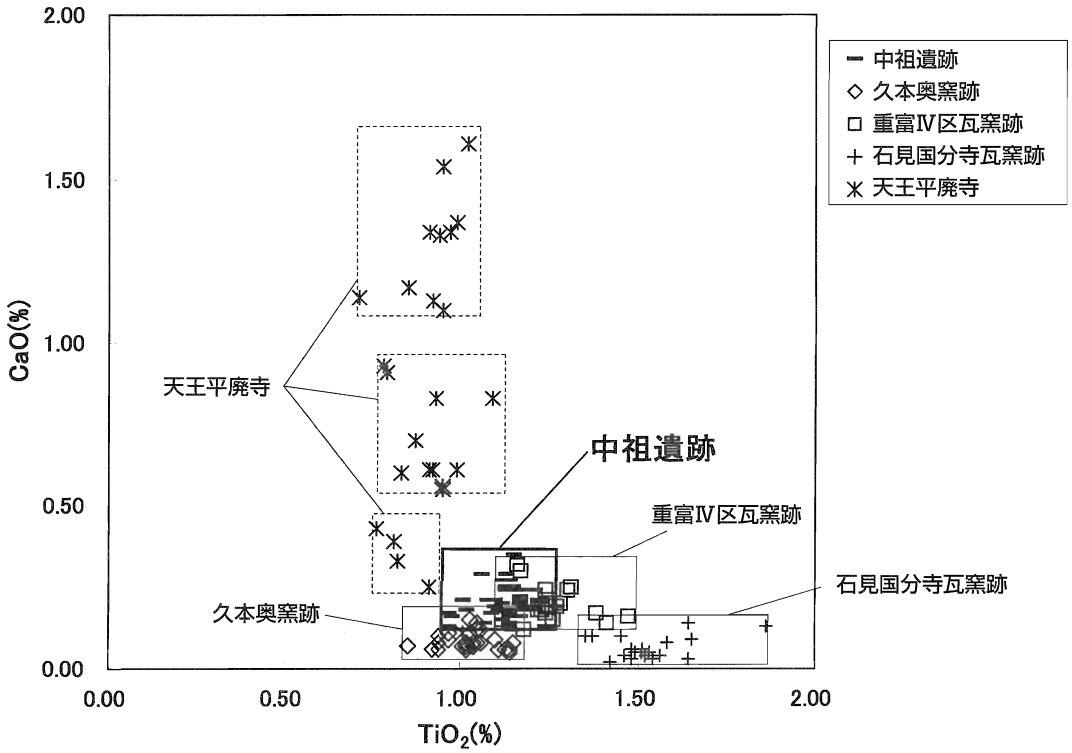
この分析の機会を与えていただいた角田徳幸氏をはじめ、島根県埋蔵文化財調査センターの職員の方々には、いろいろとお世話になった。末筆ではありますが記して感謝いたします。

註

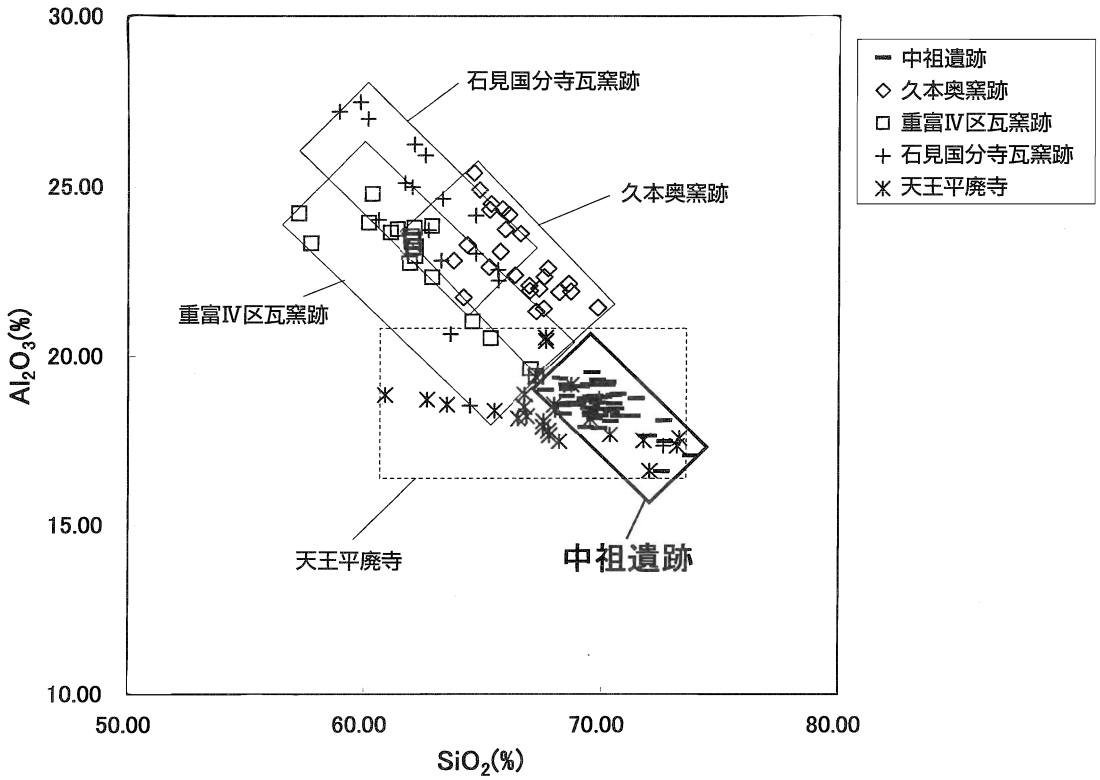
（１）中祖遺跡の瓦の胎土に混入していた白色粒および赤色粒の砂粒は、焼粘土の可能性がある。



第94図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較（K_2O－CaO散布図）



第95図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較（TiO_2－CaO散布図）



第96図　中祖遺跡他出土瓦の産地比較（SiO_2－Al_2O_3散布図）

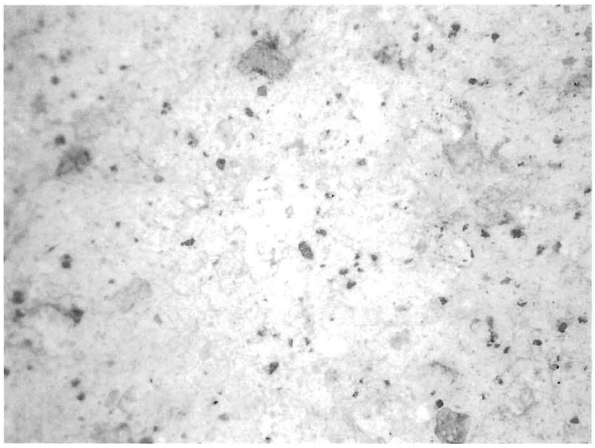
第18表　中祖遺跡胎土分析試料一覧

単位：SiO_2～P_2O_5（%）

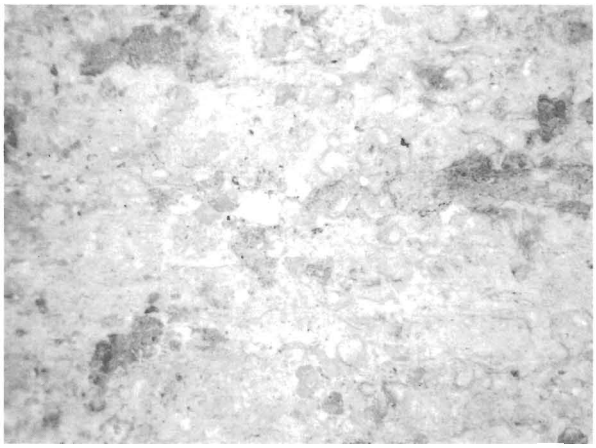
試料番号	遺跡名	種類	色調	調整	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備考
1	中祖遺跡	丸瓦	青灰色	縄目タタキ	72.63	1.17	17.49	3.50	0.07	1.48	0.16	2.25	0.99	0.11	須恵質
2	中祖遺跡	丸瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	70.51	1.20	18.84	4.00	0.07	1.55	0.18	2.01	1.18	0.27	
3	中祖遺跡	平瓦	淡青灰色	縄目タタキ	72.50	1.17	16.60	4.09	0.10	1.36	0.18	2.59	1.08	0.15	須恵質
4	中祖遺跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	70.60	1.11	18.45	4.54	0.09	1.43	0.18	1.93	1.15	0.32	
5	中祖遺跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ	71.85	1.02	17.65	3.45	0.06	2.59	0.12	2.10	0.91	0.12	須恵質
6	中祖遺跡	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	73.72	1.24	17.06	2.93	0.05	1.40	0.13	2.18	1.00	0.15	須恵質
7	中祖遺跡	平瓦	黒褐色	縄目タタキ	69.67	1.21	18.70	3.71	0.06	1.49	0.24	2.52	1.12	1.10	
8	中祖遺跡	平瓦	淡青灰色	縄目タタキ	71.95	1.12	17.65	3.30	0.06	1.47	0.15	2.94	1.06	0.08	須恵質
9	中祖遺跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	70.39	0.98	18.40	3.50	0.05	2.46	0.16	2.26	0.94	0.74	
10	中祖遺跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ	68.82	1.14	18.61	5.24	0.09	1.50	0.17	2.56	1.16	0.52	
11	中祖遺跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ・ケズリ	69.84	1.02	19.29	3.84	0.06	2.30	0.18	2.25	0.95	0.12	
12	中祖遺跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ	69.35	1.08	17.91	4.46	0.07	1.46	0.21	3.13	1.12	1.04	
13	中祖遺跡	平瓦	灰白色	なし、糸切り痕	69.31	1.20	18.74	4.32	0.06	1.51	0.18	2.50	1.06	0.93	
14	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.54	1.01	18.81	4.25	0.07	2.32	0.21	2.91	1.01	0.74	
15	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.27	0.97	19.23	3.22	0.04	2.62	0.13	2.11	0.91	0.38	
16	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	72.59	1.23	18.10	4.14	0.07	1.23	0.21	0.27	1.20	0.83	
17	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.40	1.06	18.55	4.12	0.06	1.90	0.29	3.80	1.14	0.48	
18	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.55	1.22	18.26	4.06	0.06	1.63	0.21	2.66	1.14	1.04	
19	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.42	1.21	18.37	3.73	0.06	1.47	0.18	2.60	1.14	0.66	
20	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.74	1.21	18.82	3.57	0.05	1.64	0.19	2.41	1.15	1.04	
21	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.53	1.17	18.60	3.59	0.06	1.35	0.24	2.17	1.16	0.94	
22	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.60	1.18	19.15	3.74	0.05	1.42	0.19	2.22	1.08	1.20	
23	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.91	1.14	18.43	4.44	0.07	1.78	0.16	2.10	1.14	0.68	
24	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.48	1.13	18.68	4.69	0.09	1.62	0.25	2.34	1.14	0.33	
25	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.03	1.27	18.56	4.11	0.08	1.64	0.19	2.71	1.14	1.06	
26	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.52	1.09	18.75	4.86	0.08	1.66	0.17	2.40	1.11	0.22	
27	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.10	1.10	18.79	4.45	0.07	1.49	0.19	2.19	1.12	0.28	
28	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.88	1.17	18.77	3.36	0.04	1.57	0.22	2.37	1.16	1.22	
29	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.23	1.24	19.15	4.11	0.06	1.45	0.17	1.91	1.19	0.32	
30	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	71.29	1.10	18.24	3.70	0.05	1.54	0.21	1.78	1.08	0.83	
31	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.52	0.97	19.14	3.49	0.05	2.64	0.17	2.89	0.91	1.07	
32	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.58	1.15	19.52	4.28	0.07	1.80	0.12	2.14	0.97	0.21	
33	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.53	1.07	18.33	4.72	0.06	1.48	0.14	2.15	1.14	1.11	
34	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.37	1.15	18.09	4.25	0.06	1.43	0.25	1.90	1.13	1.18	
35	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ・ケズリ	69.71	1.12	18.17	4.53	0.06	1.51	0.18	2.62	1.11	0.83	
36	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.45	1.14	19.16	3.72	0.04	1.61	0.13	2.69	1.10	0.82	
37	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.59	1.16	18.60	4.35	0.08	1.75	0.34	2.43	1.07	1.46	
38	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.68	1.19	18.88	4.03	0.07	1.46	0.18	1.71	1.02	0.61	
39	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	67.64	1.15	18.98	5.88	0.09	1.53	0.35	2.10	1.14	0.98	
40	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.90	1.13	17.88	4.96	0.13	1.43	0.29	1.92	1.13	1.09	
41	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.45	1.12	18.47	3.88	0.07	1.67	0.27	2.56	1.14	1.22	
42	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.17	1.17	19.10	3.70	0.06	1.57	0.20	2.61	1.12	1.09	
43	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.42	1.13	18.30	5.07	0.10	1.46	0.24	2.37	1.08	1.68	
44	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.56	1.14	18.80	3.91	0.06	1.49	0.13	2.90	1.05	0.77	
45	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.95	1.13	18.25	4.34	0.08	1.45	0.24	2.65	1.17	0.55	
46	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.27	1.16	19.33	5.21	0.06	1.65	0.18	2.51	1.07	0.40	
47	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	71.44	1.14	18.75	3.67	0.05	1.31	0.27	1.47	1.15	0.60	
48	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.71	1.17	18.24	4.15	0.06	1.36	0.21	1.84	1.13	0.99	
49	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	68.56	1.12	19.02	3.89	0.08	1.59	0.20	3.01	1.06	1.28	
50	中祖遺跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	69.82	1.14	18.62	4.62	0.07	1.44	0.14	2.02	1.04	0.96	
51	久本奥窯跡	丸瓦	淡青灰色	ケズリ	64.19	0.97	21.74	7.52	0.15	1.45	0.11	2.03	1.58	0.05	須恵質・内面端部ケズリ
52	久本奥窯跡	丸瓦	暗灰色	縄目タタキ・ナデ	66.60	1.15	23.62	2.91	0.05	1.49	0.08	2.08	1.74	0.09	須恵質
53	久本奥窯跡	丸瓦	黄灰色	縄目タタキ・ナデ	67.59	0.97	22.34	3.23	0.04	1.64	0.09	2.71	1.08	0.14	須恵質
54	久本奥窯跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	66.11	0.85	24.18	2.11	0.03	2.67	0.07	2.72	1.06	0.04	
55	久本奥窯跡	平瓦	淡青灰色	縄目タタキ	69.82	1.05	21.44	2.81	0.05	1.53	0.08	1.73	1.18	0.11	須恵質
56	久本奥窯跡	平瓦	淡灰色	縄目タタキ・ケズリ	68.21	1.02	21.89	2.91	0.04	1.67	0.08	2.66	1.18	0.14	須恵質
57	久本奥窯跡	丸瓦	灰褐色	縄目タタキ	63.78	1.04	22.82	5.79	0.07	1.54	0.07	3.08	1.58	0.07	
58	久本奥窯跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ・ケズリ	68.60	1.03	22.14	2.31	0.04	1.53	0.15	2.33	1.58	0.12	
59	久本奥窯跡	丸瓦	淡褐色	縄目タタキ・ナデ	65.76	1.05	23.09	2.85	0.04	1.61	0.14	3.42	1.73	0.12	
60	久本奥窯跡	丸瓦	明褐灰色	ケズリ	67.57	1.04	21.41	4.32	0.04	1.63	0.08	2.29	1.28	0.16	内面端部ケズリ
61	久本奥窯跡	丸瓦	淡褐色	ナデ	64.35	1.02	23.28	6.20	0.08	1.55	0.06	2.11	1.15	0.05	内面端部ケズリ
62	久本奥窯跡	丸瓦	桃褐色	ケズリ	65.29	1.01	22.63	5.61	0.05	1.57	0.07	2.27	1.19	0.15	内面端部ケズリ
63	久本奥窯跡	丸瓦	灰褐色	縄目タタキ・ナデ	65.84	1.14	24.34	3.15	0.04	1.54	0.06	2.43	1.21	0.09	内面端部ケズリ
64	久本奥窯跡	丸瓦	灰褐色	縄目タタキ	66.98	1.11	21.93	4.47	0.06	1.51	0.06	2.51	1.24	0.01	
65	久本奥窯跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ・ケズリ	67.26	1.14	21.32	4.21	0.04	1.64	0.05	2.93	1.15	0.05	
66	久本奥窯跡	平瓦	淡褐色	縄目タタキ	66.37	1.02	22.39	3.87	0.06	1.59	0.07	3.02	1.31	0.12	
67	久本奥窯跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ	67.37	1.13	21.99	3.91	0.04	1.56	0.06	2.51	1.16	0.12	
68	久本奥窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	64.87	0.94	24.91	2.55	0.03	2.72	0.08	2.55	1.12	0.08	
69	久本奥窯跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ・ケズリ	66.96	0.92	22.08	3.74	0.04	2.52	0.06	2.47	0.98	0.09	
70	久本奥窯跡	平瓦	淡褐色	縄目タタキ	68.69	1.06	21.91	3.15	0.04	1.45	0.08	1.99	1.32	0.13	

単位：SiO_2～P_2O_5（%）

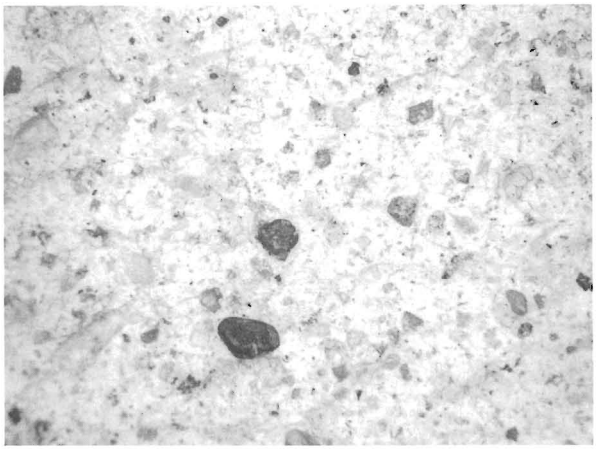
試料番号	遺跡名	種類	色調	調整	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	備考
71	久本奥窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	65.37	0.94	24.49	2.28	0.04	2.77	0.10	2.54	1.22	0.07	
72	久本奥窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	64.63	0.94	25.41	2.61	0.03	2.46	0.06	2.16	1.52	0.02	
73	久本奥窯跡	平瓦	淡褐色	縄目タタキ	67.75	1.05	22.59	3.06	0.04	1.55	0.12	2.23	1.25	0.20	
74	久本奥窯跡	平瓦	淡褐色	縄目タタキ	65.96	1.10	23.74	2.55	0.03	1.68	0.09	2.88	1.69	0.11	
75	久本奥窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	65.31	1.06	24.32	2.91	0.05	1.48	0.12	2.88	1.62	0.09	
76	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	64.47	1.37	18.53	4.78	0.10	2.57	0.10	6.90	0.87	0.14	須恵質
77	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	65.68	1.65	22.23	4.71	0.08	1.59	0.09	2.86	0.77	0.18	須恵質
78	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	黄灰色	縄目タタキ	63.65	1.35	20.65	4.42	0.08	2.73	0.10	6.04	0.73	0.11	須恵質
79	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	65.66	1.48	22.55	5.46	0.07	1.68	0.03	1.74	1.10	0.07	須恵質
80	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	黒褐色	縄目タタキ	61.72	1.51	25.11	5.57	0.08	1.85	0.05	2.76	1.01	0.11	須恵質
81	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	64.71	1.64	24.15	5.21	0.09	1.45	0.03	1.24	1.19	0.10	須恵質
82	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	63.32	1.52	24.64	5.39	0.09	1.65	0.04	1.80	1.17	0.15	須恵質
83	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ	62.58	1.54	25.93	5.21	0.09	1.47	0.03	1.82	1.03	0.04	須恵質
84	石見国分寺瓦窯跡	丸瓦	暗赤褐色	縄目タタキ・ナデ	72.57	1.58	17.35	3.55	0.08	1.62	0.08	2.13	0.73	0.12	
85	石見国分寺瓦窯跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ・ナデ	62.12	1.51	26.25	5.32	0.09	1.64	0.06	1.69	1.03	0.08	
86	石見国分寺瓦窯跡	丸瓦	灰白色	縄目タタキ・ナデ	60.60	1.86	24.03	7.75	0.12	1.67	0.13	2.23	1.26	0.07	
87	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	58.93	1.53	27.21	5.19	0.07	1.89	0.05	3.99	0.79	0.13	軒平か
88	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	橙褐色	不明	62.71	1.49	23.72	6.96	0.08	1.69	0.05	2.11	0.90	0.13	
89	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰褐色	縄目タタキ	62.02	1.48	24.99	6.75	0.11	1.29	0.06	2.17	0.88	0.08	
90	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	69.90	1.64	18.74	5.30	0.10	1.44	0.14	1.60	0.84	0.15	
91	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	59.83	1.56	27.49	5.13	0.07	1.98	0.04	3.05	0.63	0.06	
92	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	淡黒褐色	縄目タタキ	63.25	1.42	22.82	7.06	0.11	1.73	0.02	2.28	0.93	0.15	
93	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	64.71	1.45	23.02	4.93	0.07	1.58	0.10	2.71	1.12	0.17	
94	石見国分寺瓦窯跡	平瓦	灰白色	縄目タタキ	60.15	1.46	27.00	4.83	0.07	1.69	0.04	3.47	1.01	0.08	
95	重富瓦窯跡	平瓦	青灰色	ケズリ	57.74	1.12	23.33	6.79	0.09	2.62	0.15	7.07	0.80	0.06	須恵質
96	重富瓦窯跡	平瓦	淡青灰色	ケズリ	61.93	1.28	22.75	7.62	0.10	1.91	0.20	2.87	1.04	0.14	須恵質
97	重富瓦窯跡	平瓦	灰白色	ケズリ・ナデ	61.40	1.41	23.75	7.88	0.09	1.35	0.14	2.47	1.19	0.10	須恵質
98	重富瓦窯跡	平瓦	青灰色	ケズリ・ナデ	67.27	1.16	19.39	5.85	0.08	1.69	0.32	2.55	1.35	0.18	須恵質
99	重富瓦窯跡	平瓦	青灰色	ナデ	65.36	1.24	20.53	7.38	0.09	1.70	0.24	2.07	1.10	0.14	須恵質
100	重富瓦窯跡	平瓦	暗青灰色	ハケメ	67.04	1.17	19.61	5.87	0.08	1.53	0.30	2.65	1.33	0.21	須恵質
101	重富瓦窯跡	丸瓦	浅黄橙色	ハケメ	61.11	1.38	23.65	7.83	0.08	1.94	0.17	2.58	0.99	0.12	
102	重富瓦窯跡	丸瓦	黄橙色	ハケメ	62.15	1.25	22.96	7.52	0.10	1.66	0.19	2.78	1.09	0.11	軒丸
103	重富瓦窯跡	平瓦	浅黄橙色	不明	62.17	1.24	23.24	6.35	0.09	1.76	0.17	3.53	1.21	0.07	
104	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	不明	62.08	1.27	23.42	7.59	0.09	1.64	0.19	2.36	1.11	0.10	
105	重富瓦窯跡	平瓦	灰白色	ケズリ	62.09	1.22	23.21	7.57	0.09	1.70	0.18	2.61	1.04	0.15	
106	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ケズリ	60.18	1.47	23.94	8.64	0.11	1.82	0.16	2.50	0.94	0.06	
107	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ケズリ	62.04	1.25	23.37	7.27	0.10	1.64	0.21	2.57	1.23	0.11	
108	重富瓦窯跡	平瓦	灰白色	ケズリ	62.87	1.24	22.33	7.93	0.11	1.49	0.21	2.45	0.99	0.12	
109	重富瓦窯跡	平瓦	灰白色	ケズリ	64.58	1.30	21.02	7.62	0.10	1.57	0.24	2.18	1.11	0.12	
110	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ハケメ	57.23	1.18	24.21	6.93	0.07	2.36	0.12	6.66	1.04	0.04	
111	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ハケメ	60.34	1.41	24.79	7.85	0.10	1.42	0.14	2.47	1.19	0.07	
112	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ハケメ	62.00	1.23	23.52	7.64	0.08	1.63	0.18	2.29	1.15	0.06	
113	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ケズリ・ナデ	62.12	1.26	23.79	6.58	0.07	1.59	0.15	3.01	1.21	0.04	
114	重富瓦窯跡	平瓦	黄橙色	ケズリ・ナデ	62.86	1.31	23.84	6.46	0.07	1.64	0.25	1.94	1.35	0.10	
115	天王平廃寺	丸瓦	淡褐色	ナデ	67.77	1.09	17.79	6.82	0.11	1.61	0.83	2.71	0.93	0.19	須恵質
116	天王平廃寺	丸瓦	灰色	ケズリ・ナデ	62.66	0.79	18.71	5.49	0.18	2.58	0.91	7.76	0.60	0.15	須恵質
117	天王平廃寺	丸瓦	暗青灰色	ケズリ・ナデ	60.88	0.71	18.85	6.46	0.28	2.83	1.14	7.87	0.66	0.10	須恵質
118	天王平廃寺	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	72.00	0.92	16.61	5.07	0.13	1.41	0.61	1.63	1.22	0.20	須恵質
119	天王平廃寺	平瓦	淡灰色	縄目タタキ	73.14	0.91	17.35	4.39	0.07	1.24	0.61	0.58	1.32	0.24	須恵質
120	天王平廃寺	平瓦	暗青灰色	縄目タタキ	69.75	1.01	18.60	4.96	0.07	1.59	0.11	2.23	1.30	0.21	須恵質
121	天王平廃寺	平瓦	灰白色	縄目タタキ	73.25	0.99	17.58	4.73	0.07	1.05	0.61	0.00	1.34	0.18	あまい須恵質
122	天王平廃寺	平瓦	暗灰色	縄目タタキ	63.50	0.76	18.56	5.46	0.09	2.67	0.43	7.15	1.11	0.14	須恵質
123	天王平廃寺	平瓦	淡青灰色	縄目タタキ	68.22	0.83	17.49	6.86	0.11	1.67	0.60	2.39	1.31	0.26	須恵質
124	天王平廃寺	平瓦	灰色	縄目タタキ	68.75	0.87	19.15	5.43	0.08	1.44	0.70	2.01	1.22	0.18	あまい須恵質
125	天王平廃寺	平瓦	淡青灰色	格子タタキ	67.81	0.85	17.66	6.67	0.21	1.61	1.17	2.85	0.83	0.15	須恵質
126	天王平廃寺	平瓦	淡青灰色	格子タタキ	69.54	0.92	18.16	5.24	0.14	1.33	1.13	2.25	0.88	0.20	須恵質
127	天王平廃寺	平瓦	暗青灰色	格子タタキ	67.55	0.78	17.90	6.90	0.18	1.56	0.93	2.87	0.83	0.24	須恵質
128	天王平廃寺	平瓦	淡灰色	平行タタキ	67.57	0.94	18.07	7.53	0.21	1.40	1.33	1.84	0.76	0.20	須恵質
129	天王平廃寺	平瓦	淡青灰色	平行タタキ	66.53	1.02	18.15	7.45	0.21	1.65	1.61	2.21	0.71	0.18	須恵質
130	天王平廃寺	平瓦	青灰色	平行タタキ	66.88	0.99	18.21	7.49	0.26	1.54	1.37	2.22	0.71	0.13	須恵質
131	天王平廃寺	平瓦	灰白色	ハケメ	68.01	0.93	18.55	6.01	0.10	1.48	0.83	2.64	1.08	0.21	あまい須恵質
132	天王平廃寺	平瓦	灰白色	縄目タタキ	70.34	0.95	17.69	4.50	0.07	1.53	0.55	2.84	1.21	0.19	
133	天王平廃寺	平瓦	灰褐色	縄目タタキ	67.67	0.82	20.45	4.38	0.05	1.55	0.33	2.69	1.64	0.17	
134	天王平廃寺	平瓦	灰白色	縄目タタキ	67.66	0.81	20.55	4.60	0.07	1.55	0.39	2.28	1.71	0.17	
135	天王平廃寺	平瓦	灰白色	縄目タタキ	71.75	0.95	17.51	4.04	0.05	1.49	0.56	2.01	1.24	0.26	
136	天王平廃寺	平瓦	橙褐色	縄目タタキ	67.25	0.91	19.36	6.09	0.06	1.57	0.25	2.69	1.45	0.18	
137	天王平廃寺	平瓦	灰褐色	格子タタキ	68.05	0.97	18.40	5.61	0.12	1.37	1.34	2.74	0.88	0.28	
138	天王平廃寺	平瓦	淡灰色	格子タタキ	66.78	0.91	18.48	7.05	0.15	1.53	1.34	2.64	0.73	0.17	
139	天王平廃寺	平瓦	灰白色	格子タタキ	66.80	0.95	18.84	7.45	0.20	1.45	1.10	2.13	0.72	0.17	
140	天王平廃寺	平瓦	灰白色	平行タタキ	65.53	0.95	18.38	8.70	0.21	1.48	1.54	2.15	0.68	0.20	



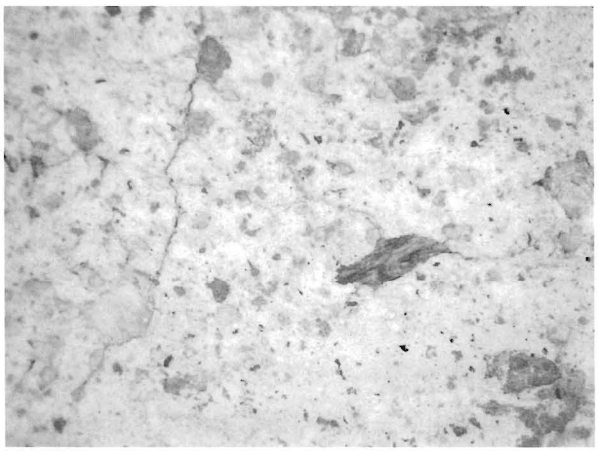
1．中祖遺跡



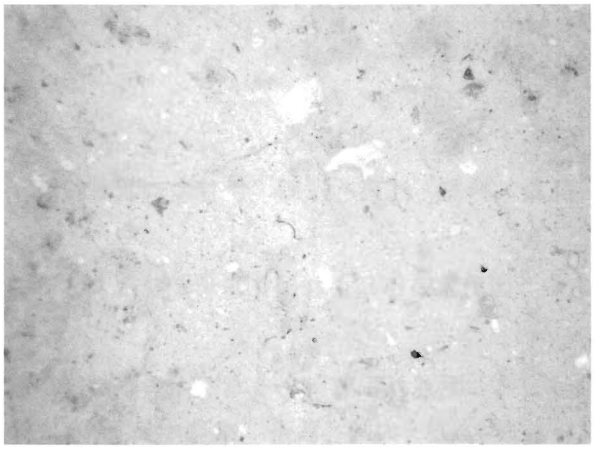
2．中祖遺跡



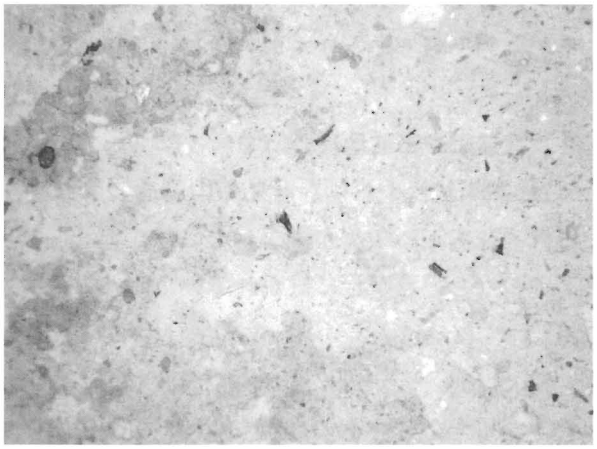
3．久本奥窯跡



4．石見国分寺瓦窯跡



5．重富Ⅳ区瓦窯跡



6．天王平廃寺跡

0　2mm

写真21　瓦胎土実体顕微鏡写真

第４節　中祖遺跡と古代山陰道

神（じん）　英雄（浜田市立石正（せきしょう）美術館）

１．古代山陰道研究の現状

近年の歴史地理学研究によって、石見の古代山陰道の経路がある程度判ってきた。

江津市から浜田市にかけては、幅６～14mの直線的道路痕跡が、十数キロにわたって断続的に東西に繋がる。丘陵部を通る時は切り通しがつくられており、一部には古街道の伝承が残る。江津市西部の直線的道路痕跡を示したのが第97図である。

これによれば、江津市嘉久志町（地図Ａ）から敬川町（同Ｅ）にかけて道路痕跡がほぼ一直線に繋がり、沿道には「大道」などの道路関係地名が点在するのが判る。この経路は、石見国府から畿内に向かって進む際に常に正面に室神山（浅利富士）を目指して進むように敷設され、国府に向かって進む際には大崎鼻を目指すように敷設されたようである(1)。

国分寺や国分尼寺のある浜田市国分地区にも、「殿様道」と呼ばれる直線的道路痕跡が残っている(2)。

また、旧美濃郡においては、益田市中心市街地から大道山の中腹を通り、美濃地集落へと向かう「往還道」という直線的古代道路痕跡（Ａ－Ｅ、Ｆ－Ｉ）が残存している（第98図）。そして、その経路には、益田市白上町松原（１）と益田市美濃地（４）には地元の人々が「大人の足跡」と呼ぶ切り通しがある。このうち、松原の「大人の足跡」では、幅13～14mの古代道の遺構と思われる切り通しが100mにわたって続く。この「往還道」は、弘仁８（817）年に廃止された長門国府と石見国府を結ぶ山陰連絡路の遺構であると思われる。

このほか、大田市仁摩町の沖積平野でも南北に直線道路痕跡が伸び、ＪＲ山陰線の敷地となっている。ここには「大道」地名がある。この道路痕跡の西側の延長線上には「馬路」・「神子路」などの地名がある(3)。

これに対して、大田市温泉津地域では山地が卓越していて、直線道路痕跡の検出は困難である。そのため、景観の上からの古代道の検出作業は全く行われなかった。

２．樟道駅の所在地について

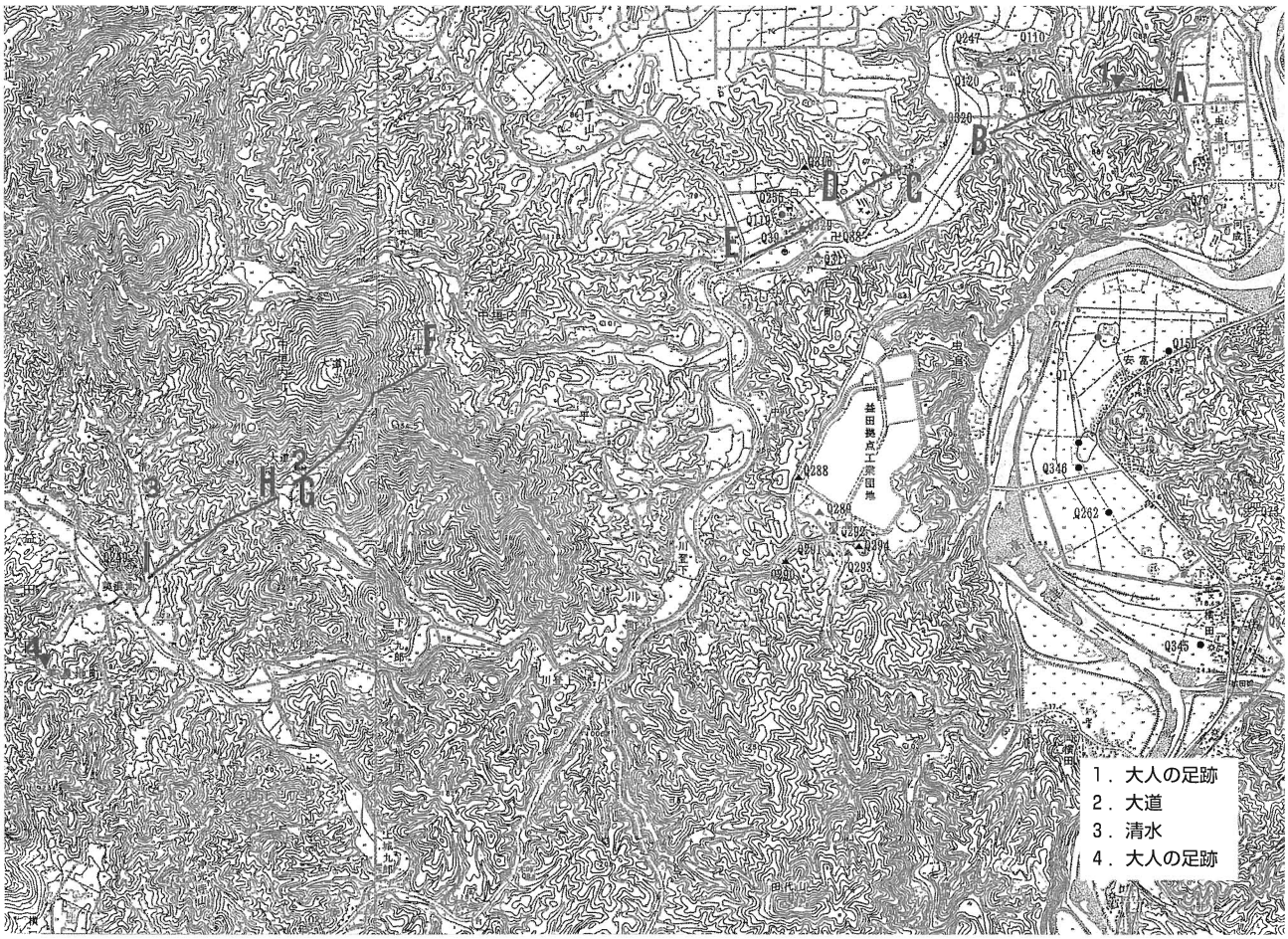
『延喜式』によれば、石見の山陰道には、波祢・託農・樟道・江東・江西・伊甘の六駅が置かれ、それぞれ五疋の駅馬が置かれていた。

このうち、邇摩郡に置かれていたのは樟道駅である。国史大系本によればクスチと読むようである。

『和名抄』によれば、邇摩郡には津道郷もしくは杵道郷と記される郷があったが(4)、ここに樟道駅があったようである。『和名抄』の高山寺本には「託農多久乃　大国　温泉　津道都知　大家　都治」とあり、刊本には「託農多久乃　大国　温泉由　杵道都知　大家於保伊倍　群治」と記載されている(5)。

津道（杵道）郷はツチと読み、これとは別に都治（群治）郷があった。吉田東伍(6)は津道（杵道）と都治を重複して記載されたものであるとするが、具体的な根拠は示さなかった。

第97図　江津市における古代山陰道の痕跡



第98図　益田市西部における古代山陰道（長門－石見連絡路）の痕跡

樟道駅の所在地について、先学の多くは江津市東部の都治地区に比定する。

江津市黒松町と松川町を結ぶ近世の広島往還道（県道221号線）と中都治集落と江津市浅利町を結ぶ県道大田・井田・江津線（県道177号線）の交差する中都治集落の都治神社付近に「引馬」という字名があり、同所に樟道駅を示す標柱が建っている。これは、静岡県浜松市の《曳馬》が古代東海道に因むものとされていたことを参考にして、この付近に駅を設定したものだった。しかし、浜松市周辺の東海道が伊場遺跡付近を通ることが明らかになり、「曳馬」は東海道と関係しないことが判明している。それゆえ、「引馬」地名を根拠として樟道駅所在地とすることは出来ないだろう。また、付近からは駅家の存在を示す遺構・遺物などは一切発見されていない。

一方、邨岡良弼は、都治（群治）郷に樟道駅が置かれていたと推量して、大田市温泉津町福波が託農駅（大田市宅野地区）と江東駅（江津市渡津地区）の中間であることから、ここに樟道駅があったとした[7]。岡熊臣・金子杜駿・藤井宗雄も福光説を採るが、具体的な根拠は示されなかった。

このほか、中林保は、大田市温泉津町飯原の下り谷集落付近に字「駒ケ畑」があり、宅野地区と江東地区からともに約14キロの位置に相当することから、この付近を駅とするが[8]、これだけでは根拠が脆弱である。

3．大田市温泉津町の古代交通路関係地名

歴史地理学における古代道推定作業に際して、馬路・大道などの古代交通路関係地名を手がかりにすることがある。もちろん近代の字名がただちに古代交通路の存在を示すものではないが、重要な手がかりとなる。

そこで、『温泉津町誌研究』[9]に掲載された「字名総覧」によって関係地名を抜き出し たところ、別表のような地名が検出しえた。多くは近世山陰道沿線に見られるものであるが、それと無関係のものが複数ある。

また、温泉津地区の湯里や福光・吉浦では、断続的に直線的道路痕跡が残存し、沿道に「馬路」や「大道」などの交通路関係地名がある。しかし、現状ではこれだけの理由によって、古代山陰道の痕跡であると断定することは出来ない。

そのような状況下にあって、このほど中祖遺跡から２間×２間の熨斗棟の建物が検出された意味は大きい。８世紀後半から10世紀前後までの長い期間存続していたこの建物について、楼閣と見た場合、駅楼とすることが出来るからである。遺跡の北側には狭小な開折谷になっていて、入り口に柵をつければ、容易に馬を囲い込むことが出来る。

福光地区には「都合（津合・都郷）」という字名が存在する。これを津の郷を通る道の意味とすると樟道につながる。その近くに字「大道ケ廻」もある。

今回検出された中祖遺跡のをただちに古代樟道駅の施設であるとすることは難しいが、今後の古代山陰道検出作業において重要な手がかりになるものと考える。

註

(1)拙稿「石見の古代山陰道」（『いしずえ』80、2005年）、同「石見相聞歌の景観論的考察」（『宮城学院女子大学人文社会学研究所研究紀要』17、2008年）。

⑵拙稿「石見の古代山陰道－浜田市東部－」(『郷土石見』70、2004年)。
⑶中林保「石見国」(『古代日本の交通路」』大明堂、1978年)。
⑷津道郷について杵道郷と表記することがある。しかし、杵は決してツと読まない。これについて、筆者は写本制作者が樟の崩し字を誤って杵と読んだ可能性を指摘したい。なお、樟道駅について、国史大系本ではクスチのフリガナがあるが、いつの時代につけられたものかは不明である。
今後、諸写本を調査して文字を精査する必要があると考える。
⑸『倭名類聚鈔』(風間書房、1970年)。
⑹吉田東伍『大日本地名辞書』３（冨山房、1900年)。
⑺邨岡良弼『日本地理志料』(1902年、後に 臨川書店より復刻)
⑻中林前掲註⑶に同じ。
⑼温泉津町史編纂委員会編『温泉津町誌研究』２・３（温泉津町教育委員会、1992年)。

旧温泉津町の交通路関係地名

湯里１号	47番	古馬路　馬路
湯里２号	94番	大道ノ下タ
西田	35－２番	大道ノ下タ
飯原	８番	馬路畑　大道ノ下タ
福光１号	21番	駄迫曽根　駄道平頭
	22番	駄道　駄道頭
	23番	駄道　大道ケ奥　大道ケ迫曽根　大道ケ迫奥　大道ケ迫奥西平　大道ケ迫左曽根　大道ケ迫大平　大道ケ迫小田上　大道ケ迫小田向　大道ケ迫上ノ切　大道ケ迫出口　大道ケ迫下タ切　大道ケ迫　大道ケ迫東平
	24番	大道ケ迫恵後　大道ケ迫　大道ケ迫頭　大道ケ迫下恵後　大道ケ迫落合　大道ケ迫八百　大道ケ迫笹ケ迫　大道ケ迫八百　大道ケ迫正佛
	25番	大道ケ迫出口　大道ケ迫上の切　大道ケ迫土手ノ内　大道ケ迫西平　大道ケ迫西平出口
	30番	大道迫曽根
	31番	小路　中小路　上小路ノ上へ
	34番	下小路　小路
吉浦	１番	大道ノ中　大道ノ沖　大道ノ沖平
井田	１番	大道ノ上
	10番	駄道谷　駄道　駄道谷　駄道尻
	19番	大道下モ　大道下
	41番	才ノ峠大道ノ下タ　大平大道ノ下タ
	42番	中屋大道下タ　中屋大道ノ下タ　中屋大道ノ上ヱ　下ノ垣内大ノ上　津渕谷ノ大道下タ　津渕谷ノ大道下モ
太田	２番	大道上

	18番	大道田　大道畑
	26番	大道　大道ノ下タ　大道ノ上へ
福田	14番	大道ノ下　大道ノ前　大道
	25番	駄道前下モ　駄道ノ前　駄道ノ前上ミ　駄道ノ下タ　駄道屋敷
	35番	大道ノ下タ
	38番	大道ノ下タ

第５節　中祖遺跡・ナメラ迫遺跡の放射性炭素年代測定

株式会社古環境研究所

１．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、中祖遺跡とナメラ迫遺跡の遺構年代に関わる資料を得る目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc.の協力を得た。

２．試料と方法

測定試料は、中祖遺跡出土の板材１点、ナメラ迫遺跡出土の木炭１点と柱材１点、計３点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

２）塩酸（HCl）で炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）で二次的に混入した有機酸を除去

３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和

４）定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデトロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。

第19表　放射性炭素年代測定試料及び処理

試料名	遺跡	遺構	種類	前処理・調整	測定法
№１	中祖	Ⅲ区２号土坑	板材	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
№２	ナメラ迫	Ⅰ区１号土坑	木炭	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ
№３	ナメラ迫	Ⅱ区１号建物跡	柱材	酸－アルカリ－酸洗浄	ＡＭＳ

※AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．結果

年代測定の結果を表20に示す。

第20表　放射性炭素年代測定結果

試料名	測定№ (Beta-)	^{14}C年代[1] (年BP)	δ^{13}C[2] (‰)	補正^{14}C年代[3] (年BP)	暦年代（西暦）[4]	
№１	227332	880±40	−24.0	900±40	交点：cal	AD 1160
					１σ：cal	AD 1040～1100
					cal	AD 1120～1200
					２σ：cal	AD 1030～1220

№2	227333	1220±40	−27.4	1180±40	交点：cal	AD 880
					1 σ：cal	AD 780～890
					2 σ：cal	AD 720～740
					cal	AD 770～970
№3	227334	590±40	−26.7	560±40	交点：cal	AD 1400
					1 σ：cal	AD 1320～1350
					cal	AD 1390～1420
					2 σ：cal	AD 1300～1370
					cal	AD 1380～1430

１）^{14}C年代測定値
　試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。14Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。
２）δ^{13}C測定値
　試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。
３）補正14C年代値
　δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を-25（‰）に標準化することによって得られる年代である。
４）暦年代 Calendar Age
　^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10450年まで）。
　暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

４．所見

仁摩温遺津道路発掘調査において、加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定を行った結果、中祖遺跡Ⅲ区２号土坑出土板材では900±40年BP（同AD1030～1220年）、ナメラ迫遺跡Ⅰ区１号土坑出土木炭では1180±40年BP（同AD720～740年，AD770～970年）、同Ⅱ区１号建物跡出土柱材では560±40年BP（同AD1030～1370年，AD1380～1430年）、の年代値が得られた。

文　献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

第６節　ナメラ迫遺跡出土柱根の樹種同定

渡辺正巳・古野　毅（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

ナメラ迫遺跡は、島根県中央部大田市仁摩町天河内地内に位置する。本報は、ナメラ迫遺跡発掘調査に伴い出土した柱材の樹種確認を目的に、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した樹種同定の報告書をまとめ直したものである。

分析試料について

Ⅱ区１・２号建物跡で残存していた７本の柱の合計７試料を対象に樹種同定を行った。樹種同定を行った試料一覧を第13表に示すとともに、分布を第99図、第100図に示す。上記試料は全て島根県埋蔵文化財調査センターより採取保管されていもので、文化財調査コンサルタント株式会社が同定作業のために必要量を分取した。

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2000）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント（株）にて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で４倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、３断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

樹種同定結果と記載

分類群ごとに代表的な試料（下線試料）の記載を行い、顕微鏡写真を図版に示した。また、同定結果を第13表にまとめた。

⑴クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料№：1（W06111701），2（W06111702），3（W06111703），4（W06111704），5（W06111705），7（W06111707）

非常に大きい円形ないし楕円形の道管がほとんど単独で多列（10列かそれ以上）に配列する環孔材である。孔圏部の幅はかなり広い。孔圏外では急に道管の径を減じている。孔圏外道管は薄壁で角張っており、単独ないし２～３個集まって放射状に配列している。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースがよく発達している。孔圏道管のまわりに周囲仮道管が存在している。放射組織は単列同性で、３～40細胞高である。軸方向柔組織は周囲状及び短接線状が認められる。以上の組織上の特徴から、クリと同定した。

⑵コナラ属コナラ節　*Quercus* sect. *Prinus* sp.（ブナ科）

試料№：6（W06111706）

大きい円形ないし楕円形の道管が単独で１～４列に配列する環孔材である。孔圏外では急に道管の径を減じ、非常に小さい道管が放射状ないし火炎状に配列する。小道管は薄壁で角張っている。道管せん孔は単せん孔である。道管内腔にチロースがよく発達している。孔圏道管のまわりに周囲仮道管が存在している。放射組織は同性で、単列放射組織（２～25細胞高）と幅の広い広放射組織（15細胞幅前後）からなり、典型的な複合型放射組織である。軸方向柔組織は周囲状の他に、短接

線状が特に孔圏外において非常に顕著となっている。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ節と同定した。

用材の特徴

同定を行った7試料の内、6試料がクリ、残り1試料がコナラ節であった。特に1号建物跡では、同定を行った5試料すべてがクリであった。島根県東部では、クリは古代以降、柱材として用いられる例が最も多い樹種である。この傾向が、島根県西部でも認められたことになる。また、島根県内でコナラ節が柱材として報告されたことは初めてである。しかしコナラ節は、「里山」の構成樹種として県内でもよく認められる樹種である。近くの森から無作為に切り出してきたとすれば、用いられてもごく自然である。

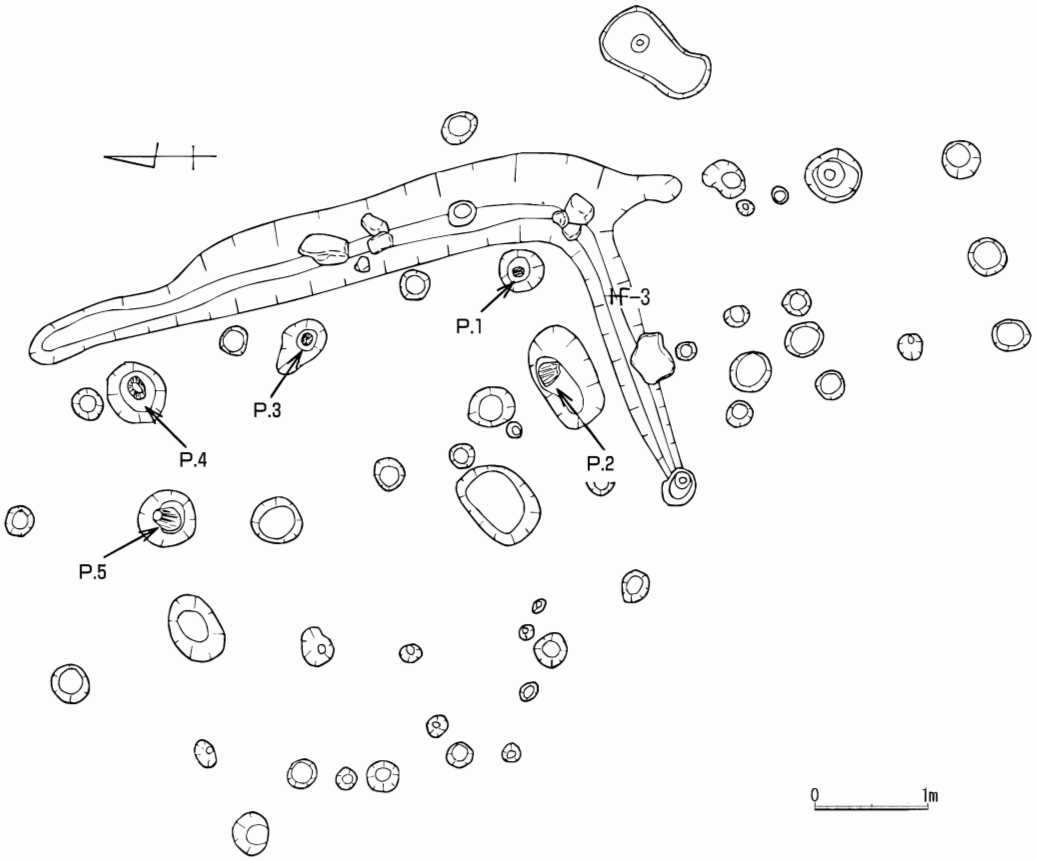
まとめ

ナメラ迫遺跡で出土した柱材を対象に樹種同定を行った結果、2分類群が確認できた。多くがクリであり、島根県東部で従来知られていた用材と一致した。一方で、コナラ節は柱材として、おそらく島根県内で初めて記載された種類である。

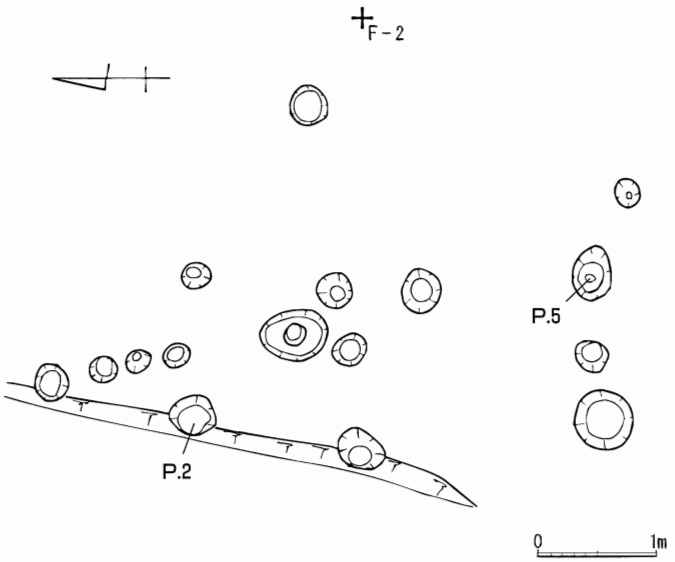
引用文献

島地　謙・佐伯　浩・原田　浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．276p.，文永堂，東京．

渡辺正巳（2000）長原遺跡東北地区東調査地出土木質遺物の樹種鑑定．長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅲ-1997年度大阪市長吉東部地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書-，247-249，財団法人大阪市文化財協会．



第99図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区１号建物跡と同定試料

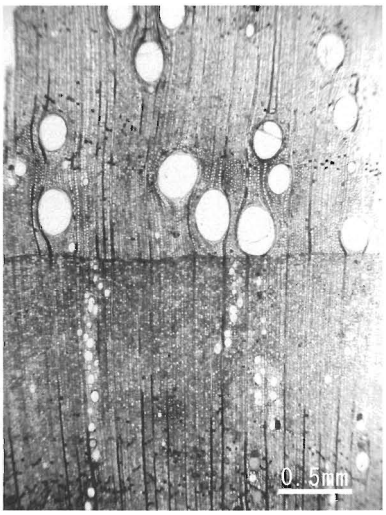


第100図　ナメラ迫遺跡Ⅱ区２号建物跡と同定試料

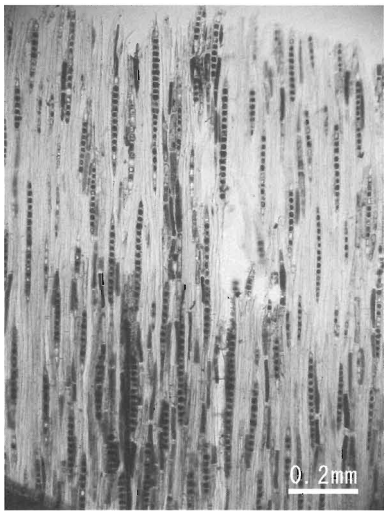
第21表　ナメラ迫遺跡樹種同定結果一覧表

試料No	整理番号	遺構	樹種名	種類	時代	備考
1	W06111701	1号建物跡　P.1	クリ	柱	室町時代	
2	W06111702	1号建物跡　P.3	クリ	柱	室町時代	
3	W06111703	1号建物跡　P.4	クリ	柱	室町時代	
4	W06111704	1号建物跡　P.5	クリ	柱	室町時代	
5	W06111705	2号建物跡　P.2	クリ	柱	室町時代	
6	W06111706	2号建物跡　P.5	コナラ節	柱	室町時代	
7	W06111707	1号建物跡　P.2	クリ	柱	室町時代	

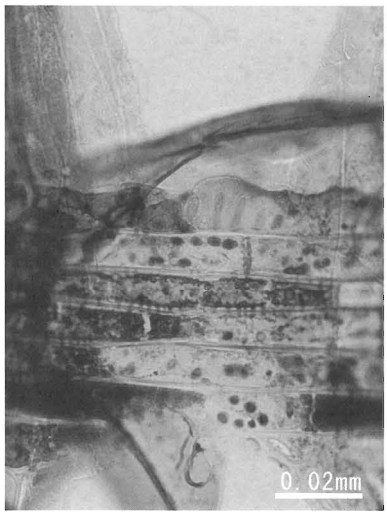
クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
試料No.1（W06111701）



横断面

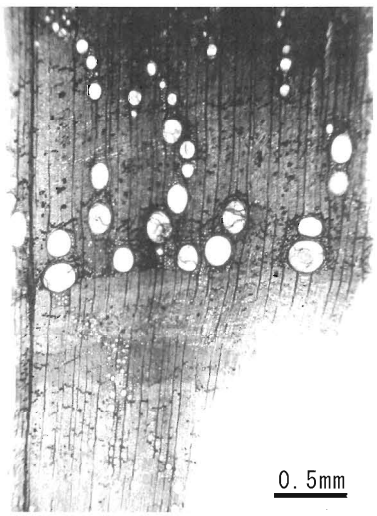


接線断面

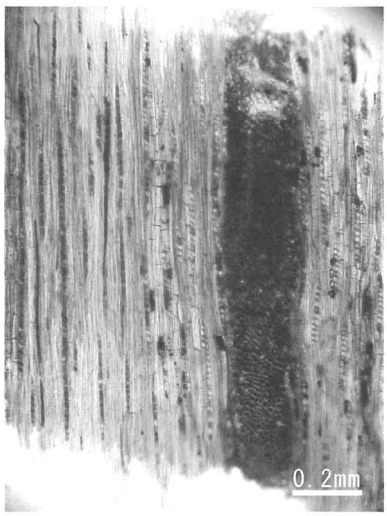


放射断面

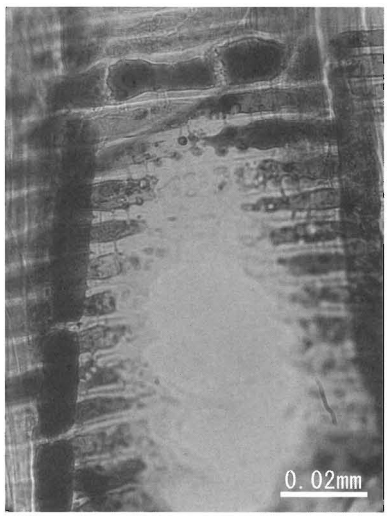
コナラ属コナラ節　*Quercus* Sect. *Prinus* sp.
試料No.6（W06111706）



横断面



接線断面



放射断面

写真22　ナメラ迫遺跡樹種同定顕微鏡写真

写　真　図　版

１．中祖遺跡遠景（東上空から）

２．中祖遺跡遠景（南上空から）